岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第454集

# 細谷地遺跡第8次発掘調查報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

岩 手 県 盛 岡 市 (財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

## 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第454集 『細谷地遺跡第8次発掘調査報告書』正誤表

	##   ##   ##   ##   ##   ##   ##   #								
頁	行	誤	$\rightarrow$	正					
	上から22行目								
123	上から20行目	畑状遺構	$\rightarrow$	<b>畠</b> 状遺構					
124	上から10行目								
16	下から4行目	直径0cm	$\rightarrow$	直径50cm					
	上から17行目	東壁は、西壁は、南壁は、 北壁は、	, <u> </u>	北壁、南壁が攪乱を受けている 以外は良好に残存する。					
26	下から9行目	脂頭圧痕	$\rightarrow$ 1	指頭圧痕					
115	上から9行目	表13の通り	$\rightarrow$	表14の通り					
	上から2行目	農業生産以では、	$\rightarrow$	農業生産以外では、					
125	上から13行目	鉄(製品)製産	$\rightarrow$	鉄(製品)生産					
127	上から12行目	必要となり	$\rightarrow$	必要があり					
	上から18行目	4. 土師器生産と消費	$\rightarrow$	5. 土師器生産と消費					
132	上から1行目	5. まとめ	$\rightarrow$	6. まとめ					

# 細谷地遺跡第8次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査



畠状遺構検出状況



RD140土坑出土剥片土器

岩手県には、旧石器時代から全時代を通じて数多くの遺跡、埋蔵文化財があります。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。その一方で地域開発などの社会資本の充実も欠くことのできない題目であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は、 埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査をおこない、記録保存する措置をとって参りました。

本書は、盛岡南新都市計画整備事業に関連して平成15年度におこなった細谷地遺跡第8次調査の成果をま とめたものであります。この調査により段丘上に立地する平安時代集落の様子がこれまで以上に明らかにな り、当時の集落を考えるうえで貴重な資料を提供することが可能となりました。

この調査成果が、本書とともに広く活用され、考古学研究に寄与すると同時に埋蔵文化財に対する理解と 関心をより深めることに役立つこと切に願う次第であります。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に際し、ご援助とご協力を賜りました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成16年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団 理事長 合田 武

### 例 言

- 1. 本書は、岩手県盛岡市向中野字野原11-1ほかに所在する細谷地遺跡において、平成15年度に実施した第8次発掘調査の成果を収録したものである。
- 2. 調査は、盛岡南新都市整備事業に伴い、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、盛岡市 の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。
- 3. 岩手県遺跡登録台帳における登録番号はLE24-0214、第8次調査の調査略号は0HY-03-8である。
- 4. 発掘調査面積は2,638㎡、発掘調査期間は平成15年7月1日~11月7日であった。また、発掘調査は、福島正和・齋藤麻紀子が担当した。
- 5. 発掘調査に際する基準点、補助点の測量・設置は、株式会社ハイマーテックに業務委託した。
- 6. 整理作業は平成15年11月4日~平成16年3月31日の期間、福島正和が担当した。
- 7. 本書の執筆および編集は齋藤麻紀子の協力を得て福島正和がおこなった。
- 8. 発掘調査においては、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、地域振興整備公団岩手総合 開発事務所、株式会社佐賀組、株式会社中亀建設、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。
- 9. 各種科学的分析および保存処理は以下の機関に委託し、分析・鑑定結果は本書に記載した。

火山灰分析・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

植物珪酸体分析・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

炭化樹種同定・・・木炭協会

石質鑑定・・・花崗岩研究会

- 10. 出土遺物の写真撮影、遺物写真図版の編集および作成は、㈱セビアスに委託した。
- 11. 調査および報告書作成にあたり以下の方々のご教示をいただいた。(敬称略・順不同) 鎌田 勉(岩手県教育委員会)、八木光則・津島知弘・三浦陽一・今野公顕(盛岡市教育委員会)、高木 晃(岩手県立博物館)、及川 洵・野坂晃平(江刺市教育委員会)、木村淳一(青森市教育委員会)、宇 部則保(八戸市教育委員会)、菊池強一
- 12. 本書では、国土地理院発行「盛岡・日詰 1:50,000」地図を使用した。
- 13. 検出遺構の土層注記における土色および出土土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法 人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』2002年度版に準拠した。
- 14. 調査で出土した遺物および実測図、写真等の各種記録類の一切は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 15. 本書発行以前に現地説明会、遺跡報告会等で資料および調査成果を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業期間を経ている本書をもって正とする。

# 目 次

巻頭カラー写真 序

例言

# <本 文>

Ι.	調査に至る経緯と経過	1
Ι.	遺跡の立地と環境	1
	1. 地理的環境	]
	2. 歷史的環境	4
Ⅲ.	調査の方法	8
	1. 発掘調査の方法	8
	2. 整理作業の方法	ξ
	3. 記載方法と凡例	ć
IV.	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
	1. 基本層序と遺構配置	11
	2. 竪穴住居・竪穴住居状遺構と出土遺物 (RA008・034・035・040~051・RE006) ···············	12
	3. 畠状遺構 (RZ) ·······	72
	4. 杭列(RZ)	75
	5. 燒土坑・土坑	77
٧.	自然科学的分析(パリノ・サーヴェイ株式会社)	88
	1. 火山灰分析	88
	2. 植物珪酸体分析	89
VI.	調査のまとめ	112
	1. 竪穴住居群について	112
	2. 竪穴住居出土遺物について	115
	3. 出土遺物からみた集落の性格	121
	4. 遺構と遺物からみた生産活動	122
	5. 総 括	126
VII.	考 察	127
	亚安時 (4) 7 4 7 4 6 7 8 9 7 9 7 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	

平安時代における土師器生産

-細谷地遺跡の発掘調査成果から-

# <図 版>

第1図	遺跡位置	2	第36図	RA046竪穴住居カマド	45
第2図	地形分類	3	第37図	RA046竪穴住居出土遺物	46
第3図	周辺の遺跡分布図	5	第38図	RA047竪穴住居	49
第4図	調査区割	8	第39図	RA047竪穴住居カマド	50
第 5 図	基本層序断面	11	第40図	RA047竪穴住居出土遺物	
第6図	遺構配置	11	第41図	RA048竪穴住居	53
第7図	RA008竪穴住居	12	第42図	RA048竪穴住居カマド	55
第8図	RA034竪穴住居	13	第43図	RA048竪穴住居出土遺物	56
第9図	RA034竪穴住居出土遺物	14	第44図	RA049竪穴住居	58
第10図	RA035竪穴住居	15	第45図	RA049竪穴住居カマド	59
第11図	RA035竪穴住居カマド	16	第46図	RA049竪穴住居出土遺物	60
第12図	RA035竪穴住居出土遺物	17	第47図	RA050竪穴住居	62
第13図	RA040竪穴住居	19	第48図	RA050竪穴住居カマド	63
第14図	RA040竪穴住居カマド	20	第49図	RA050竪穴住居出土遺物	64
第15図	RA040竪穴住居出土遺物	21	第50図	RA051竪穴住居	65
第16図	RA041竪穴住居	23	第51図	RA051竪穴住居カマド	66
第17図	RA041竪穴住居カマド	24	第52図	RA051竪穴住居出土遺物	67
第18図	RA041竪穴住居カマド石組	25	第53図	RE006竪穴住居状遺構	69
第19図	RA041竪穴住居出土遺物	27	第54図	竪穴住居出土石製品	70
第20図	RA042・045・046竪穴住居	28	第55図	竪穴住居出土鉄製品	71
第21図	RA042竪穴住居	29	第56図	RZ004·005皛状遺構	73
第22図	RA042竪穴住居カマド	30	第57図	RZ006·007皛状遺構	74
第23図	RA042竪穴住居出土遺物	31	第58図	RZ008杭列·····	76
第24図	RA043·050竪穴住居	32	第59図	RD137土坑······	77
第25図	RA043竪穴住居	33	第60図	RD138土坑·····	78
第26図	RA043竪穴住居カマド	34	第61図	RD139土坑	79
第27図	RA043竪穴住居出土遺物	35	第62図	RD140土坑·····	80
第28図	RA044竪穴住居	36	第63図	RD141土坑·····	81
第29図	RA044竪穴住居出土遺物	37	第64図	RD142·143土坑······	83
第30図	RA045竪穴住居	38	第65図	RD144~149土坑 ·····	84
第31図	RA045竪穴住居カマド	39	第66図	土坑出土遺物	86
第32図	RA045竪穴住居出土遺物(1)	41	第67図	細谷地遺跡古代遺構分布1	13
第33図	RA045竪穴住居出土遺物(2)	42	第68図	竪穴住居出土土師器坏集成(1)1	16
第34図	RA045竪穴住居出土遺物(3)	43	第69図	竪穴住居出土土師器坏集成(2)1	17
第35図	RA046竪穴住居	44	第70図	畠状遺構及び杭列1	24

# < 表 >

表上盛		表10 遺物	観察表(石製品)······10′
(	(埋蔵文化財センター調査分) 4	表11 遺物	観察表(鉄製品)10′
表 2 周	J辺の遺跡一覧(1)・(2) 6 ・7	表12 遺物	観察表(剥片土器)①~④108~11.
表3 基	準点・補助点座標一覧 8	表13 遺構	間土器接合事例一覧 ·····114
表4 土	- 器調整一覧 10	表14 土器	分類一覧11
表 5 竪	5穴住居一覧 96	表15 土師	器坏公園形態組成117
表6 土	坑一覧 97	表16 飯岡	才川・細谷地両遺跡出土墨書
表7 杭	」跡一覧 97	及び	刻書土器一覧12]
表 8 畠	状遺構畝間溝一覧 98	表17 岩手!	県内耕作遺構集成(畠)124
表9 遺	物観察表(土器)①~⑨ 99~107	表18 岩手!	県内土器焼成土坑一覧130
	<写真	図版>	
写真図版	〔1 調査区全景135	写真図版25	RA051竪穴住居(2)159
写真図版	2 調査前現況136	写真図版26	RE006竪穴住居状遺構160
写真図版	3 基本層序・竪穴住居群137	写真図版27	RZ004・005畠状遺構(1)、作業風景… 161
写真図版	4 RA008・034竪穴住居138	写真図版28	RZ004・005畠状遺構 (2)162
写真図版	5 RA035竪穴住居······139	写真図版29	RZ006・007畠状遺構(1)168
写真図版	6 RA040竪穴住居(1)······140	写真図版30	RZ006・007畠状遺構 (2)164
写真図版	7 RA040竪穴住居(2)······141	写真図版31	RZ008杭列(1) ······165
写真図版	8 RA041竪穴住居(1)······142	写真図版32	RZ008杭列(2) ······166
写真図版	[9 RA041竪穴住居(2)·······143	写真図版33	RD137土坑、作業風景167
写真図版	[10 RA042竪穴住居(1)·······144	写真図版34	RD138土坑、作業風景168
写真図版	[11 RA042竪穴住居(2)······145	写真図版35	RD139·140土坑······169
写真図版	12 RA043竪穴住居······146	写真図版36	RD141土坑·······170
写真図版	13 RA044竪穴住居······147	写真図版37	RD142~144・146土坑171
写真図版	14 RA045竪穴住居(1)······148	写真図版38	RD145・147~149土坑・P 1 ······172
写真図版	15 RA045竪穴住居(2)······149	写真図版39	RA034·035竪穴住居出土遺物173
写真図版	16 RA046竪穴住居(1)150	写真図版40	RA035竪穴住居出土遺物 (1)174
写真図版	17 RA046竪穴住居(2)······151	写真図版41	RA035竪穴住居出土遺物 (2)175
写真図版	18 RA047竪穴住居(1)······152	写真図版42	RA040·041竪穴住居出土遺物176
写真図版	19 RA047竪穴住居(2)······153	写真図版43	RA041竪穴住居出土遺物 (1)177
写真図版	20 RA048竪穴住居(1)154	写真図版44	RA041 (2) · 042 (1)
写真図版	21 RA048竪穴住居(2)155		竪穴住居出土遺物178
写真図版	22 RA049竪穴住居156	写真図版45	RA042(2)·043竪穴住居出土遺物…179
写真図版	23 RA050竪穴住居157	写真図版46	RA044・045(1)竪穴住居出土遺物
写真図版	24 RA051竪穴住居(1)158		

写真図版47	RA045竪穴住居出土遺物 (2)181	写真図版62	土坑出土遺物196
写真図版48	RA045竪穴住居出土遺物 (3)182	写真図版63	遺構外出土遺物(1)197
写真図版49	RA045竪穴住居出土遺物 (4)183	写真図版64	遺構外出土遺物 (2)198
写真図版50	RA045竪穴住居出土遺物 (5)184	写真図版65	RD140土坑出土遺物(1)199
写真図版51	RA046竪穴住居出土遺物(1)185	写真図版66	RD140土坑出土遺物 (2)200
写真図版52	RA046竪穴住居出土遺物 (2)186	写真図版67	RD140土坑出土遺物(3)201
写真図版53	RA047竪穴住居出土遺物(1)187	写真図版68	RD140土坑出土遺物(4)202
写真図版54	RA047竪穴住居出土遺物 (2)188	写真図版69	RD140土坑出土遺物 (5)203
写真図版55	RA047竪穴住居出土遺物 (3)189	写真図版70	RD140土坑出土遺物(6)204
写真図版56	RA048竪穴住居出土遺物190	写真図版71	RD140土坑出土遺物(7)205
写真図版57	RA049竪穴住居出土遺物 (1)191	写真図版72	RD140土坑出土遺物(8)206
写真図版58	RA049(2)·050竪穴住居出土遺物…192	写真図版73	RD140土坑出土遺物(9)207
写真図版59	RA051竪穴住居出土遺物(1)193	写真図版73	RD140土坑出土遺物(10)208
写真図版60	RA051竪穴住居出土遺物(2)194	写真図版74	RD140土坑出土遺物(11)209
写真図版61	竪穴住居出土石・鉄製品195	写真図版75	RD140土坑出土遺物(12) ······210

### I. 調査に至る経緯と経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された都市区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定として、対象面積313haに及ぶ土地区画整理事業が進められている。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査をおこない調査必要範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施することとなった。

細谷地遺跡は過去に数次に渡る調査がおこなわれている。第1次~第3次調査は、盛岡市教育委員会により実施されており、特に平成11年度実施された第3次調査では、古代の遺構が濃密に分布する区域が明らかになったことから、平成12年度受託事業として財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが第4次調査をおこなった。その後、平成13年度には第5次調査が同様の受託事業としておこなわれ、これに隣接する地域振興整備公団委託分を第6次調査としておこなってきた。

なお、第4次・5次調査の成果は、『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集 細谷地遺跡発掘調査報告書一第4・5次調査ー』に成果が収録され、第6次調査については、『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成13年度)』にて報告がおこなわれている。

今回の細谷地遺跡における発掘調査は、第7次・第8次が平成15年度受託事業として契約された。そのうち第7次調査が地域振興整備公団委託分として都市計画道路用地内260㎡の範囲で、第8次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分として宅地用地内3,067㎡の範囲でそれぞれ予定された。しかし、予定された面積より、実質的に発掘調査が平成15年度内事業として不可能な部分があり、これを除外した調査範囲内で調査を終えた。これにより実質の調査面積は、第7次調査125㎡、第8次調査2,638㎡とそれぞれ変更された。

今回調査した第8次と合わせて調査した地域振興整備公団委託分である第7次調査は『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成15年度)』に本報告とし調査成果を収録している。

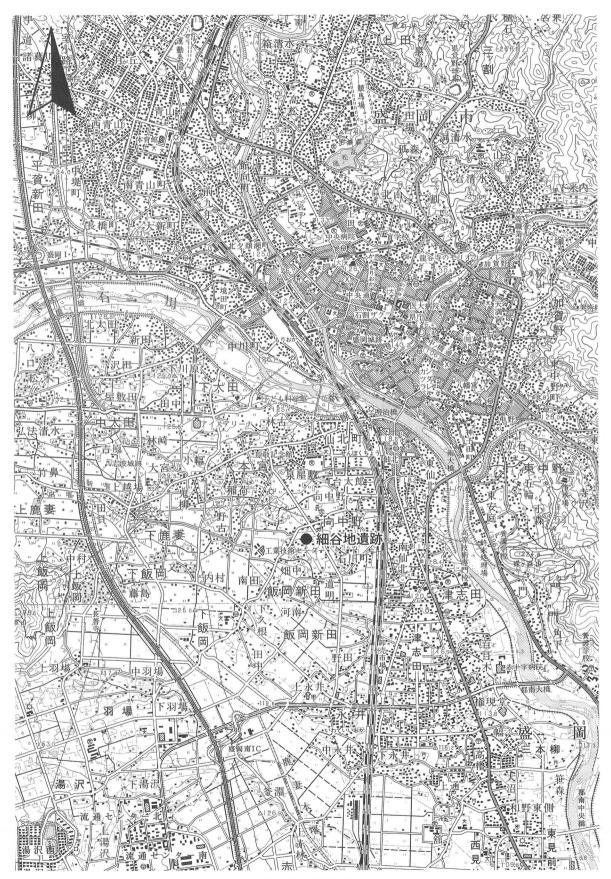
## Ⅱ.遺跡の立地と環境

#### 1. 地理的環境

細谷地遺跡は、岩手県盛岡市向中野字野原から同市飯岡新田にかけて所在する。遺跡の東には北上川、北には雫石川がそれぞれ流れ、北西には標高2,038mの岩手山を望むことができる。

岩手県北部から県内を南へ貫流する北上川は、蛇行を繰り返しながら岩手県南端を抜け宮城県に至る。宮城県北部を抜けた北上川は、宮城県石巻湾より太平洋に注ぎ出る。この東北地方を代表する大河川は西に連なる奥羽山脈、東に連なる北上山地の間を流れ、その流域に多くの沖積平野を形成している。この北上川の沖積作用によって形成された平野は、特に中・下流域において発達が顕著であり、その平野部面積は岩手県内に存在するその他の河川流域よりも広大である。中流域北部に位置する盛岡盆地では、西から雫石川、東から中津川、梁川がそれぞれ北上川に合流する。

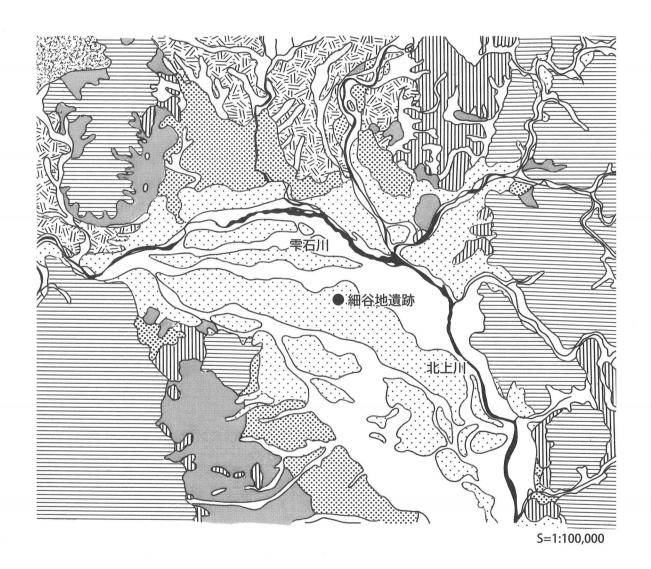
雫石川は、秋田県境、岩手県西部に端を発し、東へ流れ北上川に合流する。この雫石川は、盛岡盆地西半において広い沖積地を形成しており、特にこの南岸と北上川西岸にあたる一帯は沖積段丘面が層状に重なる。

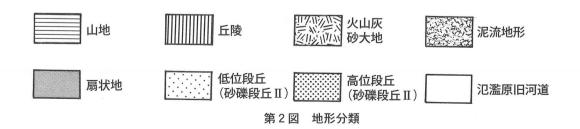


第1図 遺跡位置

細谷地遺跡は、この段丘面の一角に位置する。この段丘は砂礫層によって構成され、起伏を持ちながら一帯に広がっている。

細谷地遺跡周辺は、雫石川の氾濫原による低地部分と自然堤防状低位段丘面が複雑に入り組んだ地形を成している。現在でも水田、宅地、道路などに反映している場所も随所にみられる。このような微地形は、遺跡の分布・立地と大きく関わるものと考えられ、両者の関連性については今後も開発が進むこの地域の重要なテーマの一つであると考えられる。





#### 2. 歴史的環境

細谷地遺跡の所在する盛岡市内には、現在約500以上を数える遺跡が確認されている。これら多数の遺跡は、時代、性格、内容において多岐に渡る。しかし、現段階での遺跡分布状況は、遺跡の時代によってやや 偏在傾向が認められる。

縄文時代の遺跡あるいは散布地は、雫石川北岸に位置する台地上に多くみられ、大新町遺跡などを含む大館遺跡群などが挙げられる。古代の遺跡は、細谷地遺跡の位置する雫石川南岸、北上川西岸の地域で集落遺跡が高い密度で分布している。中世の遺跡は、館跡等を中心として市域各地に散見される。

細谷地遺跡周辺域では、縄文時代の遺跡として熊堂A遺跡が存在する。この遺跡は縄文時代晩期を中心とする集落遺跡であり、周辺では縄文時代の居住域が特定できる数少ない遺跡である。周辺では居住域ではないが、縄文時代の陥し穴等猟場を示す遺構が熊堂、稲荷、野古、飯岡沢田などで確認されている。

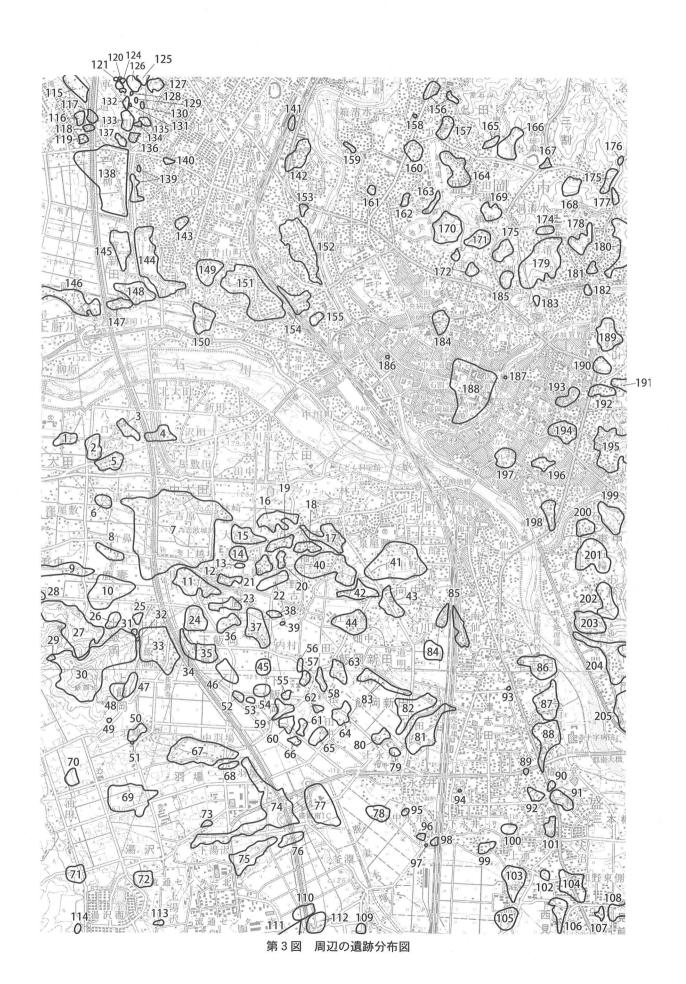
この地域では、古代の集落遺跡が多く分布する。古代城柵の一つである志波城跡は、雫石川より約1km南に位置する。志波城跡は803年に造営された城柵で、雫石川の氾濫により城柵機能を徳丹城に移したと考えられている。

今回調査した細谷地遺跡周辺は、古代の集落遺跡が多く確認されており、いわゆる盛南開発に伴う発掘調査によってその全体像が徐々に明らかになりつつある。盛南開発により調査された遺跡は、大宮北、小幅、熊堂A、熊堂B、稲荷、鬼柳、野古A、台太郎、飯岡才川、飯岡沢田、矢盛の各遺跡、向中野館跡が挙げられる。これらの遺跡は、ほとんどが奈良~平安時代の竪穴住居を中心とする集落遺跡である。熊堂B遺跡では、竪穴住居が約80棟、野古A遺跡では、同じく約50棟確認・調査されている。台太郎遺跡の発掘調査事業は、すでに50次を超え、合計約110,000㎡の調査終了面積に対して竪穴住居約600棟が確認されている。さらに、飯岡沢田遺跡では、古代の墳墓群が確認されており、周辺の竪穴住居群との関係が注目される。

古代に続く中世の遺構・遺物としては、台太郎遺跡で確認されている礎石建物、堀跡、土壙墓群などが挙げられる。また、向中野館跡では、中世の館跡の一部であることが発掘調査によって明らかになっている。近世の遺構・遺物は各遺跡で少なからずみられるが、まとまって確認されているのは台太郎遺跡、小幅遺跡などである。両遺跡ともに掘立柱建物などの遺構がみられる。

表 1 盛岡南新都市計画整備事業関連調査遺跡一覧(埋蔵文化財センター調査分)

No.	遺跡名	時 代	種別	No.	遺跡名	時 代	種 別
15	大宮北	古代	集落跡	40	野古A	古代・平安	集落跡
16	小幅	古代	集落跡	40	飯岡沢田	古代	集落跡
17	本宮熊堂(熊堂B)	古代	集落跡	41	台太郎	古代	集落跡
18	稲荷	古代	集落跡	42	飯岡才川	古代	集落跡
19	鬼柳	古代	集落跡	43	細谷地	古代	集落跡
				43	向中野館	中世	集落跡



-5-

表2 周辺の遺跡一覧 (1)

No.	遺跡名	時 代	種別	No.	遺跡名	時 代	種別
1	細田	古代・平安	散布地	59	熊堂I	縄文・古代	集落跡
2	館(太田館)	古代・(平安)	集落跡	60	熊堂Ⅲ	古代・平安	集落跡
3	八ツロ	古代	散布地	61	熊堂Ⅱ	古代・平安	集落跡
4	八卦	古代・(奈良・平安)	集落跡	62	下久根Ⅱ	縄文・古代	散布地
5	上野屋敷	古代	散布地	63	石持	古代	散布地
6	畑中	古代	集落跡	64	松島	古代	集落跡
7	小沼	古代・平安	集落跡	65	田中	古代・平安	集落跡
8	五兵衛新田	古代	集落跡	66	南谷地	古代・平安	集落跡
9	天沼	古代	集落跡	67	因幡	縄文・古代	散布地
10	竹鼻	古代	集落跡	68	新井田Ⅱ	古代	散布地
11	石仏	古代	集落跡	69	木節	古代・平安	集落跡
12	水門	古代	集落跡	70	アイノ野	縄文	散布地
13	小林	古代	集落跡	71	湯壷	縄文	散布地
14	大宮	古代・中世	集落跡	72	後島	縄文	散布地
20	鬼柳C	古代	集落跡	73	小田 I	古代	散布地
21	鬼柳B	古代	集落跡	74	新田	古代・平安	集落跡
22	野古B	古代	散布地	75	湯沢大館	古代~中世	散布地
23	上越馬B	古代	集落跡	76	一本松	平安	散布地
24	辻屋敷	古代	集落跡	77	大島	古代	散布地
25	堤	縄文・古代	散布地	78	間木	古代	散布地
26	月見山	縄文・古代	散布地	79	境田	古代	散布地
27	山中	縄文・古代	散布地	80	葛本	古代	散布地
28	蟹沢下	古代	散布地	81	陣当	古代	集落跡
29	細越	縄文	散布地	82	生畔	古代	集落跡
30	飯岡山館	中世	散布地	83	夕覚	古代	散布地
31	高館古墳路	奈良~平安	古墳	84	向中野幅	古代	集落跡
32	高館	縄文	散布地	85	南仙北	縄文・古代	集落跡
33	大柳 I	古代	集落跡	86	碇堰	古代・奈良	集落跡
34	藤島Ⅱ	平安?	散布地	87	西鹿渡	古代	集落跡
35	藤島	縄文・平安	集落跡	88	百目木	縄文・古代	集落跡
36	二又	古代・平安	散布地	89	坂の下	縄文	散布地
37	西田A	古代	集落跡	90	中島	古代	集落跡
38	西田B	古代	集落跡	91	三本柳幅	縄文・古代	集落跡
39	前田	古代	集落跡	92	下永林	縄文・古代	散布地
44	矢盛	古代	散布地	93	いたこ塚	近世	祭祀跡
45	深淵 I	古代・平安	集落跡	94	永井経塚		祭祀跡
46	飯岡林崎Ⅱ	古代	集落跡	95	永井前田	古代	散布地
47	赤坂Ⅱ	平安?	散布地	96	神田	古代	散布地
48	飯岡赤坂	古代	散布地	97	神田塚	近世	祭祀跡
49	いたこ塚	近世	祭祀跡	98	下永井	古代	散布地
50	小館(羽場館)	中世	散布地	99	荒屋	古代	集落跡
51	砂子塚	古代	散布地	100	高櫓A	古代	集落跡
52	飯岡林崎I	古代	集落跡	101	高櫓B	古代	散布地
53	上新田	古代・平安	集落跡	102	和野	古代	散布地
54	深淵Ⅱ	古代・平安	集落跡	103	三百刈田	古代・中世	集落跡
55	西	古代・平安	集落跡	104	古館	中世	散布地
56	高屋敷I	古代	散布地	105	見前館	古代	集落跡·城館跡
57	高屋敷Ⅱ	古代・平安	散布地	106	見前中島	古代	散布地
58	下久根 I	縄文・古代	散布地	107	伊志田	古代	散布地

表 2 周辺の遺跡一覧 (2)

No.	遺跡名	時 代	種 別	No.	遺跡名	時 代	種別
106	見前中島	古代	散布地	156	黒石野平	古代(平安)	集落跡
107	伊志田	古代	散布地	157	東緑が丘	縄文	散布地
108	大桜前	古代	集落跡	158	上田一里塚	近世	祭祀跡
109	上浅子	古代	散布地	159	箱清水	縄文・古代	散布地
110	大波野 I	古代・縄文	散布地	160	右京長根	縄文	散布地
111	大波野Ⅱ	縄文	散布地	161	八幡森	縄文	散布地
112	赤林一里塚	江戸	散布地	162	高松神社裏	縄文	散布地
113	島	不明	散布地	163	高松	縄文・古代	散布地
114	湯沢	縄文	散布地	164		縄文	散布地
115	白沢	縄文	散布地	165		縄文	散布地
116	滝沢笹森	縄文・奈良・平安	散布地	166		縄文	散布地
117	大緩	縄文・平安	散布地	167	櫃石	縄文	散布地
118	別当森	縄文・平安	散布地	168	洞清水	縄文	散布地
119	笹森	縄文	散布地	169	稲荷窪	縄文	散布地
120	室小路8	縄文	散布地	170	上田山	縄文・古代	散布地
121	室小路16	縄文	散布地	171	金比羅前	縄文	散布地
122	室小路5	縄文・平安	散布地	172	南武家墓所	近世	散布地
123	室小路9	縄文	散布地	173	久保屋敷A	縄文	散布地
124	室小路15	縄文	散布地	174	岩清水	縄文	散布地
125	室小路Ⅱ	縄文・古墳	散布地	175	新茶屋	縄文	散布地
126	室小路3	縄文・奈良・平安	散布地	176	0171122	縄文	散布地
127	穴口	縄文・古代	集落跡	177	新茶屋口	縄文	散布地
128	室小路10	縄文・弥生	散布地	178	合間	縄文・古代	散布地
129	室小路4	縄文	散布地	179	道下	縄文・古代	散布地
130	室小路12	縄文・平安	散布地	180	甘石	縄文	散布地
131	室小路6	縄文	散布地	181	屠牛場	縄文・古代	散布地
132	室小路11	縄文・奈良	散布地	182	楢山田	縄文	散布地
133	室小路7	縄文·古墳·奈良·平安	散布地	183	愛宕山	近世	散布地
134	室小路13	縄文・古代	散布地	184	四ッ家	古代	散布地
135	室小路 [	縄文・平安	散布地	185	久保屋敷 B	縄文	散布地
136	室小路14	縄文・古代	散布地	186	永祥院経塚	近世	経塚跡
137	諸葛川	縄文·古墳·奈良·平安	集落跡	187	鍛治町	近世	一里塚
138	高柳	縄文·弥生·古墳·奈良·平安	集落跡	188	盛岡城	中世・近世	散布地
139	堤橋	縄文・古代	散布地	189	獅子が鼻	中近世	散布地
	諸葛橋	縄文・古代	散布地		鼻子	縄文・弥生	散布地
141	氏子橋	縄文・古代	散布地	191	新庄	縄文	散布地
142	上堂頭	縄文・古代	集落跡	192	瀬戸	縄文・弥生	散布地
143	赤袰	縄文・古代	散布地	193	花垣館(花坂館)	中世	散布地
144	長橋町	縄文・古代	散布地	194	山王山	縄文・古代	集落跡
145	水道	縄文・古代	散布地	195	砂溜	縄文・古代	集落跡
146	幅皿	古代	集落跡	196	中野館	中世	
147	幅Ⅱ	古代	集落跡	197	大慈寺町	縄文	散布地
148	幅I	古代(奈良)	集落跡	198	新山館	古代・中世・近世	
149	大館堤	縄文・古代	集落跡	199	金勢	縄文・古代	集落跡・城館跡
150	稲荷町	縄文・古代~近世	集落跡	200	葛西館	縄文~古代	散布地
151	大新町	縄文・古代・近世	集落跡		立石		散布地
152	安倍館(厨川城)	縄文・中世	散布地		<u> </u>	縄文・古代 縄文~近世	散布地·集落跡
153	上堂	縄文・古代	散布地		蝶ヶ森館	中世	散布地
154	<u>一</u> 前九年	縄文	集落跡		門		散布地
155	宿田南	中世・近世	集落跡		角下	縄文・古代	散布地
TOO	пшн	1.16. 角頂	未俗助	400	<b>月</b> 下	縄文・古代	散布地

# Ⅲ. 調査の方法

#### 1. 発掘調査の方法

調査開始時、調査区境に沿って調査区を全周する細長い試掘トレンチを掘削し、その土層断面によって調査区全域での遺構検出面を確認した。その後表土をバックホーにより除去し、それ以降の掘削作業は人力でおこなった。調査中は適宜、写真撮影および実測をおこない記録の保存に努めた。

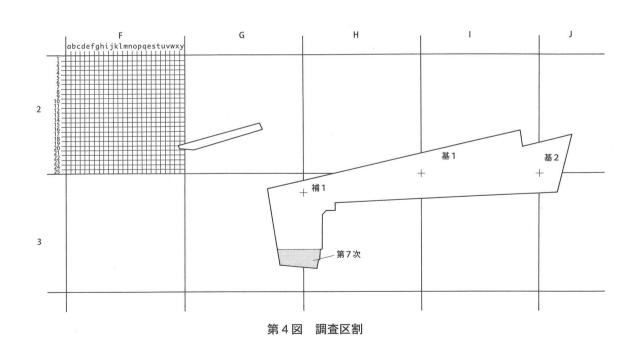
調査区割とグリッドの設定および遺構名称は、盛岡市教育委員会の方針に従っている。正方形グリッド最小単位を $2 \times 2$  mとした。グリッド(区画点)の設定および実測に用いた基準点は表3 のとおりである。

遺構出土遺物は遺構・位置・層位の各単位で取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド(区画点)・層位単位で取り上げた。

遺構名は遺跡内統一の連番であるため、調査時に付与したものが欠番になることもあったが、統一連番にするべく新しい遺構名・番号を与え報告した。また、過年度調査されている遺構の続きは、過年度調査の遺構名および遺構番号をそのまま踏襲した。遺構名略号は、竪穴住居(RA)・竪穴住居状遺構(RE)・土坑(RD)・性格不明遺構、その他(RZ)である。

点名	座標系種類	X 座 標	Y 座 標	Z 座 標	
甘海上1	世界測地系(新)	-35792. 313	26100. 409	122, 724	
基準点1	日本測地系(旧)	-36100.000	26400.000	144. 144	
甘油上の	世界測地系(新)	-35792. 313 26100. 408		122, 776	
基準点2	日本測地系(旧)	-36100.000	26450.000	122.110	
4+04 H 1	世界測地系(新)	-35800.312	26050. 410	122, 960	
補助点1	日本測地系(旧)	-36108,000	26350. 000		
4-114 E 0	世界測地系(新)	-35800.312	26100. 409	122, 760	
補助点2	日本測地系(旧)	-36108.000	26400.000	122.700	

表 3 基準点・補助点座標一覧



#### 2. 整理作業の方法

発掘調査中に作成した遺構実測図は必要に応じて合成および修正をおこない、必要なものは第2原図を作成し浄書した。遺構名は、発掘調査時のものと整理作業・報告書用のものとで新旧の対応表を作成した。

発掘調査中に撮影した遺構写真は、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサル・6×7版モノクロを使用し、 それぞれファイルに整理し台帳を作成した。本書では、そのうち必要な遺構写真について紙焼き、トリミン グをおこない写真図版に掲載した。

出土した遺物は、水洗した後注記・接合し、必要な遺物に関しては石膏による復元をおこなった。それら作業過程中、本書に掲載するものを選出し実測、写真撮影を実施した。実測した遺物は浄書をおこない挿図版として掲載し、撮影した遺物写真についてもすべてを写真図版に掲載した。掲載した遺物は、原則的に実測に堪え得るものを中心に選出した。また、体部のみの破片は器壁の傾きが判明する遺物のみを選出した。遺物写真は、立面での撮影を原則としたが、立面での撮影が不可能な破片については平面的な撮影をおこなった。なお、遺物撮影はデジタルカメラ(300万画素程度)を用いた。

#### 3. 記載方法と凡例

本書で使用する方位は、座標による方位である。よって平面図中に付されている北方位印はすべて座標による北である。検出した遺構の欠損部分は、波線による推定線を加えて表現した。また、調査において任意で設定したトレンチ掘方、調査区境および現代の攪乱は一点鎖線とし、トレンチおよび攪乱の平面はケバを変えて遺構のそれと区別した。

遺構の重複については、平・断面図ですべてを示している。

個々の遺構平面図は、基本的に遺構主軸を重視して配置したが、主軸の定まらない不定形、円形の平面形態を呈する遺構については、北が上になるように掲載した。竪穴住居の平面図はカマドのある側辺を上向きに配置し主軸に合わせ、畑状遺構については畝間溝の軸方向に合わせてレイアウトした。

出土した土器は、本書では以下の通りに分類し報告することとした。

従来のあかやき土器とされている坏類は土師器(非黒色処理、ミガキなし)とした。この分類は客観性を持たせることが目的であるが、非黒色処理でミガキの施されない坏と焼成不良の須恵器坏とは極めて不分明であると言わざるを得ない。両者の決定的な差異は焼成に他ならない。よって、一部で還元が進んでいるものや須恵器の形態・製作技法がみられるものは本来須恵器を指向したと考えられ、器表面に黒斑が顕著にみられるものは本来土師器を指向していたと考えられるため、部分的に還元不足が認められる土器や黒斑を有する土器は遺物観察表中の備考欄に表記した。

掲載した土器実測図は、奈良平城京跡、京都平安京跡の調査報告書に準じて1/4の縮尺で統一した。先述した分類により須恵器の断面は黒塗り、土師器の断面は白抜き、黒色処理されている土師器は半分にアミをかけ表現した。調整の痕跡は表のとおり区分し、内外面ともに中央半分のみの表現にとどめた。口縁部に施されるヨコナデは、図の煩雑さを避けるため表現していない。また、土器実測図における稜線は弱い屈曲や口縁端部、底端部の稜を一点抜き直線、強い屈曲や明瞭な調整の変化点は実線、ロクロ等の回転力を利用した回転ナデは、その凹凸の凸部に二点抜き直線で表現した。

竪穴住居出土遺物は、原則的に住居毎のまとまりで図・写真を掲載したが、遺構間で接合した遺物は本文中・遺物観察一覧に表記し、より原位置に近い出土状況にある遺構の方を優先させ掲載した。

表 4 土器調整一覧

調整作用媒体	ロクロ等の回転力	調整技法名	施される部位	器面に残る痕跡	実測図表現方法
		ヘラナデ	甕の体部など	明瞭な条線のない 不定方向で断続的 な工具の単位	
		ハケ	甕の体部など	不定方向で断続的な数条単位の細かな条線	
工具	×	ヘラケズリ	甕の体部外面など	不定方向で断続的な砂粒の動き	TP   1
		ミ ガ キ	坏体部など	断続的で光沢のあ る細い単位の筋	
	0	回転ヘラケズリ	坏底部など	横、螺旋方向に連続 して見られる砂粒 の動き	<b>D</b>
指+皮(布)	Δ	ョコナデ	各器種口縁部など	口縁部等に見られる横方向の連続的な粘土の動き	
指	×	ナ デ	各器種各部	不定方向、単位不定 の断続的な粘土の 動き	
	0	回転ナデ	坏・甕体部など	横・螺旋方向に連続 的な粘土の動き	

## Ⅳ. 検出遺構と出土遺物

#### 1. 基本層序と遺構配置

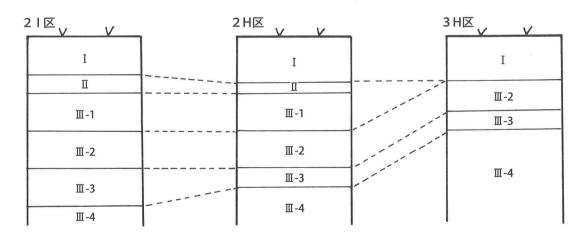
遺跡の基本層序は、大別するとⅠ層~Ⅲ層である。

I層は灰黒色シルトで近現代の混入物を含む層である。細分すると表土、耕作土、攪乱層などから構成される。

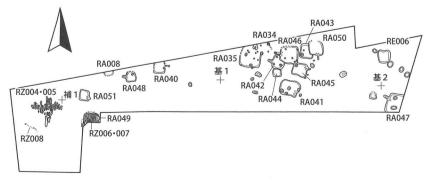
Ⅱ層は黒褐色シルトで、この層上面が古代の遺構検出面である。部分的にしか遺存していない。特に、調 香区南側は削平が著しいため遺存していない。無遺物自然堆積層である。

IIII 層は IIII 層の削平が著しいところでは III 層直下で検出される。細分すると上層から III <math>IIII = 1 層は、暗褐色シルト層で漸位的に変化している無遺物自然堆積層、 III IIII = 1 は黄色シルト層、 III IIII = 1 は黄色砂層、 III IIII = 1 は黄色砂礫層である。いずれも無遺物自然堆積層である。

遺構調査区は概ね東西方向に長い形状を成し、過年度調査区南端と隣接している。検出した遺構は、調査区北端および東側の2I・2J・3I・3J・2H・3Hにかけて竪穴住居、調査区西側の3G・3Hにかけて畠状遺構がみられる。



第5図 基本層序断面



第6図 遺構配置

#### 2. 竪穴住居・竪穴住居状遺構と出土遺物 (RA008・RA 034・RA 035・RA040~051・RE006)

今回の調査では、竪穴住居15棟・竪穴住居状遺構 1 棟を検出した。調査区を便宜的にH・Iライン(Y=26400.000上)で東西 2 分割すると、調査区東側で10棟、調査区西側で 5 棟となり、やや東側に偏在する傾向にある。特に 2 I 区は最も分布密度が高い。また、遺構埋土に十和田 4 降下火山を含むものも存在する。

#### RA008竪穴住居(第7図、写真図版4)

3 H区に位置し、第 4 次調査で検出された竪穴住居に続く遺構である。全体的に現代の水路によって削平を受けているが、床面は良好に残存している。

平面形態は全体が不明であるが、方形であると考えられる。規模は、残存する南北長0.6m、東西長2.8m、深さ13cmを測る。カマドおよびそれに付随する施設、焼土はみられなかった。

南側壁は、東西に流れる現代の水路による攪乱を受けているが、南西隅は屈曲の始まりを示し、竪穴住居 角に近いと考えられる。

埋土は、現代の水路の影響で、ややグライ化しているシルトであった。

カマドおよびそれに付随する施設、出土遺物は第4次調査部分と同様にみられなかった。

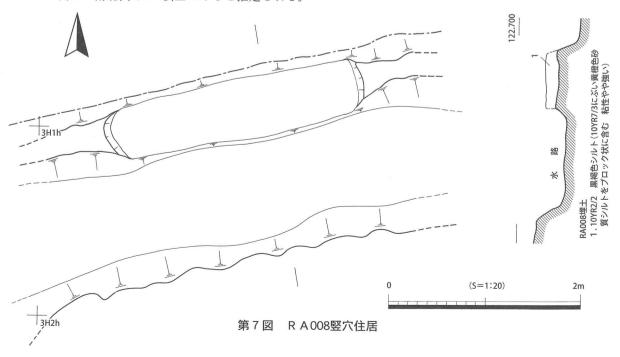
出土遺物もなく、時期も不明である。

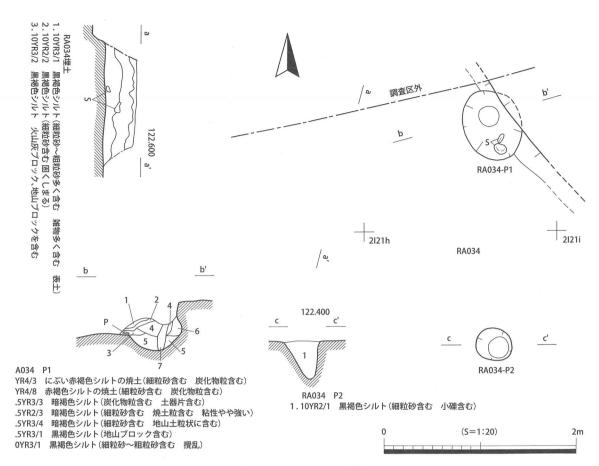
#### RA034竪穴住居(第8図、写真図版4)

2 I 区に位置し、第 4 次調査で検出された竪穴住居に続く遺構である。第 4 次調査では、この住居の北側 1/3 が調査されている。住居南側は、東西に流れる現代の水路による攪乱を受けている。

また、遺構西側はRA035と重複が認められる。第 4 次調査断面では、このRA034が別遺構を破壊していると報告されている。今回の調査で、この別遺構はRA035の一部であることが判明し、このことからRA034はRA035より新しい遺構であると考えられる。平面では重複する部分が水路により欠損しているため不明確である。よって、両者の先後関係は第 4 次調査の成果から考えられるのみである。

先述した通り攪乱が著しいため全体の規模は不明である。しかし、第4次調査の成果を勘案すると東西長3.6mを測り、南北長3.5m以上であると推定される。





第8図 RA034竪穴住居

平面形態は、直線のみの検出、残存であったため不明である。しかし、第4次調査より方形であると考えられる。

埋土は上・中・下の3層からなり、若干の凹凸はあるもののほぼ水平に堆積している。中層および下層には火山灰が認められるが、下層の方がより顕著である。この埋土は、水平な堆積で顕著なブロック土を含まないため自然堆積であると考えられ、同時に下層は火山灰降下により近い時期の堆積層であると考えられる。 床面は、ほぼ全面固く締まり、貼床が施されていると考えられる。また、床面においてP1、P2をそれ

P1は、平面長軸39cm・短軸26cmの楕円形を呈する小土坑である。床面および東側壁を袋状に掘り込んでいるが、竪穴住居埋土での掘り込みはみられないことから、この住居に伴う何らかの施設であったと考えられる。埋土には炭化物や焼土を多く含み、規模に比して遺物も多く出土した。

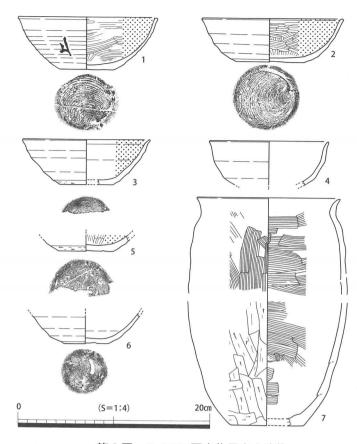
P 2 は直径19cmの平面円形を呈する小形の土坑である。深さは21cmを測り、床面から掘り込まれている。埋土は火山灰を含まない黒褐色土層で、遺物は出土していない。

#### 出土遺物 (第9回、写真図版39)

ぞれ検出した。

出土した遺物は土師器坏・土師器甕である。1~6は土師器坏である。

1は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。体部外面に「上」という文字が倒位で墨書されている。墨書の文字は、筆順・字体・筆の運びとも



第9図 RA034竪穴住居出土遺物

に非常に整っている。住居内土坑P1の焼土を伴う埋土より出土した。

2は口縁部~底部にかけて良好に残存する。 内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転 糸切り後無調整である。住居内土坑P1の焼 土を伴う埋土より出土した。

3は口縁部~底部にかけて残存する。不明瞭ながら内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り離し回転ヘラケズリ調整である。住居内土坑P1の焼土を伴う埋土より出土した。

4 は口縁部~体部下半にかけて残存する。 内外面ともに回転ナデのみの調整である。体 部下半でやや膨らみを持つ特異な器形を呈す る。住居埋土中より出土した。

5 は体部下半~底部にかけての破片である。 内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り 離し後回転ヘラケズリ調整である。住居内土 坑P1の焼土を伴う埋土より出土した。

6 は体部半ば~底部にかけての破片である。 内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は

回転糸切り後無調整である。住居埋土中より出土した。

7は土師器甕である。成形および調整にロクロは使用されていない。外面調整は下半のヘラケズリと上半のハケで、それぞれ痕跡の見え方が異なるが、調整の単位幅、調整方向ともに同じであるため同一工具で施されたと考えられる。内面調整は横方向のハケで体部全面、密に施されている。口縁部は短くわずかに外方に開く。住居内土坑P1の焼土を伴う埋土より出土した。

#### R A 035竪穴住居 (第10·11図、写真図版 5)

調査区中央やや東寄り、2 I 区南西隅に位置する。遺構北西隅が区画点2 I 21 e に近接する。

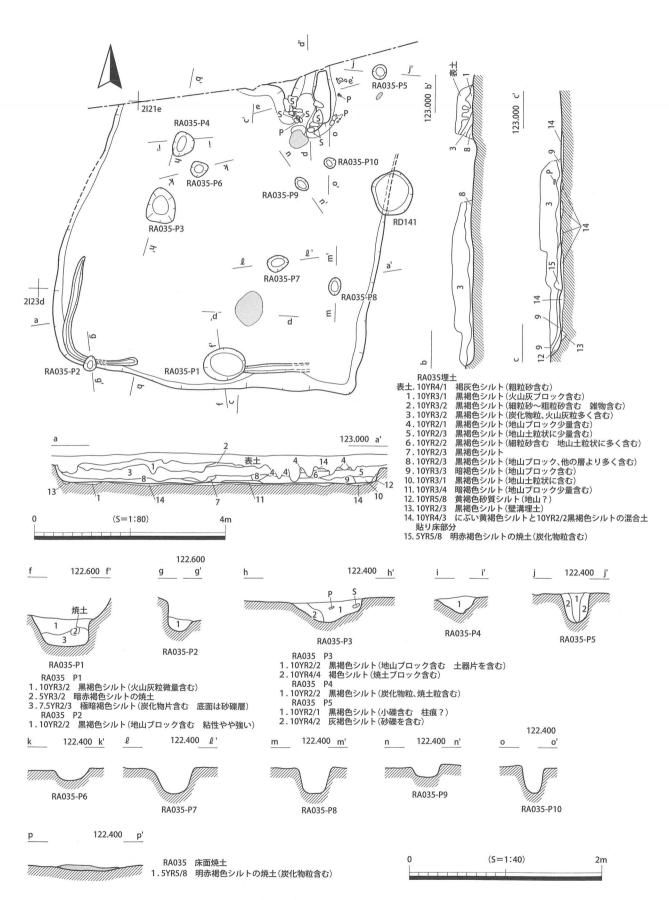
検出面は第1層直下、標高122.600mを測る。この検出面は、木の根の浸食を受けているため、非常に凹凸の著しい面であった。また、東西に流れる現代の水路により東西両側壁の一部を攪乱されている。

平面形態は、ほぼ方形を呈するものと思われる。北西側壁は、第 4 次調査区で検出されており、第 4 次調査「RA35住居跡」に続く遺構である。

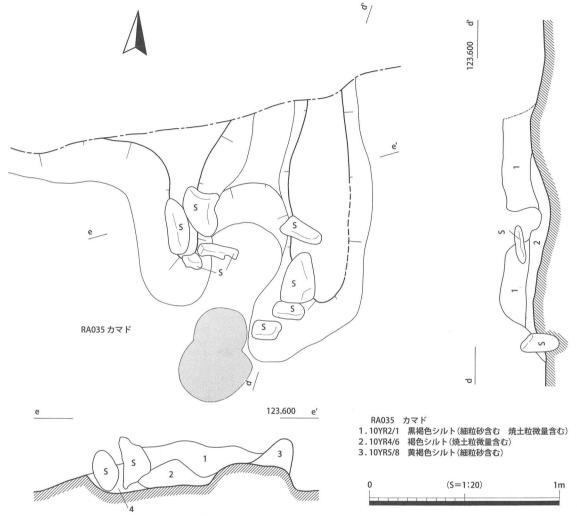
規模は、短軸である南北長6.11m、長軸である東西長は推定6.65m、深さ22.6cmを測る。今回検出した竪 穴住居群中最大の規模を有する。

埋土は、概ね上・下 2 層のシルトからなり、上層には多量の火山灰を含む。火山灰は、比較的大きな塊状を呈するが、降下時の純堆積ではないと考えられる。

東側壁は、南半が良好に残存しているが、北半は現代の水路によって攪乱されている。また、同様に一部 RD141によって切られている。西側壁は、東側壁と同様に現代の水路によって一部削平されているが、調査区



第10図 RA035竪穴住居



第11図 RA035竪穴住居カマド

境まで概ね良好に残存している。南側壁は、最も良好に残存している。北側壁は、今回の調査区では検出できなかったが、第4次調査区内で検出されている。

カマドは、北側壁調査区境に位置する。カマド両袖は、構築用の礫が露出した状態であった。カマド燃焼 部はカマド袖よりやや南に位置し、本来カマド袖がもう少し南まで延びていたことを示している。

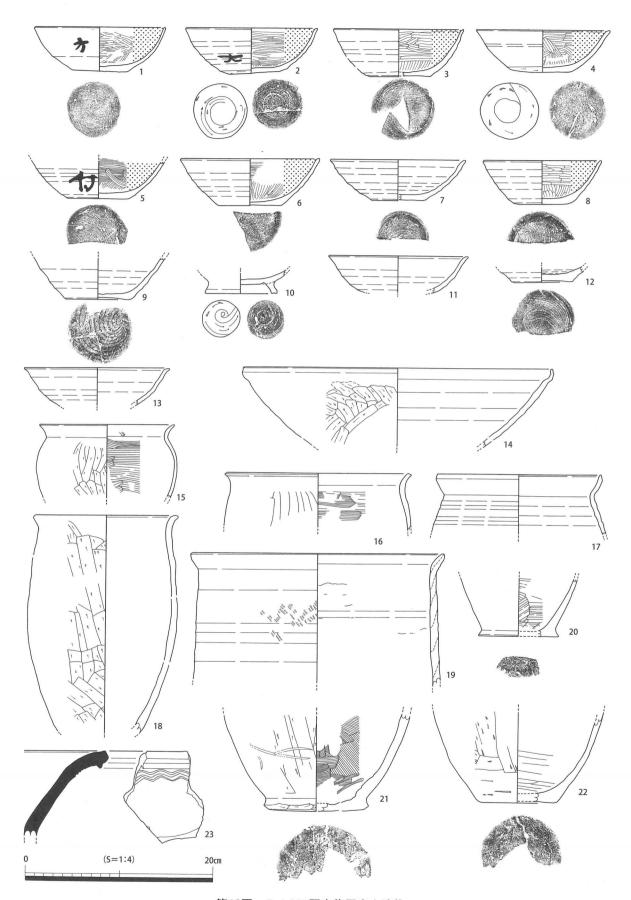
煙道および煙出しは、不明である。存在するとすれば、第4次調査区にみられると推定されるが、検出されていない。

床面は、残存している長さ南北3.2m、東西3.15mを測り、堅く締まっている。

床面では土坑10基、周溝1条を検出した。

床面の貼床は、厚さ約 $5\,\mathrm{cm}$ を測る。完掘したが、柱穴はみられなかった。調査では明確にできなかったが、 床面で検出した10基の土坑のうちいくつかは柱穴になる可能性も考えられる。また、直径 $0\,\mathrm{cm}$ の範囲で焼土 面を確認したが、どのような性格を有するものかは不明である。

遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土師器を中心に土器類が出土した。遺構および遺物から 9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。



第12図 RA035竪穴住居出土遺物

#### R A 035出土遺物 (第12図、写真図版40・41)

出土した遺物は土師器坏・土師器高台付坏・土師器甕・須恵器甕である。  $1 \sim 8 \cdot 11 \sim 13$ は土師器坏である。

1は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り離し後不定方向 のヘラケズリ調整である。また、体部外面に正位で「方」と墨書されている。住居北東部埋土より出土した。

2 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り離し後体部最下端~底部外周にかけて回転ヘラケズリ調整が施されている。また、体部外面に正位で「大」と墨書されている。

3 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土中より出土した。

4は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り離し後体部最下端~底部外周にかけて回転ヘラケズリ調整が施されている。住居埋土中より出土した。

5 は体部上半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。体部外面に正位で「村」と推測される1文字が墨書されている。住居埋土中より出土した。

6 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居カマド付近埋土中より出土した。

7は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は回転糸切り 後無調整である。また、口縁部はやや外反する。住居埋土中より出土した。

8 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土中より出土した。

11は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部調整は不明である。また、口縁部はやや外反気味である。住居埋土中より出土した。

12は底部のみの破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は回転糸切り後無調整である。また、底部外面には黒斑が認められる。住居埋土中より出土した。

13は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部調整は不明である。また、口縁部はやや外反気味である。住居内土坑3埋土中より出土した。

9・15~22は土師器甕である。

9は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は回転糸切り 後無調整である。住居埋土より出土した。

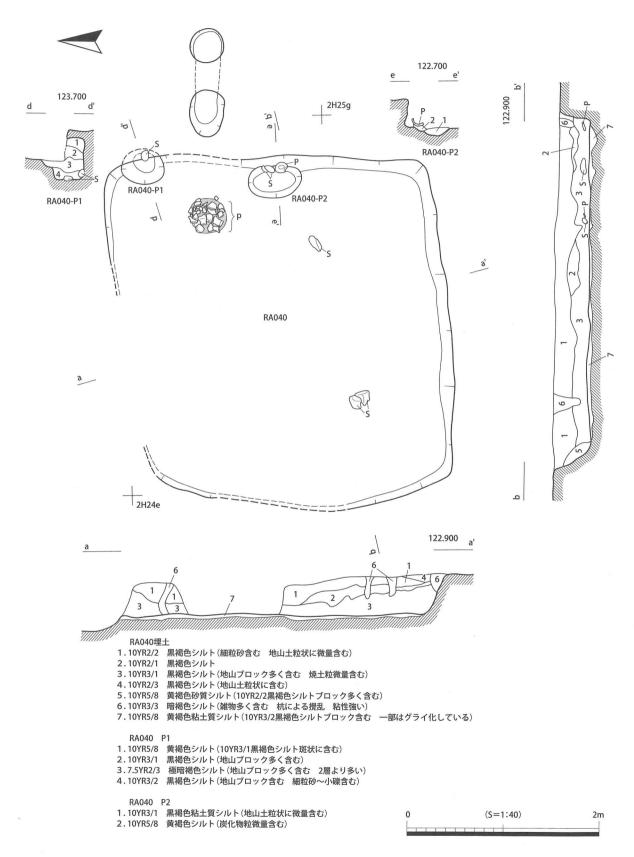
15は口縁部~体部にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケがそれぞれ施されている。体部はやや丸みを持ち、口縁部は緩く外反する。住居内土坑3埋土中より出土した。

16は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケが それぞれ施されている。口縁部は短く、わずかに外方に開くのみである。住居北側埋土中より出土した。

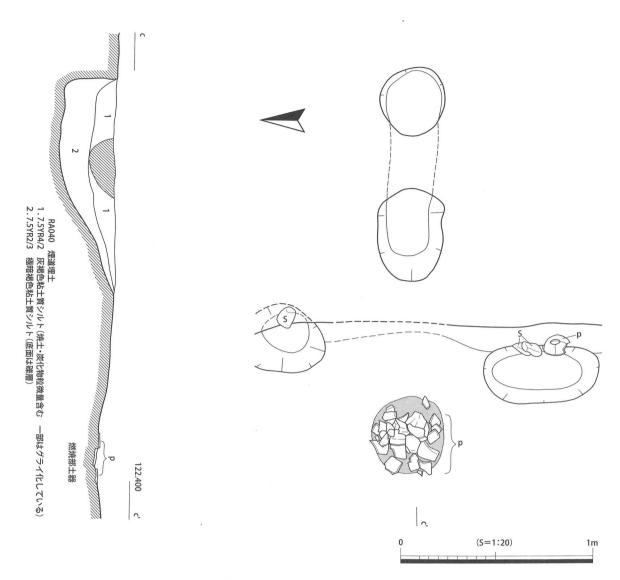
17は口縁部~体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、口縁部は端部でわずかに 上方に向く。住居内土坑3より出土した。

18は口縁部~体部下半にかけて残存する。外面は縦方向のヘラケズリが施され、口縁部はわずかに屈曲させるのみで、ヨコナデが施されていない。住居内土坑1埋土中および住居埋土中より出土した。

19は口縁部~体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整である。この調整によって不明瞭に



第13図 RA040竪穴住居



第14図 RA040竪穴住居カマド

なっているが、かすかに平行タタキの痕跡が認められる。また、器壁断面の輪積み痕は非常に明瞭である。 口縁部は短く外方へ開く形状である。住居内カマド埋土中より出土した。

20は体部半ば~底部にかけての破片である。内面調整はハケである。また、底部外面には木葉痕が認められる。住居埋土中および住居内土坑3埋土より出土した。

21は体部~底部にかけて残存する。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケが施されている。また、底部外面には木葉痕が認められる。体部下半には焼成前の刻書がみられるが、文字か記号か、にわかには断じ得ない。しかし、文字であるならば筆順と出土文字傾向より倒位の「大」である可能性も考えられる。住居北東埋土中より出土した。

22は体部~底部にかけて残存する。面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のヘラナデが施されている。また、底部外面には木葉痕が認められる。住居北西埋土中より出土した。

10は土師器高台付坏である。体部下半~高台部にかけての破片である。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内面はミガキと黒化処理されている可能性がある。底部は切り離し後高台が貼り付けられ、さらに回転ヘラケズリが施されている。住居埋土より出土した。

16は土師器鉢である。口縁部~体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整が施されているが、体部外面には不定方向のヘラケズリも施されている。口縁部は丸みを持ちながら上方に端部を向け強いヨコナデが施されている。住居内土坑3より出土した。

23は須恵器甕である。口縁部のみの破片であるため口径等の法量は不明である。口縁端部直下に波状文が施されている。

#### R A 040 (第13·14図、写真図版 6·7)

調査区中央西寄り、2H区南端中央に位置する。遺構南西隅が区画点2H24eに近接する。

検出面は第1層直下、標高122.700mを測る。この検出面は、木の根の浸食を受けているため、やや凹凸の著しい面であった。また、東西に流れる現代の水路により中央の一部を溝状に攪乱されている。

平面形態は、ほぼ方形を呈し、平面規模は南北3.4m、東西3.8m、深さ42cmを測る。

埋土は、概ね上下2層のシルトからなり、ほぼ水平堆積である。いずれの埋土にも地山ブロックが含まれているが、堆積の状況から人為的な堆積とは考えられない。

東壁は、カマドの設置位置である中央やや北寄りの一部が現代の水路によって攪乱されている。西壁も同様に中央部が水路によって攪乱されている。南壁は良好に残存しており、北壁は西半が調査区外である。

カマドは、水路によりほぼ完全に削平されているが、燃焼部のみを良好に検出した。カマド袖はすべて失われているため規模および形状は不明である。燃焼部には焼土がみられ、この焼土の範囲上面に土器が集中して出土した。土器は土師器甕1個体分で、故意に破砕して敷かれたと考えられる。

煙道および煙出しは、現代の水路により削平を受けているが、全体の長さの約1/3がトンネル状に残存している。

床面は、南北3.2m、東西3.4mを測り、堅く締まっている。水路による攪乱は、概ね床面直上までしか及んでいないため床面は全体的に良好な状態で残存している。

床面では土坑2基を検出した。2基ともに本来存在したと考えられるカマド袖の両外側で検出し、いずれ も東側壁を抉って掘り込まれている。また、

埋土中から掘り込まれていないことから床 面と同時に機能した土坑であると考えられ ス

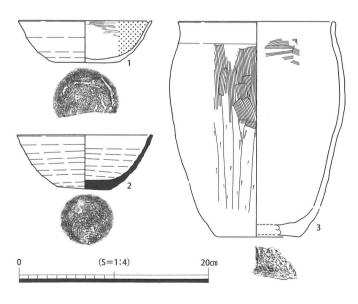
床面の貼床は、厚さ約5cmを測る。完掘 したが、柱穴はみられなかった。

遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土器を中心に出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。

## R A 040出土遺物 (第15図、写真図版42)

出土した遺物は土師器坏・須恵器坏・土 師器甕である。

1は土師器坏である。内面ミガキ調整で



第15図 RA040竪穴住居出土遺物

黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土から出土した。

2 は須恵器坏である。底部は回転糸切り後無調整であり、体部が帯状に還元不足を示す。床面直上から出土した。

3は土師器甕である。体部下半の調整痕は縦方向のヘラケズリとみられるが、上半はハケに転化しているようである。両者の調整痕は見え方が異なるが、工具の単位、方向など同一視でき、いずれの調整も同一工具により同時に施された一連の調整であると考えられる。また、内面調整は横方向のハケである。口縁部~頸部にかけては、ヨコナデは施されているが、ほとんど屈曲せず直立気味である。大部分の破片がカマド前床面で出土した。

#### R A 041竪穴住居 (第16~18図、写真図版 8 · 9)

調査区中央やや東寄り、3I区北端に位置する。遺構北東隅は、3I1kの区画点に近接する。

検出面は第1層直下、標高122.400mを測り、ほぼ平坦な面である。

平面形態は、概ね長方形を呈する。北壁と南壁の一部は、現代の攪乱によって欠損しているが、その他は 良好に残存していた。

規模は、短軸である南北長4.46m、長軸である東西長5.20m、深さ26.8cmを測る。

埋土は、概ね2層のシルトからなる。

東壁は、西壁は、南壁は、北壁は、

カマドは、東側辺中央よりやや南よりに設置されている。カマド両袖および煙道側天井部ともに、良好に 残存している。カマド袖構築土を除去するとしっかり組まれた石列がその姿を現す。石組みは両袖ともに 2~3段積み上げられており、地山削り出しと合わせて袖の芯部となっている。

煙道は、天井部が良好に残存するトンネル状を呈する。煙道に取り付く煙出しは間口の広い筒状を呈する。 床面は、南北4.6m、東西4.8mを測り、全体的に堅く締まっている。

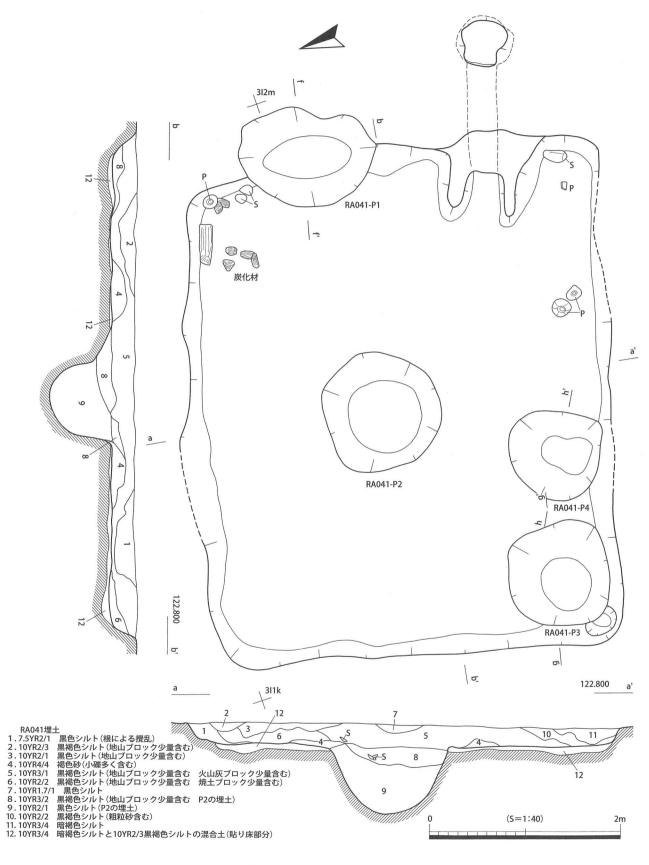
床面の貼床は、厚さ約5cmを測る。完掘したが、柱穴はみられなかった。

さらに、床面では比較的大形の土坑を4基検出した。これらの土坑は、すべて貼床を含む床面から掘り抜いて作られている。竪穴住居埋土の上からの掘り込みではないことは、RA041竪穴住居土坑2が竪穴住居に設けた土層観察用のベルトから明らかである。

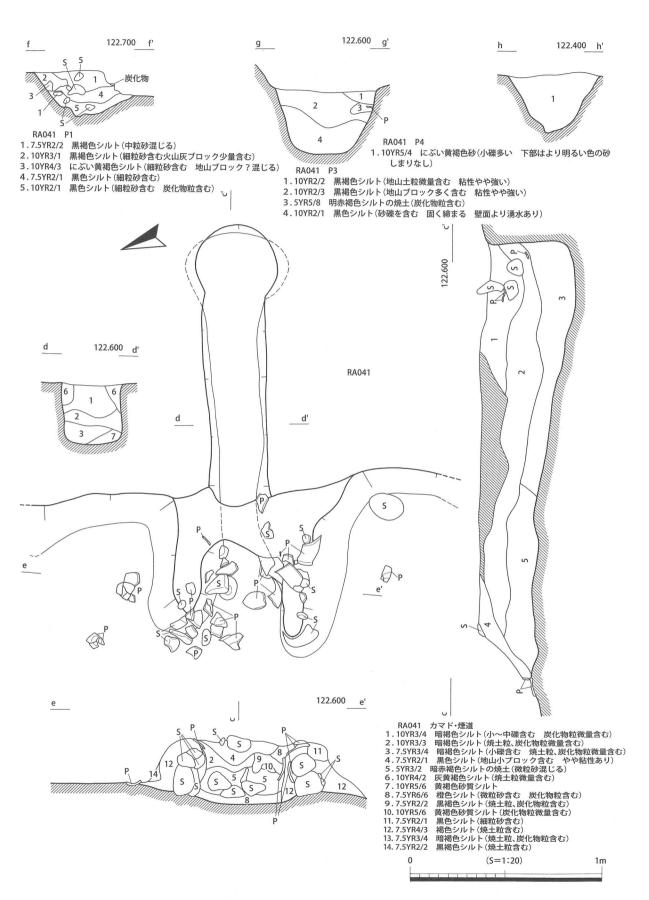
RA041竪穴住居内P1は、住居北側壁の一部を切って掘り込まれている。長軸1.4m、短軸1.0mを測る長楕円形を呈する。底面は住居床面より約20cm下に位置する。

RA041竪穴住居内P 2 は、直径1.2mの平面円形で、深さは竪穴住居床面から最深部で65cmを測る。埋土は、人為的な堆積とは認められず、竪穴住居埋没に伴って自然に堆積したものと考えられる。土坑の周囲には、平面環状に固く締まった砂礫層が巡る。この砂礫層は、シルトを主体とする竪穴住居埋土や貼床構築土とは土質が明らかに異なり、地山中のシルト層より下層に存在する砂礫層に酷似する。また、この土坑2は地山砂礫層まで掘り抜かれており、絶えず湧水が著しい状況であった。これらの様子を総合するとこの土坑は、この竪穴住居床面が機能している時期に何らかの目的で掘削されたものと考えられる。さらに、非常に固い地山砂礫層まで掘削し、掘削に際して生じた排土を土坑の周囲に積み上げていた可能性が考えられる。RA041竪穴住居土坑3・4も土坑2と同様である

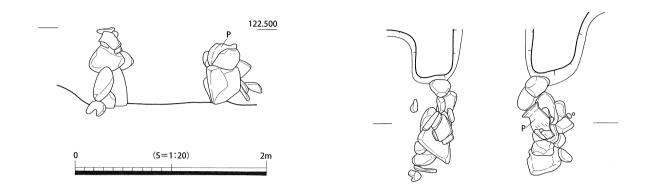
遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土器を中心に多く出土した。遺構および出土遺物より9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。



第16図 RA041竪穴住居



第17図 RA041竪穴住居カマド



第18図 RA041竪穴住居カマド石組

#### **出土遺物**(第19図、写真図版42・43)

出土した遺物は土師器および須恵器である。

 $1 \sim 6 \cdot 8 \cdot 11 \sim 14$ は土師器坏である。

1は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り離し後不定方向のヘラケズリである。住居床面直上より出土した。

2 は口縁部~底部にかけて残存する。内外面ともに回転ナデのみで、回転糸切り後無調整である。住居内カマド袖構築土中より出土した。

3は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居内カマド付近より出土した。

4は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。判読不可能であるが体部外面に墨書がみられる。文字であると考えられるが、止め・払い等が未熟で拙く、字の太さもやや太い特徴がある。住居床面直上より出土した。

5 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は切り離し後ヘラケズリである。住居内カマド天井部構築土中より出土した。

6 は口縁部~底部にかけて残存する。口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。床面直上・住居内土坑埋土中より出土した。

8は内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土上層より出土した。

10は体部下半から底部のみの破片である。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。カマド燃焼部から出土した。

11は底部のみの破片である。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。床面直上、煙出し、住居内カマド埋土中より出土した。

12は口縁部から体部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されている。住居埋土中より出土した。

13口縁部から体部下半にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されている。住居内カマド天井

部の構築土中より出土した。

14は体部下半から底部のみの破片である。内面ミガキ調整で黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上より出土した。

7は土師器高台付坏である。体部外面に不明瞭ながら墨書がみられる。墨書は横位の「祝」などが考えられる。口縁端部はやや外反しており、高台は貼り付けである。住居埋土中位より出土した。

9 は土師器坏であると考えられる。体部下半から底部にかけて残存していないが、他の出土遺物の類例から高台が付く可能性が高い。内外面ともにミガキ調整で黒化処理されている。口縁端部はやや外反している。住居南東部埋土中および住居内カマド埋土中より出土した。

15は須恵器小瓶であると考えられる。口縁部のみの破片であるため全体の形状は不明であるが、極端に口径が小さい。当該期、周辺域での出土事例が皆無であるため比較することができないが、施釉陶器などにみられる小瓶に形状が近い。住居検出中に埋土最上層より出土した。

16・17は土師器耳皿である。ともに内外面黒化処理され、底部は回転糸切り後無調整である。16は口縁部が半分程度欠損するのみで、その他は良好に残存している。煙出し検出中に出土した。17は底部のみの破片であり、内面はミガキ調整が施されている。住居北西部埋土中より出土した。

18~22は土師器甕である。

1は外面縦方向のヘラナデ、内面横方向のヘラナデがそれぞれ施されている。口縁部は短く外反している。 南西部の埋土およびP3埋土より出土した。

19は内外面ともに回転ナデが施されている。頸部~底部にかけて良好に残存しているが、口縁部は残存していないため形状不明である。カマド周辺で集中して出土しているため、カマドの支脚に用いられたものかもしれない。

20は口縁部~体部最下端部にかけての破片である。口縁部はヨコナデが施されているが、緩く外反し頸部 との明瞭な稜は持たない。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケが施されている。また、 体部内面中位には比較的明瞭な輪積み痕を残している。カマドと住居埋土中より出土した。

21は口縁部~体部下半にかけての破片である。口縁部は短く外傾しており、端部は上方に摘み上げられたような形態をなす。内外面ともに回転ナデ調整が施されているが、外面下半には縦方向のヘラケズリの痕跡が認められる。住居内カマド天井部及び袖部の構築土中より出土した。出土状況よりこの土器は、両構築土中での補強材として用いられていた可能性が高い。

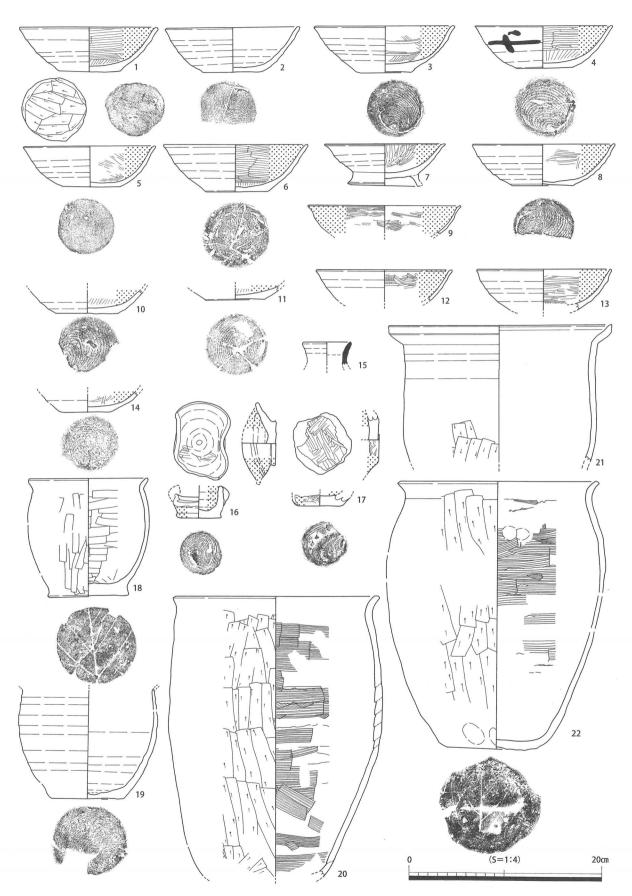
22は完形ではないものの口縁部~底部にかけて残存している。口縁部は緩く外反し、体部上半に膨らみを持つ。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケがそれぞれ施されている。また、それ以外に内外面ともに脂頭圧痕が数カ所認められる。住居南側埋土およびカマド埋土中より出土した。

#### R A042竪穴住居 (第20~22図、写真図版11)

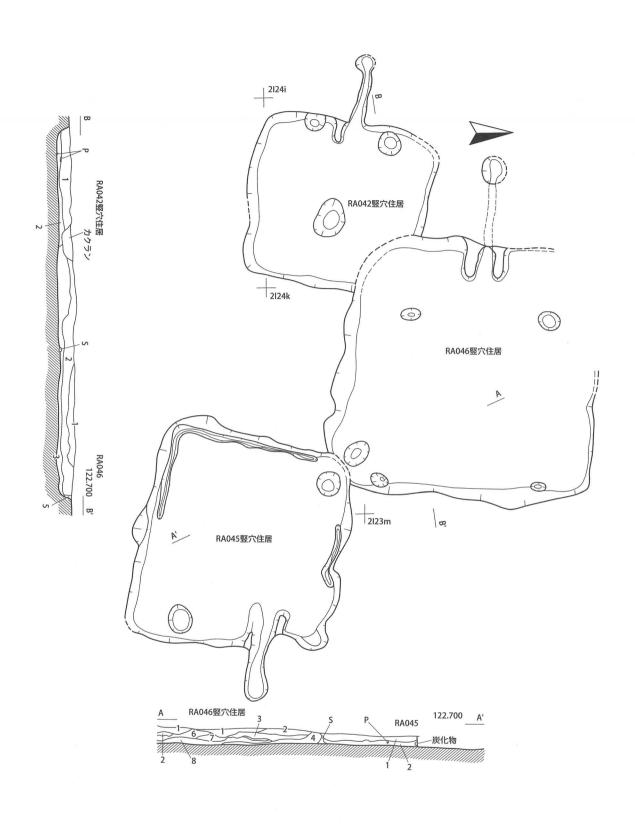
調査区中央やや東寄り、2 I 区南西隅に位置する。住居南東隅が区画点 2 I 24 k と近接する。RA046と切り合い関係がある。

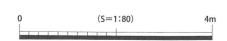
検出面は第1層直下、標高122.600mを測る。この検出面は削平が著しく、さらに木の根の浸食を受けているため、やや凹凸の著しい面であった。

平面形態は、ほぼ方形を呈する。北西角は、攪乱によって欠損している。さらに、北東角は、RA046竪穴住居によって切られている。

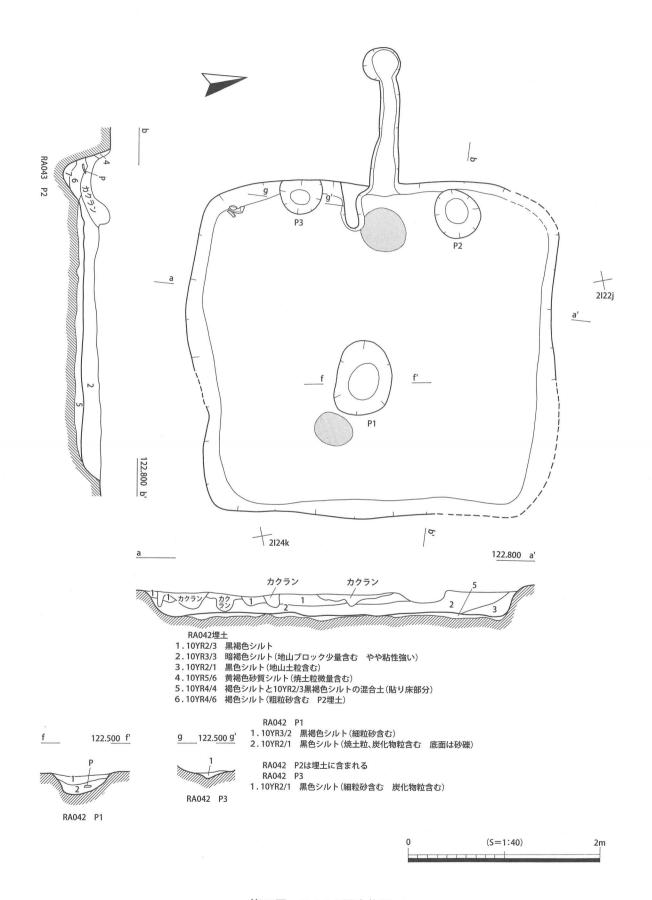


第19図 RA041竪穴住居出土遺物

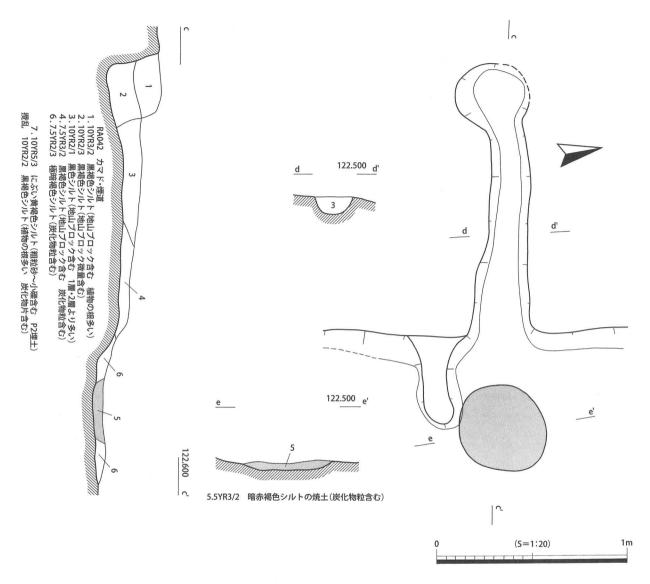




第20図 R A 042 · 045 · 046竪穴住居



第21図 RA042竪穴住居



第22図 R A 042竪穴住居カマド

規模は、南北長3.76m、東西長3.50m、深さ23.6cmを測る。

埋土は、概ね上・下2層のシルトからなり、上層は植物の浸食による攪乱が顕著であるが、下層はやや粘性の強いシルトである。

東側壁は、南半が良好に残存しているが、北半はRA046竪穴住居によって切られている。北側壁も同様に RA046竪穴住居によって切られている。西側壁および南側壁は、良好に残存している。

カマドは、西側辺の概ね中央部に設置されている。カマド南袖は良好に残存しているが、北袖は後世の攪乱のためか残存していなかった。燃焼部は、焼土が平面ほぼ円形にみられる。

煙道は西に延びるが、天井部が残存していない。本来はトンネル状であったと考えられる。煙道に取り付く煙出しは間口の広い筒状をする。

床面の貼床は、厚さ約5cmを測る。完掘したが、柱穴はみられなかった。

床面中央には浅い掘り込みの土坑がみられた。このP1は埋土中に土器片を含む。

西側壁近くにはカマドより北に1基、カマドより南に1基の土坑がみられた。

北側の土坑である P 2 は、住居西側壁に張り付くように掘り込まれている。住居埋土から掘り込まれておらず、住居床面での掘り込みである。

南側の土坑であるP3は、P2よりもさらに住居西側壁に接している。やや西側壁を抉り込むように掘られている。

これら西側壁に接する2基の土坑は、その位置からカマドに関連する何らかの施設であったと考えられる。 遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土師器を中心に出土した。遺構および遺物から9世紀後 半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられるが、切り合い関係よりRA046竪穴住居よりも古い竪 穴住居である。

# 出土遺物 (第23図、写真図版44・45)

出土した遺物は、土師器坏・埦・甕である。1~5は土師器坏である。

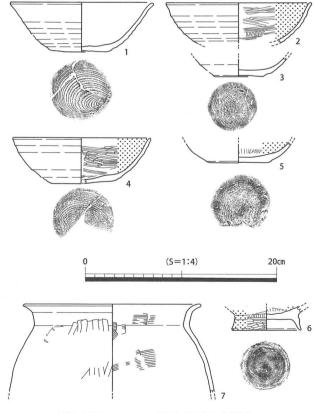
1は内外面ともにミガキ調整、黒色処理が施されておらず、底部は回転糸切り後無調整である。また、体部外面には黒斑がみられる。住居南東部埋土とRA045北西部埋土から出土しており、遺構間での接合認められた。

- 2 は内面ミガキ調整で黒化処理されている。口縁部~体部が残存している。P3埋土から出土した。
- 3 は内面ミガキ調整、黒化処理ともに施されていない。底部は回転糸切り後無調整である。住居南東部埋土から出土した。
- 4 は内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居南西部埋土、P 3 埋土、煙道埋土から出土した。

5 は内面ミガキ調整で黒化処理されており、 底部は回転糸切り後無調整である。体部下 半~底部にかけての破片である。P2埋土か ら出土した。

6は土師器高台坏であると考えられる。内 外面ともにミガキ調整で黒化処理され、高台 は貼り付けである。

7は土師器甕である。口縁部~体部にかけての破片である。頸部はあまり外傾せず、口縁端部がやや外反する。体部外面上半に焼成前とみられる刻書が施されている。欠損しているため刻書全体は確認できないが、何らかの文字あるいは記号であると考えられる。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケがそれぞれ施されている。南東部埋土、P2埋土から出土した。



第23図 RA042竪穴住居出土遺物

# R A 043竪穴住居 (第24~26図、写真図版12)

調査区中央やや東寄り、2 I 区南中央に位置する。住居南東隅が区画点2 I 23 q に近接する。RA050竪穴住居と切り合い関係がある。

検出面は第1層直下、標高122.700mを測る。

平面形態は、ほぼ方形を呈するものと思われるが、北東角がRA050南西角によって切られる。

規模は、南北長4.16m、東西長40.6m、深さ23.6cmを測る。

埋土は、概ね上・下 2 層のシルトからなるが、南北方向断面の堆積状況と東西方向の堆積状況がやや異なる。

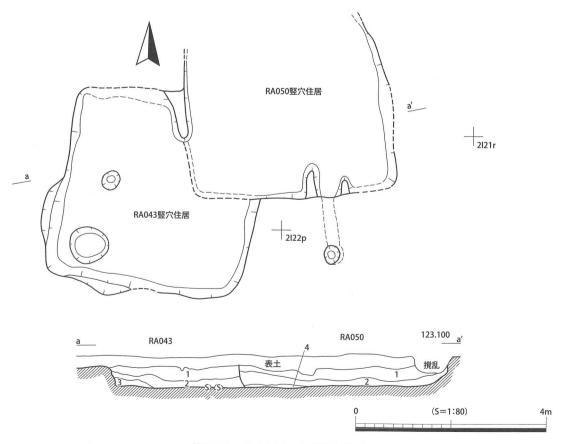
西側壁は、良好に残存しているが、東側壁は、RA050竪穴住居によって北半が失われているため、南半のみが残存している。北側壁は、東半がRA050竪穴住居によって失われているため西半のみが良好に残存している。

カマドは、北側辺のほぼ中央部に設置されている。カマド西袖は、床面よりわずかな高まりを確認できたが、東袖はRA050竪穴住居によって削平されており、痕跡すら確認できなかった。燃焼部は円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

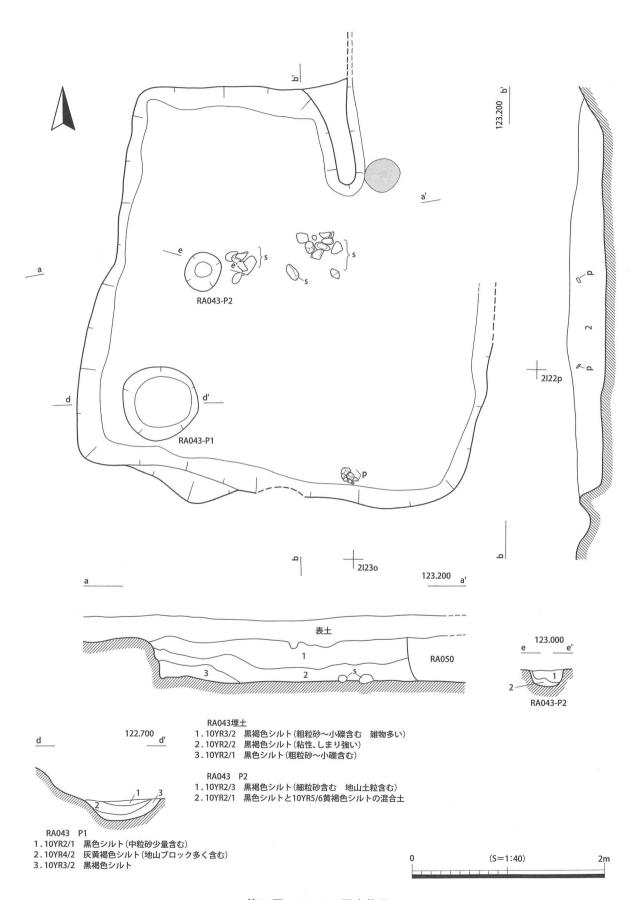
床面の貼床はみられず、貼床そのものが施されていなかったと考えられる。また、同様に柱穴もみられなかった。

床面には大小2基の土坑を検出した。いずれも性格不明である。

遺物は、竪穴住居埋土および付属する施設等から土師器を中心に出土した。遺構および遺物から9世紀後



第24図 RA043·050竪穴住居



第25図 RA043竪穴住居

半~10世紀前半にかけての竪穴住居 であると考えられるが、切り合い関 係よりRA050よりも古い竪穴住居で ある。

## 出土遺物 (第27図、写真図版45)

出土した遺物は、須恵器坏・土師 器坏・土師器甕である。

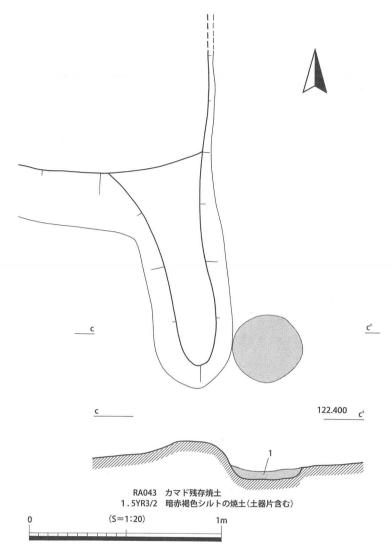
1は須恵器坏である。内外面とも に回転ナデのみの調整である。底部 は回転糸切り後無調整である。住居 東側埋土およびRA050竪穴住居床面 直上から出土した。

 $2 \sim 5$  は土師器坏である。

2 は内面ミガキ調整で黒化処理されている。口縁部~体部下端にかけての破片である。住居北側埋土から出土した。

3 は内面ミガキ調整、黒化処理と もに施されていない。底部は回転糸 切り後無調整である。体部~底部に かけての破片である。床面直上から 出土している。

4 は内面ミガキ調整、黒化処理と もに施されていない。底部は回転糸



第26図 RA043竪穴住居カマド

切り後無調整である。体部下半~底部にかけての破片である。住居東側埋土より出土した。

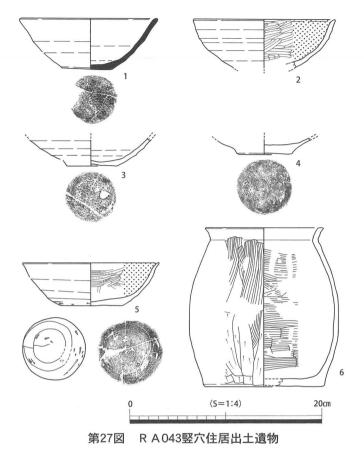
5 は内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後回転ヘラケズリが施され、体部最下端まで及ぶ。住居東側埋土、床面直上より出土した。

6は土師器甕である。口径より底径の方が大きく、全体の最大径は体部のやや下にある。体部下半の調整痕は縦方向のヘラケズリとみられるが、上半はハケに転化しているようである。両者の調整痕は見え方が異なるが、工具の単位、方向など同一視でき、いずれの調整も同一工具によりほぼ同時に施された一連の調整であると考えられる。また、内面調整は横方向のハケである。底部には木葉痕等は確認できず、ナデや指頭圧痕により消されたと考えられる。カマド埋土中およびRA050竪穴住居埋土より出土した。

#### R A 044 (第28図、写真図版13)

調査区中央やや東寄り、2 I 区南端ほぼ中央に位置する。住居南東隅が区画点 2 I 25 k に近接する。 検出面は第 1 層直下、標高122,500mを測る。

平面形態は、北西角が攪乱によって失われているが、ほぼ方形を呈するものと思われる。



規模は、南北長2.22m、東西長は2.11m、深さ28.7cmを測る。今回検出した竪穴住居群中最小の規模を有する。

埋土は、概ね上・中・下 3 層のシルトからなり、上層は後世の攪乱を受けている。

東側壁は、全体的に良好に残存しているが、西側壁は後世の攪乱により南半を失っている。また、南側壁は良好に残存しているが、北側壁は一部攪乱を受け欠損している。

カマドに該当するような施設は確認できなかったが、北側壁中央部付近で被熱した石や炭化物、土器が集中しており、カマドの残骸である可能性が考えられる。また、北側壁は攪乱を受けていないにも関わらず、中央部の壁面が途切れ、煙道が設置されていた可能性がある。この煙道および煙出しは、存在すれば北にあるRAO42竪穴住居にまで及ぶと考えられるが検出できなかった。しかし、RAO42竪穴住居南端の埋土最下層

中に焼土などがブロック状に集中して存在したことより、この住居の煙道の一部・煙出しは、RA042竪穴住居によって消滅した可能性が高い。

床面の貼床は、厚さ約5cmを測る。しかし、貼床を施されているが、上面である床面は平坦ではない。このことから、貼床とした部分は住居埋土の最下層に相当することも考慮に入れる必要がある。また、床面には、柱穴はみられなかった。

遺物は、竪穴住居埋土および床面から土師器を中心に出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀 前半にかけての竪穴住居であると考えられるが、切り合い関係よりRA046竪穴住居よりも古い竪穴住居であ る可能性がある。

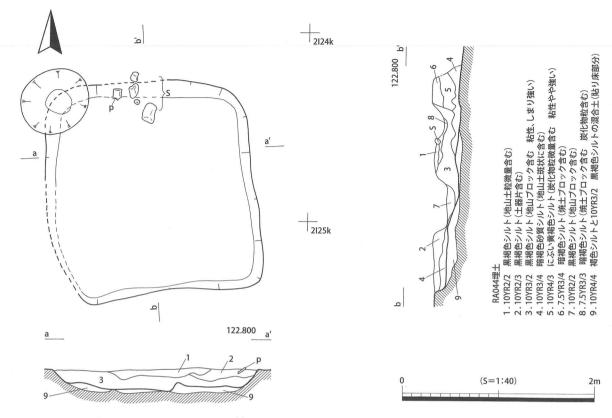
#### 出土遺物 (第29図、写真図版46)

出土した遺物は須恵器坏・土師器高台付坏・土師器甕である。1・2は須恵器坏である。

1は内外面ともに回転ナデのみの調整である。底部は回転糸切り後無調整である。全体的に還元不足が著しい。住居埋土および検出中に出土した。

2 は内外面ともに回転ナデのみの調整である。底部は回転糸切り後無調整である。全体的に還元不足が著しい。住居埋土と検出中、さらにRA047竪穴住居埋土からも出土した。

3 は土師器高台付坏である。底部のみの破片であるため埦となる可能性もあるが、にわかには断じ得ない。 内面ミガキ調整、黒化処理ともに施されておらず、高台は貼り付けである。高台端部は比較的丁寧なヨコナ デが施されており、外面には垂直な端面を持つ。住居検出中に出土した。



第28図 RA044竪穴住居

4 · 5 は土師器甕である。 4 は口縁部~体部上半にかけての小形甕の破片である。調整痕は不明瞭である。 住居検出中に出土した。

5 は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のハケ、内面調整は横方向のハケである。 外面のハケに比べ、内面のハケの方がより条線が粗い。住居埋土中より出土した。

# R A 045竪穴住居 (第30・31図、写真図版14・15)

調査区中央やや東寄り、2 I 区南端ほぼ中央に位置する。住居北東隅が区画点 2 I 23g に近接する。 RA046と切り合い関係がある。

検出面は第1層直下、標高T.P. 122. 500mを測る。

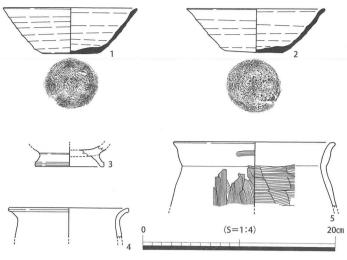
平面形態はやや不整であるが、ほぼ方形を呈する。規模は南北長4.65m、東西長4.63m、深さ30.6cmを測る。

埋土は、概ね上・下2層のシルトからなるが、下層は焼土ブロックや炭化物を多量に含む。

側壁は、すべて良好に残存している。北側壁は直線的ではなく凹凸が顕著である。

カマドは、東側辺の北よりに設置されている。カマド北袖は、芯材と考えられる礫が露出していた。南袖 も礫を芯材として用いてあり、その上をシルト主体の構築土で覆っている。また、カマド天井部はすでに失 われていた。燃焼部は両袖の間に存在し、円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

煙道は天井部が削平のため残存していなかったが、煙道埋土中に焼土層が確認された。この焼土層は本来トンネル状を呈していた時の天井部崩落土層であると考えられる。煙出しは最深部で深さ35cmを測る。



第29図 RA044竪穴住居出土遺物

床面の貼床は掘り方のわずかな凹凸を解消する程度の薄いものが施されていた。また、床面には柱穴はみられなかったが、床面直上には焼土塊や炭化物とともに多くの遺物が出土した。特に南西隅には須恵器甕が1個体分破片となった状態で出土した。床面でみられる焼土塊や炭化物は、住居の焼失を想起させられるが、床面に普遍的にみられないため、少なくとも焼失後そのままの状況を残すものではないと判断される。尚、床面から出土した炭化物はクリ材が主体を占めている。さらに、床面には2基の土坑を検出したが、いず

れも床面から浅く掘られたものであった。いずれも性格不明である。西側壁~南側壁、北側壁の一部では、 周溝を検出した。平均すると約10cmの深さである。

遺物は、竪穴住居埋土および床面、付属する施設等から土師器・須恵器・鉄製品などが多量に出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられるが、切り合い関係よりRA046よりも新しい竪穴住居である。

## **出土遺物**(第32~34図、写真図版46~50)

今回検出したすべての遺構の中で最も多くの遺物が出土した。出土した遺物は、土師器坏・土師器甕・須恵器壷・須恵器大甕である。

1~26はすべて土師器坏である。

1 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。部分的に黒斑がみられる。床面直上より出土した。

2 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。底部内面に黒斑がみられる。住居埋土より出土した。

4 は内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。体部に「玉」の逆字と考えられる文字が墨書されている。住居埋土および検出中に出土した。

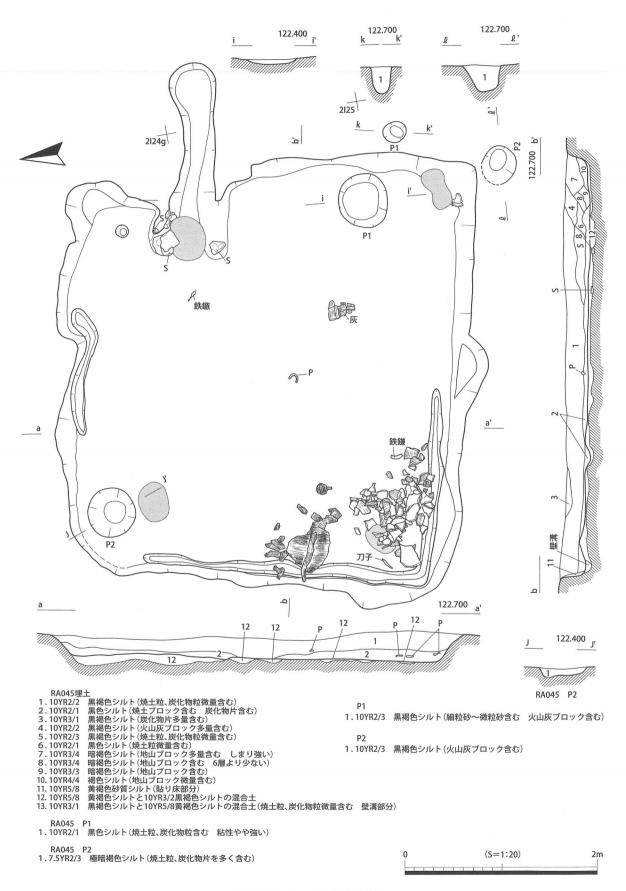
5 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部は緩く外反し、体部に黒斑がみられる。住居北東埋土より出土した。

6 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。体部外面下半、底部内面に 黒斑がみられる。住居東側埋土より出土した。

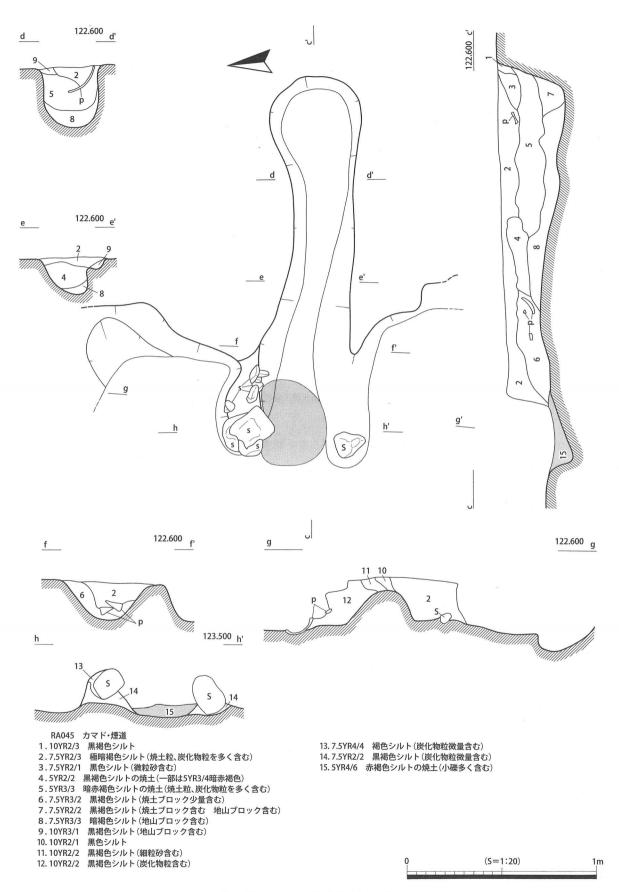
7 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。底部内面に黒斑がみられる。住居東側および北西埋土より出土した。

8 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土および住居内土坑より出土した。

9 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。内外面広い範囲に黒斑がみられる。住居南西埋土より出土した。



第30図 RA045竪穴住居



第31図 RA045竪穴住居カマド

10は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。底部外面に黒斑が認められる。住居北側埋土中より出土した。

11は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部はやや肥厚し、底部内面に黒斑が認められる。住居北東埋土中および床面直上より出土した。

12は摩滅のため不明瞭ながら内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部はやや外反し、底部内外面に黒斑が認められる。住居埋土中より出土した。

13は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部はやや肥厚する。住居南~東側埋土中より出土した。

14は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部は外反気味であり、内面には広範囲に黒斑が認められる。住居北東埋土中より出土した。

15は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居北西埋土中より出土した。

16は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。底部内面に黒斑が認められる。住居東側埋土中より出土した。

17は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。底部内面に黒斑が認められる。住居北東埋土中より出土した。

18は内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居東側埋土中より出土した。

19は体部半ば~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居南西および北東埋土中より出土した。

20は口縁部~体部下半にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されているが、底部調整は不明である。住居埋土中より出土した。

21は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であるが、底部調整は不明である。住居埋土中より出土した。

22は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土中より出土した。

23は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居北東埋土中より出土した。

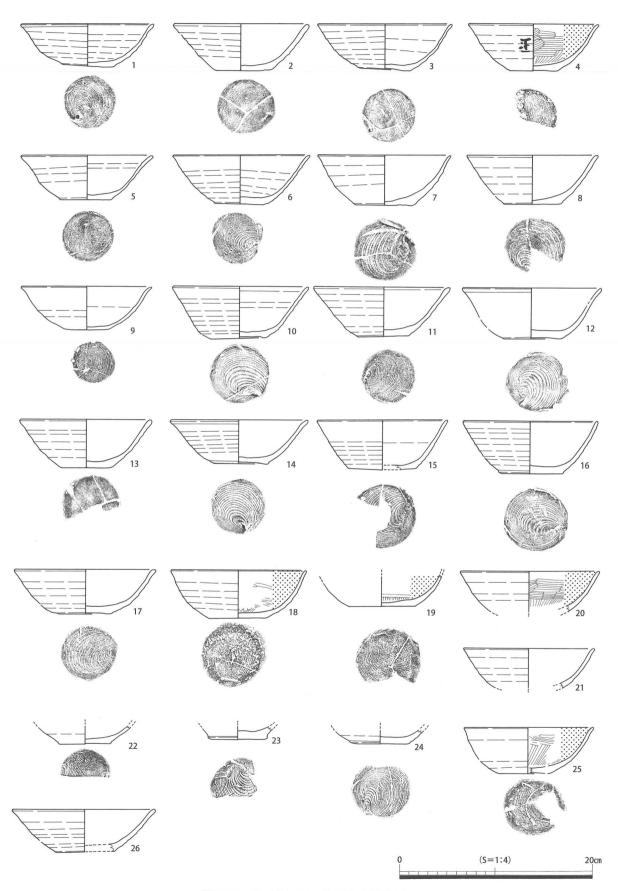
24は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居北西埋土中より出土した。

25は口縁部~底部にかけて残存する。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居北西埋土中より出土した。

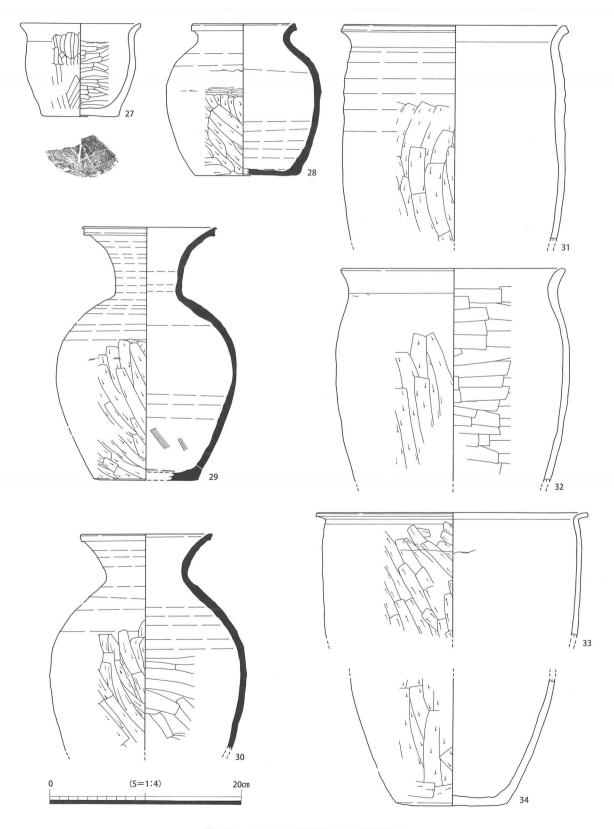
26は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であるが、底部調整は不明である。体部外面に黒斑が認められる。住居北側埋土中より出土した。

27は土師器小形甕である。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のヘラナデが施されている。 底部外面には木葉痕が認められる。口径よりも器高の方が大きく凌駕する特異な形態である。住居北側埋土 中およびRA042土坑埋土中より出土した。

28~30は須恵器壷である。



第32図 RA045竪穴住居出土遺物(1)

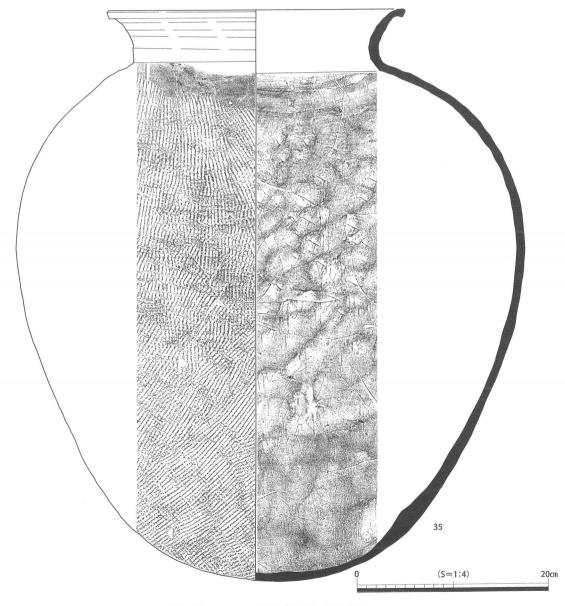


第33図 RA045竪穴住居出土遺物(2)

28は短頸壷である。口縁部~底部にかけて良好に残存し、ほぼ完形である。体部外面は半ば~最下端にかけて不定方向のヘラケズリが、半ばにはミガキが施されている。また、口縁部~頸部にかけては丁寧なヨコナデが施され、その他の調整は回転ナデのみである。住居床面直上より出土した。

29は長頸壷である。口縁部~底部にかけて残存する。体部外面は半ば~最下端にかけて上方から下方へ向けてのヘラケズリが施されている。また、口縁部~頸部にかけては丁寧なヨコナデが施され、その他の調整は回転ナデのみである。口縁部~肩部にかけて星状に降灰が認められる。住居埋土中より出土したが、他にRA042およびRA046埋土中からも破片が出土した。

30は広口壷である。口縁部~体部下半にかけて残存する。体部外面は半ば~最下端にかけて上方から下方へ向けてのヘラケズリが施されており、体部内面下半は横方向のヘラナデが施されている。また、口縁部~頸部にかけては丁寧なヨコナデが施され、その他の調整は回転ナデのみである。住居埋土中より出土した。31~34は土師器甕である。



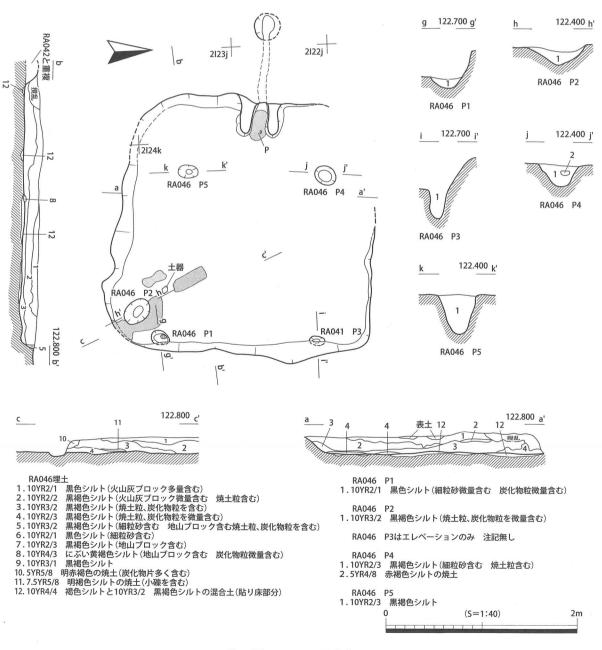
第34図 RA045竪穴住居出土遺物(3)

31は口縁部~体部下半にかけての破片である。外面調整は回転ナデが施されており、半ば~下半にかけて 縦方向のヘラケズリが施されている。内面は回転ナデのみの調整である。住居内カマド埋土中より出土した。

32は口縁部~体部下半にかけて残存する。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のヘラナデである。口縁部は肥厚し、緩く屈曲している。住居煙道および煙出し埋土中より出土した。

33は口縁部~体部半ばにかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリが施される。他の土師器甕に比べ著しく器壁が薄く、口縁部は直立する体部に対し、直角に近い角度で屈曲する。住居北側埋土中およびカマド、煙道埋土より出土した。

34は体部半ば~底部にかけての破片である。外面調整は体部最下端が横方向である以外は縦方向のヘラケズリが施される。住居内カマド埋土中より出土したが、RA042埋土からも破片が出土している。



第35図 RA046竪穴住居

35は須恵器甕である。ほぼ体部および頸部に一部欠損部分があるもののほぼ完形である。外面は平行タタキ、内面は当て具の痕跡が明瞭にみられる。当て具痕は陶製であるためか木目等の痕跡は認められず、代わりに円形の窪み中心部に「+」文が認められる。頸部は回転ナデ、口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。また、口縁部内面~肩部外面にかけて焼成時の降灰がみられる。器壁は大形製品にしては比較的均等な厚みを持つが、体部下半で器壁の厚い部分が存在する。これは、底部成形後乾燥を経て、それより上部を成形したために生じた痕跡である可能性が考えられる。大きな個体であるためかなりの破片数を数えたが、すべての破片が床面直上の炭化物とともに出土した。

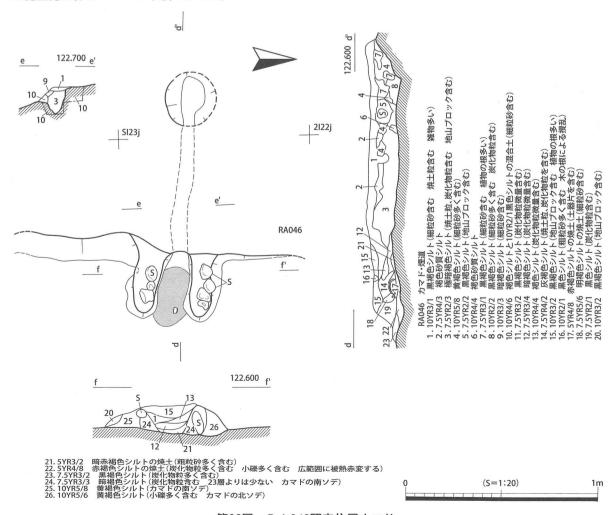
### R A 046竪穴住居 (第35・36図、写真図版16・17)

調査区中央やや東寄り、2 I 区南端ほぼ中央に位置する。住居南西隅が区画点2 I 24 k に近接する。 RA050と切り合い関係がある。

検出面は第1層直下、標高T.P.122.600mを測る。

平面形態は、北西隅が東西方向に流れる現代の水路によって攪乱され失われているため不完全であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は南北長5.38m、東西長5.82m、深さ28.6cmを測る。

埋土は、概ね上・中・下 3 層のシルトからなるが、上層は堆積土よりも火山灰の方が多い層である。火山灰 2 次的な堆積であるかもしれないが、かなり降灰時のプライマリーな状態に近いと考えられる。中~下層は焼土塊を含むシルトの堆積であった。



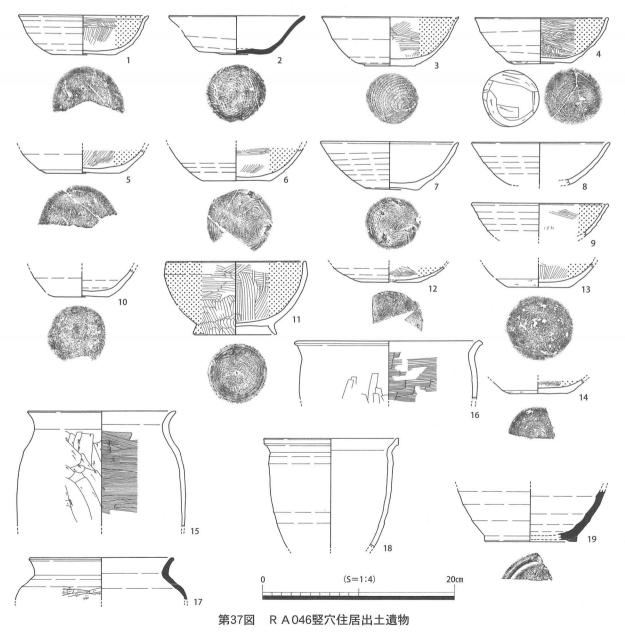
第36図 RA046竪穴住居カマド

側壁は、攪乱を受けている南側壁と北西隅を除いてすべて良好に残存している。

カマドは、西側辺のほぼ中央に設置されている。カマド両袖は構築土で覆われた、礫を芯材とするものである。また、カマド天井部はすでに失われていた。燃焼部は両袖の間に存在し、円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

床面の貼床は掘り方のわずかな凹凸を解消する程度の薄いものが施されていた。床面には柱穴と考えられるピットを4基確認した。 $P1 \cdot P3$ はそれぞれ東側壁際に掘り込まれている。これに対し、 $P4 \cdot P5$ はいずれも西側壁より $1.2\sim1.4$ mほど離れた位置に掘り込まれている。他に1基の土坑を検出したが、床面から浅く掘られたもので、性格不明である。また、床面には焼土や炭化物を多く検出したが、全面に広がらず住居南東側に集中する。

遺物は、竪穴住居埋土、付属する施設等から土師器・須恵器・鉄製品などが出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられるが、切り合い関係よりRA050竪穴住居よりも古い竪穴住居である。



-46-

#### R A 047出土遺物 (第37図、写真図版52)

出土した遺物は土師器坏・須恵器坏・土師器焼・土師器甕・須恵器甕・須恵器瓶である。 1 ・ 3 ~10・12~14は土師器坏である。

1 は内面ミガキ調整で黒化処理されている。口縁部~底部にかけて良好に残存している。底部は回転糸切り後無調整である。住居カマド北側袖から出土した。底部外面には「-」のヘラ記号がみられる。

3 は内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後無調整である。口縁部~底部にかけて良好に残存しており、住居埋土から出土した。

4 は内面ミガキ調整で黒化処理されている。体部下端~底部縁辺は回転糸切り後へラケズリが施されている。口縁部~底部にかけて良好に残存しており、住居埋土中、床面直上、カマド埋土から出土した。

5 は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後 無調整である。住居東側埋土中から出土した。

6 は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後 無調整である。住居北西埋土から出土した。

7 は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部~底部にかけて良好に残存しており、内外面に黒斑がみられる。住居埋土上層より出土した。

8 は内外面ともに回転ナデのみの調整が施されている。底部が欠損しているため、底部の調整は不明である。住居埋土中の火山灰堆積層より出土した。

10は内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部は残存していない。 住居内カマド前の床面直上より出土した。

12は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されおり、底部は回転糸切り後無調整である。住居北側埋土より出土した。

13は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、体部下端~底部縁辺は回転糸切り後回転ヘラケズリが施されている。住居内カマド南側袖より出土した。

14は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、体部下端~底部縁辺は回転糸切り後回転ヘラケズリが施されている。住居埋土中より出土した。

2 は須恵器坏である。口縁部~底部まで良好に残存している。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、 底部は回転糸切り後無調整である。住居内カマド袖直上および住居埋土中より出土した。

11は土師器埦である。内外面ともにミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。底部には高台が貼り付けられている。体部の形状は半球形を呈し、口縁部はやや内湾気味である。

15・16・18はいずれも土師器甕である。

15は口縁部~体部にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。口縁部は緩く屈曲している。住居カマド埋土から出土した。

16は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケである。口縁端部は端面を持つ形状をし、口縁部は短く開く。住居北側埋土より出土した。

18は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整が施されている。口縁部は鋭く外に開き、端部は上方に摘み上げられた形状である。住居埋土中、カマド埋土より出土した。

17は須恵器甕である。口縁部~体部上半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整が施されており、外面には横方向のヘラケズリがみられる。住居埋土中より出土した。

19は須恵器瓶類の体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整が施され、底部は回転糸切り後、高台が貼り付けられている。やや焼成不良気味であるが、胎土は精良で当地では類をみない。形状から長頸瓶である可能性が高い。住居北側埋土より出土した。

#### R A 047竪穴住居 (第38・39図、写真図版18・19)

調査区中央やや東寄り、3 J 区北西隅に位置する。住居北西隅が区画点3 J 2 c に近接する。住居東側は調査区外に続く。

検出面は第1層直下、標高122.300mを測る。

平面形態は、住居全体の1/4程度が調査区外へ続くと考えられ、全体の形態は不明であるが、調査区内で検出できた西側の形状よりほぼ方形を呈するものと考えられる。規模は西辺長5,20m、調査区内に収まり、検出可能であった北辺長3.35m、深さ26.5cmを測る。

埋土は、概ね上・中・下3層のシルトからなる。上層は砂礫などが多く混じったシルトであり、中層は火山灰がブロック状に多く含まれるシルトである。下層は焼土塊を微量に含むシルトの堆積であった。

側壁は、調査区外へ存在すると想定される南側壁と東側壁を除き比較的良好に残存している。今回の調査で完全に明らかになったのは北西角のみであるが、南西角もわずかに緩やかな曲線が現れている。

カマドは、西側辺の中央よりやや北寄りに設置されている。カマド両袖は構築土で覆われた、礫を芯材とするものであると考えられるが、芯材の礫に貼り付けられている構築土は残存していなかった。カマド天井部も袖構築土と同様にすでに失われていた。燃焼部は両袖の間に存在し、不整な円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。燃焼部直上では、カマド芯材の礫とは異なる細長い形状を呈する礫を2個体検出した。これらの礫は、本来両袖に架けられていたカマド天井部の補強用芯材礫であった可能性が考えられる。

床面の貼床は厚いところで約10cmを測り、ほぼ床面全体に施されている。床面には焼土が広がる部分もあったが、1次的なものではなかった。

また、床面には大小2基の土坑を検出した。いずれの土坑も床面からの掘り込みであるが、性格は不明である。

遺物は、竪穴住居埋土、付属する施設等から土師器・須恵器・鉄製品などが出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。

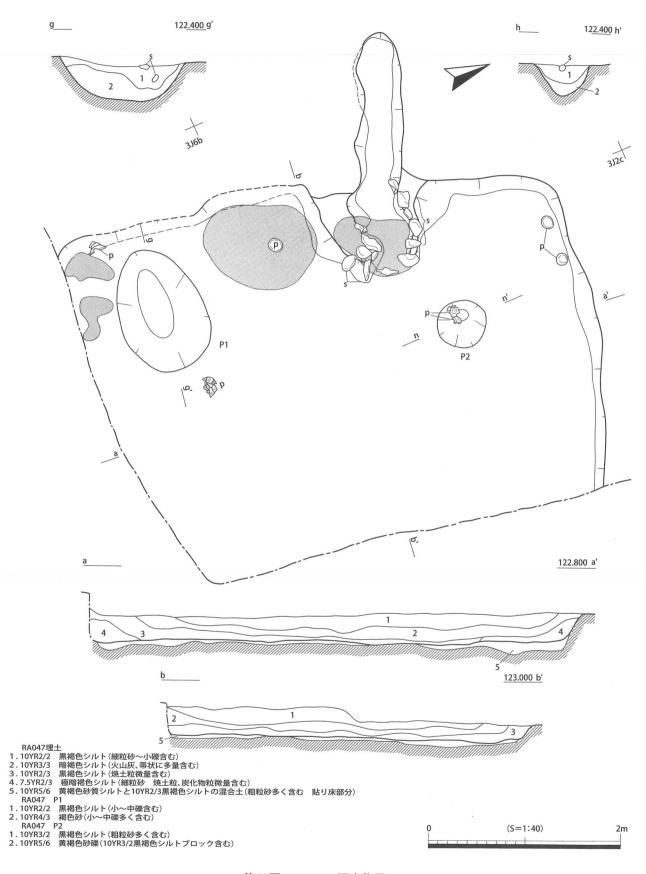
### **出土遺物** (第40図、写真図版53~55)

出土した遺物は土師器高台付坏・土師器坏・須恵器坏・土師器甕・土師器埦・土師器鉢・須恵器甕である。 1・9・20は土師器高台付坏である。

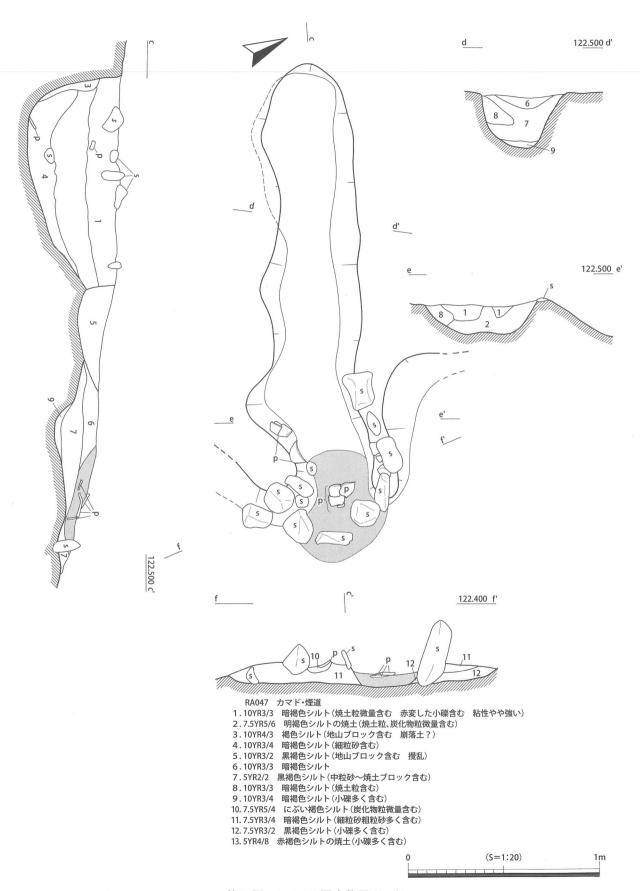
1 は口縁部~底部までほぼ完存する。内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後高台が貼り付けられている。口縁部は端部で外反し、高台の断面形状は逆台形である。体部外面には、「大」と思われる刻書、底部外面には「一」のヘラ記号がそれぞれ施されている。また、体部外面には籾の圧痕がみられる。住居床面直上より出土した。

9 は口縁部〜底部までほぼ完存する。内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後高台が 貼り付けられている。口縁部は端部で外反し、高台の断面形状は逆台形である。体部外面には、墨書がみられ、旁が不明瞭ながら「祝」と考えられる。住居床面直上より出土した。

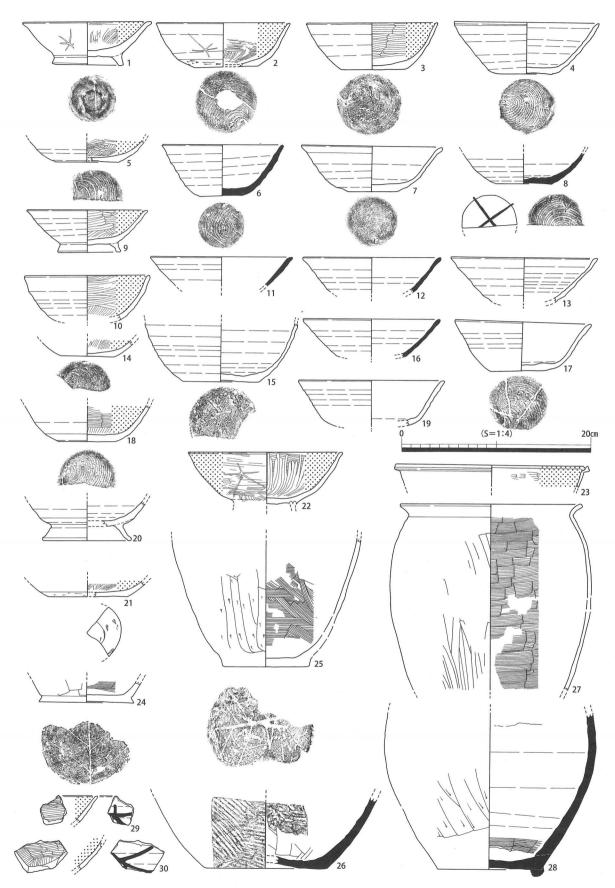
12は底部付近のみの破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は切り離し後、高台が貼



第38図 RA047竪穴住居



第39図 RA047竪穴住居カマド



第40図 RA047竪穴住居出土遺物

り付けられている。住居北東埋土中より出土した。

 $2 \sim 5 \cdot 7 \cdot 10 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 17 \sim 19 \cdot 21 \cdot 29 \cdot 30$ は土師器坏である。

2 は口縁部~底部にかけて残存している。内面ミガキ調整で黒化処理されている。底部は回転糸切り後無調整であるが、体部最下端部のみ回転ヘラケズリが施されている。体部外面には横字で「大」と刻書されている。住居内土坑 2 埋土および住居埋土中より出土した。

3は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後 無調整である。住居北側埋土中および床面直上より出土した。

4 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は回転糸切り 後無調整である。住居床面直上より出土した。

5 は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後 無調整である。住居内土坑 2 埋土上層より出土した。

7 は内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部はやや肥厚気味で外反する。住居北側埋土中および住居内土坑2より出土した。

10は口縁部~体部下半にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居北側埋土中より出土した。

13は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。住居北側埋土中より出土した。

14は体部下半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居南側埋土中より出土した。

17は内外面ともに回転ナデのみの調整であり、底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上より出土した。

18は体部上半~底部にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居南東隅埋土中の火山灰層より出土した。

19は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。住居埋土中より出土した。

21は底部の破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、体部最下端部~底部は切り離し後回転へ ラケズリが施されている。住居北側埋土中より出土した。

29は口縁部~体部上半のみの小破片であり、器壁の傾きや口径などは不明である。内面ミガキ調整で黒化処理されている。外面には全容不明ながら墨書がみられ、筆の運びから「大」と推察される。住居南東隅埋土より出土した。

30は体部のみの小破片であり、器壁の傾きや口径などは不明である。外面には判読不可能ながら墨書がみられる。住居南東埋土より出土した。

6・8・11・12・16は須恵器坏である。

6 は口縁部~底部まで良好に残存している。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。全体的にやや還元不足である。住居北側埋土中より出土した。

8 は体部~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。底部外面に「+」の墨書がみられる。墨書は筆の運びなどからみて文字である可能性は低く、記号であると考えられる。住居北東埋土中から出土した。

11は口縁部~体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。 住居南東埋土中から出土した。

12は口縁部~体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。住居南東埋土中および床面直上より出土した。

16は口縁部~体部下半にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。住居南側埋土中より出土した。

15・24・25・27は土師器甕である。

15は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居煙道埋土より出土した。

24は底部のみの破片である。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケである。底部外面には木葉痕がみられる。住居南側埋土中より出土した。

25は体部~底部にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。 底部外面には木葉痕がみられる。住居煙道埋土より出土した。

27は口縁部~体部下半にかけて残存している。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケである。器壁はやや薄く、口縁部は短く外に開く。住居北側埋土中およびカマド埋土より出土した。

22は土師器埦である。高台のみが欠損している。内外面ともにミガキ調整で黒化処理されている。底部切り離し後、貼り付けられた高台を持つ。口縁部はやや外反気味である。また、体部外面には、「大」と正位に刻書が施されている。

23は土師器鉢である。口縁部~体部上半のみの破片であるため、全体の形状は不明である。内面ミガキ調整で黒化処理されている。土師器甕とは異なる用途を保持していたと考えられるため鉢とした。現段階では、類例の僅少な器種であるため不明な部分が多い。住居南側埋土中より出土した。

26・28は須恵器甕である。

26は体部下半~底部にかけての破片である。外面タタキの痕跡が明瞭で、内面は当具痕とヘラナデが認められる。焼成は非常に良好で硬質である。南側埋土より出土した。

28は体部半ば〜底部にかけて残存している。内外面回転ナデの後、外面は縦方向のヘラケズリが施されている。底部には溶着物が残存している。住居内カマド埋土中より出土した。

#### R A 048竪穴住居 (第41·42図、写真図版20·21)

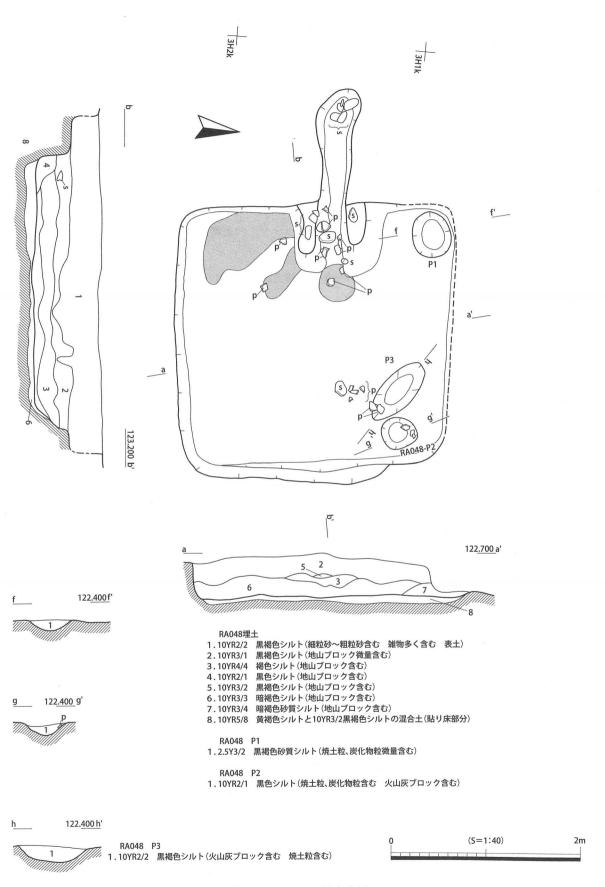
調査区中央やや西寄り、2 H区南端ほぼ中央に位置する。住居北西隅が区画点2 H 1 1 に近接する。 検出面は第 I 層直下、標高122.600mを測る。

平面形態は、北側壁が東西方向に流れる現代の水路によって攪乱され失われているため不完全であるが、 辛うじて床面には影響が少なく、ほぼ方形を呈すると考えられる。

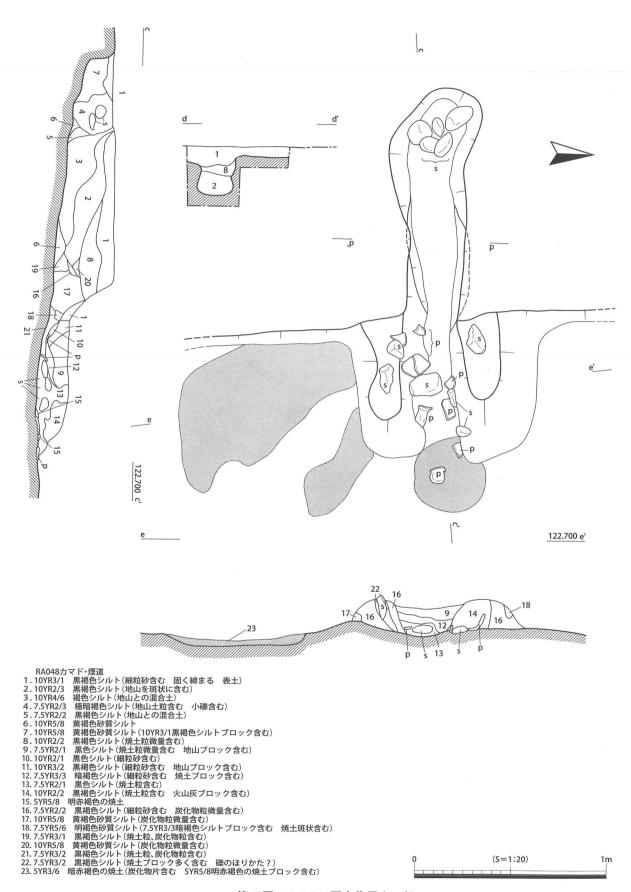
規模は南北長の推定値2.91m、東西長2.95m、深さ30.9cmを測る。

埋土は、概ね上・中・下3層のシルトからなる。上層は上面の攪乱を受けているが、シルトが堆積している。中~下層はやや締まったシルトの堆積であった。埋土全体に地山のブロック土を含むが、層の単位に不規則性や細かさがみられないため自然堆積の埋土であると考えられる。

側壁は、攪乱を受けている北側壁を除いてすべて非常に良好に残存している。また、側壁立ち上がりが良好で、削平の度合いが極めて少ない。



第41図 RA048竪穴住居



第42図 RA048竪穴住居カマド

カマドは、西側辺のほぼ中央に設置されている。カマド両袖は構築土で覆われた、礫を芯材とするものである。また、カマド天井部はすでに失われていた。燃焼部は両袖の間よりやや手前に存在し、円形の範囲で焼土層を確認した。

煙道は、天井部が残存していなかったが、トンネル状であったと考えられる。煙道は住居から煙出しに向けてやや登り勾配気味に掘られており、その他の住居とは少し異なる。

煙出しは煙道の方向より、やや北側に逸れた位置で開口部を持つ。

床面の貼床は平均すると約10cmの厚みで住居全体に施されている。この床面は全体的に強固に締まっており、締まっていない南西部分は2次的な焼土が堆積していた。

床面には土坑を3基確認した。いずれも10cm程度の深さであり、性格も不明である。遺物は、竪穴住居埋土、付属する施設等から土師器を中心に土器が出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。

# 出土遺物 (第43図、写真図版56)

出土した遺物は土師器坏・土師器甕である。  $1 \sim 6$  は土師器坏である。

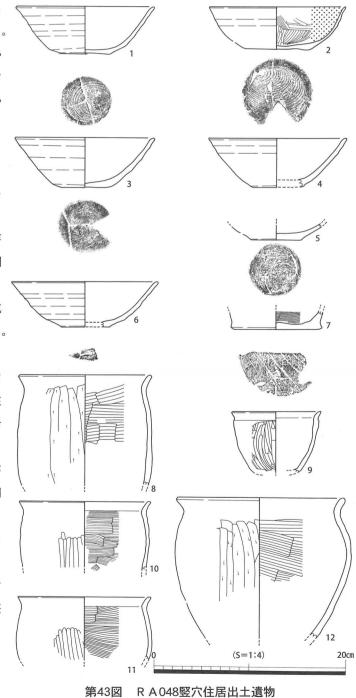
1は口縁部から底部にかけて良好に残存している。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。 体部に一部還元状態の部分がみられ、焼成不良の須恵器坏である可能性も考えられる。 住居床面直上および埋土中より出土した。

2 は内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上、埋土中およびRA040竪穴住居検出中に出土した。

3は口縁部から底部にかけて良好に残存 している。内外面ともに回転ナデのみの調 整で、底部は回転糸切り後無調整である。 住居床面直上、埋土中、住居内土坑埋土よ り出土した。

4 は内外面ともに回転ナデのみの調整であるが、底部が欠損しているため底部調整は不明である。住居埋土中より出土した。

5 は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、



底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上より出土している。

6 は口縁部~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であるが、底部は大半が欠損 しており調整不明である。住居床面直上および住居内土坑埋土より出土している。

7~12は土師器甕である。

7は底部のみの破片である。内面調整は横方向のハケが施され、底部外面には木葉痕がみられる。住居内カマド袖中より出土した。

8は口縁部~体部下半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。住居埋土下層および床面直上より出土した。

9は口縁部~体部下半にかけての小形の甕である。外面調整は縦方向のヘラナデが施されており、口縁部は極端に短く屈曲する。住居床面直上より出土した。

10は口縁部~体部にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケである。 口縁部は緩く屈曲する。住居床面直上および埋土中より出土した。特徴は11と酷似するため同一個体である 可能性が高い。

11は10と同じ特徴を有する。住居内カマド袖、住居床面直上および北側埋土中より出土した。10と酷似することから同一個体である可能性が高い。

12は口縁部~体部にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。体部はやや丸く膨らむ形状を呈する。口縁部は緩く屈曲し、端部は丸く収められる。

#### R A 049竪穴住居 (第44·45図、写真図版22)

調査区中央やや西寄り、 3 H区に位置する。住居南西隅が区画点 3 H 9 e に近接する。住居南側は調査区外に続く。

検出面は第1層直下、標高T. P. 122. 700mを測る。この検出面では、同時にRZ006・007を検出している。 平面形態は、住居全体の1/3程度が調査区外へ続くと考えられ、全体の形態は不明であるが、調査区内で検出できた北側の形状よりほぼ方形を呈するものと考えられる。

規模は北辺長4.56m、調査区内に収まり、検出可能であった西辺長4.62m、深さ28.9cmを測る。

埋土は、単層のシルトからなる。先述した通り、上面でこの住居埋土を切り込んでRZ006・007の畝間が作られている。この畝間埋土には火山灰を多量に含む。

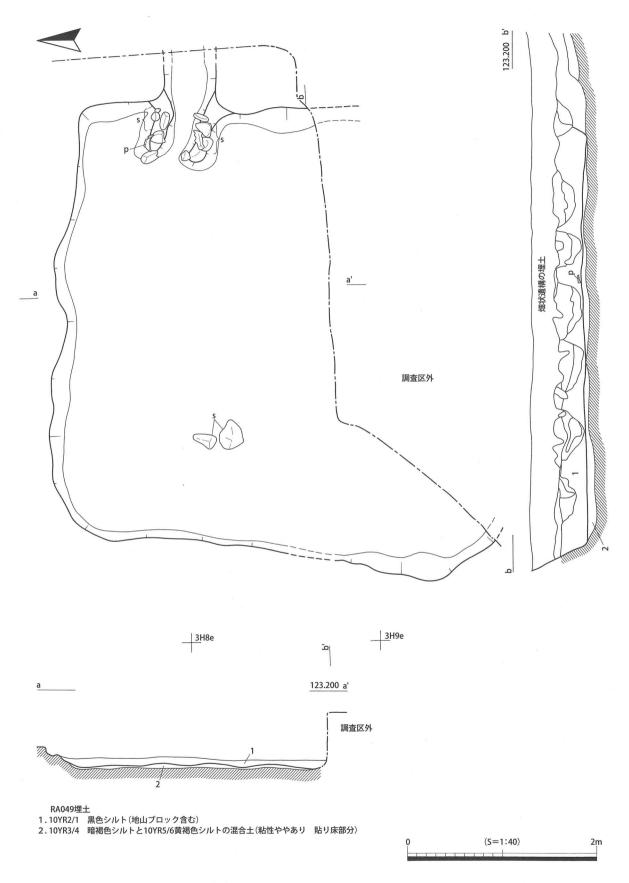
側壁は、調査区外へ存在すると想定される南側壁と東側壁の一部を除き比較的良好に残存している。今回 の調査で完全に明らかになったのは北西角、北東角のみであるが、南西角もわずかに緩やかな曲線が現れて いる。

カマドは、東側辺の中央より北寄りに設置されている。カマド両袖は構築土で覆われた、礫を芯材とするものであると考えられるが、芯材の礫に貼り付けられている構築土は残存していなかった。カマド天井部も袖構築土と同様にすでに失われていた。燃焼部は両袖の間に存在するが不明瞭であった。

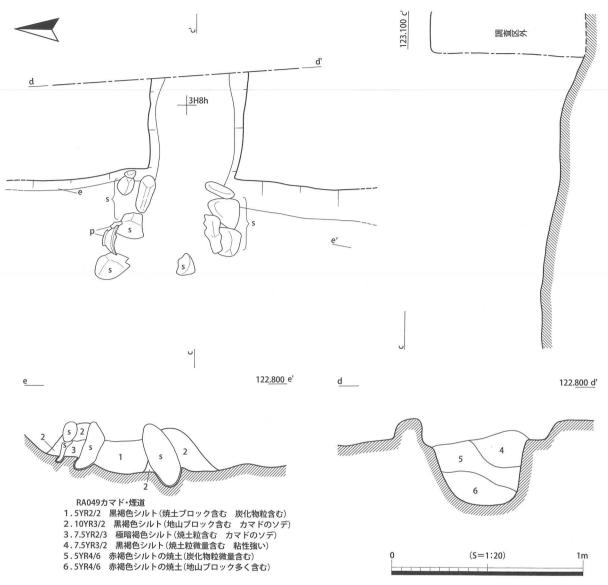
煙道は幅50cmの比較的広いものであった。本来はトンネル状であったと推測されるが天井部は残存していなかった。この煙道は住居から約50cm延びたところで調査区外へと続き、煙出しも調査区内で検出できなかった。

床面の貼床は厚いところで約10cmを測り、ほぼ床面全体に施されている。

遺物は、竪穴住居埋土、付属する施設等から土師器などの土器が出土した。遺構および遺物から9世紀後半



第44図 RA049竪穴住居



第45図 R A 049竪穴住居カマド

の竪穴住居であると考えられ、少なくとも住居埋没後にRZ006・007が営まれたと想定される。

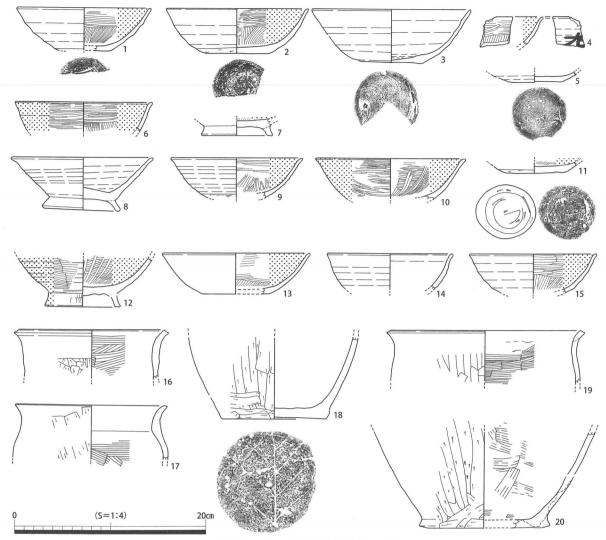
### 出土遺物 (第46図、写真図版57・58)

出土した遺物は土師器坏・土師器高台付坏・土師器塊・土師器甕である。  $1 \sim 5 \cdot 9 \cdot 11 \cdot 13 \sim 15$ は土師器坏である。 1 は口縁部~底部にかけて残存している。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は切り離し後回転へラケズリが施されている。住居内のカマド脇およびカマド埋土中より出土した。

2 は口縁部~底部にかけて良好に残存している。内面ミガキ調整で黒化処理されており、体部最下端~底部は切り離し後回転ヘラケズリが施されている。住居南側埋土中より出土した。

3は口縁部~底部にかけて残存している。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居煙道埋土中より出土している。

4は口縁部~体部上半にかけて残存する小破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、体部外面には墨書が認められる。墨書は欠損部にあるため文字全体は不明であるが、残存する字形より正位に書かれた「本」であると推定できる。住居埋土中より出土した。



第46図 RA049竪穴住居出土遺物

5 は底部のみの破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土より出土した。

9は口縁部~体部下半にかけて残存している。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は残存していないが、体部最下端は回転ヘラケズリが施されている。口縁端部はやや外反する。住居埋土中より出土した。

11は底部のみの破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、体部最下端~底部は切り離し後回転へラケズリが施されている。住居内カマド北側袖付近より出土した。

13は口縁部~体部下半にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されているが、底部の調整は不明である。住居内カマド北側袖付近より出土した。

14は口縁部~体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部の調整は不明である。住居内カマド袖構築土中より出土した。

15は口縁部~体部下半にかけての破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されているが、底部の調整は不明である。住居検出中、埋土最上層より出土した。

7・8は土師器高台付坏である。7は底部のみの破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部切り離し後、高台が貼り付けられている。住居埋土中より出土した。

8 は口縁部~底部にかけて良好に残存している。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部切り離し後、

高台が貼り付けられている。口縁端部は外反気味であり、体部に一部還元焼成部分が認められる。住居内カマド北側袖構築土中より出土した。

10・12は土師器埦である。10は口縁部~体部下半の破片である。内外面ともにミガキ調整で黒化処理されている。残存する器形より底部には貼り付けられた高台が存在したと推測される。口縁端部は外反する。住居埋土中より出土した。

12は口縁部が残存しない。内外面ともにミガキ調整で黒化処理されており、底部には高台が貼り付けられている。住居埋土中より出土した。

16~20はすべて土師器甕である。16は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。口縁部は緩くわずかに外方へ開く。口縁端部は端面を持ち、シャープにヨコナデが施されている。住居床面直上より出土した。

17は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケであり、外面のヘラケズリは口縁部にまで及ぶ。口縁部は緩くわずかに外反し、口縁端部は尖り気味である。住居内カマド埋土中より出土した。

18は体部半ば~底部にかけて残存する。体部の外面調整は縦方向のヘラケズリ、体部最下端は横方向のヘラケズリである。底部外面には木葉痕がみられる。住居内カマド埋土中より出土した。

19は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラナデ、内面調整は横方向のハケである。口縁部は緩くわずかに外方へ開く。口縁端部は端面を持ち、シャープにヨコナデが施されている。住居埋土中より出土した。

20は体部半ば~底部にかけて残存する。体部の外面調整は縦方向のヘラケズリ、体部最下端は横方向のヘラケズリである。内面調整は不定方向のハケが施されている。住居埋土中より出土した。

## R A 050竪穴住居 (第47·48図、写真図版23)

調査区中央やや東寄り、2 I 区南端ほぼ中央に位置する。住居南西隅が区画点 2 I 22 q に近接する。 RA043と切り合い関係がある。

検出面は第1層直下、標高122.700mを測る。この検出面は、木の根の浸食を受けているため、非常に凹凸の著しい面であった。

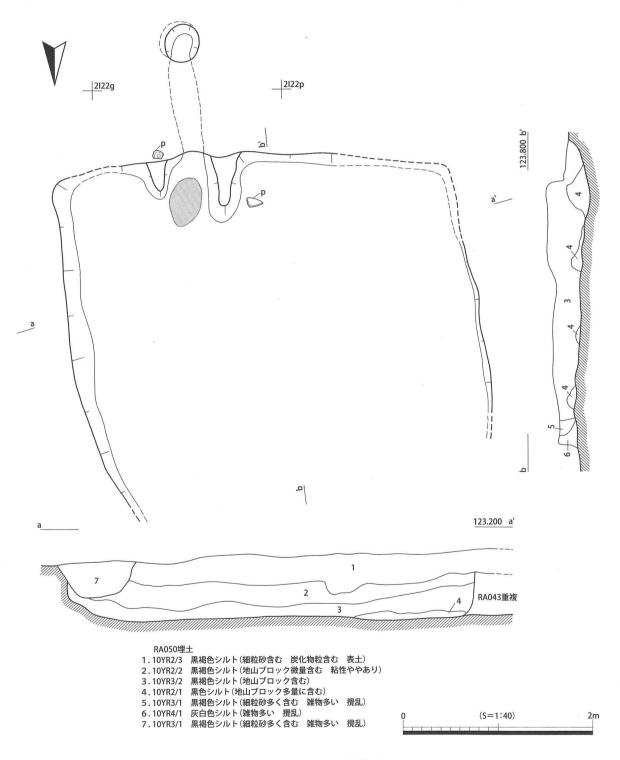
平面形態は、北側が東西方向に流れる現代の水路によって攪乱され失われているため不完全であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は東西長3.44m、深さ22.8cmを測る。

埋土は、概ね上・下 2 層のシルトからなる。埋土中には地山ブロックを含むが、木の根の浸食作用によって生じたものと考えられ、埋土自体に人為的な様子は窺えない。

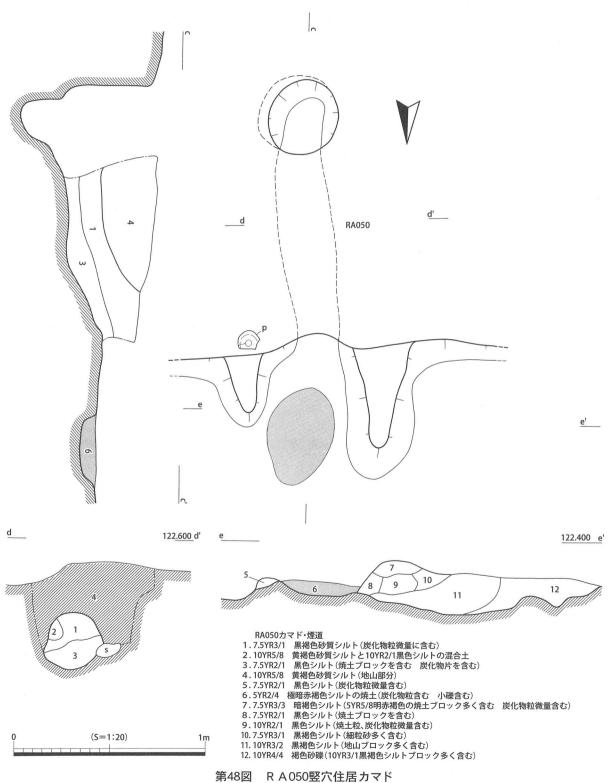
側壁は、攪乱を受けている北側壁を除いて概ね良好に残存しているが、南西角はRA043によって損なわれている。

カマドは、南側辺の東寄りに設置されている。カマド両袖は構築土で作られたものである。東側袖はほとんど残存していないが、西側袖は構築土の高まりが良好にみられた。さらに、この西側袖は基底面を築いてから袖を作ったような様子が断面で観察できた。カマド天井部はすでに失われていた。燃焼部は両袖の間に存在し、円形の範囲で比較的厚い焼土層を確認した。

煙道はカマドから南向きにトンネル状に掘られており、天井部も良好に残存している。出しかし、煙道壁面は焼土化していなかった。



第47図 RA050竪穴住居



煙出しは直径40cmを測る円形の開口部を持ち、検出 面より約70cm深さの掘り込みが認められた。

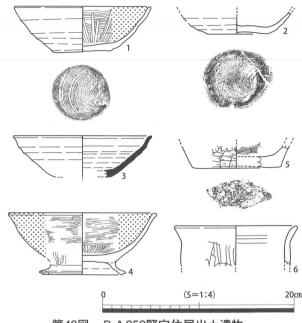
一床面には明瞭な貼床はみられず、床面は大半で地山 礫層が露出した状態である。

遺物は、竪穴住居埋土、付属する施設等から土師器・ 須恵器・鉄製品などが出土した。遺構および遺物から 9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると 考えられるが、切り合い関係よりRA043よりも古い竪 穴住居である。

## 出土遺物 (第49図、写真図版58)

出土した遺物は土師器坏・須恵器坏・土師器埦・土 師器甕である。1・2は土師器坏である。

1 は内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部回 転糸切り後無調整である。住居内カマド右袖より出土した。



第49図 RA050竪穴住居出土遺物

2 は体部下半~底部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居埋土中より出土した。

3 は須恵器坏である。口縁部~体部下半にかけて残存している。口縁端部は外反気味である。住居埋土中より出土した。

4 は土師器埦である。内外面ともにミガキ調整で黒化処理されている。底部切り離し後、貼り付けられた 高台を持つ。口縁部はやや外反気味であり、高台は大きく外反する。住居埋土中およびRA045北東埋土より 出土した。

5 · 6 は土師器甕である。

5 は底部のみの破片である。外面調整は横方向と縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。また、底部外面には砂粒が多量に付着している砂底土器である。住居埋土中より出土した。

6 は口縁部~体部上半にかけての破片である。外面調整は縦方向のヘラナデである。口縁部は小さく外に 開く。住居埋土中より出土した。

## R A 051竪穴住居 (第50・51図、写真図版24)

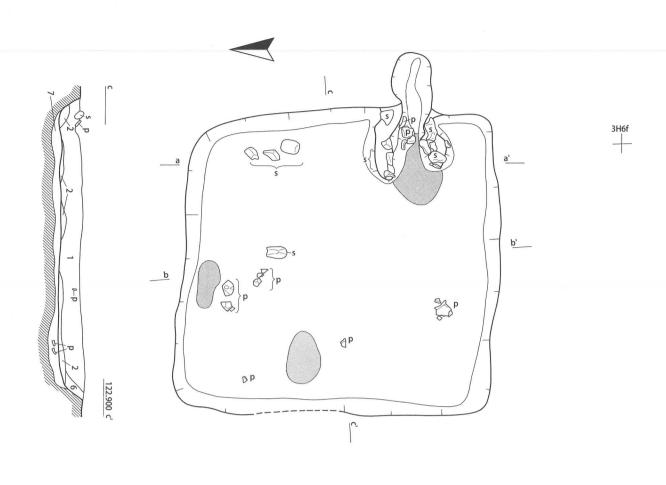
調査区中央西寄り、3 H区北端中央よりやや西側に位置する。住居南東隅が区画点 3 H 5 f に近接する。 検出面は第1層直下、標高122.600mを測る。

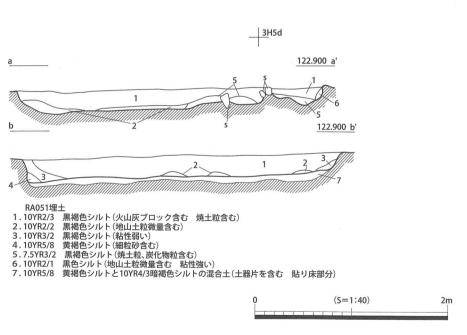
平面形態は、ほぼ方形を呈する。規模は南北長3.22m、東西長3.27m、深さ21.8cmを測る。

埋土は、単層のシルトからなる。この埋土中には若干の火山灰ブロックが認められる。

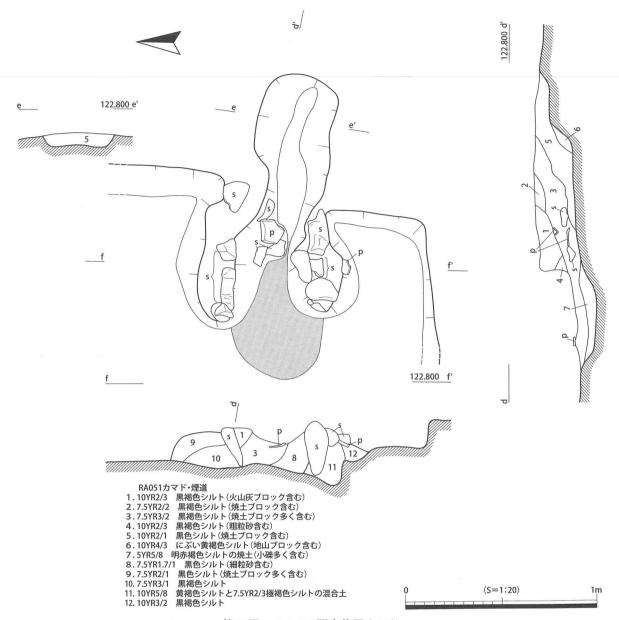
側壁は、一部攪乱を受けている西側壁を除いてすべて非常に良好に残存している。

カマドは、東側辺の南寄りに設置されている。カマド両袖は構築土で覆われた、礫を芯材とするものであると考えられる。構築土はほとんど残存していないが、芯材の礫は良好に残存している。また、カマド天井部はすでに失われていた。燃焼部は両袖の間よりやや手前に存在し、袖を避けるように円形の範囲で焼土層を確認した。





第50図 RA051竪穴住居



第51図 RA051竪穴住居カマド

煙道は、天井部が残存していなかったが、本来はトンネル状であったと考えられる。煙道は住居から煙出 しに向けてやや登り勾配気味に掘られており、1mに満たない長さである。以上の特徴はその他の住居とは 少し異なる。

煙出しは平面においても断面においても不明瞭であった。

床面の貼床は平均すると約10cmの厚みで住居全体に施されている。この床面は全体的に強固に締まっている。

床面には土器や被熱した礫がみられた。また、2次的な焼土層を住居北西部で2箇所検出した。

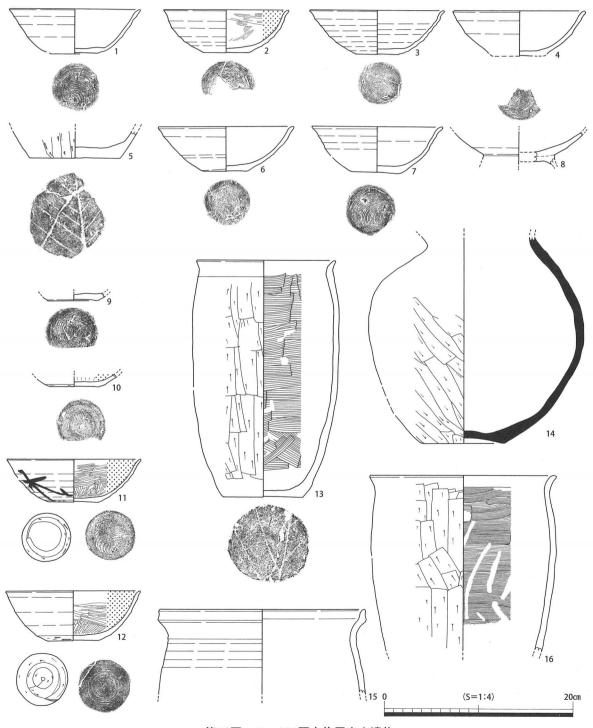
遺物は、竪穴住居埋土、付属する施設等から土師器を中心に土器類が出土した。遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての竪穴住居であると考えられる。

## **出土遺物** (第52図、写真図版59·60)

出土した遺物は土師器坏・土師器甕・土師器高台付坏・須恵器甕である。  $1 \sim 4 \cdot 6 \cdot 7 \cdot 9 \sim 12$ は土師器坏である。

1は口縁部~底部にかけて残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居貼床より出土した。

2は口縁部~底部にかけて残存する。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部は著しく外反する。住居埋土中およびカマド周辺埋土中より出土した。



第52図 RA051竪穴住居出土遺物

3は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。体部外面に黒斑が認められる。住居内カマド周辺床面直上より出土した。

4 は口縁部~底部にかけて残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整で ある。住居内カマド前床面直上より出土した。

6 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上より出土した。

7は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上より出土した。

9は底部のみの破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。住居床面直上より出土した。

10は底部のみの破片である。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部調整は切り離し後回転ヘラケズリである。住居北西床面直上より出土した。

11は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部調整は切り離し後回転ヘラケズリである。回転ヘラケズリは体部最下端~底部外周に施されている。口縁部はやや外反する。また、体部外面には「木」と考えられる墨書がみられる。墨書の文字は太く大きい特徴が認められる。住居北西部床面直上より出土した。

12は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部調整は切り離し 後回転ヘラケズリである。口縁端部はやや外反傾向である。

5・13・15・16は土師器甕である。

5 は体部下半~底部のみの破片である。外面は縦方向のヘラケズリ調整が施されている。底部外面には木葉痕が認められる。住居北東埋土中および貼床より出土した。

13は口縁部~底部にかけて残存する。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横方向のハケである。 底部には木葉痕が認められる。口縁部はヨコナデで短くわずかに外反させるのみで、そのため器形は全体的 に円筒状を呈する。住居内カマド袖内およびカマド周辺埋土中より出土した。

15は口縁部~体部半ばにかけての破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整であり、口縁部は端部が 上方に摘み上げられる形状を呈する。住居内カマド右袖内および住居南西埋土中より出土した。内外面とも に回転ナデのみの調整である。住居カマド付近埋土中より出土した。

16は口縁部~体部下半にかけて残存する。住居内カマド袖内およびカマド前床面直上より出土した。

8は土師器高台付坏である。体部下半~高台貼付部にかけての破片である。

14は須恵器甕である。外面調整は上方から下方へ斜めにヘラケズリが施されている。器形は全体的に大きく歪みが認められる。住居南西床面直上および住居内カマド付近よりまとまって出土した。

## R E 006竪穴住居状遺構 (第53図、写真図版26)

調査区中央やや東寄り、2 J 区南端ほぼ中央に位置する。竪穴住居状遺構北西隅が区画点 2 I 21 y に近接する。

検出面は第 I 層直下、標高122.500mを測る。この検出面は、削平が著しい面であった。

平面形態は、ほぼ方形を呈する。規模は南北3.60m、東西長3.89m、深さ22.8cmを測る。

埋土は、概ね上・下2層のシルトからなる。上層は火山灰を含むシルト層である。下層は、層厚10cmもな

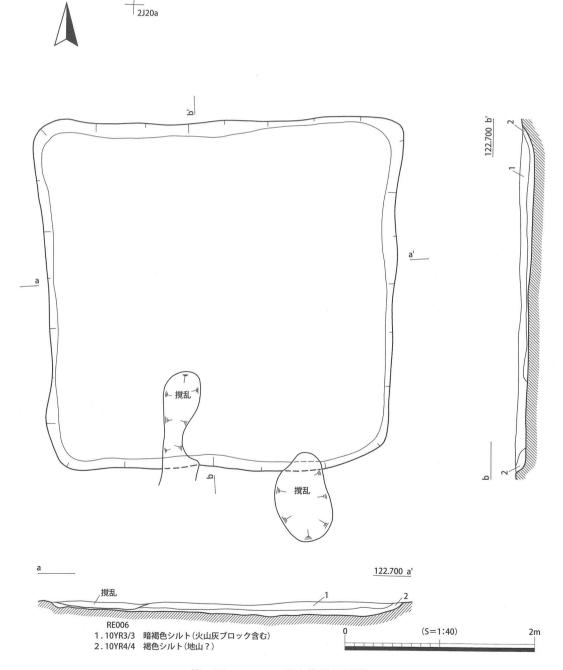
いシルトである。この下層のシルトは地山に色調が類似するが、明らかに地山よりも締まりがないものであったため、地山とは区分した。

側壁は、一部攪乱を受けている南側壁を除いて概ね良好に残存している。

床面には貼床は認められず、他の住居ほど締まりや硬化がみられなかった。

カマド、煙道、煙出しともに存在せず、それら存在の痕跡になり得る焼土や炭化物もまったくみられない。 よって、規模および形態からは竪穴住居と大きく隔たりを持つものではないが、カマドが存在しないため竪 穴住居状遺構とした。

また、出土遺物もまったくみられなかった。以上の事実より、この遺構が居住用の施設である可能性は極

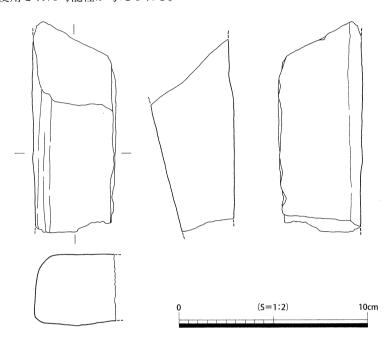


第53図 RE006竪穴住居状遺構

めて低いと考えられる。

## 竪穴住居出土石製品(第54図、写真図版61)

竪穴住居より出土した石製品は1点のみである。この石製品はRA042竪穴住居より出土した砥石である。 良好に残存していると思われるが、完存はしていない。石材は北上山地産の砂岩である。形態は長方形を呈 し、断面形態は方形を呈する。長さは11.15cm、幅4.4cm、重量は270.0gを測る。長側面4面ともに平滑であ り、すべての面が使用された可能性が考えられる。



第54図 竪穴住居出土石製品

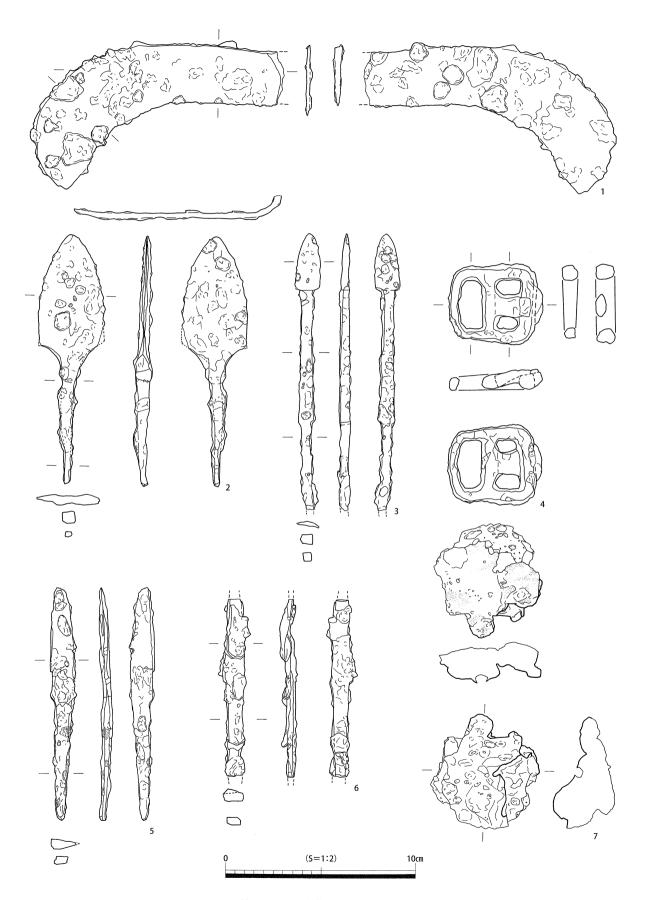
## 竪穴住居出土鉄製品(第55図、写真図版62)

竪穴住居より7点の鉄製品が出土した。これらをまとめて報告する。

1は鉄鎌である。基部先端部が欠損するもののその他は良好に残存する。全長12.8cm、重量64gを測る。 刃部は緩やかに屈曲する曲刃鎌である。刃部の先端はやや尖り気味で、屈曲部はやや幅広である。刃部と基 部とを区分する境界はみられない。基部には、柄に装着するための折り曲げがみられる。RA045竪穴住居床 面直上より出土した。

2は鉄鏃である。残存状況はほぼ完形で、全長13.25cm、重量は40gを測る。鏃身部外形は長三角形を呈し、鏃身部断面形は両切刃造であると考えられる。頸部形は斜行であると考えられるが、頸部に続く関部は段差や突起が不明瞭である。このため茎部は頸部との境界が定かでない。しかし、頸部と茎部では明らかに太さが異なるため両者に区分されるものと考えられる。また、これらの部位の断面形態は方形である。この鉄鏃の各部位の長さの比は、概ね鏃身部5:頸部2.5:茎部2.5である。よって、この出土鉄鏃は短頸鏃である。RA045竪穴住居床面直上より出土した。

3は鉄鏃である。残存状況はほぼ完形であると考えられるが、茎部先端部がわずかに欠損している。残存する全長14.7cm、重量15.0gを測る。鏃身部外形は長三角形を呈し、鏃身部断面形は片切刃造であると考えられる。頸部、茎部ともに直線で断面方形を呈する。関部は角関であり、頸部と茎部を明瞭に区分する。こ



第55図 竪穴住居出土鉄製品

の鉄鏃の各部位の長さの比は、全長を10とした場合概ね鏃身部 2 : 頸部 5 : 茎部 3 である。よって、この鉄鏃は長頸鏃である。RA045竪穴住居床面直上より出土した。

4は鉄製鉸具である。錆が全面に覆っているものの、ほぼ完形であると考えられる。外形は概ね方形を呈するが、基部側が先端部側よりやや広がる台形状である。先端部~基部までの全長は4.8cm、全体の重量は27.0gを測る。環状の中にT字形を呈する自在金具と自在棒が取り付けられている。自在棒は、帯に取り付けられる基部側に倒れた状態で錆び付き凝固している。RA046竪穴住居埋土最下層より出土した。

5は鉄製刀子である。全体を錆が覆っているが、ほぼ完形である。全長は12.2cm、刃部長6.2cm、重量12gを測る。刃部は、断面三角形を呈する片刃である。茎部は断面長方形で先端に向け次第に細くなる。また、茎部には木質が部分的に残存しており、木製の柄が装着されていたことが窺われる。

6は鉄製刀子であると考えられる。全体的に錆による劣化が著しく、さらに両端が折れ、欠損しているため形状は判然としない。残存する全長は9.2cm、重量は10gを測る。断面は方形であり刃部が失われている可能性も考えられる。RA049竪穴住居埋土中より出土した。

7は鉄滓である。表面にはスサ等はみられず、片面には少量の砂粒を取り込んでいる。表面の凹凸や形状より流状滓であると考えられる。重量は66gを測る。RA049竪穴住居煙道埋土より出土した。

## 3. 畠状遺構

今回の調査では、調査区西側で畑状遺構を 2 箇所で検出した。 3 G~ 3 H区にて $004 \cdot 005$  畠状遺構、 3 H区にて $RZ006 \cdot 007$  畠状遺構をそれぞれ検出した。

#### R Z 004 · 005 畠 状 遺構 (第56 図、写真図版27 · 28)

RZ004畠状遺構は、調査区西側3G区西端~3H区東端にまたがって位置する。

検出面は第 I 層直下の面であるが、周辺よりも削平が著しく I 層が全く遺存していないため I 層上面が検出面である。しかし、この面の標高は122.750mを測り、竪穴住居等の遺構検出面の標高値と大きく異なるものではない。

ほぼ南北を指向する17条からなる畝間溝群である。ここでは、畝間溝は西から東へ向け便宜上①~⑰の番号を付して表記する。畝間溝はそれぞれほぼ平行でそれぞれ重なることなく筋状に延びる。各畝間溝間の間隔は、セクション位置で最小約18cm、最大約67cmである。溝幅も $12\sim27$ cmと一定ではない。

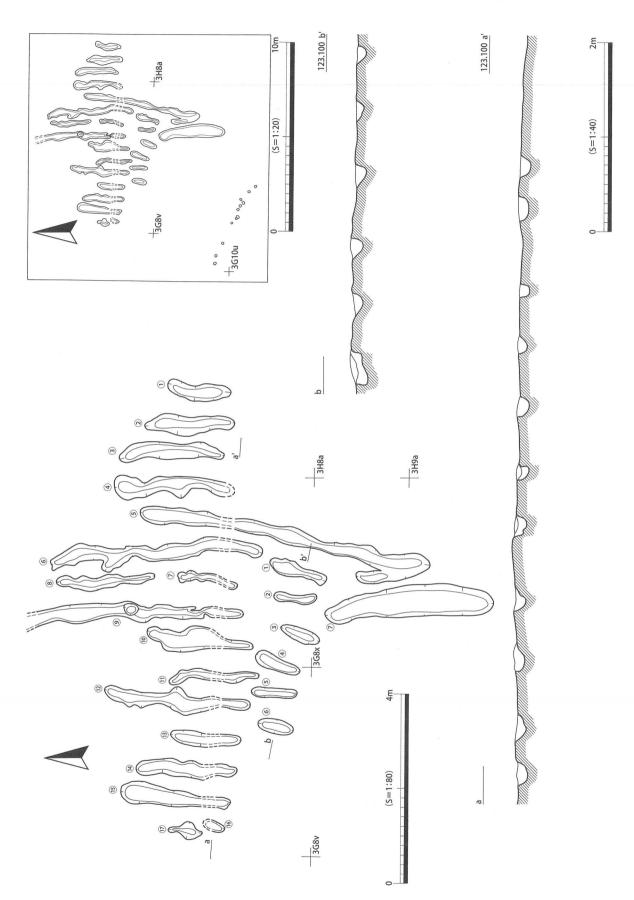
埋土は2層か単層のいずれかであり、それぞれの畝間溝の埋土はほぼ同じシルトである。この埋土中には多くの火山灰ブロックが認められる。2層の埋土からなる畝間溝は⑪と⑫であるが、いずれの埋土上層にも多量の火山灰ブロックが認められ、埋土下層の火山灰よりも大きな塊状である。

畝間溝①~③・⑪は断面による土層の確認はできなかったが、埋土の様子はその他の畝間溝と同様であった。また、⑯と⑰はそれぞれがかなり短小な溝であり、溝間の間隔も狭いため同一の畝間溝である可能性も考えられる。

畝頂部は残存していないため遺構から耕作の痕跡は見出せない。

出土遺物はみられなかったが、埋土中の火山灰が十和田 a 降下火山灰であるとから、畝間溝埋没時期が 9世紀末~10世紀初頭頃であると考えられる。

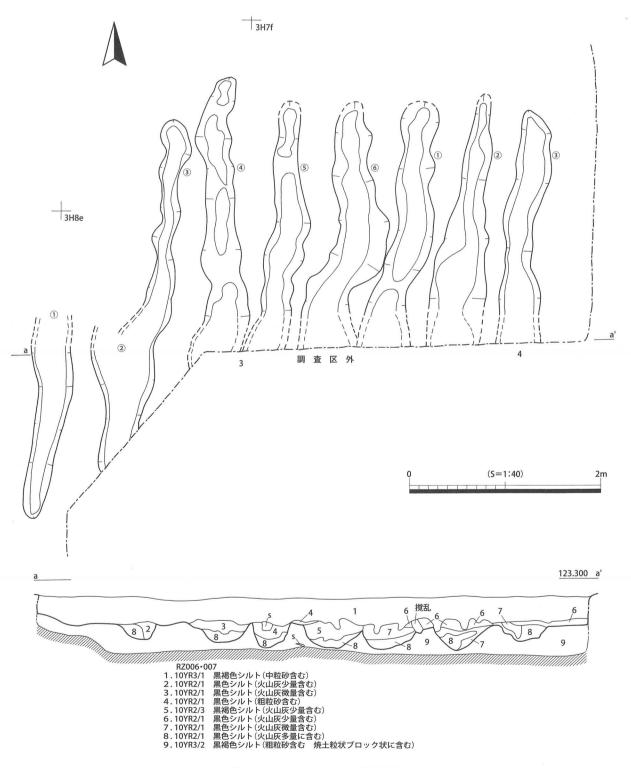
RZ005畠状遺構は、RZ004畠状遺構北に位置する畝間溝群である。RZ004畠状遺構と大きく異なるものはみられず、ほぼ同じ様子である。本来、先のRZ004畠状遺構と連続する畝間である可能性が考えられるが、それ



第56図 R Z 004・005畠状遺構

ぞれ断絶しているため別遺構として扱った。畝間溝は西から東へ向け便宜上① $\sim$ ①の番号を付して表記する。 ① $\sim$ ③は方向、規模、形状、埋土ともに南に位置するRZ004の⑥ $\cdot$ ⑦ $\cdot$ 9と同じであり、RZ004に続く畝間 溝である可能性がある。しかし、その他の畝間溝に関しては連続性が認められない。

畝頂部は残存していないため遺構から耕作の痕跡は見出せない。



第57図 R Z 006·007 晶状遺構

出土遺物はみられなかったが、埋土中の火山灰が十和田 a 降下火山灰であると考えられ、畝間溝埋没時期が 9 世紀末~10世紀初頭頃であると考えられる。

#### R Z 006 · 007 (第57図、写真図版29 · 30)

RZ006 畠状遺構は、調査区西側 3 H区に位置する。RA049と切り合い関係がある。

検出面は第 I 層直下の面である。この面の標高は122.800mを測り、竪穴住居等の遺構検出面の標高値と 大きく異なるものではない。

ほぼ南北を指向する 5 条からなる畝間溝群である。ここでは、畝間溝は西から東へ向け便宜上① $\sim$ ⑥の番号を付して表記する。畝間溝はそれぞれほぼ平行であるが、間隔は一定ではない。特に畝間溝④・⑤の間隔は南側で他より狭い。

埋土は、火山灰を多量に含むシルトの堆積である。火山灰はほぼ1次的な堆積と思われる程多量である。 畝頂部は残存していないため遺構から耕作の痕跡は見出せない。

出土遺物はみられなかったが、埋土中の火山灰が十和田 a 降下火山灰であるとから、畝間溝埋没時期が 9世紀末~10世紀初頭頃であると考えられる。

#### 4. 杭 列

調査区西側で杭跡と考えられる小さな遺構を検出した。およそ東西方向に列を成して存在している。杭跡の集合である杭列を一つの遺構として登録した。

#### R Z 008杭列 (第58図、写真図版31・32)

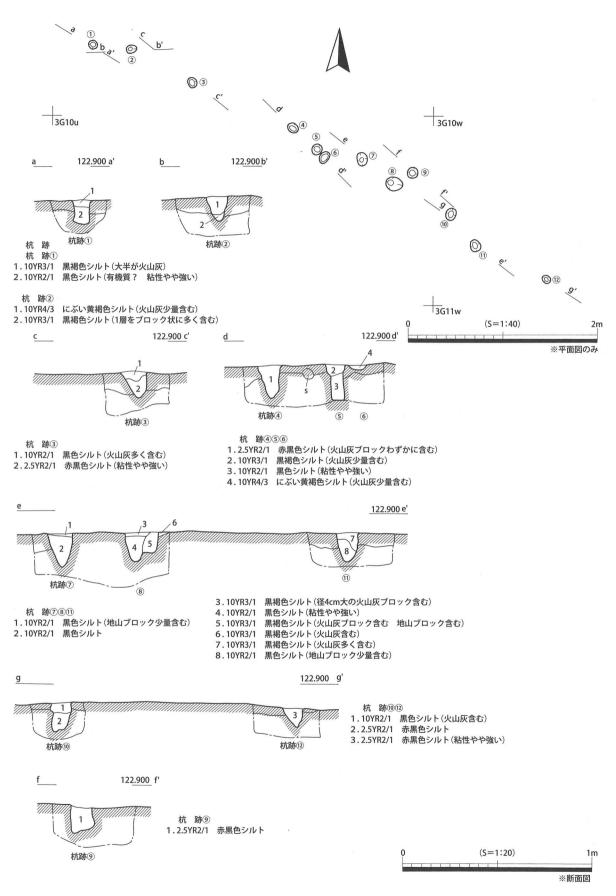
3 G区で検出した12本の杭跡からなる杭列である。杭列を構成する杭跡は便宜上杭跡①~⑫とした。

検出面は第 I 層直下の面であるが、周辺よりも削平が著しく II 層が全く遺存していないため II 層上面が検出面である。しかし、この面の標高は122.750 mを測り、竪穴住居等の遺構検出面の標高値と大きく異なるものではない。

埋土は、上層で火山灰が多く認められる。下層はシルト主体であるが火山灰は認められない。埋土は全般的にしまりがない。

全ての杭跡に掘形はみられず、地面に直接打ち込まれたものと考えられる。平面形態は径約10cmの円形であり、断面形状は柱状のもので、杭跡 $2\cdot 3\cdot 4\cdot 7\cdot 8\cdot 1\cdot 1$ 2については最下端が逆三角形に尖っている。このことから杭そのものはまったく遺存していないながらも、使用された杭は丸木のもので、先端部が鉛筆の先ように加工されていたと考えられる。これらの杭跡には、断面においても平面においても明瞭な抜き取り痕はみられなかった。抜き取りの際に痕跡が残らないような抜かれ方をされたのか、抜かれずそのまま木材が朽ちてしまったなど可能性が考えられるが、調査では明確にできなかった。また、すべての杭の先端がIII-4 層(砂礫層)中まで及んでいない。打ち込みの際、杭先端が礫層にぶつかったところで打ち込み終わったのかもしれない。したがって、杭跡 $1\cdot 5\cdot 9\cdot 10$ 0の断面形態は先端部が尖っていない理由の一つに礫層にぶつかって杭先端部が潰れてしまったのかもしれない。

出土遺物はみられなかったが、埋土中の火山灰が十和田 a 降下火山灰であると考えられ、杭の痕跡の埋没時期が 9 世紀末~10世紀初頭頃であると考えられる。



第58図 R Z 008杭列

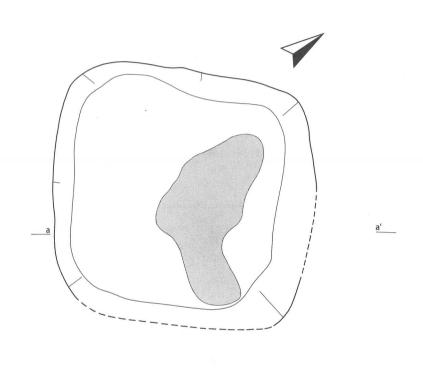
## 5. 焼土坑・土坑および柱穴

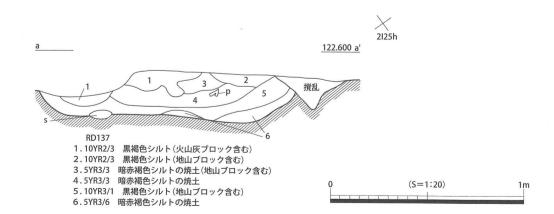
調査区東側で土坑を多数検出した。土坑の中には底面に被熱痕跡が認められる 3 基があり、これらは焼土坑という呼称を用い、被熱痕跡が認められないその他の土坑と区別した。焼土坑はRD137~139であり、土坑はRD140~149である。

## R D 137土坑 (第59図、写真図版33)

調査区中央やや東寄り、2J区北端西側に位置する焼土坑である。焼土坑東隅が区画点2I25Wに近接する。 検出面は攪乱を受けているが、第1層直下標高122.480mを測る。

平面形態は、ほぼ方形を呈する。主軸は座標軸より約45°振る。規模は北西~南東長1.34m、北東~南西長1.65m、深さ19.1cmを測る。





第59図 R D 137土坑

埋土は、大別すると上・中・下3層からなる。上層は火山灰や地山をブロック状に含むシルト層である。中層は焼土の2次堆積層である。下層は地山ブロックを含むシルト層である。

側壁は、南東側壁と北東側壁が攪乱を受けているが、その他は良好に残存している。

底面はほぼ平坦で、東半の広範囲に被熱度合いの高い焼土層を検出した。この焼土層断面は直下の地山層 と層界不明瞭で下方に向け漸位的に赤みが弱くなっている。このことから、この底面東半および東側壁は直 接被熱していると考えられる。

遺物は、土師器の破片がわずかに出土した。

遺構および少量の遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての焼土坑であると考えられる。

## R D 138土坑 (第60図、写真図版34)

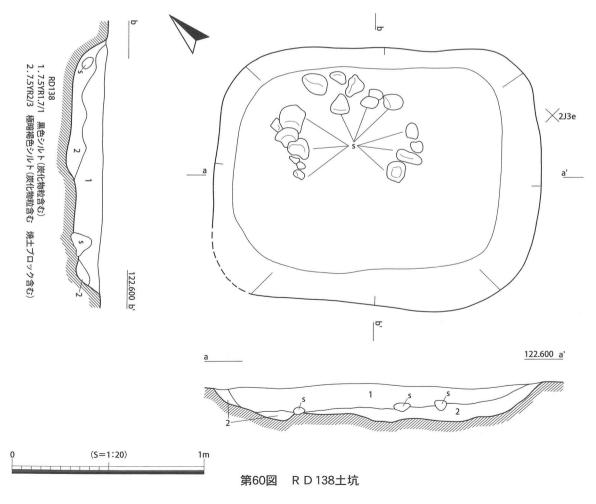
調査区東側、3I区北端西側に位置する焼土坑である。焼土坑東隅が区画点2J3eに近接する。

検出面は、第1層直下標高122.400mを測る。

平面形態は、ほぼ方形を呈する。土坑主軸は座標軸より約45°振る。規模は北西~南東長1.92m、東西長1.42m、深さ26.0cmを測る。

埋土は、大別すると上・下 2 層からなる。上層は炭化物を含むシルト層である。下層は焼土ブロックを多く含むシルト層である。

側壁は、西隅側壁が攪乱を受けているが、その他は良好に残存している。

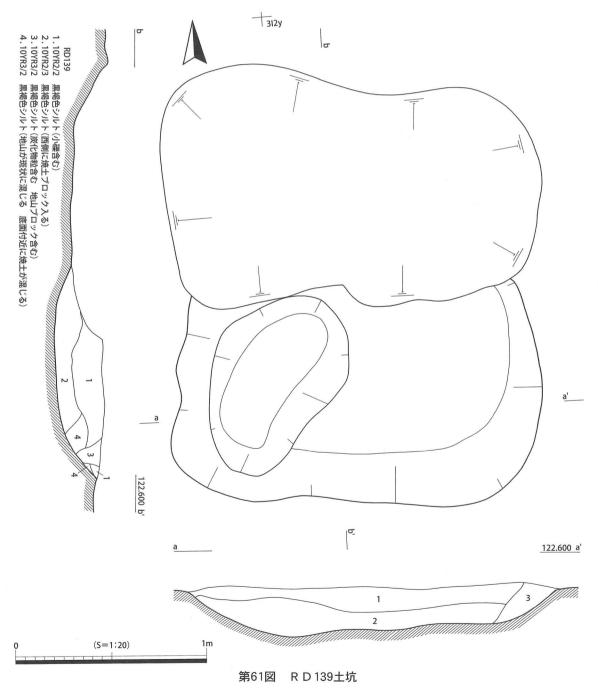


底面はやや凹凸がみられ、北側には拳大の円礫が「コ」の字形に存在する。円礫は被熱のためか赤変が認められ、円礫分布範囲内は底面も焼土化が顕著である。この焼土層断面は層界不明瞭で下方に向け漸位的に赤みが弱くなっている。このことから、底面北側は直接被熱していると考えられる。なお、側壁は被熱が認められなかった。

火山灰や遺物がみられないため、時期は不明である。しかし、RD137土坑と類似する点が多いことから9世紀後半~10世紀前半にかけての焼土坑であると考えられる。

## R D 139土坑 (第61図、写真図版35)

調査区東側、3I区北端西側に位置する焼土坑である。焼土坑南西隅が区画点3I3yに近接する。



検出面は、第1層直下標高122.200mを測る。

平面形態は、東西方向に長い長方形を呈すると考えられるが、北側が大きく攪乱を受けている。土坑長軸方向が主軸とするならば、主軸は東西方向である。規模は南北長の推定約1.2m、東西長1.92m、深さ21.1cmを測る。

埋土は、大別すると上・下 2 層からなる。上層は拳~人頭大の礫を含むシルト層である。この埋土中の礫は被熱痕跡が認められるものがあり、西側に集中する。下層は西半で焼土ブロックを多く含むシルト層である。

側壁は、北側壁がほぼ全体攪乱を受けているが、その他は良好に残存している。

底面は概ね平坦であるが、西側はわずかに窪む。底面西半は焼土化が顕著である。この焼土層断面は層界不明瞭で下方に向け漸位的に赤みが弱くなっている。このことから、底面北側は直接被熱していると考えられる。なお、側壁には顕著な被熱が認められなかった。

遺物は、埋土より土師器が3点出土した。

遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての焼土坑であると考えられる。

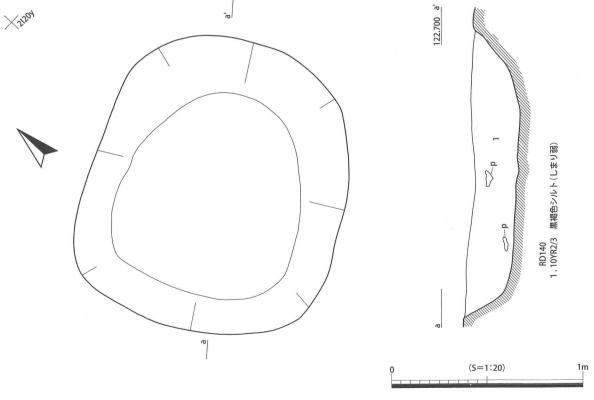
## R D 140土坑 (第62図、写真図版35)

調査区東側、2I区東端に位置する土坑である。土坑南隅が区画点2I21yに近接する。

検出面は、第1層直下標高122.500mを測る。

平面形態は、方~円形を呈する。主軸方向は座標軸より約30°振る。規模は南北長1.33m、東西長1.53m、深さ25.2cmを測る。

埋土は、ほぼ単層であり、炭化物を若干量含むシルト層である。植物の根株によりやや攪拌されているた



第62図 R D 140土坑

めか埋土に締まりはない。

側壁は、良好に残存している。側壁はどの方向においても緩やかに立ち上がる形状を成す。

底面は概ね平坦である。

遺物は、埋土中より192点もの剥片土器が出土した。剥片土器は埋土中にほぼ普遍的に含まれるが、土坑北 半埋土下位~底面付近より多く出土した。

遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての剥片土器廃棄土坑であると考えられる。

## R D 141土坑 (第63図、写真図版36)

調査区東側、2I区西側に位置する土坑である。土坑東端が区画点2I22hに近接する。RA035竪穴住居と切り合い関係が認められる。

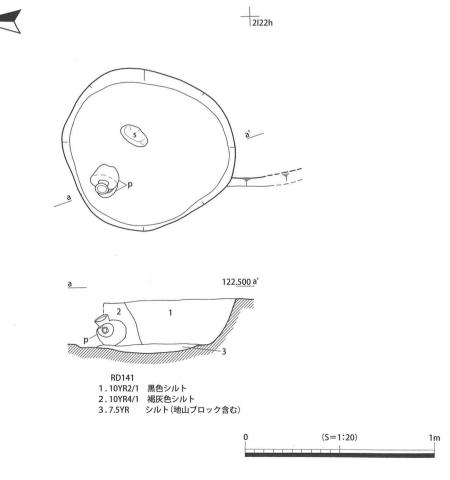
検出面は、攪乱の顕著な面であり、第1層直下標高122.450mを測る。

平面形態と規模は、直径約1mの不整な円形を呈する。

埋土は、上・下2層からなり、上層は締まりのないシルトである。下層は地山ブロックを含むシルトであり、底面を薄く被覆している程度のものである。

側壁は、現代の水路によって攪乱されている北側以外が残存している。

RA035竪穴住居と切り合い関係は断面においては確認できなかった。しかし、平面での検出段階で土坑西



第63図 R D 141土坑

側の輪郭がみられず、土坑西半はRA035竪穴住居の埋土のみであった。このことからこの土坑はRA035竪穴住居によって切られている可能性が高い。

底面は概ね平坦であるが、土坑中心部がやや窪む。土坑底面では須恵器長頸壷が西にやや傾いた状態で出土した。この須恵器長頸壷は口縁~頸部半ばまでがみられない。また、その破片は埋土中にもみられなかった。さらに、この須恵器長頸壷肩部西側には、ほぼ完形の土師器坏が口縁部を須恵器長頸壷に密着するような状況で出土した。土師器坏の破損部分は上側の口縁部のわずかである。土師器坏内面と須恵器長頸壷の間には埋土が充填しており、植物の根が蔓延っていた。このような底面での土器検出状況より、本来土坑底面に須恵器長頸壷は正置され、長頸壷の口は土師器坏を伏せるようにして蓋とされていたものと推測される。しかし、東側からの生じた何らかの圧力により須恵器長頸壷は西に傾き、土師器坏が須恵器長頸壷肩部まで滑り落ちた状況であると考えられる。なお、須恵器長頸壷内には土が充満しており土以外のものはみられなかった。

このような土器の組み合わせは飯岡沢田遺跡でも確認されている。飯岡沢田遺跡の例では、長頸壷の口頸部が意図的に打ち欠かれ、土師器坏で蓋がなされていた。これは須恵器内から火葬人骨が出土している蔵骨器であったが、今回の例は火葬骨がみつかっておらず蔵骨器ではない可能性が高い。

遺構および出土した遺物から9世紀後半の土器埋納土坑であると考えられるが、遺構の切り合い関係よりRA035竪穴住居よりも古い土坑であると考えられる。

#### R D 142土坑 (第64図、写真図版37)

調査区東端、2J区北端に位置する土坑である。土坑北端が区画点2I23eに近接する。

検出面は、第1層直下標高122.400mを測る。

平面形態は、均整の取れたほぼ方形を呈すると考えられるが、北側が攪乱を受けている。主軸は、ほぼ南 北方向である。規模は南北長1.04m、東西長0.92m、深さ15.9cmを測る。

埋土は、概ね粒状の焼土や炭化物を多く含むシルトである。

側壁は、北側壁が攪乱を受けているが、その他は良好に残存している。

底面は概ね平坦である。底面や側壁には顕著な被熱が認められなかったが、埋土中には多くの炭化物と焼土がみられたことから近くで検出した焼土坑と何らかの関係があると考えられる。また、規模や形態は焼土坑の特徴を有するため被熱度合いの軽い焼土坑である可能性も考えられる。

遺物は、須恵器坏が2点出土した。

出土したわずかな遺物から判断すれば、平安時代の土坑であると考えられる。

#### R D 143土坑 (第64図、写真図版37)

調査区東端、2J区北端に位置する土坑である。土坑北東隅が区画点2I23eに近接する。

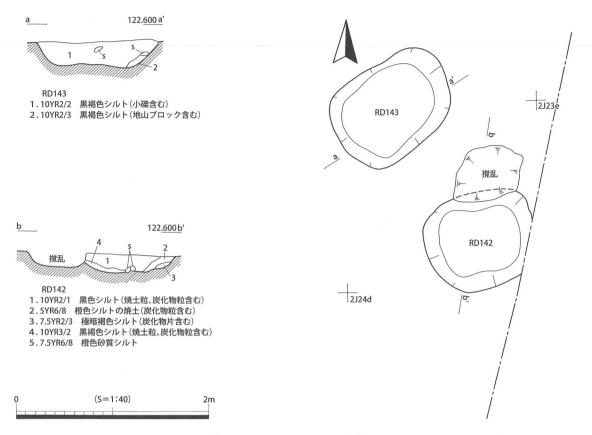
検出面は、第1層直下標高122.400mを測る。

平面形態は、ほぼ長方形を呈する。長軸方向を主軸とするならば、主軸はほぼ南北方向より約45°東に振っている。規模は長軸1.40m、短軸1.02m、深さ29.0cmを測る。

埋土は、概ね黒褐色シルトの単層であり、若干量の小礫を含む。

側壁は、すべて良好に残存している。

底面は概ね平坦である。



第64図 R D 142 · 143土坑

遺物は出土しなかったため明確な土坑の時期は不明であるが、埋土や規模・形状から古代の土坑である可能性が高い。

## R D 144土坑 (第65図、写真図版37)

調査区中央やや東寄り、3I区北端に位置する土坑である。土坑北東隅が区画点3I3fに近接する。

検出面は、第1層直下標高122.300mを測る。

平面形態は、ほぼ長楕円形を呈する。長軸方向を主軸とするならば、主軸はほぼ東西方向である。規模は 東西長1.61m、南北長0.90m、深さ25.9cmを測る。

埋土は、概ね黒褐色シルトの単層であり、火山灰ブロックを多く含む。

側壁は、すべて良好に残存している。

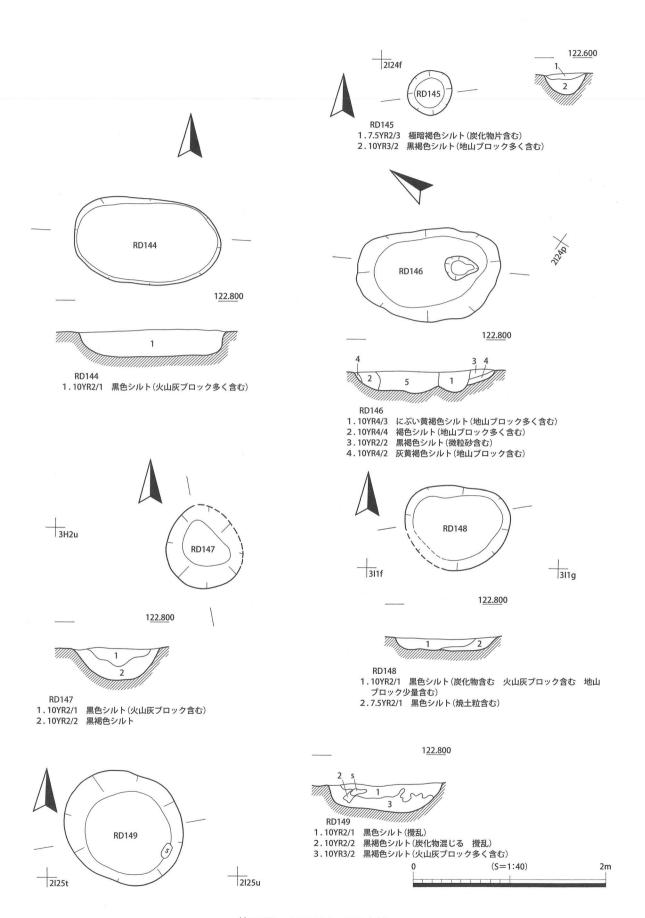
底面は概ね平坦である。

遺物は須恵器坏が埋土中より1点出土した。

遺構および遺物から9世紀後半~10世紀前半にかけての土坑であると考えられる。

## R D 145土坑 (第65図、写真図版38)

調査区中央やや東寄り、2I区南端に位置する土坑である。土坑北側が区画点2I24fに近接する。 検出面は、第1層直下標高122、400mを測る。



第65図 R D 144~149土坑

平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は径0.48m、深さ19.9cmを測る。

埋土は、上下 2 層のシルトであり、上層には炭化物、下層には地山ブロックを多く含む。

側壁は、すべて良好に残存している。

底面は丸い形状である。

遺物は出土しなかった。

遺構の時期は不明である。

## R D 146土坑 (図65、写真図版37)

調査区中央やや東寄り、2I区南端に位置する土坑である。土坑西端が区画点3I1gに近接する。 検出面は、第1層直下標高122,400mを測る。

平面形態は、やや不整な円形を呈する。規模は径0.96m、深さ24.7cmを測る。

埋土は、地山ブロックを含むシルトである。

側壁は、南西側が攪乱を受けている以外はすべて良好に残存している。

底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

遺構の時期は不明である。

#### R D 147土坑 (第65図、写真図版38)

調査区中央やや西寄り、3H区北西側に位置する土坑である。土坑西端が区画点3H2uに近接する。 検出面は、第1層直下標高122.600mを測る。

平面形態は、やや不整な円形を呈する。規模は径0.95m、深さ33.0cmを測る。

埋土は、上下2層のシルトであり、上層には火山灰ブロックを含む。

側壁は、攪乱を受けている北東部分以外すべて良好に残存している。

底面は丸い形状である。

遺物は出土しなかった。

遺構埋土に含まれる火山灰より9世紀後半~10世紀前半にかけての土坑であると考えられる。

#### R D 148土坑 (第65図、写真図版38)

調査区中央やや東寄り、3I区北西に位置する土坑である。土坑西端が区画点3I1fに近接する。 検出面は、第1層直下標高122.400mを測る。

平面形態は、やや不整な円形を呈する。規模は径0.96m、深さ24.7cmを測る。

埋土は、上下 2 層のシルトであり、上層には火山灰ブロックや炭化物を含み、下層には少量の焼土ブロックを含む。

側壁は、南西側が攪乱を受けている以外はすべて良好に残存している。

底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

遺構埋土に含まれる火山灰より9世紀後半~10世紀前半にかけての土坑であると考えられる。

## R D 149土坑 (第65図、写真図版38)

調査区中央やや東寄り、2I区南西隅に位置する土坑である。土坑南端が区画点2I25tに近接する。

検出面は、第1層直下標高122.500mを測る。

平面形態は、やや不整な円形を呈する。規模は径1.28m、深さ25.8cmを測る。

埋土は、上下 2 層のシルトであり、上層は攪乱起源による不純物が多いが、下層には火山灰ブロックを多く含む。

側壁はすべて良好に残存している。

底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

遺構埋土に含まれる火山灰より9世紀後半~10世紀前半にかけての土坑であると考えられる。

## 土坑出土遺物 (第66図、写真図版63)

出土した遺物は土師器坏・土師器甕・須恵器坏・須恵器壷である。 1 · 2 · 5 · 6 · 8 · 11は土師器坏である。

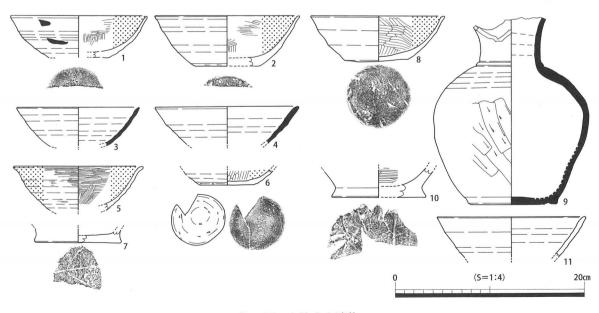
1は口縁部~底部にかけて残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。

2 は口縁部~底部にかけて残存する。内面ミガキ調整で黒化処理されており、底部は回転糸切り後無調整である。口縁部は著しく外反する。

5 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。体部外面に黒斑が認められる。

6 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。

8 は口縁部~底部にかけて良好に残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。



第66図 土坑出土遺物

11は底部のみの破片である。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部は回転糸切り後無調整である。

7・10は土師器甕である。

いずれも底部のみの破片で、底部外面には木葉痕が認められる。

3 ・ 4 は須恵器坏である。

3は口縁部~体部下半にかけて残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。

4 は口縁部~体部にかけて残存する。内外面ともに回転ナデのみの調整で、底部調整は不明である。口縁部はやや肥厚する。

9 は須恵器長頸壷である。頸部~口縁部にかけて欠損しているが、その他は良好に残存している。体部下 半は縦方向のヘラケズリが施され、それ以外は回転ナデである。底部はわずかに輪状に高台がみられる。こ れは削り出しの高台であると考えられる。RD141土坑底面中央よりほぼ正置されて出土した。

# V. 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

岩手県盛岡市向中野に所在する細谷地遺跡は、北上川右岸の低位段丘上に立地する。周辺には、飯岡才川、野古A、稲荷、熊堂A・B遺跡などが分布している。本遺跡の発掘調査では、平安時代と考えられる竪穴住居跡や畑と考えられる畝、杭列などの遺構や、当該期の土師器や須恵器、鎌や刀子、鉄鏃などの遺物が確認されている。

本報告では、1)テフラの検出同定、2)畑状遺構の栽培植物の検証、という2点の課題を設定し、1)については、火山灰(テフラ)と考えられる堆積物を対象に、性状を明らかにする。また、テフラであった場合、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行い、遺構に関わる年代資料を作成する。一方、2)については、特にイネ科の栽培植物について検討するため、畝及び畝間から採取された土壌を対象に植物珪酸体分析を行う。

# I. 火山灰分析

## 1. 試 料

試料は、竪穴住居跡 (RA046) 覆土及び畑状遺構3・4の畝間から採取された火山灰と考えられる堆積物 2点である。各試料の肉眼観察の結果、竪穴住居跡覆土の試料は暗褐色を呈する中粒〜細粒の砂であり、 畑状遺構試料は、黒褐色の砂質シルトとにぶい黄橙色のシルト質砂が混在する状況が認められた。

## 2. 分析方法

#### (1) テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返し、得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラス、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。さらに火山ガラスについて、屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMATOTを使用した温度変化法を用いた。

#### 3. 結果

#### (1) テフラ分析

2 試料は、ともに多量の火山ガラスが含まれる。 また竪穴住居跡試料中には多量の軽石も含まれ、 畑状遺構試料には中量の軽石が含まれる。火山ガ ラスおよび軽石の特徴は、両試料とも類似してい

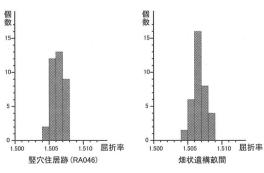


図 1. 火山ガラスの屈折率

る。火山ガラスはバブル型と軽石型が混在し、軽石型が非常に多い。

火山ガラスの屈折率は、竪穴住居跡覆土試料ではn1.504~1.508、畑状遺構試料ではn1.504~1.509のレンジを示し、ともにn1.506前後にモードがある(図1)。軽石は、径2mm程度で粒径の淘汰は非常に良好である。その色調は白色を呈し、発泡は良好である。

## 4. 考 察

竪穴住居跡覆土や畑状遺構畝間に認められたテフラと考えられる堆積物は、火山ガラスおよび軽石の粒径の淘汰が非常に良いことや、岩石片や石英粒などテフラに由来しない砕屑物をほとんど含まないこと、さらに各遺構における出土状況から、一次降下堆積したテフラが後世の撹乱を受け土層中にブロック状に残存したことが推測される。

これらの試料は、上記した火山ガラスや軽石の特性や本遺跡の地理的位置、既存の東北地方におけるテフラの産状についての研究成果(町田ほか(1981;1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、西暦915年に十和田カルデラより噴出した十和田aテフラ(To-a)に対比される。なお、東北地方では、To-aとほぼ同時期(上述の早川・小山(1998)によれば、To-a噴出から約30年後の西暦947年)に中国と北朝鮮の国境にある白頭山から噴出した白頭山苫小牧テフラ(B-Tm)の堆積も広域に認められている。ただし、このテフラは細粒のバブル型の多い火山ガラスを主体とすることとその屈折率が高い(n1.511~1.522)ことから、To-aとは明瞭に区別される。今回の試料中に含まれる火山ガラスには、B-Tmに由来する火山ガラスはほとんど含まれていないと考えられる。

また、発掘調査時の所見によれば、テフラは、竪穴住居跡では覆土上層にブロック状に堆積する状況が認められており、遺構の廃絶後のほぼ埋没した時期に降下ことが考えられる。したがって、当遺構は、新しくともTo-a降灰以前、すなわち10世紀以前の遺構と判断される。また、畑状遺構についても、畝間にTo-aが集積していることから、当テフラの降灰時には畝や畝間が作られていたことが推測される。

## Ⅱ. 植物珪酸体分析

#### 1. 試 料

畠状遺構は、発掘調査区西側2箇所から検出されており、それぞれ畠状遺構1・2、畠状遺構3・4とされる。 これらの畠状遺構からは、いずれも畝が南北に延びる状況が確認されている。

試料は、3H7f区南壁で確認された畑状遺構3・4の土層断面から採取された土壌6点(試料番号1~5,火山灰試料)と、畠状遺構1・2の畝間より採取された土壌1点(試料番号6)である。このうち、試料番号1は表土付近、試料番号2は畝直上の土層であり、いずれも黒色を呈する砂質シルトからなる。試料番号3は、畝間より採取されており、To-aが混在する黒色の砂質シルトである。なお、火山灰試料は、同地点の隣接する同一土層から採取されている。試料番号4・5は、畝覆土上部(試料番号4)及び畝覆土下部(試料番号5)に相当し、いずれも黒色を呈する砂質シルトからなる。これらの計7点の土壌試料について、植物珪酸体分析を行う。

#### 2. 分析方法

#### (1) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から栽培植物や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

## 3. 結果

#### (1) 植物珪酸体分析

結果を表1、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。この中には、イネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来する亜鈴形を呈する短細胞珪酸体、葉身機動細胞に由来が見られる。また、籾殻の外穎表面に形成される乳房状形を呈するイネ属類珪酸体も含まれる。

火山灰試料では、植物珪酸体含量は約2,600個/gと最も少なく、ヨシ属やススキ属などが認められる。

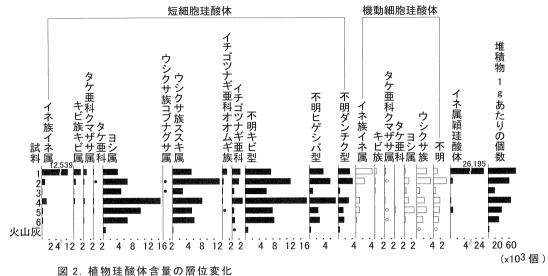
表	1. 畠	状遺	構の	植物	珪酸	体含	量

(個/g)

種類							
試料番号	1	2	3	4	5	6	火山灰
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	12,539	871	101	1,272	232	219	0
キビ族キビ属	1,986	581	101	318	0	0	0
タケ亜科クマザサ属	869	218	0	318	0	146	0
タケ亜科	124	73	0	159	174	0	0
ヨシ属	4,221	7,039	5,184	16,534	10,826	7,014	714
ウシクサ族コブナグサ属	0	73	50	0	0	0	0
ウシクサ族ススキ属	5,462	13,643	2,919	8,585	5,558	6,283	165
イチゴツナギ亜科オオムギ族	1,366	363	151	159	58	0	0
イチゴツナギ亜科	2,359	1,959	604	3,021	579	804	55
不明キビ型	7,449	13,062	6,140	17,647	7,873	8,329	769
不明ヒゲシバ型	3,973	5,951	956	7,472	2,489	2,923	384
不明ダンチク型	3,352	4,136	503	3,021	1,447	1,680	439
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	4,718	2,467	0	1,113	1,100	146	0
キビ族	372	218	101	0	0	0	0
タケ亜科クマザサ属	372	73	0	159	58	73	0
タケ亜科	0	0	. 0	0	347	0	0
ヨシ属	248	1,379	503	1,272	2,837	365	0
ウシクサ族	2,855	4,064	856	2,226	2,721	1,754	55
不明	1,117	3,774	705	1,908	1,795	1,461	55
珪化組織片		-	-				
イネ属穎珪酸体	26,195	653	0	159	753	0	0
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	43,700	47,969	16,709	,	29,236		2,526
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,682	11,975	2,165	6,678	8,858	3,799	110
珪化組織片 総計	26,195	653	10.074	159	753	0	0
NS EI	79,577	60,597	18,874	65,343	38,847	31,197	2,636

試料番号6・5では、植物珪酸体含量は約3-4万個/gである。栽培植物のイネ属が認められ、特に試料番号5では機動細胞珪酸体含量は約1,100個、籾殻に形成されるイネ属穎珪酸体は約750個/gである。また、試料番号5では栽培種を含む分類群であるオオムギ族も認められるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別は困難である。

試料番号4では、植物珪酸体含量は約6.5万個/gである。に増加する。イネ属が認められ、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体含量は約1,000個/gを超える。この他に、オオムギ族や栽培種を含む分類群であるキビ属が認められる。試料番号3でも、試料番号4と概ね同様な種類が検出されるが、これらの植



ない。他の年版体音量の層位変化 堆積物 1 gあたりに換算した個数を示す。● 〇は 100 個 /g 未満の種類を示す。

物珪酸体含量は少ない。

試料番号2・1では、イネ属が認められる。特に、試料番号1ではイネ属短細胞珪酸体や穎珪酸体含量が突出して多く、機動細胞珪酸体含量も最も多い。この他に、オオムギ族やキビ属の植物珪酸体含量も多く認められる。これらの試料には、いずれもヨシ属やススキ属の植物珪酸体が多く認められ、タケ亜科やイチゴツナギ亜科などの植物珪酸体も認められる。

#### 4. 考 察

晶状遺構3・4の表土から畝下部までの土層からは、栽培植物のイネ属をはじめとして、栽培種を含む分類群のキビ属やオオムギ族が検出された。これらの状況を見ると、イネ属短細胞珪酸体含量は表土(試料番号1)で最も含量が多く、次いで畝上部(試料番号4)、畝直上(試料番号2)となるが、表土と畝上部では約10倍の含量の違いがある。また、イネ属の機動細胞珪酸体や頴珪酸体含量も、畝上部と畝直上の試料間で含量が多少異なるが、表土付近で最も含量が多い傾向は共通する。キビ属やオオムギ族も、短細胞珪酸体含量は少ないものの、イネ属と同様な傾向が認められる。

一方、畝と畝間の植物珪酸体含量は、畑状遺構3・4では畝上部(試料番号4)でイネ属やキビ属、オオムギ族の短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体含量が多く、畝下部(試料番号5)や畝間(試料番号3、火山灰試料)で得られた含量をいずれも上回る。ただし、イネ属の頴珪酸体は畝下部(試料番号5)と畝上部の含量を上回る。

畠状遺構3・4の畝(試料番号4・5)におけるイネ属機動細胞珪酸体含量は約1,000個/gである。ここで、安定した稲作が行われたと推定される水田跡で行った分析調査では、イネ属機動細胞珪酸体含量は約5,000個/gとされている(杉山,2000)。岩手県内における分析調査例を見ると、皀角子久保IV遺跡(軽米町)の平安時代の畝溝からはイネの植物珪酸体が検出され、そのイネ属機動細胞珪酸体含量が約600個/gとされ(古環境研究所,1988)、同遺構からは、前述のイネとともにムギ類の植物珪酸体や種実遺体も検出されたことから、これらの栽培の可能性が指摘されている(パリノ・サーヴェイ,1988)。また、上鬼柳IV遺跡(北上市)では、イネやオオムギに由来する植物珪酸体が検出され、平安時代以降に畠遺構や

周辺でイネ、あるいはオオムギが栽培された可能性が指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992)。大向II遺跡(二戸市)の平安時代の畠跡では、栽培種のイネやムギ類などのイネ科作物に由来する植物珪酸体は全く検出されず、イネ科以外の作物(根菜類、豆類、野菜類など)の栽培の可能性が指摘されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 未公表)。

これらの状況を考慮すると、畠状遺構3・4の畝では、陸稲栽培が行われていた可能性がある。なお、畝直上(試料番号2)や表土(試料番号1)からもイネ属やキビ属、オオムギ族が認められているが、イネ属やキビ属の短細胞珪酸体に限れば、畝直上(試料番号2)と比較して畝(試料番号4)で含量が多い。また、畝間(試料番号3,火山灰試料)でも同様な種類が確認されているが、その含量は低い。これは、耕作後にTo-aが混入したことや、畝や周囲の土壌の混入により畝間が埋没したことから植物珪酸体の割合が低下したと考えられる。また、畠状遺構の畝下部(試料番号5)においても、イネ属やオオムギ族が認められている。この点は、1)当遺構で継続的に栽培が行われ、これらの植物珪酸体が土壌中に供給された、2)上部からの混入、といったことが推測される。

なお、本分析で検出されたキビ属やオオムギ族は、植物珪酸体分析では栽培種に限定することができないが、これらの種類も栽培されていた可能性がある。また、本分析結果で得られた植物珪酸体については、敷き藁や稲藁を用いた堆肥による施肥等によって供給された可能性もある。この点については、これらの栽培植物の種実遺体調査を行い検証することが望まれる。

畠状遺構3・4の土層では、上記した栽培植物や栽培植物を含む種類の他に、ヨシ属やススキ属をはじめとして、タケ亜科やイチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出されることから、これらのイネ科植物の生育も窺われる。なお、これらのイネ科植物はいわゆる人里植物であり、開けた場所に生育する種類が多く、本遺跡周辺は開けた場所であったと推測される。また、ヨシ属は湿潤な場所に生育する種類であることから、周囲に湿潤な場所が存在したと考えられる。

#### 引用文献

Arai, F. · Machida, H. · Okumura, K. · Miyauchi, T. · Soda, T. · Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker—

tephras in Japan II — Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido — . Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.

古澤 明,1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌,101,123-133.

早川由紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖 と白頭山-.火山, 43, 403-407.

町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

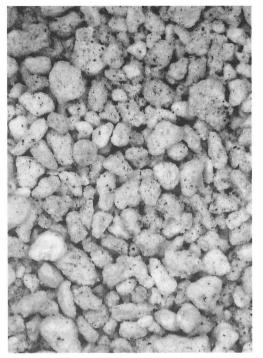
町田 洋・新井房夫・森脇 広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学―考古学研究と関連するテフラのカタログー. 渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎,865-928.

Arai, F. · Machida, H. · Okumura, K. · Miyauchi, T. · Soda, T. · Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-

- tephras in Japan II Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido . Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌,101,123-133.
- 古環境研究所,1988,プラント・オパール分析調査報告書. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129 集「皀角子久保VI遺跡発掘調査報告書 一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査」,財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,116-128.
- 近藤 錬三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, 31-64.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学―考古学研究と関連するテフラのカタログー.渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1988, 皀角子久保VI遺跡出土試料種子同定報告. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化 財調査報告書第129集「皀角子久保VI遺跡発掘調査報告書 一般国道340号改良工事関連遺 跡発掘調査」, 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,129-134.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1992,種子同定および植物珪酸体分析報告. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集「上鬼柳IV遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」,財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,177-188.
- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.

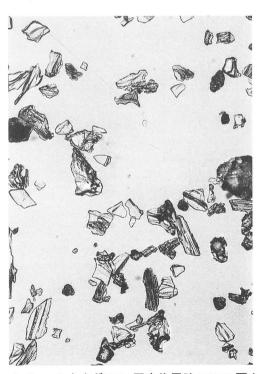
# 図版1 テフラ



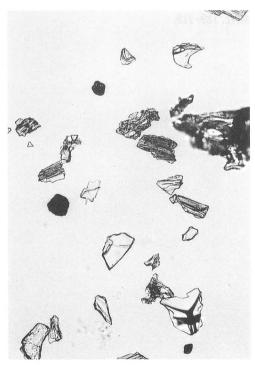
1. To-a の軽石 堅穴住居跡 RA046 覆土



2. To-a の軽石 畑状遺構火山灰



3. To-a の火山ガラス 堅穴住居跡 RA046 覆土

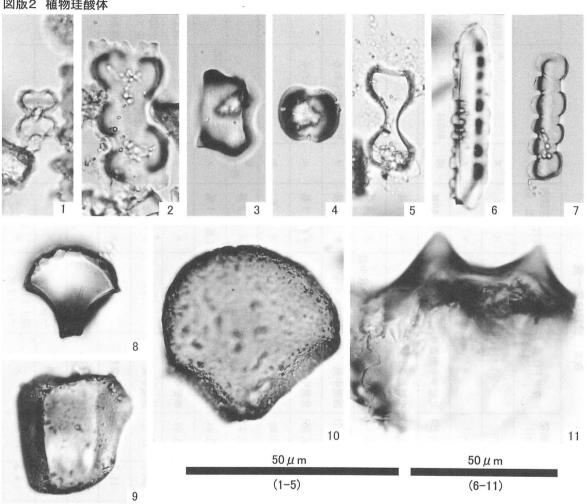


4. To-a の火山ガラス 畑状遺構火山灰

2mm	0.2mm
1,2	3,4

自然科学分析図版 1

図版2 植物珪酸体



- 1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号4)
- 3. クマザサ属短細胞珪酸体(試料番号4)
- 5.ススキ属短細胞珪酸体(試料番号4)
- 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号1)
- 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号4)
- 11. イネ属穎珪酸体(試料番号5)

- 2. キビ属短細胞珪酸体(試料番号1)
- 4.ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号4)
- 6. オオムギ族短細胞珪酸体(試料番号1)
- 8. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号5)
- 10.ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号4)

自然科学分析図版 2

表 5 竪穴住居一覧

Ě	有	± ±		箱	模(	(cm)	床面積	,	-		住居内	#	7 HH > < E.		
4 区 IVO.	図版	週檷名	<b>罪</b> 刊	業	類	災な	(m <sup>i</sup> )	ルベトル直	≼ ∃ ≼	 < ₩	十二	起律	ツワロで選択	<b>二</b>	
<u>Z</u>	写图 4	RA008	1			-		×	×	×	×	×		前年度調査区にかかる	
6	写图 4	RA034		1			I	×	埋土下位 ブロック状	×	×	×	RA035	前年度調査区にかかる	
図10	写图 5	RA035	N-10° -E	611	(665)	22. 6	(39, 25)	北壁やや東寄り	埋土上位 ブロック状		10基	西~南	RA034 RD156 に切られる	土抗埋土に火山灰微量含む 年度調査区にかかる	海
⊠13	多 図 全	RA040	E-2° -N	360	(345)	36.3	(10, 66)	東壁やや北寄り	×	×	2 基	×			
図16	<b>写</b> 图 8	RA041	E-19° -S	440	536	26.8	20.75	東壁南寄り	埋土中 ブロック状少量	×	4	×		土抗埋土に火山灰少量含む	
図21	写图10	RA042	W-16° -N	350	376	23.6	(10, 37)	西壁中央	×	×	3 套	×	RAO46に切られる		
図25	写図12	RA043	N-6° -E	416	406	23.6	(14, 06)	北壁中央	×	×	2 基	×	RA050に切られる	,	
<b>M</b> 28	写図13	RA044	M- °6-N	211	222	28.7	3.82	×	×	×	×	×			
₩30	写図14	RA045	E-16° -S	465	463	30.6	17. 40	東壁北寄り	埋土上位 ブロック状多量	×	3 撰	北 西~南	RAO46を切る?		
© 35	写図16	RA046	N-8° -N	540	(282)	28.8	(25, 89)	西壁中央	埋土上位 ブロック状多量	4基	土	×	RA042を切る・RA045 に切られる		
38	写图18	RA047	N-6° -N	208	-384	26.5	-15.64	西壁中央	埋土下位 带状多量	×	2 基	×		調査区外にかかる	
図41	写图20	RA048	N-5° -S	295	(291)	30.9	(7.42)	西壁中央	×	×	3 津	×		土抗埋土、カマド崩落土?に火山 灰ブロック含む	Ξ
₩44	写图22	RA049	E-6° -S	455	-289	11.7	-13.21	東壁北寄り	×	×	×	×	畑跡2・3直下	調査区外にかかる	
⊠47	写图23	RA050	3-e° -E	(436)	-344	22.8	-14.24	南壁東寄り	×	×	×	×	RAO43を切る		
区区	写図24	RA051	E-7° -S	322	327	21.8	8.61	東壁南隅	埋土中 ブロック状	×	×	×		カマド崩落土に火山灰ブロッ 含む	4
⊠53	写图26	RE006	N-3° -W	389	360	9.3	11.80	×	埋土上位 ブロック状	×	×	×			

表 5 土坑一覧

杭跡一覧

栎 下端が平ら 下端が平ら 下端が平ら 靊 杭間の 距 離 30.0 63.0 111.5 22.5 29.0 28.0 48.0 30.0 72.0 1.0 9.5 埋土上中位・ブ ロック状 埋土上位・ブロック状に微量 埋土上位に多量 埋土上位に少量 埋土上位に多量 18.0 埋土上位に含む 14.0 埋土上位に含む 埋土上位に多量 民 埋土中に少量 埋土中・ブロ ク状に少量  $\exists$  $\stackrel{\scriptstyle \star}{\prec}$ × X 14.0 14.5 13.5 16.0 7.0 3.0 14.5 2 がい 19. 14. 10. 9.0 0 2 2 2 11.0 14.5 11.5 11.0 10.5 0 8.0 短径 6 6 10. 10. 6. 規模( 10.0 11.0 11.0 11.5 11.5 14.0 0 0 0 長径 0 5 13, 18. 12. 13. 12. 6  $\Theta$ (3) (9) 4 (E) No. (2) 9 ∞ (2) **写图32** 写真図版No. 写図31 类 土器廃棄土坑 土器埋納土坑 焼土坑 燒土坑 燒土坑 靊 土師器の剥片 土器片数点 出土遺物 埋土中 ブロック状多量 埋土下位 ブロック状多量 埋土上位 ブロック状多量 埋土上位 ブロック状 埋土上位 ブロック状 火山灰 X × × X  $\times$ × X  $\times$ 隅丸方形 隅丸方形 隅丸方形 不整円形 不整円形 彩 坐 不整円形 彩 不整円形 不整円形 | 不整円形 不整円形 平面形  $\mathbb{E}$  $\mathbb{H}$  $\mathbb{H}$ 麵 棒 幸 19.1 21.1 25, 2 വ 27.0 19.9 24.7 がいな 6 29.0 33.0 11.5 25.8 6 22. 15. 25. Cm)  $139 \times 109$  $190 \times -121 | 157 \times -95 |$  $111 \times 106$  $110 \times 93$  $143 \times 82$  $80 \times 78$  $20 \times 10$  $117 \times 70$  $86 \times 63$  $99 \times 74$  $53 \times 43$  $88 \times 55$  $91\!\times\!89$ 模( 1  $138 \times (135)$  $170\!\times\!137$  $159 \times 133$  $130 \times 110$  $135 \times 96$  $161 \times 90$  $105\!\times\!90$  $86 \times 82$  $115 \times (113)$  $48 \times 46$  $147 \times 95$  $85 \times (75)$ 팵 4 グリッド 2124g 2J22b 2121g 2J24d 2124f 21230 2120x2J23d 2H24y 2125f 312y313f 3H2u 遺構名 RD137 RD138 RD145 RD139 RD140 RD142 RD143 RD144 RD146 RD149 RD141 RD147 RD148 **享**図33 **基图34** 享図36 **季**図35 写真 図版 No. 写図37 写図38

畠状遺構畝間溝一覧 表8

車									a								偏が			
	_											7 %	7 %	w 7	4 %	12	<u> </u>	7 / 1	ν. 7	w 7
1									— П — П			・ブロ	・ブロ	・ブロ	・ブロ		=	・ブロ	· 7 🗅	・ブロ
×									       			埋土下位来に名号	は 理士下位 状に多量	埋土下位状に多量	埋土下位・ブ 状に多量	-	×	埋土下位 状に多量	埋土下位 状に多量	埋土下位・ブ 状に多量
畝の幅	(CIII)	38.0	0	0.00	0.00	0.00	40.0	I	戦の幅 (cm)	23.0				4.0	15.5	畝の幅	(CIII)	20.0		18.0
(cm)	がい	9.1	5.6	11.2	7.7	9.6	13.4	11.3	(Cm) 減以	不明	不明	18.0	23.5	26.5	27.0	(cm)	災な	26.5	30.0	20.5
‡⊞K	匷	23	16	28	28	20	32	54	中	42	55	30	20	33	26	横		48	22	29
箱	が単	122	06	16	26	94	22	349	が海	-174	-115	(210)	-291	-255	-256	規	単な	-260	-268	-249
N		2 — ①	©	60	<del>(</del>	(2)	9		No.	3 — ①	@	60	<b>(</b>	(a)	9	N	NO.	4 — ①	©	60
4																				
屋	3																			
=	H																			
*	<																			)数值
畝の幅	(CIII)	30.0	0	10.0	0.00	91.0	64.0	17 O.F. O	28.0	32.0	50.0	37.0	48.0	36.0	35.0	0.00	21.0	33. 0 <b>%</b> 2		※ 2 は⑤-①の数値
(cm)	影が	2.5	11.4	17.3	13.7	13.9	17.6	6.2	6.5	12.7	7.6	7.9	10.1	6.5	7.6	9.2	1 9	+ 0		% 2 3
部长	ᄪ	35	38	31	29	35	25	17	23	25	35	17	31	29	32	33	91	1 6	P	の数値
選	世	80	184	219	(235)	615	439	120	203	-470	221	185	301	144	212	225	-95	(77)	(10)	※1は⑥-⑧間の数値
No.		1 ①	(3)	3	<b>(4)</b>	2	9	©	@	6	9		(2)	9	(2)	9	<u>@</u>	3 6	9	<b>※</b> 1 は€

※2は⑤—①の数値 ※1は6-8間の数値

表 9 遺物観察表 (土器) ①

												ps.	50		ايليا	(公元		大径	:黑斑	2				2黒斑							
垂	H.	肩部降灰認められる		部分的に黒斑あり	黒斑あり	黒斑あり (底部内面)	星状に降灰	内黒・墨書「玉」	黒斑あり 内黒か?	黒斑あり (底部内面)		内外面広い範囲に黒斑	二次焼成による黒斑あ	黒斑あり (底部内面)	底部付近内外面に黒斑	黒斑あり (底部内面中心)		底径の数値は胴部最大径	内面底部外面底部下半に黒斑	内面の底部に黒斑あり				黒斑あり(外面)内面全体黒斑			底部外面に黒斑		体部外面に黒斑		体部外面に黒斑あり
世		0	0	0	◁	◁	0	0	0	0	0	⊲	◁	0	◁	×	◁	0	⊲	×	0	0	0	⊲	0	×	◁	◁	◁	0	0
4		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	◁	0	0	0	0	0	0	0	◁	0	◁	0	0	0	0	0	0	0	0
	断面	10YR6/1 褐灰色	10YR5/1 褐灰色	_	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR5/1 褐灰色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/2 灰黄褐色	5YR4/4 にぶい赤褐色	7.5YR4/3 褐色	10YR5/1 褐灰色	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/8 橙色	7.5YR8/5 浅黄橙色	5YR7/8 橙色	10YR6/8 明黄褐色	7.5YR6/6 橙色	10YR7/6 橙色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR4/2 灰黄褐色	5YR7/8 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	2.5YR6/1 灰黄色	10YR6/2 灰黄褐色
	内面	2.5YR5/2 暗黄灰色	10YR5/1 褐灰色	7.5YR7/6 橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色 10YR6/6 明黄褐色	7.5YR5/1 褐灰色	10YR1.7/1 黒色	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR5/2 灰黄褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR6/8 橙色	7.5YR7/6 橙色	5YR7/8 橙色	10YR4/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR6/8 橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	5YR7/8 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	2.5YR6/1 灰黄色	10YR2/1 黒色
卸	外面	2.5YR5/1 黄灰色	10YR5/1 褐灰色	7.5YR8/8 黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	7. 5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/2 灰褐色	10YR5/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	5YR5/8 明黄褐色	7.5YR4/3 褐色	10YR5/1 褐灰色	10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	10YR6/8 明黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10VR5/3 にぶい黄褐色 10VR3/1	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/8 橙色	10YR6/2 灰黄褐色	10VR5/3 にぶい黄褐色
翷	内面	計	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラナデ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	ナギ	回転ナデ	回転ナデ	ナチ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ
田中	外 面	平行タタキ・頸部回転 ナデ	ヘラケズリ・一部にミガ キ・その他は回転ナデ?	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ
(III)	器庫	1.9	Γ.	0.65	0.7	0.8	1.0	9.0	0.7	9.0	1.1	0.4	0.8	0.6	0.6	0.8	0.4	1.1	0.75	1.0	0.8	1.0	1.2	0.5	9.0	0.8	0.6	0.7	0.6	8.5	0.7
) <u>=</u>	器	60.5	16.0	4.6	4.75	5.3	26.6	5.0	5.1	5.6	23. 2	4.6	5.2	4.7	5.4	5.0	4.9	(22.6)	5.3	5.2	(3.3)	9.8	(15.9)	4.6	(13.2)	5.1	5, 55	5.3	4.6	22.9	4.9
	底径	52.9	10.6	5.1	5.3	6.6	10.8	(4.8)	6.0	9.9	ı	(4.5)	6.1	5.6	5.9	5.8	5.7	(24.4)	5, 15	5.5	6.8	8.2	11.5	6.1	1	(5.1)	6.0	7.2	6.3	ı	5.2
拱	四	31.0	10.7	13.8	13, 75	13.9	(14.0)	(13.5)	14.1	13.9	(23.8)	(13.5)	13.6	(14.6)	14.4	14.1	14.1	(23.4)	14.3	(14.2)	(12.2)	12.4	ı	14.4	(28.4)	(13, 7)	14.2	13.6	14.9	13.7	13.3
残存率	(%)	95	80	100	85 1	95	9	30	80	45	30	65	70	20	09	95	75	40	70	20	40	09	40	20	30	30	30	35	20	40	30
超過	- 1	搬	短頸壷	妆	*	₩	長頸壷(瓶)	*	坛	*	鰕	本	苯	*	*	*	*	毈	*	*	*	鰕	毈	址	毈	*	*	*	*	長頭壷(瓶)	本
祖 胡		須恵器	須恵器	上師器	上師器	上師器	須恵器	上師器	上師器	工師器	上師器	上師器	土師器	子師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	干師器	工師器	土飾器	上師器	工師器	工師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	上師器
出	- 1	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045/042/046	RA045	RA045	RA045	RA045/042	RA045	RA045/042	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045/042	RA045/042	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045	RA045
写真図版	No.	50-108 F	49-100 F	48- 92 F	48- 90 F	48- 91 F	49-102 R	47- 89 F	48- 94 F	47-86 F	49-107 R	48- 95 F	48- 96 R	49-104 F	48- 97 F	48- 98 F	48- 99 F	49-106 F	47- 83 F	47- 87 F	46- 75 F	49-103 R	49-105 R	47-84 F	46- 74 F	48- 93 F	47- 82 F	47- 85 F	47- 81 F	48-101 F	47- 88 F
	No.	34-35	- 2	-	32- 5	32- 7	33-28	32- 4	32-18	32-16	33-31	32- 9	32- 8	32-17	32-12	32- 2	32- 3	33-32	32- 6	32-11	32-19	33-27	33-34	32-14	33-33	32-13	32-10	32-15	32-26	33-30	32-25

表 9 遺物観察表 (土器) ②

¥	<b>忙</b>				ケズリ	ケズリ	デキ		黒斑									黒斑あり				芸部外面にヘラ に刻書「大」					漫回転く				
担		内外面に黒化処理	[ る] 書番	「も」量番	底部糸切り後ヘラク	底部糸切り後ヘラク	底部糸切り後ヘラナ		底部口縁部外面に黒				Andrew An		内外面に黒化処理		内部に黒斑あり	胎士に砂粒多く含む・鳥		底部回転糸切り	墨書「ネ?」	籾痕(体部外面)底部外面 記号[一]体部外面に刻書			「大」刻書	一部還元	「大」刻書 体部最下段回転へ ラケズリ			書	墨書「大?」
4 4		0	0	0	0	0	0	0	0	0	⊲	0	⊲	⊲	0	0	0	0	0	0	◁	0	0	0	0	×	0	◁	⊲	0	0
1 4	H	0	◁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	◁	⊲	0	◁	0	◁	◁	◁	0	0	0	0	0	0	0	◁	0	0	0
聖龍	順	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色		10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/6 明黄褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR6/6 明黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	10VR6/4 にぶい黄橙色	10YR4/2 灰黄褐色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	10YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	1		7.5YR8/4 浅黄橙色	5YR6/8 橙色	10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/8 橙色	5YR6/8 橙色	5YR7/8 橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/6 橙色
	日	10YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色	10YR2/1 黒色	10YR2/1 黒色	10YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色	10YR6/6 明黄褐色	10YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR6/6 橙色	10YR3/1 黒褐色	10YR5/6 黄褐色	10YR2/2 黒褐色	10YR2/1 黒色	7.5YR4/6 褐色	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR7/8 橙色	5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR2/1 黒色	10YR2/1 黒色	10YR2/1 黒色	5YR6/8 橙色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR6/8 橙色	10YR2/1 黒色	5YR5/6 明赤褐色	2.5YR7/8 橙色	10YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色
和	外面	10YR3/1 黒褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	7.5YR6/8 橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR4/6 褐色	7.5YR5/6 明褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR6/6 明黄褐色	7.5YR6/6 橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/6 橙色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	5YR5/8 明赤褐色	5YR7/8 橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/6 橙色
羅	内画	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	回転ナデ	ハケ	ハケ	回転ナデ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	ミガキ
新克	外面	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	ヘラナデ	ヘラケズリ・回転ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
	器	0.95	0.7	0.7	0.5	0.55	0.9	0.5	0.7	1.2	0.6	0.9	0.55	0.6	(0.3)	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	9.0	0.9	0.7	0.5	0,65	0.65	9.0	0.5	9.0	(0, 4)	0.4
量 (cm)	器局	3.5	4.5	4.5	4.7	4.3	5.0	4.4	5.0	(1.2)	4.7	(1.9)	(1, 85)	(2.5)	(3. 0)	12.6	(14.5)	28.3	(29.8)	(11.7)	4.5	4.6	5.0	5.5	(2, 6)	5.5	4.75	5.3	4.85	(3.2)	(3.1)
	底 径	4.7	7.8	5.8	5.6	5.85	6.2	(6.2)	5.4	4.5	6.1	6.3	5.2	(6.4)	I	8.4	1	9.5	1	7.5	6.7	7.5	6.3	5.8	. 1	4.6	(6.6)	5.9	5.1	ı	ı
扭	殹	(8.7)	. 55	14.2	14.4	13.7	15.0	(14.8)	14.6	1	14.0	(0.6)	1	(11.9)	(15.9)	12.4	3.2)	20.4	21.6	1	12.7	13.6	13.8	15.3	. 35	12.8	14.1	14.4	14.9	1	
残存率	П (%)	92	98 12.	80 1	100	98 1	98 1	30 (1	60 1	20	75 1	40 (	25	30 (1	10 (1	65 1	30 (23.	75 2	80 2	20	100	100 1	80 1	95 1	85 16.	95 1	90 1	60 1	85 1	5	2
超路	#	目由	高台付坏	*	茶	*	本	本	*	直直	*	毕	*	*	宛	熈	鱖	撇	쎎	쎎	高台付坏	高台付坏	*	*	罄	*	苯	*	*	*	*
響	- 1	工師器	上師器	土師器	上師器	上師器	工師器	工師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	工師器	上師器	土師器	上師器	十部器	工師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
H		RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA041	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047	RA047
写真図版	No.	44- 49 R	43- 40 R	42- 37 R	42- 35 R	42- 34 R	42- 36 R	43- 41 R	42- 39 R	44- 53 R	42- 38 R	44- 50 R	44- 52 R	44- 51 R	44- 54 R	43- 44 R	43- 46 R	43- 47 R	43- 48 R		54-137 R	54-136 R	53-132 R		53-135 R	53-131 R	53-134 R	53-130 R	53-129 R	55-147 R	56-146 R
華図	- 1	19-16	19- 7	19- 4	19- 1	19- 5	19- 6	19-8	19- 3	19-17	19- 2	19-11	19-14	19-10	19- 9	19-18	19-21	19-22	19-20	19-19	40- 9	40- 1	40-3	-	40-22	40- 6	40- 2	40-17	40- 7	40-30	40-29

表 9 遺物観察表 (土器) ③

写真図版 出土 籍 四	推		田	残存率	沃		量 (cm)		皇皇	翻	田		童		1	
構作の	一	#	%		口谷	底径	地電	盤器	外面	内面	外面	内面	断	型 日 日 日	光光	<b>一</b>
53-128 RA047 土師器 坏 15 (1	土師器 坏 15	坏 15			(15.4)	ı	(4.9)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR6/8 橙色	0	0	
55-144 RA047 土師器 甕 55	上師器 甕	羅	22		ı	8.0	6.2	0.75	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR8/4 浅黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	0	0	底部回転糸切り
54-143 RA047 土師器 甕 30	上師器 甕	選	30		ı	9.2	13.4	0.6	ヘラケズリ	ナギ	5YR5/8 明赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR6/6 橙色	0	0	外面の大部分は黒変
55-148 RA047 須恵器 坏 30	須恵器 坏	林	30		ı	5.8	(3.3)	0.7	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y6/2 灰黄色	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR7/1 灰白色	0		底部外面に墨書「十」
54-141 RA047 土師器 甕 30 (19.	土師器 甕 30	甕 30		<u> </u>	9.2)	I	(19.7)	0.5	ヘラナデ	ハケ	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	0	0	
55-150 RA047 土師器 鉢 10 (20.	鉢 10	鉢 10		2	0.2)	1	(2.3)	0.3	回転ナデ	ミガキ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR3/1 黒褐色	10YR6/3 にぶい黄橙色	0	0	
55-154 RA047 土師器 坏 10	土師器  坏	杯	10		1	(8.2)	(1.75)	0.7	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/6 橙色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR6/6 橙色	0	0	底部糸切り後回転ヘラケズリ
54-139 RA047 土節器 坏 30	上師器 坏	本	30		1	(2.8)	(3.9)	0.45	回転ナデ	ミガキ	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR2/1 黒色	10YR6/3 にぶい黄橙色	0	0	
54-138 RA047 土師器 高台付坏 30	上師器 高台付坏	高台付坏	30		1	(9.4)	(4.9)	0.8	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/6 橙色	0	0	
54-140 RA047 土師器 甕 10	土師器	鎌	10		1	(10.0)	(2, 3)	0.8	ヘラナボ	ナギ	7.5YR4/2 灰褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	◁	0	
54-142 RA047 須恵器 甕 40	須恵器	毈	40		ı	10.9	(19.2)	1.4	タタキ・ヘラケズリ	ハケ	10YR4/1 褐灰色	2.5Y5/1 灰黄色	2.5Y5/1 灰黄色	0	0	底部に融着物付着
55-149 RA047 須恵器 坏 30 (14.	坏 30	坏 30		2	. 7	]	(3.7)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y4/1 灰黄色	2.5Y5/1 灰黄色	2.5Y5/1 灰黄色	0	0	
55-155 RA047 須恵器 坏 20 (15.	坏 20	坏 20		(15	6		(3. 4)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1 灰色	2.574/1 灰黄色	7Y6/1 灰色	0	0	
55-156 RA047 須恵器 坏 15 (14.	坏 15	坏 15		(14.	4)	I	(4.1)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7Y5/1 灰色	7Y5/1 灰色	10YR5/1 灰色	0	0	
55-145 RA047 須恵器 選 20	翻	翻	20		1	(13.0)	(7.3)	1.1	タタキ	当具痕	5Y4/1 灰色	7.5y4/1 灰色	5Y4/1 灰色	◁		-部は赤変
59-198 RA051 土師器 坏 60	松 60	松 60			14	(2.5)	(4.8)	0.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	0	◁	
59-196 RA051 土師器 坏 50 (13.	坏 50	坏 50		(13,	8	(4.9)	4.7	0.35	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	0	◁	
59-203 RA051 土師器 坏 30 (13.	坏 30	坏 30		(13.	33	(4.85)	4.5	0.5	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色	◁	0	
59-201 RA051 土師器 坏 65 14.	杯 65	杯 65		14	2	4.9	4.85	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR7/8 黄橙色	7.5VR7/8 黄橙色	0	⊲	
59-199 RA051 土師器 坏 70 14.	坏 70	坏 70		17	1.2	4.5	4.75	0.5	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	5YR7/8 橙色	0	4	外面に黒斑あり
RA035 土師器	林 80	林 80		13.	85	5.8	4.7	0.65	回転ナデ	ミガキ	5YR6/8 橙色	10YR2/1 黒色	5YR6/6 橙色	0	○ ■ □	墨書「方」底部回転糸切り後へ ラケズリ
RA051 土師器 坏	74 80	74 80		- I	4.2	5.45	5.3	0.65	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	7.5YR7/6 橙色	0		底部切り離し後回転ヘラケズリ
RA051	坏 55	坏 55			3.8)	5.0	4.75	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	0		
60-205 RA051 土師器 高台付坏 20	高台付坏	高台付坏	20		П	1	(3.5)	0.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	0	0	
59-202 RA051 土師器 坏 40 (14.	坏 40	坏 40		Ž.	f, 15)	5.2	4.6	0.5	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/6 橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR6/6 橙色	0		墨書「木」底部回転糸切り後回 転ヘラケズリ
59-204 RA051 土師器 坏 25	本	本	25		***************************************	5.0	(1.1)	(0.4)	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR2/1 黒色	7.5YR6/6 橙色	0	0	底部切り離し後回転ヘラケズリ
60-211 RA051 土師器 甕 65 (	獲 65	獲 65		$\Box$	(14, 7)	(8.4)	25. 2	1.1	回転ヘラケズリ	ハケ	5YR5/6 明赤褐色	5YR4/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	◁	0	
60-210 RA051 土師器 甕 50	赛 50	赛 50			19.6	1	(18.6)	0.7	ヘラケズリ	ハケ	5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7. 5YR6/4 にぶい橙色	0	0	
60-209 RA051 土師器 雞 20 (3	甕 20	甕 20		53 1	(21.75)	1	(0.6)	(0.0)	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	0		
60-207 RA051 須恵器 甕 80	鎌	鎌	80			(8.8)	23.6	1.0	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰色	N4/ 灰色	N5/ 灰色	0	0	

表 9 遺物観察表 (土器) ④

19   19   19   19   19   19   19   19	¥	Ĺ					4.5	÷ .≯								いっケズリ									匠ヘラケズリ	Q			転ヘラケズリ		
25.0   25.4	担	<b>#</b>	一部還元				回 7 96	No. 95と同一個(								底部回転糸切り後									底部切り離し後回	内外面に黒斑あ	底部にヘラ記号		底部回転糸切り後回		
等美國版 出土         報告         報告         本         本         本         本         面         本         の	1	流成	×	0	×	⊲			0	0	0	0	0	0	0	0	0	⊲	0	⊲	⊲	0	0	0	0	0	◁	×	⊲	⊲	0
等点数数         出土         無別         報本報報         出土         (本)         前         所         <	1	<u> </u>	0	0	0	0	0	0	0	⊲	0	◁		◁	0	0	0	0	0	0	0	0	◁	0	0	0	◁	◁		0	0
写真図版         出土         無分本         注         田         (本)         前         整         所         自転子         本         国际子         所         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         五         五         五         の         日         の         面         力         五	開館		蓜		7. 5YR7/6	7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR4/2 灰褐	5YR7/6 橙色				7.5YR5/3 にぶい褐色	7. 5YR5/4 にぶい褐色	明黄褐	7.5YR8/4 浅黄橙色	10YR6/3 にぶい黄褐色		7.5YR4/6 褐色	7.5YR8/4 浅黄橙色		浅黄橙	5YR7/8 橙色	10YR4/1 灰褐色	10YR5/2 灰黄褐色			7.5YR8/6 浅黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	麵	5YR6/6 橙色
写真図版         出土         無分本         注         田         (本)         前         整         所         自転子         本         国际子         所         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         内         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         面         力         五         五         五         の         日         の         面         力         五			5YR5/8 明赤褐色	甽	7.5YR7/8 黄橙色	7.5YR6/6 橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR3/3 暗褐色	5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	7. 5YR4/4	10YR2/1	10YR2/1 黒色	10YR1.7/1 黒色	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR4/4 褐色	7.5YR8/4 浅黄橙色			5YR7/8 橙色			7.5YR6/6 橙色	10YR5/4 にぶい黄褐色	5YR8/4 浅橙色	毗	5YR6/8 橙色	7.5YR2/1 黒色
今年図版	卸		1		7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/8 黄橙色	5YR6/6 橙色	7.5YR4/2 灰褐色	橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色		7.5YR4/3 褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 橙色	毗	5YR6/8 橙色	7.5YR4/6 褐色	7.5YR8/6 浅黄橙色			橙色	10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR7/2 にぶい黄橙色	7.5YR6/6 橙色	5YR7/6 橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	10YR5/4 にぶい黄褐色	橙色	5YR5/6 明赤褐色
時間 別         無極	翷		回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	1	ハケ	ハケ		回転ナデ	ミガキ	ナデ	ハケ	ハケ	苯	Ŧ	苯		ハケ	回転ナデ	Ħ	ミガキ	回転ナデ	Ŧ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ
与真図版 出土         種 別         器 権 別         競棒         洋         重         標 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	HE'		回転ナデ	回転ナデ		回転ナ	ヘラナボ	ヘッナ	1	回転ナ	回転ナデ	<	K	ラケズ			Ĭ	ヘラケズ	ヘラケズリ			回転ナデ		回転ナデ	回転ナ	回転ナデ			回転ナデ		
与真図版 No.         出土 遺構 遺構 56-159         種 別 56-159         器 有 56-159         法 56-159         日本 名 56-159         日本 名 56-169	(a)	١ ١			0.6	(0, 5)		(0, 5)			0.4	0.45	0.7		(0.4			(0, 6		0.6			0.6		0.75		0.6	0.4		0.75	0.3
写真図版         出土         種別         器種         残存率         注           No.         遺 構         年別         6%         口径         底径           50-159         RA048         土師器         坏         70         14.3         5.1           50-159         RA048         土師器         坏         50         (14.2)         6.7           50-159         RA048         土師器         环         50         (14.4)         (5.0)           50-169         RA048         土師器         班         10         (13.8)         —           50-164         RA048         土師器         班         10         (13.9)         —            50-167         RA048         土師器         班         30         (15.1)         (5.0)           50-168         RA048         土師器         班         10         (14.5)         (14.5)           50-169 <t< td=""><td></td><td>1</td><td>5.1</td><td>4.6</td><td></td><td></td><td>(1.0)</td><td></td><td></td><td></td><td>1.8</td><td>(6.5)</td><td>11.7</td><td>15.6</td><td>(3.6)</td><td>4.9</td><td>7.7</td><td>(12, 15)</td><td>(9.9)</td><td>11.6</td><td>(1.7)</td><td></td><td></td><td>(2.4)</td><td>(1.3)</td><td>5.1</td><td></td><td>4.1</td><td>2.7</td><td></td><td></td></t<>		1	5.1	4.6			(1.0)				1.8	(6.5)	11.7	15.6	(3.6)	4.9	7.7	(12, 15)	(9.9)	11.6	(1.7)			(2.4)	(1.3)	5.1		4.1	2.7		
写真図版         出土         種別         器種         残存率         注           No.         遺構構         年別         器種         36         14.2           56-159         RA048         土師器         坏         70         14.3           56-160         RA048         土師器         坏         50         14.4           56-169         RA048         土師器         乗         25         (13.6)           56-169         RA048         土師器         乗         25         (13.6)           56-169         RA048         土師器         乗         10         (14.4)           56-167         RA048         土師器         乗         30         (13.8)           56-168         RA048         土師器         乗         30         (13.8)           56-169         RA048         土師器         乗         30         (13.4)           51-111         RA046         土師器         乗         40 <td></td> <td></td> <td>5.1</td> <td>6.7</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td>ı</td> <td>1</td> <td>and a</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td>ı</td> <td>I</td> <td></td> <td>(7.2)</td> <td>ı</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td>			5.1	6.7				1				1	ı	1	and a			1	ı	I		(7.2)	ı								
写真図版         出土         種別         器種         機存率           No.         遺構         種別         器種         (%)           56-159         RA048         土師器         坏         50           56-159         RA048         土師器         坏         50           56-169         RA048         土師器         強         25           56-169         RA048         土師器         強         10           56-167         RA048         土師器         強         10           56-167         RA048         土師器         球         30           56-167         RA048         土師器         球         40           56-167         RA046         土師器         球         40           57-116         RA046         土師器         球         40           52-120         RA046         土師器         球         40           52-121	뇄	緻														6				(4.0)	1	I	(4.4)	1	ı				1	1	
写真図版         出土         種別         器種           No.         遺構         年別         品種           56-159         RA048         上師器         坏           56-158         RA048         上師器         坏           56-169         RA048         上師器         來           56-164         RA048         上師器         藥           56-167         RA048         上師器         來           56-167         RA046         上師器         藥           51-117         RA046         上師器         來           52-120         RA046         上師器         坏           52-120         RA046         上師器         坏           51-111	養存率					-	-		10		30										10	40		30	20				35	35	
写真図版         出土         種別           No.         遺 構         種別           56-159         RA048         上師器           56-160         RA048         上師器           56-169         RA048         上師器           56-169         RA048         上師器           56-164         RA048         上師器           56-167         RA048         上師器           52-110         RA046         上師器           52-127         RA046         上師器           52-128         RA046         上師器           52-120         RA046         上師器           51-111         RA046         上師器           51-111         RA046         上師器           51-111         RA046         上師器           51-111         RA046 <td>#</td> <td><b>型</b></td> <td>*</td> <td>*</td> <td>苯</td> <td>坛</td> <td>欟</td> <td>毈</td> <td>鱡</td> <td>苯</td> <td>*</td> <td>熈</td> <td>黚</td> <td>凞</td> <td>坛</td> <td>*</td> <td>凝</td> <td>毈</td> <td>獭</td> <td>臘</td> <td>*</td> <td>坛</td> <td>苯</td> <td>15</td> <td>*</td> <td>*</td> <td>*</td> <td>*</td> <td>*</td> <td>*</td> <td>*</td>	#	<b>型</b>	*	*	苯	坛	欟	毈	鱡	苯	*	熈	黚	凞	坛	*	凝	毈	獭	臘	*	坛	苯	15	*	*	*	*	*	*	*
写真図版         出 土           No.         遺 構           56-159         RA048           56-160         RA048           56-169         RA048           56-169         RA048           56-161         RA048           56-163         RA048           56-164         RA048           56-167         RA048           56-167         RA048           56-167         RA046           56-167         RA046           56-167         RA046           56-167         RA046           51-117         RA046           52-127         RA046           52-128         RA046           52-129         RA046           52-120         RA046           52-121         RA046           52-122         RA046           51-111         RA046           51-113         RA046           51-113         RA046           51-113         RA046           51-113         RA046           51-111         RA046           51-112         RA046           51-113         RA046           51-111         RA046 <t< td=""><td>ā</td><td>Ę,</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>L師器</td><td>上師器</td><td>頁惠器</td><td>上師器</td><td>上師器</td><td>上師器</td></t<>	ā	Ę,	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	L師器	上師器	頁惠器	上師器	上師器	上師器
84 国	+1	華																													
																	-117 RAC			-126 RAC									-112 RA(		-110 RA(
				- 2	ಣ	4	-	-	-	9	- 5	6	∞		6	4			_			9 -	∞	2	_	-		2			ന

表 9 遺物観察表 (土器) ⑤

H	Ĺ				0,0		[ è ]	ヘラケズリ					」底部に							温			ラケズリ	<b>トラケズリ</b>							T
Ŧ	Œ				体部外面に黒斑あ		体部外面に刻書「	底部回転糸切り後回転ヘラケ					体部外面に刻書「?」 墨書?「十」				砂底			体部帯状に還元不足			底部糸切り後回転ヘラケズリ	底部切り離し後回転ヘラケズリ						一部還元	
4: 14		×	0	0	⊲	0	0	⊲	0	⊲	0	⊲	0	0	⊲	0	0	0	⊲	×	0	0	0	0	0	◁	0	0	0	0	
1	무	0	⊲	0	0	0	×	0	0	0	0	⊲	0	0	0	⊲	0	0	⊲	0	0	0	0	⊲	0	0	0	0	0	0	
曾	層	7.5YR7/6 橙色	10YR5/3 にぶい黄褐色	7. 5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR5/4 にぶい黄褐色	7. 5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR6/8 橙色	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	10YR5/1 褐灰色	7.5YR6/4 にぶい橙色	10VR6/6 明黄褐色	7.5YR7/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/8 橙色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR5/3 にぶい赤褐色	5YR5/8 明赤褐色	7.5YR7/6 橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	
	石	7.5YR7/6 橙色	10YR3/2 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR3/1 黒褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR2/1 黒色	5YR6/8 橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR7/8 黄橙色	10YR2/1 黒色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR4/1 褐灰色	10VR5/3 にぶい黄褐色 10VR5/4 にぶい黄褐色 10VR7/4 にぶい黄橙色	10YR2/1 黒色	57R6/8 橙色 底部は 2.5Y6/2 灰黄色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR4/2 灰褐色	10YR3/1 黑褐色	5YR4/8 赤褐色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR3/2 黒褐色	10YR1.7/1 黒色	5YR5/6 明赤褐色	5YR6/8 橙色	
田	外面	7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR3/1 黒褐色	7. 5YR5/4 にぶい褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR6/8 橙色	7. 5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい黄橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 橙色	口縁・底部2.576/2灰黄 色 その他7.5YR6/8橙色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR4/8 赤褐色	7.5YR6/4 にぶい僧色 10YR3/1	7.5YR4/3 褐色	10YR1.7/1 黒色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	
糴	内面	回転ナデ	ミガキ	ミガキ	回転ナデ	ミガキ	ハケ	ミガキ	ミガキ	回転ナデ	ハケ	回転ナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	回転ナデ	ハケ	ハケ	ミガキ	回転ナデ	ナデ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケ	ミガキ	ハケ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	
里道	外面	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ・ハケ	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	ヘラナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ・ハケ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	回転ナデ	ヘラナデ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	
CIII)	器	0.5	0.7	0.6	0.65	0.65	0.6	0.8	0.4	0.6	5.5	0.6	0.6	0.9	(0,65)	0.6	1.0	1.2	0.6	0.85	1.0	(0, 7)	0.6	0.7	0.95	0.5	0.8	0.8	0.5	0.95	
(CI	器	(1.9)	(2.0)	2.5	5.2	4.85	(10.1)	4.55	5.2	(1.6)	16,85	(2.8)	4.9	6.55	(4.3)	(2.1)	(2, 4)	22.7	4.4	5.8	(8.6)	(4, 3)	(4.55)	(1.2)	(5.7)	4.4	5.1	(5.3)	5.7	5.8	
	底径	5.4	8.9	7.2	6.25	(6.2)	I	6.5		5.7	12.5	5.2	6.4	(6, 1)	ı	6.5	(8.2)	(0.0)	(7.2)	5.7	10.8	ı	(2, 3)	6.2	-	(1.0)	ı	(7.9)	6.7	7.8	
扣	日径	-	-	1	(15.0)	(14.3)	(18.5)	(14.2)	(14.6)	1	(12.2)		14.3	(15.5)	2, 85)			16.6	(14.1)	14.3	1	(15.7)	(14.0)	-	(15.8)	(15.4)	(16.2)	1	(16.6)	14.8	
残存率	(%)	30	30	30	09	45 (	30 (3	20 (	35 (	30	45 (	20	80	45 (	10 (12.	30	10	80	45 (	06	30	15 (1	35 (1	40	20 (1	30 (1	10	40	25 (1	85 ]	-
明 選	#	*	本	屋	*	*	搬	*	*	*	鱡	本	茶	屋	鰕	芹	槲	搬	*	*	鵩	屋	本	茶	鰕	₩	凞	遊	茶	高台付坏	
اة ا		上節器	上師器	工師器	土師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	土師器	上師器	器业	上師器	上師器	上師器	路	1器	1器	器	器址	品	器	上師器	器具	14器	据	器	器	上師器 高紀	
.1.1													上師器	刊	刊	判	上師器	上師器	土師器	須恵器	上師器	土師器	上師器		土師器	上師器	土師器	上師器	上師器		
田田	脛	RA042	RA042	RA042	RA042	RA042	RA042	RA043	RA043	RA043	RA043	RA043	RA050	RA050	RA050	RA050	RA050	RA040	RA040	RA040	RA049	RA049	RA049	RA049	RA049	RA049	RA049	RA049	RA049	RA049	
写真図版	No.	45- 60	45- 61	45- 62	44- 56	44- 57	45- 59	45- 63	45- 67	45- 66	45- 68	45- 65	58-190	58-191	58-193	58-192	58-194	42- 33	42- 32	42- 31	57-140	58-189	57-171	57-180	57-179	58-187	57-177	57-174	57-170	57-172	
		- 97	4.	4.	Α,	4.	4'	4,	~''	4,	7,	√1,					- L	4.	A.	√1.	LL U	LL J	- L		44.0	- L	20	LL 2	14.0	17.5	Ι.

表 9 遺物観察表 (土器) ⑥

墨書「大?」 底部切り離し後 回転ヘラケズリ 口縁部湾曲させるのみでヨコナデなし 底部切り離し後回転ヘラケズリ 底部切り離し後回転ヘラケズリ 底部切り離し後回転ヘラケズリ 内面ミガキ+黒化処理の可能性あり 体部外面に焼成前線刻 椒 底部外面に黒斑 「村?」 酸化著 靊 電量 0 0 0 0 0  $\triangleleft$ 0 0 0  $\triangleleft$ 0 0 0 0 0  $\triangleleft$  $\circ$ 0 0 0  $\triangleleft$ 0 0 0  $\triangleleft$  $\triangleleft$  $\triangleleft$ 0 0 0 0 × 0 0  $\triangleleft$ 0 0 ◁ 0 0 0 0 ⊲ 0 0 0 0  $\triangleleft$ 0 0  $\triangleleft$ 0 0 0 ◁ 0 0 黄橙色 10YR6/4 にぶい黄橙色 10VR7/6 明黄褐色 | 10VR8/4 浅黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR5/4 にぶい黄褐色 |7.5YR6/3 にぶい褐色| 10YR6/4 にぶい黄橙色 7.5YR4/2 灰褐色 10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい黄橙色 5YR5/8 明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/8 明赤褐色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR8/4 浅黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR3/1 黒褐色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/6 橙色 固 7.5YR6/6 橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/8 橙色 橙色 |5YR5/8 明赤褐色 |5YR6/8 橙色 5YR6/8 橙色 5YR6/6 橙色 5YR7/8 橙色 5YR6/6 橙色 7. 5YR7/8 5YR6/6 靐 10YR6/4 にぶい黄橙色 7.5YR8/6 浅黄橙色 7.5YR7/8 黄橙色 5YR4/3 にぶい赤褐色 7.5YR3/1 黒褐色 5YR5/8 明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/8 明赤褐色 10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR5/3 にぶい黄褐色 | 10YR4/2 褐黄灰色 10YR1.7/1 黒色 5YR5/8 明赤褐色 10VR5/3 にぶい黄褐色 | 10VR3/1 黒褐色 10YR1.7/1 黒色 10YR3/1 黒褐色 7.5YR6/6 橙色 黒色 国 10YR6/4 にぶい黄橙色 | 10YR2/1 黒色 10YR2/1 黒色 7.5VR6/4 にぶい橙色 10VR2/1 黒色 5YR6/8 橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/8 橙色 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 10YR2/1 5YR7/8 10YR2/1  $\mathbb{K}$ 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/8 明赤褐色 10VR6/4 にぶい黄橙色 .0VR5/4 にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい黄橙色 7.5YR5/4 にぶい褐色 10YR6/4 にぶい黄橙色 桕 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6 橙色 屉 7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/8 橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR4/6 赤褐色 5YR4/6 赤褐色 櫛色 5YR6/6 橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/8 橙色 5YR6/8 橙色 回転ナデ? 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ ヘッナデ 回転ナデ 回転ナラ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ 不明 ハケ ハケ ハケ ハケ ハケ ハケ (タタキ) 固 靐 8.5 ヘラケズリ (1.45) ヘラケズリ 1.2 ヘラケズリ 回転ナデ (0.4) 回転ナデ 0.6 回転ナデ ヘッナデ ヘラナデ 4.9 0.35~0.6回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ 0.2~0.5回転ナデ 共 (0.4) ハケ (9.0) 0.45 0.55 0.75 0.45 8.5 0.6 0.5 0.45 0.4 0.4 9.0 0.9 0.8 0.7 0.8 0.6 0.95 船 (CIII) (4.4) (6.9) (6, 65) (6.3) (10.2) (4.8) (1.2) (14.7) 23. 2 4.5 (1.7) (3.0) 4.9 (11, 0) (10, 7) 4.8 硘 4.85 13.7 5.9 6.1 4.3 3.9 4.6 5.0 4.0 5.0 7.8 2.5 5, 55 3, 4 ıllı 船 (7.7) (8.4) (5.6) (6.7) (6.4) (9.9) 俎 5.3 (5.6) (6.25) (3.8) 5.9 5.7 6.2 6.4 7.1 5.6 6.85 7.6 10.0 岻 (14.3) (12, 5) 法 (16.8) (14.8) (19.6) (15.0) (13.4) (13, 7) 俎 (7.3) 26.8 (14, 65) (14.3)14.0 15.3 13,95 14.2 13.6 15.3 (12, 5) 14.6 1 1 1 1 2 9 95 30 75 20 30 30 20 30 45 20 20 40 40 75 20 30 20 85 25 15 20 35 98 10 15 20 % 高台付坏 7( 2) 種 於 鰵 邂 於 太 芹 獸 蘣 黧 獸 難 芩 太 於 太 芡 芡 芡 蘣 幺 鱡 本 於 太 K 於 坏 鵩 器 土師器 上師器 上師器 土師器 土師器 上師器 上師器 土師器 上節器 上師器 十二部部 土師器 上師器 上師器 土師器 上師器 上師器 上師器 土師器 上師器 畐 灃 土華 RA044 RA035 RA035 26 RA035 2 RA034 RD137 11 RA035 40- 18 RA035 15 RA035 12-19 41- 30 RA035 12-11 | 41- 20 | RA035 RA034 RD137 9 RA035 17 RA035 12 RA035 23 RA035 24 RA035 16 RA035 41- 25 RA035 13 RA035 27 RA035 12-10 | 39- 10 | RA035 12-16 41- 29 RA035 RA034 3 RA034 6 RA034 5 RA034 1 RA034 田魍 71 19 69 62-259 写真図版 62 - 22146--94 40-39-12-21 40-12-8 41-12-3 40-40 -12-17 | 41-39-39- $^{39-}$ 12-7 | 40-12-12 | 41-12- 6 40-41-39-39-39-39-39 -39-12-22 12-18 29- 5 12-2 12- 9 12-4 12-5 9- 5 99 - 2 12-20 12-15 6- 7 9 -6 9- 4 9-3 66-10 2 6

表 9 遺物観察表 (土器) ①

土 編 別 器 編 選	別器種	揮	44.17	残存率	扭		(Cm)		田(	槲		田		原			#
TH //3	//	(%) 口径 底径	口径底径	径底径	紐		恒器	重	外面	内	面外	恒	内画	断	H E	焼ぬ	机
上師器 甕 10 — (9.0) 1.45	彟 10 — (9.0)	10 - (9.0)	(0.0)	6	6	1.45		0.9			7. 5Y	5YR6/6 橙色 7	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色		0	
上師器 坏 30 (14.4) — (14.45)		30 (14.4) —	(14.4) —	4) —	(14, 45)	4, 45)		0.7 回車	回転ナデ	ミガキ	5YR6/6	橙色	7.5YR2/1 黒色	7.5YR5/6 明褐色	0	<ul><li></li></ul>	「木・本?」
土師器 坏 30 - 5.7 (1.6)	坏 30 - 5.7 (1.	30 — 5.7 (1.	.1 5.7 (1.	7 (1.	7 (1.	(1.6)		0.5 回転ナ	エナデ	ミガキ	7. 5Y	7.5YR6/6 橙色	10YR1.7/1 黒色	7.5YR6/6 橙色	0	○ 底部切り離	底部切り離し後回転ヘラケズリ
土師器 坏 30 (15.6) (6.8) 5.3	体     30 (15.6) (6.8) 5.	30 (15.6) (6.8) 5.	(15.6) (6.8) 5.	6) (6.8) 5.	8) 5.			0.7 回転ナ	エナデ	ミガキ	7. 5Y	7.5YR6/6 橙色	7.5YR2/1 黒色	7.5YR6/6 橙色	0	0	
土師器 高台付坏 20 — 7.3 1.85 0.	高台付坏 20 — 7.3 1.85	20 — 7.3 1.85	- 7.3 1.85	3 1.85	3 1.85		0	9	回転ナデ	ミガキ	5YR6/6	整色	10YR2/1 黒色	5YR7/6 橙色	0	0	
土節器 坏 20 (13.2) — (3.9) 0.	怀     20     (13.2)     -     (3.9)	20 (13.2) — (3.9)	(13. 2) - (3. 9)	2) — (3.9)	(3.9)	(6	0.	5 回転ナ	ニナデ	回転ナデ	5YR6/6	橙色	5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	0	0	
上師器 坏 20 - 5.6 0.9 0.	FK         20         -         5.6         0.9         0.	20 - 5.6 0.9 0.	- 5.6 0.9 0.	6 0.9 0.	6 0.9 0.	9 0.		6 回転ナ	ミナデ?	回転ナデ	5YR6/8	橙色	5YR6/8 橙色	5YR6/8 橙色	0	×	
上師器 坏 30 - 6.3 (1.5) 0.6	体     30     -     6.3     (1.5)     0.	30 - 6.3 (1.5) 0.	- 6.3 (1.5) 0.	3 (1.5) 0.	3 (1.5) 0.	5) 0.		回転ナ	ナナボ	回転ナデ	10YR2/1	黒色	10YR2/1 黒色	7. 5YR5/3 にぶい褐色	0	×	
土師器 坏 25 (13.5) - (4.2) 0.5	FF         25         (13.5)         -         (4.2)         0.	25 (13.5) - (4.2) 0.	(13.5) $ (4.2)$ $0.$	5) - (4.2) 0.	2) 0.	2) 0.		直	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7. 5YR7/4 にぶい橙色 10YR2/1	黒色	7. 5YR7/3 にぶい橙色	0	◁	
土師器 坏 25 - (5.3) (1.9) 0.5	47 25 - (5.3) (1.9) 0.5	25 - (5.3) (1.9) 0.5	- (5.3) (1.9) 0.5	3) (1,9) 0.5	3) (1,9) 0.5	0.5	2	当	回転ナデ	回転ナデ	7, 5	7.5YR8/6 浅黄橙色	5YR8/4 浅橙色	7.5YR8/6 浅黄橙色	0	×	
上師器 坏 20 - (6.3) (1.4) 0.6	F     20     -     (6.3)     (1.4)     0.6	20 - (6.3) (1.4) 0.6	- (6.3) (1.4) 0.6	3) (1.4) 0.6	3) (1.4) 0.6	4) 0.6	9	回転ナ	ナナボ	回転ナデ	7. 5YR	7. 5YR6/4 にぶい橙色 7	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	0	×	
上師器 坏 30 (14.4) - (4.3) 0.6	坏 30 (14.4) — (4.3)	30 (14.4) - (4.3)	(14.4) - (4.3)	4) - (4.3)	(4.3)	3)	9.0	回	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7.5YR6/4 にぶい橙色 10YR2/1	黒色	7.5YR6/4 にぶい橙色	0	0	
桥     20     14.15     -     (3.3)     (0.35)	桥         20         14.15         -         (3.3)         (0.35)	20 14.15 — (3.3) (0.35)	14.15 - (3.3) (0.35)	15 - (3.3) (0.35)	(3, 3) (0, 35)	(0, 35)	. 35)	画	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7.5YR6/4 にぶい橙色 ]	10YR2/1 黒色	7. 5YR6/4 にぶい橙色	0	0	
土師器 坏 20 (13.95) - (4.35) (0.7)	体         20 (13.95)         - (4.35)         (0.7)	20 (13.95) — (4.35) (0.7)	(13.95) $ (4.35)$ $(0.7)$	95) — (4, 35) (0, 7)	(4.35) (0.7)	(0.7)	7	回転ナ	:ナデ	ミガキ	10YR6,	10VR6/4 にぶい黄橙色 J	10YR2/1 黒色	10VR6/3 にぶい黄橙色	0	0	
土師器 坏 20 — (6.7) (2.2) 0.7	FR         20         -         (6.7)         (2.2)         0.7	20 - (6.7) (2.2) 0.7	- (6.7) (2.2) 0.7	7) (2.2) 0.7	7) (2.2) 0.7	2) 0.7		回	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7. 5YR6/4 にぶい橙色 1	10YR2/1 黒色	7.5YR8/6 浅黄橙色	0	×	
47 20 - (5.6) (1.8) (0.65)	#         20         -         (5.6)         (1.8)         (0.65)	20 - (5.6) (1.8) (0.65)	- (5.6) (1.8) (0.65)	(5.6) (1.8) (0.65)	(1.8) (0.65)	(0, 65)	. 65)	回	回転ナデ	ミガキ	5YR6/6	橙色	10YR3/1 黒褐色	7.5YR6/6 橙色	0	0	
桥 35 (15.45) — (4.7) (0.45)	桥 35 (15.45) — (4.7) (0.45)	35 (15.45) — (4.7) (0.45)	(15.45) - (4.7) (0.45)	45) - (4.7) (0.45)	(0, 45)	(0, 45)		回転ナ	ナデ	回転ナデ	5YR7/8	橙色	2.5YR6/8 橙色	5YR7/8 橙色	0	×	
坏 25 (13.2) —	桥 25 (13.2) — (4.8)	25 (13.2) - (4.8)	(13. 2) - (4. 8)	2) – (4.8)	- (4.8)		9.0	回	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7.5YR5/4 にぶい褐色 7	7.5YR5/4 にぶい褐色 ~	7.5YR6/4 にぶい橙色	0	0	
土師器 養 15 — (9.55) (2.85) 1.5	彟 15 — (9.55) (2.85) 1.	15 - (9,55) (2,85) 1.	- (9, 55) (2, 85) 1.	55) (2.85) 1.	55) (2.85) 1.	.i	1.5	ト	ケズリ	ナギ	5YR7.	5YR7/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR7/6 橙色	0	×	
	体     50 (13.9)     5.35     5.35     5.35     0.	50 (13.9) 5.35 5.35 0.	(13.9) 5.35 5.35 0.	9) 5.35 5.35 0.	35 5.35 0.	35 0.	. 45	回転ナ	ナナ	回転ナデ	5YR7/	5YR7/4 にぶい橙色 5	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	⊲	×	
高台付坏 10 — 7.2 2.1 0.7	高台付坏 10 — 7.2 2.1 0.7	10 - 7.2 2.1 0.7	- 7.2 2.1 0.7	2 2.1 0.7	2 2.1 0.7	1 0.7	_	不男		回転ナデ	5YR7/6	橙色	5YR7/8 橙色	5YR7/6 橙色	0	0	
	魙 10 (12.6) — (3.2) 0.	10 (12.6) — (3.2) 0.	(12.6) $ (3.2)$ $0.$	6) - (3.2) 0.	(3.2) 0.	2) 0.		1		water	5YR6,	5YR6/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色	5YR6/6 橙色	0	0	
	選 30 - 13.6 10.2 0.	30 — 13.6 10.2 0.	-13.6  10.2  0.	6 10.2 0.	6 10.2 0.	2 0.		くん	ケズリ	ハケ	5YR5,	5YR5/6 明赤褐色 7	7. 5YR5/4 にぶい褐色	7. 5YR5/4 にぶい褐色	⊲	0	
*	坏(%?) 15 (14.4) - (3.2) (0.	?) 15 (14.4) - (3.2) (0.	(14.4) - $(3.2)$ $(0.$	4) - (3.2) (0.	2) (0.	2) (0.	0.4)	i H	+	ミガキ	10YR	10YR1.7/1 黒色 1	10YR1.7/1 黒色	10YR4/1 褐灰色	0	0	
土師器 坏 25 (13.7) — (4.3) (0.65)	桥     25 (13.7)     -     (4.3) (0.65)	25 (13.7) — (4.3) (0.65)	(13.7) - (4.3) (0.65)	7) - (4.3) (0.65)	3) (0.65)	3) (0.65)		単回	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7.5YR6/4 にぶい橙色 1	10YR1.7/1 黒色	10YR4/1 褐灰色	0	0	
士師器 坏 30 (13.2) - (4.2) 0.5	$4\pi$ 30 (13.2) - (4.2) 0.	30 (13.2) - (4.2) 0.	(13.2) $ (4.2)$ $0.$	2) - (4.2) 0.	(4.2) 0.	2) 0.	0.5	回	回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7. 5YR5/3 にぶい褐色 7	7. 5YR5/3 にぶい褐色 7	7. 5YR6/3 にぶい褐色	0	0	
上師器 選 10 (20.6) — (5.4) 0.6	五 10 (20.6) 一 (5.4) 0.	10 (20.6) - (5.4) 0.	(20.6) $ (5.4)$ $0.$	6) - (5.4) 0.	4) 0.	4) 0.		く	ケズリ	ハケ	5YR5/6	明赤褐色	7. 5YR5/4 にぶい褐色 7	7. 5YR5/4 にぶい褐色	0	0	
上師器 坏 30 — 5.4 (1.15) 0.5	47 30 - 5.4 (1.15) 0.	30 - 5.4 (1.15) 0.	- 5.4 (1.15) 0.	4 (1.15) 0.	4 (1.15) 0.	0.			回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6	橙色	7. 5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	0	0	
上師器 坏 35 (14.7) (6.2) 4.9 0.5	桥         35 (14,7) (6.2) 4.9 0.	35 (14,7) (6.2) 4.9 0.	(14.7) (6.2) 4.9 0.	7) (6.2) 4.9 0.	2) 4.9 0.	9 0.			回転ナデ	ミガキ	7. 5YR	7.5YR6/4 にぶい橙色 1	10YR2/1 黒色	10YR4/2 褐黄灰色	◁	〇 底部切り離	底部切り離し後回転ヘラケズリ
上師器 坏 25 (15.3) - (4.0) 0.4	FK         25 (15.3)         - (4.0)         0.	25 (15.3) - (4.0) 0.	(15.3) $ (4.0)$ $0.$	3) - (4.0) 0.	0) 0.	0) 0.		回転ナ	ナデ	回転ナデ	2. 5YR	2.5YR5/8 明赤褐色 2	2.5YR5/6 明赤褐色 2	2.5YR5/8 明赤褐色	0	0	

表9 遺物観察表(土器)⑧

th.	ŗ		高台はり付	あり					高台はり付					デあり 工具使用?																	
垂	## F	黒斑あり	底部回転糸切り後高台はり付	底部外面網代痕あ	還元不足				底部回転糸切り後高台はり付				墨書「メ?」	底部切り離し後ナデあり 内外面回転ナデは工具使用							[6] 霍雷	黒斑あり					243と同一個体?				
计	ME IN	0	0	$\triangleleft$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	◁	0	0	0	0	0	◁	0	0	0	0	⊲	$\triangleleft$	0
4	H	0	0	0	◁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	⊲	0	0	0
#PL	断面	7.5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	5YR8/4 淡橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR5/6 明赤褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR6/6 橙色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/6 橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	5YR6/6 橙色	10YR7/2 にぶい黄橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR6/3 にぶい橙色	10YR4/1 褐灰色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	10Y4/1 灰色	10YR7/1 灰白色	2.5Y6/2 灰黄色	5Y6/1 灰色	10YR6/1 褐灰色	- Address	2.5Y7/2 灰黄色	2.56Y7/1 明オリーブ灰色	2.5Y6/2 灰黄色
	内面	7.5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	10YR3/1 黑褐色	5YR8/4 淡橙色	7.5YR5/6 明褐色	5YR4/3 にぶい赤褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	10YR1.7/1 黒色	5YR6/6 橙色	2.5YR6/8 橙色	5YR4/8 赤褐色	10YR2/1 黒色	5YR6/6 橙色	10YR5/1 褐灰色	5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR5/2 灰褐色	10YR2/1 黒色	10YR4/1 褐灰色	10YR1.7/1 黒色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5Y5/1 灰色	10YR7/1 灰白色	7.5Y5/1 灰色	5Y6/1 灰色	2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y5/1 黄灰色	10YR7/1 灰白色	5YR7/1 灰白色	2.5Y6/2 灰黄色
和	外面	7.5YR5/3 にぶい褐色	5YR6/8 橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色 10YR3/1	5YR8/4 淡橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	5YR4/3 にぶい赤褐色 5YR4/3 にぶい赤褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR1.7/1 黒色	5YR6/6 橙色	2.5YR6/8 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/8 橙色	10YR6/2 褐黄灰色	5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	2.5YR5/6 明赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	N4/ 灰色	10YR7/1 灰白色	5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色	10YR6/1 褐灰色	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y7/2 灰黄色	5YR7/1 灰白色	2.5Y6/2 灰黄色
整	内面	回転ナデ	回転ナデ		回転ナデ	1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・1・	回転ナデ	ミガキ	ミガキ	回転ナデ	ナナ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	ナデ	ナデ	回転ナデ		ミガキ		ミガキ	ミガキ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナチ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
贈	[ 外 面	ヘラケズリ	回転ナデ		回転ナデ	)ミガキ?	回転ナデ	回転ナデ	ミガキ	回転ナデ	3) + 7	「回転ナデ	回転ナデ	「回転ナデ	ミガキ	ナギ	「回転ナデ	- ()	() 回転ナデ		回転ナデ	5 回転ナデ	5) 回転ナデ	) 回転ナデ	7 ヘラケズリ	7 回転ナデ	1) 回転ナデ	回転ナデ	5 回転ナデ	3) 回転ナデ	5 回転ナデ
(cm)	器庫	0.6	0.7	1.1	0.4	(0, 55)	0.8	0.7	0.5	0.5	(2, 3	1.5	0.5	0.7	0.55	0.6	0.7	(1.6)	(0, 45)	0.7	0.3	0. 5	(0. 5	0.85	0.7	0.7	(1.4)	0.4	0.8	9	0.
(a) (a) (b) (a)	器	8.3	3.0	1	4.95	(3.75)	2.5	(1, 15)	1.7	4.6		1.65	4.5	(4.6)	(1.5)	(4.15)	2.2	(2.3)	(4.4)		ı	5.5	(2, 45)	(5.6)	(4.5)	(4.4)	(9.4)	4.1	4.3	(3, 95)	5.1
	底径	-	8.0	ı	(5.15)	I	1	(6, 45)	(4.6)	1	ı	3.8	(4.6)	(9.9)	ı	I	Ι	(9.6)	1	ı		5.8	1	(9.6)	ı	I	ı	_	1	ı	
郑	傚	(32.6)	I	ı	(13. 2)	(8, 45)	(21.0)	-		(13.5)	ı	7.1	(15.6)	(13.6)	(13. 2)	(19, 65)		1	(13.8)	1		(14.8)	(2.1)	1	15.0	(14.5)	(37.8)	(13.0)	(15.6)	(15, 3)	(15.8)
残存率	%	15 (3	25	10	30	10 (6	10 (	30	15	30	30	10	40 (	45 (	35 (	20 (1	不明	20	20 (	20	2	40 (	20	20	20	30	2	22 (	30 (	30 (	35 (
#		林	高台付坏	毈	茶	搬	鰕	茶	高台付坏	*	平瓦	小皿?	*	*	不明	鱡	不明	議	本	深鉢	*	苯	小瓶	瓶類(長頸瓶?)	搬	本	搬	本	*	本	*
ā	種 別	上師器	上師器	上節器	須恵器?	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	回	/ 器鰄	上師器	上師器	瓦質土器	上師器	上師器	土師器	上師器	縄文土器	上師器	上師器	須恵器	須恵器∭	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
田	遺構	3 RA035	1 遺構外	遺構外	1 遺構外	3 遺構外	) 遺構外	遺構外	3 遺構外	3 遺構外	5 遺構外	3 遺構外	5 遺構外	3 遺構外	7 遺構外	7 遺構外	2 遺構外	2 遺構外	) 遺構外	3 遺構外	) 遺構外	1 遺構外	5 RA041	3 RA046	5 RA046	5 RA050	2 RA035	8 RD144	7 RD142	5 RD142	0 遺構外
写真図版	No.	41- 28	63-234	64-251	64-244	64-248	64-250	64-241	64-243	64-238	63-235	63-233	64-245	64-243	63-237	64-247	64-252	63-232	64-249	63-236	64-239	63-231	44- 55	51-118	52-125	58-195	41- 22	62-228	62-227	62-226	64-240
	No.	12-14	67-11	67-15	8 -29	67-18	67-20	67-14	67-12	67-2	67-16	67-13	67- 1	67-3	6 - 29	67-19	67-10	67-21	2 - 29	67-22	67- 5	67- 4	19-15	37-19	37-17	49-3	12-23	8 -99	66-11	66- 4	9 - 29

# 表 9 遺物観察表 (土器) ⑨

*	1				
推	H	238と同一個体	削り出し高台		墨書「本」
七 世	X 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20	0	0	0	0
1 4	1	0	0	0	0
	国	0Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色	1/4 にぶい黄橙色	0YR5/2 灰黄褐色
疆	-	10Y(	7.5	10YR7/4	10YI
	内面	0Y6/1 灰色	/1 暗青灰色	R1.7/1 黒色	10YR1.7/1 黒色
		10Y(	4B6/1	10YR1	
田	恒	/1 灰色	青灰色	.0YR7/4 にぶい黄橙色	4にぶい黄橙色
	*	7. 5Y4/1	5B6/1	10YR7/	10YR6/4 (
.564	垣				
奉	K	ナチ	1	ミガキ	ミガキ
靐	垣		ı)		
	外	回転ナデ	ヘラケズ	回転ナデ	回転ナデ
(CIII)	器庫	1.3	6.0	0.6	0.4
()	器	4.6	19.7	4.7	(3.2)
	底 径	Page 1	9.5	6.6	ı
扭	口径	-		13, 4	I
残存率	%	2	80	70	5
1 11	•	搬	長頸壷(瓶)	苯	苯
推		須恵器	須恵器	上師器	土師器
版出土		3 RA049	2 RD141	) RD141	3 RA049
写真図脱	No.	64-246	62-222	62-220	58-188
華図	No.	46- 4	6 -99	8 -99	46- 4

# 表10 遺物観察表 (石製品)

ħ	Ĺ	
担	E .	
損	英	
¥	‡	
		使用痕あり
4	맆	
H	Ħ	北上山地
‡	\$	
K	Ĺ	砂岩
曹	(g)	270.0
(cm)	せ	4.4
曹	匷	4.4
뇄	東は	11.15
# 2		砥石
典十五	田上周伸	RA042
写真図版	No.	61-219
華図	No.	55- 1

# 表11 遺物観察表(鉄製品)

将	至 .	柄の木質あり						
重	© 3	12.0	15.0	40.0	64.0	27.0	10.0	99
(cm)	か	0.65	0.6	0.9	$0.15 \sim 0.45$	1.1	0.6	3.2
曹	聖	1.35	1.3	3,5	ı	4.3	1.2	5.9
挺	世	12.3	(14.7)	13, 25	12.85	4.9	9.2	5.2
#		刀子	鉄鏃	鉄鏃	鎌	餃員	刀子	鉄滓(流状滓)
五十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	E H	54- 5 61-215 RA045	54- 3 61-212 RA045	54- 2 61-213 RA045	54- 1 61-217 RA045	54- 4 61-214 RA046	54- 6 61-216 RA049	54- 7 61-218 RA049
写真図版	No.	61-215	61-212	61-213	61-217	61-214	61-216	61-218
157	No.	54- 5	54- 3	54- 2	54- 1	54- 4	54- 6	54- 7

表12 遺物観察表 (剥片土器) ①

#	<b>严</b>																									
を担	(g)	1.0	1.0	18未満	1.0	1 g未満	5.0	33.0	17.0	8.0	11.0	23.0	37.0	7.0	5.0	2.0	5.0	8.0	3.0	3.0	3.0	3.0	5.0	3.0	2.0	1.0
(cm)	也	man	1	-	1	1	1.	ı	ı	ı		I	l	1				-	man and a second		1			1	ı	ı
当	豐		1	ŀ		1			ı					-	WHITE STATES AND ADDRESS OF THE STATES AND A				ı	-	Page 1	-	ı	1		
共	取	ı		I	au a	-	ame.				-	1		-	-		-		-			***************************************	1	ı	1	ı
	Th 477	口縁部	口縁部	口緣部	口縁部	口緣部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部
阿河	No.	26	27	28	59	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
	<b>=</b>	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	1.0	1.0	0.	1.0	1.0	0.	0.	0.	0.	1.0	1.0	1.0	0.	2.0	堰	堰
か	(g)	45.	16.0	.6	5.	20.0	∞.	∞	7.	6.	ij		2.			T.	2.	2.	.i	-i	Τ.	1.	2.	2.	18未満	18未満
(CIII)	を		l	I	ı	ı	ŀ	I	I	ı	1	I	T T T T T T T T T T T T T T T T T T T	ı	I	1	Ī	1	ĺ	-	1	I	1	I	ı	l
	哩		ı	ı	ı	ı	ı	1	I	ı	1	ı	LA SERVICIO DE LA SERVICIO DEL SERVICIO DE LA SERVICIO DEL SERVICIO DE LA SERVICIO DEL SERVICIO DE LA SERVICIO DE LA SERVICIO DE LA SERVICIO DEL SERVICIO DE LA SERVICIO DEL SERVIC	1	J	I	1	1	I	1	-	1	1	ı	1	-
珙	地	1	ı	Sades	ı	ı	1	-	ı	I	I	1		-	I	-	I	-	I	ı	I	I	1	I		1
			1																							
# #																										
写真 並 供	<u>a</u> II	口縁部	口縁部	口縁部	口緣部	口稼部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口緣部	口縁部

表12 遺物観察表 (剥片土器) ②

凇

響

無 (g)

 $\binom{\operatorname{CIII}}{\operatorname{CIII}}$ 

10

12.0

0.4

19.0

0.5

0.4

6,3

10.0

4.3

0.6

0.5

0.6

(0. 4) (0. 3) (0. 3) (0. 4) (0. 45) (0. 45) (0. 45) (0. 35)

3.4

		10	4	rc	4	22	4	9	4	60	2	60	2	9	33	2	2	2	2		2			2		
	部位		体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	
写真	図	No.	92	7.1	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95 1	96	97	98	
	備表																									
ナ 相	n (5		6.0	3.0	6.0	1.0	2.0	18未満	1.0	1.0	1.0	14.0	1.0	2.0	18未満	7.0	6.0	11.0	3.0	13.0	4.0	4.0	3.0	18.0	18.0	c
(cm)		な	ı	I	I	ı	[	-		I	I	ı	ļ		ı	ı	0.5	9.0	0.4	0.5	0.4	(0.5)	0.5	9.0	0.7	6
	1	盟	1	1	name .	ı	1			ı	ı	ı	I				4.6	4.2	3.9	6.0	4.9	4.0	3.9	5.3	6.8	0
批		10	ı	ı	1	ı				ı	ı	ı			I	I	2.7	5.5	3.0	5.0	3.0	2.9	3.2	6.3	5.8	6 6
	部位		底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体並
	1150	No.	51	52	53	54	55	56	57	58	59	90	61	62	63	64	65	99	67	89	69	70	7.1	72	73	1/4

2.0

表12 遺物観察表(剥片土器)③

世																										
世	(g)	2.0	1.0	1.0	1.0	18未満	1.0	1.0	1.0	2.0	1.0	2.0	1.0	1.0	18未満	1.0	1.0	18未満	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	18未満	1.0	18未識
(cm)	を宣	1	ı	Andrea	I	1	1		ı	-	ı	I	I			Admin.	ATTACK TO THE PARTY OF THE PART	Total Control	and a second	1	-	-				
画	■	2.2	1.6	2.5	2.2	2.6	2.7	2.4	2.1	2.9	2.3	2.8	2.1	2.1	3.2	2.8	2.1	1.7	2.3	1.8	1.4	2.1	2.0	2.0	1.9	1.9
郑	と	3, 5	1.2	2.2	2.5	1.9	2.2	1.6	2.2	2.0	2.2	2.1	1.9	3.1	1.6	1.7	2.1	1.4	2.8	2.6	1.9	1.5	1.6	1.3	1.7	1.3
44	4T	体部	体部	体部	体部	体部	体部	休部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部										
阿阿斯	No.	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150
H H	ţ.																									
担	<b>III</b>																									
		1.0	2.0	2.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1 8 未謝	18未謝	1 8 未謝	1 8 未謝	1 8 未謝	1 8未満	1 8未満	1 8未満	1 8未満	1.0	18米端	1.0	1.0	1 8 未満	1 8未満
(III)								- 1.0	1.0	1.0	1.0	90		90							1.0	50	0	- 1.0		
初	(g)	Τ.	2.	2.	1.	l.i	1.	2.6 — 1.0	1.	2.7 — 1.0	1.9 — 1.0	1 28		1 8			1			П	2.2 — 1.0	20	1.0	2.6 — 1.0	1	1
(cm)	厚さ(8)	0 - 1.	1 - 2.	.2.	4 - 1.	7 - 1.	4 - 1.	6 - 1.	7 - 1.	7 - 1.	9 - 1.	3 - 1 8	2 - 1	1 8	6 - 1	4 - 1	9 - 1	.3 – 1	1 - 1	7 - 1	- 2	- 18	2 - 1.0	6 - 1.	2 - 1	1 - 1
量 (cm)	17. 長さ幅 厚さ(g)	3 3.0 - 1.	8 3.1 - 2.	1 2.8 – 2.	3 2.4 - 1.	1 1.7 - 1.	0 2.4 - 1.	8 2.6 - 1.	1 2.7 - 1.	1 2.7 - 1.	7 1.9 - 1.	5 2.3 - 18	7 2.2 - 1	2.3 — 1 8	6 2.6 - 1	3 2.4 - 1	4 1.9 - 1	8 2.3 - 1	0 3.1 - 1	9 1.7 - 1	1 2.2 -	2.8	4 2.2 - 1.0	8 2.6 - 1.	8 2.2 - 1	3 2.1 - 1

表12 遺物観察表 (剥片土器) ④

भ

鑩

(g) (g)

量 (cm) 鲥

뇄 т

10

땔

赋

位

1 g 未満

1g未満

1

1 8 未満

1

1.6 1.6 1.2 Ξ:

-

1.7

1

18未離

1

I. 1

1

-

I 1

1 1

超	Ê	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部													
国位置	No.	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187													
杵	ſr.								And the second s											The state of the s					Militaria	
推	<b>E</b>														-											
を	(g)	1 g 未満	18未満	1 g未満	1.0	1.0	1.0	1.0	1 g未満	18未満	18末満	1.0	1 8 未離	18未識	18未満	1.0	18未満	18未満	1g未満	1 g未満	1.0	18未識	18未満	18米端	18米端	1 g 未満
(cm)	厚み	ı	ı	ı	ı	1	ı	ı	ı	ı	-	I	ı		1	1	200	1	ı		-	-			ı	1
	馽	1.6	1.3	0.7	2.1	2.2	2.1	1.9	1.9	1.2	2.5	1.8	1.9	1.6	2.4	2.1	2.0	1.1	1.6	1.9	1.3	2.1	1.6	1.6	1.7	1.6
郑	地	1.2	1.6	0.9	1.6	1.9	1.7	2.3	0.7	1.8	1.3	1.2	1.4	0.7	0.9	1.2	1.2	1.3	1.1	1.0	1.4	1.3	1.3	1.1	1.9	1.2
44	뉨																									
類	<u>2</u>	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部
阿阿斯里	No.	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	191	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175

# VI. 調査のまとめ

# 1. 竪穴住居群について

今回の細谷地遺跡(第8次調査)では、2,638㎡の面積を対象に調査をおこなった。その結果、古代に属する竪穴住居15棟、竪穴住居状遺構1棟、土坑17基を検出した。

竪穴住居群は調査区東側で多く検出され群を成している。竪穴住居からみた時期については、形態や出土遺物、大半の竪穴住居埋土で火山灰が検出されていることから、すべて平安時代のものであると考えられる。この火山灰については理化学的な分析により十和田 a 降下火山灰とほぼ特定されており、従来の見解から火山灰降下時期は10世紀初頭頃と考えられる。そのため、埋土中に十和田 a 降下火山灰がみられるこの竪穴住居群は、大半の住居が10世紀初頭には廃絶していたと考えられる。この竪穴住居群の群構造の詳細を考えるために、様々な属性・条件を抽出し、それによって分析をおこないたい。

15棟の竪穴住居群を巨視的に概観すると、平面分布は東側で密度が高く、西側で比較的分散傾向にある。 一方、南北においては北側で密度が高く、南に目を移すにしたがって密度が希薄になる傾向にある。

各竪穴住居の主軸方向は一定ではなく、カマドの設置方位についても全く一定ではない。よって、この属性は現段階では群構造の手掛かりとはなりえないと判断される。

しかし、群中の竪穴住居間には切り合い関係が認められるものがあり、これらについては各々の相対的な 先後関係を導き出すことが可能である。切り合い関係が認められる竪穴住居は以下の通りである。

- ・結果 1 · · · RA035 (古) → (新) RA034
- ・結果 2 · · · RA042 (古) → (新) RA046
- ・結果 3 · · · RA043 (古) → (新) RA050
- ・結果 4 ・・・RA044 (古) → (新) RA042
- ・結果 5 · · · RA046 (古) → (新) RA045

さらに、結果2・4・5より以下の時間的順序を導き出すことが可能である。

・結果 6 ・・・RA044 (古) → (新) RA042 (古) → (新) RA046 (古) → (新) RA045

次に竪穴住居においてみられる十和田 a 降下火山灰から竪穴住居の相対的な時間的先後関係を考えてみたい。なお、この火山灰については、いずれも埋土中にブロック状に存在する 2 次的あるいは 3 次的な堆積を示す火山灰が多く、降下時の純粋な堆積であるものは少ないと考えられるため決定的な証拠になり得ないことを断っておく。また、検出した火山灰は調査中に肉眼で観察できたものである。

火山灰が検出された層位によって分類すると以下の通りである。

- ・火山灰検出層位1 (埋土下位)・・・RA034・RA047
- ・火山灰検出層位 2 (埋土上位)・・・RA035・RA045・RA046
- ・火山灰検出層位3 (埋土中位)・・・RA041・RA051

以上の3事例から導き出すことができる相対的な先後関係を示す結果は以下の通りである。

・結果 7 ・・・ [RA034・RA047] (火山灰古) → [RA041・RA051] (火山灰中) → [RA035・RA045・RA046] (火山灰新)

このような火山灰検出層位の結果と先の切り合い関係からの結果の双方で登場する竪穴住居 4 棟を抽出し、それぞれの結果を示すと以下の通りである。なお、( ) 内は火山灰層位での結果、 $\Gamma \to L$  は切り合い関係での結果である。



第67図 細谷地遺跡古代遺構分布

- ・結果8・・・RA034 (火山灰古) → (火山灰新) RA035
- ・結果 9 · · · RA046 (火山灰新) → (火山灰新) RA045

これら結果8・9より双方の時間的先後関係に一応矛盾はない。さらに、この結果8・9を組み合わせることによって以下のような新たな結果を導き出すことが可能である。

・結果10・・・RA034 (古)  $\rightarrow$  {RA035 (新)}  $\rightarrow$ RA046 (新)  $\rightarrow$  {RA035 (新)}  $\rightarrow$ RA045 (新)  $\rightarrow$  {RA035 (新)} さらに、切り合い関係での結果 6 より、(古) RA044 $\rightarrow$ RA042 $\rightarrow$ RA046 $\rightarrow$ RA045 (新) の順序を示した。このうち火山灰の検出されていないRA044とRA042は、火山灰降下時にはすでに埋没していた、あるいは火山灰降下以後に築造されたかのどちらかが考えられる。しかし、RA034が火山灰古段階である結果10を考慮に入れると、RA044とRA042は火山灰降下時にはすでに埋没していた、と考えることができる。すなわち、RA044とRA042は必然的に埋土下位で火山灰検出のRA034より古い段階に位置付けられ、RA044とRA042の後にRA034以降が続くと考えられる。

・結 果 $11 \cdot \cdot \cdot$ (古) [RA044 · RA042]  $\rightarrow$  [RA034 · RA047]  $\rightarrow$  [RA041 · RA051]  $\rightarrow$  (RA035)  $\rightarrow$  RA046 $\rightarrow$  (RA035)  $\rightarrow$ RA045 $\rightarrow$  (RA035) (新)

表13 遺構間土器接合事例一覧

図版	遺物	部位	出土遺構	出土状況	遺構間距離	切り合い
		体部	RA042	床面直上・埋土・土抗(P1・P3)埋土	RA45-42間 3.2m	
33-28	須恵器長頸壷	口縁部・体部・底部付近	RA045	検出・埋土・RA46との重複部分		RA045 • RA046
		体部	RA046	埋土	RA45-46間 0m	
32- 4	土師器甕	体部	RA042	床面直上	3. 2m	なし
32- 4	上即吞瓮	口縁部・体部	RA045	埋土・煙道・煙出し・カマド燃焼部	J. 2111	/a U
32- 8	土師器坏	底部	RA042	土坑(P 1)埋土	3. 2m	なし
34- 0	工帥器小	口縁部・体部	RA045	北西部・北部埋土	5. 2111	7& U
32- 6	土師器甕	口縁部	RA042	土抗(P1)埋土	3. 2m	なし
52- 0	上即吞瓮	口縁部・体部・底部	RA045	北西部・北東部・南東部埋土	J. 2111	, a U
33-34	土師器甕	体部	RA042	南部埋土・土抗(P2)埋土	3. 2m	なし
55-54	上即奋瓮	口縁部・体部・底部	RA045	埋土・煙出し・カマド燃焼部	J. 2111	74.0
43- 2	T 92 66 42	体部	RA040	検出	6. 0m	なし
45 <sup>-</sup> Z	土師器坏	口縁部・体部・底部	RA048	北東部・東部埋土・床面直上	0. 0111	74.0
43-12	上。在二月月至梅	体部	RA044	埋土	42. 7m	なし
45-12	土師器甕	口縁部・体部	RA048	埋土下位・床面直上・カマド燃焼部・カマド両ソデ内	42. 1111	74.0
37- 4	土師器坏	底部	RA041	床面直上	4. 9m	なし
51- 4	上削鉛小	口縁部・体部・底部	RA046	北西部・北部埋土・カマド内	4. 3111	73.0
23- 1	土師器坏	口縁部・体部・底部	RA042	南東部埋土	3. 2m	なし
25- 1	工邮码人	体部・底部の一部	RA045	北西部埋土	0, 2111	
27- 6	土師器甕	口縁部・体部・底部	RA043	カマド?	0m	RA043 • RA050
21- 0	上即奋宽	底部付近	RA050	埋土	OIII	Kh040 Kh000
49- 4	ᅶᅋᄜᆄ	体部	RA045	北東埋土	4. 0m	なし
49- 4	土師器埦	底部	RA050	水路部分埋土	4. 0111	74.0
29- 2	石市四村	口縁部・体部・底部	RA044	埋土・検出・付近	33. 2m	なし
Z9- Z	須恵器坏	体部	RA047	北東埋土	55, 2111	, a U
27- 1	須恵器坏	口縁部・体部	RA043	東側埋土	0m	RA043 • RA050
21-1	<b>須思奋</b> 华	口縁部・体部	RA050	床面	VIII	MOUAN - MAUNI

表14 土器分類一覧

使 用 形 態	焼 成	器種	器 形	調整				
				ミガキ・黒化処理(内面)				
			高台なし	ミガキ・黒化処理(内外面)				
		坏		ミガキなし(回転ナデ)				
44. II关 IIX 台6	酸化焔	<b>小</b>		ミガキ・黒化処理(内面)				
供膳形態			古ムけ	ミガキ・黒化処理(内外面)				
			高台付	ミガキなし(回転ナデ)				
		埦		ミガキ・黒化処理(内外面)				
	還元焔	坏	高台なし	回転ナデ(内外面)				
			大					
			中	ロクロによる調整なし				
煮沸形態	酸化焰	獲	小					
<b>点</b>	自交1亿为日		大	─ ロクロによる回転ナデ				
			中	一 ログロによる回転ケケ				
		堝		ロクロによる回転ナデ				
		獲						
貯蔵形態	還元焔	瓶	長頸瓶					
只」咸 775 思		加	小 瓶					
	酸化焔	鉢		ミガキ・黒化処理(内面)				

また、RA049は廃絶・埋没後、直上に畑状遺構が作られている。この畑状遺構畝間に火山灰が堆積していることからRA049は火山灰降下時には完全に埋没していたと考えられる。よって、RA049は少なくとも10世紀初頭には廃絶していたと思われる。

不備な点はあるが、以上が遺構からみた竪穴住居群のおよその時間的先後関係である。

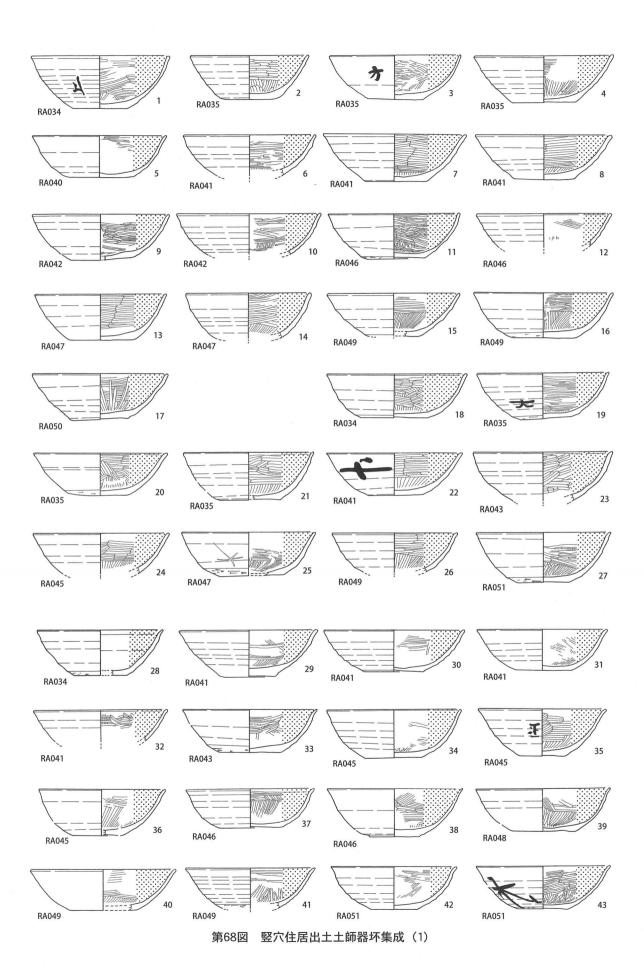
# 2. 竪穴住居出土遺物について

前節では、竪穴住居群を遺構から分析をおこなったが、本節では竪穴住居出土の土器類から分析をおこないたい。まず、大きな前提となるのは、前述した通りこの集落が9世紀~10世紀初頭までの時間幅の中に位置しているという点である。

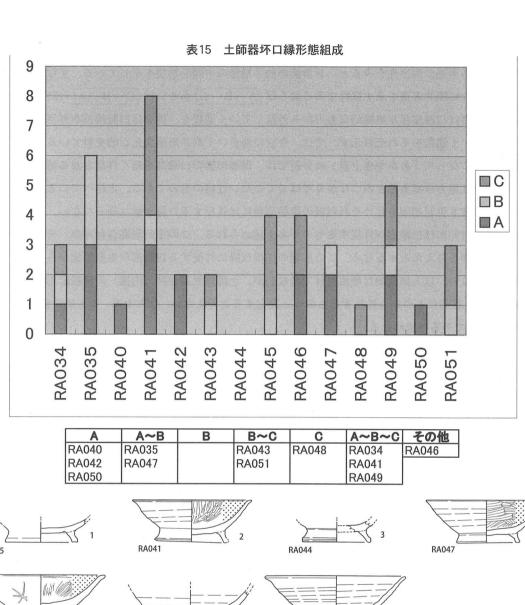
今回出土した土器を主に使用形態、焼成、調整、器形などの諸属性から大きく分類すると表13の通りになる。この中から最も普遍的にみられ、出土量の多いものである土師器坏(内黒)をさらに細分し、詳細な年代決定の材料としたいと考える。それにより、竪穴住居の変遷を追求し、さらに今後当該期における土器編年の足がかりとしたい。抽出した土師器坏(内黒)を細分する基準として注目した属性は、口縁端部の微細な形態差である。当然ながら、口縁部に着眼点を置くため、口縁部の良好に遺存する資料に限定されることはあらかじめ断っておく。これにより抽出できた資料は、全部で43点である。43点の土師器無高台坏(内黒)を口縁端部の形態差により3分類に細分可能である。分類基準は以下の通りである。

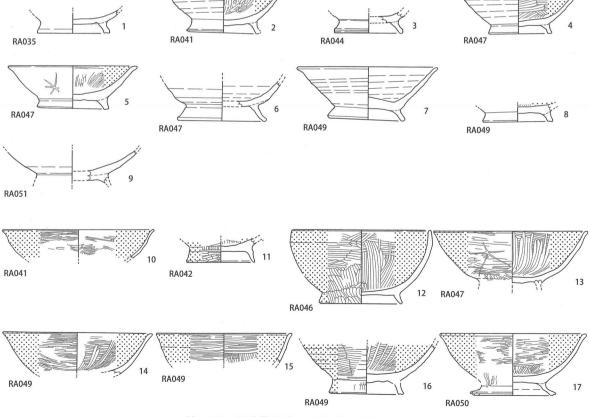
- ・口縁端部が直線的なもの・・・・・A形態(第70図1~17)
- ・口縁端部が外反傾向にあるもの・・・B形態(第70図18~27)

(内面は外反気味であるが外面は直線的)



-116-





第69図 竪穴住居出土土師器坏集成(2)

・口縁端部が外反するもの・・・・・C形態(第70図28~43)

 $A \cdot B \cdot C$  の各形態の関連性をみると、 B 形態が他 2 形態の中間的形態を示している。すなわち、この 3 形態が、もし仮に時間的変遷を示す属性であるならば  $A \rightarrow B \rightarrow C$  あるいは  $C \rightarrow B \rightarrow A$  の時間的な変遷が想定される。前者は口縁端部が直線的なものから外反していく過程を、後者は口縁端部が外反するものから直線的になっていく過程をそれぞれ示す。 では、今回の場合いずれの形態変化が的を射ているのであろうか。小笠原好彦がおこなった「あかやき土器」の分析では、供膳形態の口縁部を短く外反させる特徴について、「それ以前の東北地方の須恵器とのつながりではでてこない性格のものである。」と述べている。この指摘は重要であり、事実 9 世紀初頭を含めそれ以前の供膳形態には外反する口縁形態はみられない。これに関連して、土師器高台付坏には口縁部が外反するものが多く認められる。この土師器高台付坏が、その他の供膳形態に何らかの影響を与えたとするなら、この器種の出現以降に外反する口縁部の供膳形態がみられるようになるのかもしれない。以上積極的な理由付けではないが、土師器無高台坏(内黒)の口縁部形態の時間的変遷は、基本的に直線的なものから外反するものへと変化すると考えたい。すなわち、3 形態の変遷は  $A \rightarrow B$   $\rightarrow C$  の順が妥当であると思われる。

この仮説をもとに、竪穴住居出土土師器坏(内黒)を竪穴住居毎にA・B・C各形態に分類した。その結果、A形態は17個体で、A形態のみ出土している竪穴住居はRA040・RA042・RA050である。次にB形態は10個体で、A・B形態が出土している竪穴住居はRA035・RA047で、B形態のみが出土している竪穴住居はみられない。最後にC形態は16個体で、B・C形態が出土している竪穴住居はRA043・RA051・RA045、C形態のみが出土している竪穴住居はRA048である。なお、A・B・Cの3形態とも出土している竪穴住居はRA034・RA041・RA049であり、A・C形態出土の竪穴住居はRA046である。

これを時間的にまとめると、以下の通りである。なお、先に掲げた通り土師器高台付坏の出現が土師器無高台坏(内黒)の口縁部が外反へ向かう契機となるならば、今回出土した土師器高台付坏は、A形態単独期以降の竪穴住居から出土するはずである。この点について検証すると、A形態単独の出土がみられるRA040・RA042・RA050からは土師器高台付坏の出土がみられない点で矛盾はない。

· A期 (RA040 · RA042 · RA050)

 $\downarrow$ 

· AB期 (RA035 · RA047)

1

・BC期(RA043・RA051・RA045)・BC期以降(RA034・RA041・RA049・RA046)

1

· C期 (RA048)

これらの結果と前節の遺構から導き出された結果とを重ねると、先後関係逆転のような矛盾が生じる。

- ・矛盾 1 ・・・[遺構] RA051→RA035/ [遺物] RA035→RA051
- ・矛盾 2 ・・・[遺構] RA034→RA035/ [遺物] RA035→RA034

いずれの矛盾もRA034が他の住居と先後関係において逆転している。しかし、その他に矛盾が生じていないことを考えるとRA035の帰属時期に誤りがあるとせざるを得ない。それならば、RA035の何をどのように修正すべきなのであろうか。矛盾2は直接的な切り合い関係が認められる住居同士であり、特に切り合い関係は今回の調査区はもちろんのこと過年度調査区内でも明らかにされている。よって、遺構から得られた結果を無視するわけにはいかないと考えられる。当然、遺物は新旧が乱れて出土することもあり得るし、特に

RA034は今回検出した竪穴住居の中で最大の規模であったため、含まれる遺物に他の住居より若干の時間幅を持たせても良いのかもしれない。このようなことから矛盾2については[遺構]RA034→RA035を重視したい。よって、RA035は今回偶然C形態が出土しなかったとみるべきであろう。つまり、AB期ではなく、BC期以降に帰属するものと修正しても良さそうである。修正案は以下の通りである。

· A期 (RA040 · RA042 · RA050)

 $\downarrow$ 

· AB期 (RA047)

1

- ・BC期(RA043・RA051・RA045)・BC期以降(RA034・RA035・RA041・RA049・RA046)
- · C期 (RA048)

先の矛盾とは逆に、遺構の結果で先後関係が明確にならなかったものに遺物の結果を合わせる事により、 新たな結果を加えることができる組み合わせもある。このような関係は以下の通りである。

・新結果1・・・RA047 (AB期)→RA034 (BC期以降)

以上のように前節から本節を通じて竪穴住居群の変遷を検証した。これによって、想定される変遷は以下の 通りである。

```
(I期) [RA040・RA042・RA044・RA050]
↓
(Ⅲ期) [RA034・RA047]
↓
(Ⅲ期) [RA041・RA043・RA051]
↓
(Ⅳ期) [RA049→ (RA035) → RA046→RA045・(RA048)]
```

やや補足的ではあるが、従来の研究で当該期は時間を経るに従って、いわゆる「あかやき土器」の組成比率が高くなる傾向にあるとされている。今回の調査での竪穴住居出土坏の「あかやき土器」組成比率は  $8\sim83\%$ まで大きく開きがあることがわかった。ほとんどの住居で坏全体の $30\sim40\%$ があかやき土器であるが、RA041が 8%、RA045が80%、RA048が83%と傑出している。この結果は80%を超える 2 つの住居は先述した通り、IV期の終わりに位置付けられるため従来の研究に合致する。しかし、8%とかなり低い率のRA041は解釈に苦慮するところである。

# 3. 出土遺物からみた集落の性格

ここでは集落の性格について言及することのできる出土遺物について述べたい。RA046からは鉸具が1点出土した。県内での鉸具の出土例は決して多くなく、明らかになっていない遺物の一つである。今回出土した鉸具は、遺存状況が良好でほとんど破損していないと思われる。この鉸具は馬具に用いられた金具である可能性も否定できないが、金具部分の形状が方形を呈すること、竪穴住居からの出土であることなどから今回出土した鉸具は腰帯に装着される装身具の帯金具であると考えたい。さらに、このRA046はこのような希少な鉸具を保有し、床面に柱穴を持つ堅固な上屋構造が推定されることから他の住居よりやや性格の異なる可能性が考えられる。この鉸具のついた腰帯を使う服装は当時の正装であると考えられ、正装で参加する公

の場に顔を出す機会のあった人物の所持品だったのであろうか。

次に、今回の調査で多くの土器が出土したことは述べたが、周辺諸集落より墨書および刻書土器が多く出土した。書かれた文字は、過年度調査分と合わせると特に「大」という文字が突出している。また、表16にあるように細谷地遺跡に隣接する飯岡才川遺跡でも同様の傾向が認められる。しかし、飯岡才川遺跡の北に位置する台太郎遺跡では、「木」という文字が比較的多い傾向にある。このように一集落で同一の文字が多く出土する例が認められることから、この墨書・刻書される文字が集落固有のシンボリックな意味合いを保持している可能性が考えられる。もし、このような文字の使い分けがなされていたとするならば、今回の細谷地遺跡の調査で1点出土した「木」という墨書土器は、台太郎遺跡の集落との交流を示すのではないだろうか。

また、表にある通り文字が書かれる器種は坏類が圧倒的に多く、中でも黒化処理された土師器に集中する傾向がある。何らかの理由で黒化処理された土師器坏には特別な意味合いがあったのかもしれない。

墨書と刻書の両者が存在する以上、両者の間に何らかの差があったと考えられる。両者の差は見え方に起因するところが多いと考えられる。なぜならば、今回の出土事例をみても明らかなように、内面のみ黒化処理されている土器には墨書、内外面両面が黒化処理された土器については刻書というように文字を書く器面の違いによって使い分けがなされている。すなわち、文字を書く行為そのもの以上に、文字を「見せる」あるいは「見る」ことに重点を置いていたものとみられる。刻書は、黒地に黒字では見えないために選択された視覚的な狙いを含んだ施字方法だったのであろう。今後、周辺地域および他地域を含めた文字集成をおこない出土傾向を掴む必要がある。

最後に、籾殻の圧痕が明瞭にみられる土師器高台付坏・須恵器小瓶・土師器耳皿・底部網代痕土師器甕など周辺集落ではあまり多くみられない珍しい出土遺物も存在するが、今後の出土事例の増加と既存資料の整理をおこなう必要があり、現状では今後の検討課題としたい。

# 4. 遺構と遺物からみた生産活動

農業生産に伴う遺構として畠状遺構を2箇所で検出した。また、この畠状遺構に伴うと考えられる杭列も 検出した。

畠状遺構は、遺構の名称を異にするが岩手県内で近年検出例が増加している遺構である。県内における古代に属する同種の遺構は、二戸市大向Ⅱ遺跡・平泉町本町Ⅱ遺跡など管見に触れる限り26例を数え、盛岡市内では、堰根遺跡の検出例を含め今回の細谷地遺跡が2例目である。

今回検出した畑状遺構で生産された作物については最大の関心事であるが、考古学的には特定が困難な状況にある。しかし、自然科学的分析結果から類推可能である。

今回の調査では、畠状遺構に伴う土壌を採取し自然科学的な分析をおこなった。土壌の分析は、栽培植物の検証をおこなうため植物珪酸体分析を実施した。その結果、イネ属やキビ属、オオムギ族の短細胞珪酸体、機動珪酸体を検出した。分析結果およびその結果に基づいた検証はV章で詳しく述べられており、畠状遺構3・4では陸稲栽培がおこなわれていた可能性が指摘されている。しかし、畠状遺構を覆う表土層でも多くの植物珪酸体が検出された。すなわち、少なくとも古代以降の堆積土である表土中に多くの珪酸体が検出されたことは、畝間や畝で検出された珪酸体も後世の混入である可能性も考えられる。よって、本報告では細谷地遺跡の畠状遺構において五穀(特にイネやオオムギ)が栽培されていた可能性が考えられるものの、後世の栽培種が混入したという可能性も残るという慎重な立場を取らざるを得ない。

表16 飯岡才川・細谷地両遺跡出土墨書および刻書土器一覧

遺跡名・文献	種別	訳解	器種	部位	面	出土遺構
飯岡才川遺跡(第3次)	刻	大	土師器坏(内黒)	体部	外	RA01
『岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財調査報告書第	刻	+	土師器坏(内黒)	底部	外	RA01
393集』	刻	八八	土師器高台付坏(内黒)	体部	外	RA01
	墨	本	土師器坏(内黒)	体部	外	RA05
	墨	本?	土師器坏(内黒)	底部	外	RA06
細谷地遺跡(第4・5次)	刻	不明	須恵器坏	底部	外	RA07
『岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財調査報告書第	刻	不明	土師器坏	体部	外	RA01
414集』	刻	+	土師器坏(内黒)	体部	外	RA02
	刻	+	土師器坏	体部	外	RA02
	刻	П	土師器坏	体部	外	RA10
	刻	大	土師器高台付坏(両黒)	体部	外	RA11
	刻	十?	土師器坏	体部	外	RA14
	刻	不明	土師器耳皿	底部	内	RA15
	刻	不明	土師器坏	体部	外	RA17
	刻	大	土師器高台付坏(両黒)	体部	外	RA20
	刻	+	土師器坏	体部	外	RA22
	刻	+	土師器坏	体部	外	RA28
	刻	大	土師器坏(内黒)	体部	外	RA32
	刻	不明	土師器高台付坏(内黒)	体部	外	RD21

遺跡名・文献	種別	訳解	器種	部位	面	出土遺構
細谷地遺跡(第8次)本書	墨	上	土師器坏(内黒)	体部	外	RA034
	墨	村?	土師器坏(内黒)	体部	外	RA035
	墨	大?	土師器坏(内黒)	体部	外	RA035
	墨	方	土師器坏(内黒)	体部	外	RA035
	墨	不明	土師器坏(内黒)	体部	外	RA041
	墨	不明	土師器坏	体部	外	RA042
	刻	不明	土師器甕	体部	外	RA042
	墨	不明	土師器坏	体部	外	RA043
	墨	不明	土師器坏	体部	外	RA044
	墨	玉?	土師器坏(内黒)	体部	外	RA045
	刻	大?	土師器高台付坏(内黒)	体部	外	RA047
	刻	大	土師器坏(内黒)	体部	外	RA047
	墨	祝?	土師器高台付坏(内黒)	体部	外	RA047
	墨	+	須恵器坏	底部	外	RA047
	刻	大	土師器埦(両黒)	体部	外	RA047
	墨	大	土師器坏(内黒)	体部	外	RA047
	墨	木?	土師器坏(内黒)	体部	外	RA047
	墨	本?	土師器坏(内黒)	体部	外	RA049
	墨	木	土師器坏(内黒)	体部	外	RA051

さて、古代の畠について書かれた文献資料が存在することはあまり知られていない。ここで紹介する『延喜内膳式』によると宮中で食される作物は、直轄経営される畠で作られ、作物の種類・作業内容・作業人数等が示されている。記述中には、24種類の作物が挙げられており、そのうち13種において畝立て作業が盛り込まれている。このことから畝を形成すべき作物とその必要のない作物とに分けられるようである。この記述より調査区内において畝が検出できなかった場所も畝立てを不要とする耕作地であった可能性もある。

今回細谷地遺跡において検出した畠状遺構のその他の特徴は以下に掲げる通りである。

- ①居住域に著しく近在し、竪穴住居と時期的関係が比較的明らかであること。
- ②2種の畝間規模の異なる畠状遺構が共存すること。
- ③南端に杭列が伴うと考えられること。

居住域の中心施設である竪穴住居と近在することから、当地域における平安時代集落は、農業生産域が比較的居住域に隣接していた可能性が考えられる。もちろん、細谷地遺跡が特殊な事例である可能性も考慮に入れる必要はあるが、水田域以外の耕作地は居住域付近で営まれていたのではないだろうか。

次に、異なる規模の畝群が存在することは何に起因するのであろう。西側に立地する畠状遺構 1 ・ 2 の畝群は、畝の幅が平均すると約38cm、一方東側に立地する畠状遺構 3・ 4 の畝群は、畝の幅が平均すると約19cmと 1・ 2 の半分である。考えられるのは、両者の時間差の存在、両者の利用法の差、あるいは両者の削平の度合いの差などが考えられる。

まず、畝間の火山灰堆積状況から、ほぼ同時に両畝群が併存していた可能性が高く、時間差はないものと考えられる。次に、土壌の分析から得た結果の通り、両者の検出植物珪酸体に大きな差が認められず、両者の利用法についても栽培品種は同じである可能性が高い。最後に、削平の問題である。検出面の標高は、畝幅の小さい畠状遺構1・2の方が約10cm程度低い。よって、本来は畑状遺構3・4と同じ規模を有していた畠状遺構1・2が、畝部大半を後世の削平により失った結果、頂部より幅広の畝裾部しか遺存していない状況にあったと考えられる。すなわち、両畝群は同時期に存在し、さらに一連の畝群であった可能性が高い。両畝群間に存在する空白地は攪乱著しく、また削平も受けていた地点でもあり、畝間の検出が困難であったため検出できなかったと思われる。今となってはこのことについて、調査担当者の不甲斐なさを反省する次第である。

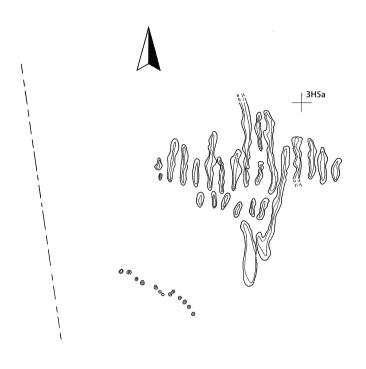
畠状遺構 1 ・ 2 の南で東西に連なる杭列を検出した。杭列は、検出面において十和田 a 降下火山灰が円形の小さなプランとして確認できた。断面形状は下方に向かうほど尖った逆三角形を呈しており、先端を人工的に加工された丸木の杭が地面に突き刺さされていたと判断できる。

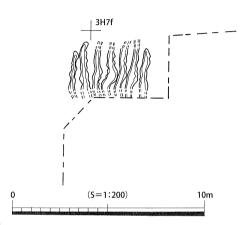
杭列の時期は、すべての杭跡埋土上層に十和田a降下火山灰が存在することから畠状遺構とほぼ同時期であることは明らかであり、さらに、杭同士は列をなしてそれぞれ同時に存在したことも明らかである。

この杭列の用途・性格であるが、県内の耕作遺構で検出された例はなく想定が困難である。したがって、 今回の事例においてのみ想定可能な用途および性格を示したい。

最初に、土地区画を示すための杭列という観点から可能性について探っていきたい。

土地の平面的な区画を示す杭列の想定できる機能は、何らかの境界線を表すということである。この機能は、遺構の平面的な配置からも十分考えられる。すなわち、畠状遺構が杭列よりも南に伸びておらず、杭列より南には遺構がみられない。一見蓋然性が高いように思えるが、このような畠の境界を示す杭列が農業経営上必要なのであろうかという疑問がある。この杭列より南側に竪穴住居などの遺構が広がるのであれば考えられるかもしれないが、遺構はみられない。性格を異にするものと畠との境界ならば、作畝し畝が途切れ





第70図 畠状遺構および杭列

れば、それをもって境界と見なして事足りるように思われる。さらに、畠状遺構との詳細な時間的観点からすると、杭跡埋土上層=畠状遺構畝間埋土下層という時間的な並行関係が考えられる。丸木の杭は故意に抜けたか抜かれたか、あるいは自然に朽ちたか不明であるが、少なくとも先の火山灰は、丸木の杭そのものがすでに失われてしまった後に堆積したと考えられる。よって、畠状遺構が畠として機能していた時には、すでに杭が地上から姿を消していたことになり、耕作時の境界として用いられたとは考えにくい。もし、境界を示す杭列だったとしても、畑状遺構に先行して設定された境界線であると考えた方が調査結果に即する。

以上の理由より、推定の域を脱しないが、この杭列は畠を作る以前に可耕地の南限の境界線を示したものだったのではないだろうか。しかし、先程述べたように境界線の設定については耕作そのものには、さほど必要性が感じられないことから、何らかの理由で可耕地の南限を定める必要性があったと思われる。この必要性の背景には農業経営そのものではなく、政治的な境界線あるいは祭祀的境界線などがあったのかもしれない。

補足的であるが、農業生産に関連する遺物としては鉄鎌が竪穴住居から1点出土している。この鉄鎌は収穫などの

表17 岩手県内耕作遺構集成(畠)

No.	遺跡名		所在地
1	皀角子久保 VI 遺	跡	軽 米 町
2	コアスカ館	跡	浄 法 寺 町
3	大向上平遺	跡	二戸市
4	米 沢 遺	跡	二戸市
5	米 沢 遺	跡	二戸市
6	門松遺	跡	二戸市
7	浅 石 遺	跡	二戸市
8	上 台 遺	跡	二戸市
9	大 向 Ⅱ 遺	跡	二戸市
10	上鬼柳IV遺	跡	北上市
11	岩崎台地遺跡	群	北上市
12	中 林 遺	跡	水沢市
13	中半入遺	跡	水 沢 市
14	白 済	寺	水 沢 市
15	岩 谷 堂 城	跡	江 刺 市
16	後 中 野 遺	跡	江 刺 市
17	宮地Ⅱ遺	跡	江 刺 市
18	新 川 Ⅲ 遺	跡	江 刺 市
19	下 醍 醐 遺	跡	江 刺 市
20	愛 宕 林 遺	跡	江 刺 市
21	宮 地 Ⅲ A 遺	跡	江 刺 市
22	本 町 Ⅱ 遺	跡	平 泉 町
23	竜ヶ坂遺	跡	平 泉 町
24	古 戸 前 遺	跡	大 東 町
25	河崎の柵擬定	地	川崎村
26	堰 根 遺	跡	盛岡市

作業に用いられたのであろう。

農業生産以では、土器生産に伴う遺構を検出した。3基検出した焼土坑は、土坑壁面および底面が被熱しており、土坑内で何かを燃焼したと考えられる。同様に、過年度調査区でも多くの焼土坑が検出されている。このような遺構の性格として想定できるのが、炭焼き窯・火葬墓あるいは火葬遺構・製鉄関連遺構など多く挙げられる。

過年度の調査報告書では土器焼成遺構である可能性が指摘されているが、決定的な証拠を持たないために 慎重な論調で留めている。しかし、今回の調査では土器焼成時に剥離した未製品の土師器甕片を多く出土し た土器廃棄土坑を1基検出した。この土坑の存在により、これら焼土坑は土器焼成遺構である可能性がこれ まで以上に現実味を帯びてきた。この土器焼成に関しては、別に機会を設けて考察したいと考える。

これまで、盛南開発に伴う発掘調査では古代に属する多くの竪穴住居が確認されてきた。そして、集落の復原や集落のあり方について様々な視点から論じられてきた。しかし、今回の細谷地遺跡では初めて集落内での生産活動という側面に言及できる調査成果を提示することができた。古代においては、専業的生産活動と非専業的生産活動の2者が存在する。岩手県における前者は、宮古市島田Ⅱ遺跡のような鉄(製品)製産専業集落、江刺市瀬谷子窯跡群、紫波町杉の上遺跡のような窯業生産専業集落である。しかし、後者は、県内ではあまり多くみつかっていない。今回報告した細谷地遺跡のような集落が後者であると考えられる。つまり、細谷地遺跡は、農業生産と土器生産の両方がおこなわれていた集落遺跡である。

通常、農業生産には農繁期と農閑期が必ず存在する。この農繁期に農業生産、農閑期に土器生産がおこなわれていたのかもしれない。また、明確な根拠にはなり得ないが、今回出土した籾殻の圧痕が残る土器は、如何にもこの集落での生産活動の両輪を象徴するような遺物である。

### 5. 総 括

本報告書で収録した細谷地遺跡では、遺構・遺物から多くの成果を得ることができた。 9 世紀半ば~10世紀初頭に営まれた平安時代集落の在り方が明らかになった。

居住域では竪穴住居群を検出した。竪穴住居におけるカマドの設置方位は、東西南北の四方に分散し、規則性もみられず、時期決定の良好な判断材料とはならなかった。そのため、竪穴住居の重複関係や埋土中の火山灰層位を基に可能な限り時期的変遷を考えた。また、それに対し、出土した土器特に土師器坏を用いて予察的に型式編年へ向けた属性の抽出とその検証をおこなった。これに関しては、ノイズの含まれるようなデータを用いた箇所もあったが、この時期の時期的傾向を概ね掴むことができた。しかし、整備不良の感が否めないため、周辺集落の資料を早急に整理することが必要である。また、竪穴住居群の変遷は住居の存続年数や埋没速度、土器の耐用年数や混入遺物などをあまり考慮していないため必ずしも正しいとは限らないであろう。さらに、過年度調査された細谷地遺跡 4・5次の成果や隣接する飯岡才川遺跡・向中野館跡などの成果を本報告書に十分反映できなかった。しかし、今回の検証や属性の抽出作業が、平安時代土器型式の細分と様式の設定をおこなうための一助となればと願う次第である。

また、この細谷地遺跡は出土した鉸具などの遺物から周辺集落よりやや優位な立場にある集落であることが想定できる。当地域において政治的に一定の権限を有していた人物が集落内に存在した可能性が考えられる。

さらに、この細谷地遺跡では2種類もの生産活動の痕跡を確認することができた。一つは農業生産、もう 一つは土器生産である。農業生産は畑状遺構が古代の畠であると想定される。栽培作物の同定は困難である が、五穀を中心とした主食級の作物であったと思われる。また、畠状遺構の南側で杭列を検出し、耕作地とその他の土地に政治的あるいは祭祀的な境界線が存在する可能性も示すことができた。土器生産では、集落内において土師器が焼成されていたことが明らかになった。被熱した土坑の用途・性格について選択肢が広がったとともに、土器焼成に関する遺構の認定に役立つものと考える。

いずれにせよ、古代における両生産遺構が今後増加することを期待したい。

志波城というこの地域の政治的な中心施設が設置され、徳丹城にその機能を移した後の集落である細谷地遺跡はこのような政治体制の中でどのような役割を演じていたのであろうか。現在、いわゆる「盛南開発」という大規模な開発事業が展開されている。この事業に伴う発掘調査は、盛岡市はもちろん岩手県の古代集落を解明する上で非常に重要な責務を担っている。今後も資料は増加するであろうが、臆せず調査および整理に臨まなければなるまい。

# VII. 考 察

平安時代における土師器生産 -細谷地遺跡の発掘調査成果から-

## 1. はじめに

今回、調査した細谷地遺跡は、平安時代の一般的な集落である。これまで周辺域の調査でも多くの平安時代集落が確認されており、その様子も少しずつ明らかになっている。このような集落の発掘調査がなされると最も多く、普遍的に出土する遺物が土器である。調査の進展に伴い、この大量に得られる土器の年代観、使用形態などにおいて検討や考察がなされてきた。しかし、土器の生産体制については触れることが難しい。平安時代、盛岡市域を含む周辺では、どのような人々がどのような場所でどのように土器を生産していたのかほとんど未解明のままでる。特に、土師器の生産については、まったく未解明と言っても過言ではない。この最大の要因は、大規模な窯業施設で生産される須恵器と異なり、土師器の生産遺構というものが検出される例が極めて少ないことが挙げられる。もし仮に、生産遺構を検出していたとしても、それと認定するためには多くの条件を満たす必要となり、調査担当者が認定することを躊躇するというのが現状である。

「土器を作る」・・・簡単に一言で表現できる事柄だが、その作業過程と作業内容は細かく、そして多岐に渡る。粘土の採取から始まり焼成に至るまでいくつもの工程を経て土器は作られ、そして人々の手によって消費される。土器生産とは、このいくつもの工程すべてであり生活に直接寄与する。

現代のような大量生産、大量消費の時代にあっても「ものを作る」という作業は骨が折れるものである。ましてや、現代のように様々な技術が確立していない古代においては言うまでもない。しかし、現代に生きる我々は、平安時代の人々の「土器を作る」苦労はなかなか想像できない。このように「土器を作る」という苦労を我々が想像できないのは、先述した通り土器生産体制について充分に解明されていないからではないだろうか。特に古代東北地方の土師器生産は不明な点が多く課題が山積している状況にある。

本稿では、この土師器生産について考古資料から予察を含むいくつかの考えを示したいと思う。これは本書で発掘調査の成果を報告した細谷地遺跡が土器生産体制について少なからずヒントを提示してくれる数少ない貴重な遺跡であると評価できるからである。

# 2. 剥離した土器片とRD140土坑

今回、細谷地遺跡の調査で検出したRD140土坑は、埋土中から多量の土器片が出土した土坑である。出土した土器片は通常の土器片とは異なり、187片すべてがチップ状に剥離したものであった。これらの土器片については、「破裂剥片」、「チップ状土器片」など様々な呼称が存在するが、現段階で定まった用語が存在していない。よって、本稿では便宜的に「剥片土器」と呼ぶこととする。この剥片土器のある種変わった特徴は、以下の通りである。

出土した剥片土器はすべて、破断面を有する剥片状の破片である。大小ある剥離面は、概ね剥片の上下両方において認められる。剥離角度は器壁断面において鋭角で、斜め上から斜め下へ向けて規則的に剥離している。つまり、断面の形状が平行四辺形にある。器表面でみると剥片上部は内面剥離、下部は外面剥離の関係にある。また、通常の破断面と異なり剥離面の焼成度合いは非常に良好である。

剥片土器器表面は、内外面ともに調整をおこなった直後の如く調整痕が明瞭で、使用による摩滅が一切みられない。また、調整によって器表面に生じた局所的な胎土のバリ状塊も欠落することなくそのまま確認で

きる。

以上、出土したこれら剥片土器の特徴を総合して考えると、剥片土器の剥離は、通常の土器片にはみられない特徴的な破断面を有することから、通常の使用によって破損した、あるいは祭祀等で故意に破砕した土器片ではなく土器製作工程の焼成段階に生じた失敗品であると考えられる。このことは、器表面の特徴から通常通り使用された土器とは摩滅の度合いが大きく異なる点でも納得できる。これら剥片土器にみられる主要な剥離面は、土器の成形における粘土紐あるいは粘土板など積み上げの最小単位であると想定される。この積み上げ最小単位の上端、下端にそれぞれ成形次の接合面が存在し、各剥片はそれぞれの接合面間に不用意にも介在した空気や水分の膨張、破裂によって生じたものと理解できる。しかしながら、接合面間以外にはクレーター状の破裂痕跡等が認められないことから、単純に接合面間での破損であると推測される。

次に、これら焼成時において生じた失敗品と考えられる剥片土器が、多量に出土した唯一の遺構である RD140土坑の特徴を掲げる。

竪穴住居が密なエリアより少し東に外れた地点にこのRD140土坑は位置する。近接する遺構としては、 RE014竪穴住居状遺構やRD138土坑(底面の被熱した焼土坑)が存在する。

RD140は、1辺約1.4m、深さ25cmを測る方形の土坑である。さらに、底面および壁面には被熱痕跡がまったく認められない。

この土坑の最も大きな特徴は、埋土中からは187片もの剥片土器が出土したということである。

このように、剥片土器が一つの土坑から多量に出土したという事実はきわめて重要である。なぜならば、 先に掲げたような特徴から、RD140土坑は焼成時に生じた失敗品である剥片土器が廃棄された土坑である可 能性が考えられ、同時に周辺で土器の焼成がおこなわれた可能性が考えられるからである。

土器を焼成した際に破損してしまった破片類はどのような末路をたどるのかというと、特殊な場合を除いて、廃棄以外にその道はないと考えられる。今回検出したRD140土坑も基本的に失敗品廃棄のために利用された土坑であると考えられる。しかし、そこで一つ疑問が生じる。土器焼成が終了すれば、焼成施設内の完成品のみを取り出すことで当初の目的を達することができるはずである。もし、失敗して破損した剥片が存在したとしても、わざわざそれを取り上げて別の土坑に廃棄する必要性はないと思われる。特に、RD140土坑内部は被熱痕跡が認められず、土器を焼成した施設ではなかったと考えられる。すなわち、土坑内で土器を焼成し、不要な破損品である剥片土器を残して必要な完成品のみを取り出した結果を示すものではない。これは、RD140土坑以外の土器焼成施設で焼成終了後の片付け行為がおこなわれたことを物語る。このような片付けがおこなわれる理由として、焼成施設は1度の土器焼成に留まらず、再度土器焼成に用いられたのかもしれない。さらに言及するならば、このRD140は最初から廃棄を目的として掘削された「廃棄土坑」である可能性がきわめて高い。

この剥片土器の廃棄行為についてもう少し掘り下げて考えたい。

まず、剥片土器187片の中には  $3\sim 5$  個体程度とみられる複数個体分の剥片が認められるが、接合し完全な 1 個体の形を成すものは存在しない。また、剥片土器の中には、20cmを超えるような大きな剥片は存在せず、重量も 1 g に満たないものが全体の約 7 割を占める。さらに、剥片土器の出土は、土坑ほぼ中央から南寄り、埋土中位から下位にかけて多くみられる。土坑を南北にちょうど半分に分割して調査した結果、北半埋土に は数点の剥片しか出土しなかったが、南半埋土からは圧倒的多数の出土が認められたことによる。また、剥片土器は土坑底面に折り重なるようにまとまって出土せず、埋土中に比較的分散して含まれる状況であった。

土器焼成に関しては次節で詳細に述べるが、複数個体分の剥片の出土は、同時に焼成された複数個体であ

るのか、別々に焼成された複数個体であるのか現段階では判断できない。しかし、1回にいくつの個体が焼成されるかわからないにせよ、その中で  $3\sim5$  個体もの失敗品が生じるようであれば、あまりにも生産性が低過ぎると思われる。また、廃棄土坑での出土状況から一括性はきわめて低いと考えられる。したがって、今回の廃棄された剥片土器は、複数回の焼成で生じたものをその都度この土坑に廃棄したと考えたい。剥片土器の中でも小さな剥片のみが廃棄されている事実から、大きな剥片はカマド構築に用いられたり、カマド燃焼部の土器敷きに用いられたりと、廃棄せずとも何らかの 2 次的な活用法があったのかもしれない。その結果、 2 次的な活用法が見出せない剥片土器については廃棄されたのではないだろうか

# 3. 土師器焼成土坑

細谷地遺跡では今回の調査において 3 基、過年度調査において12基の焼土坑が検出されており、合計15基の検出に至った。過年度調査分である第 4 ・ 5 次調査報告書では、焼成面が土坑内部に偏在すること、焼成の程度が比較的強いこと、居住域内部に取り込まれていること等の諸条件を挙げ、これらの焼土坑(焼成土坑と表現されている)は、「土器焼成土坑の可能性が高いもの」としている。ただし、不安材料として、焼成の具体的な作業内容を推し量る遺物の出土状況がみられないことを挙げ、やや慎重さを保っている。一方、土師器焼成土坑の認定については木立雅朗の論考があるが、これもかなり慎重な立場である。木立の述べた「土師器焼成坑」の必要条件は以下の通りである。

- 「①掘り込んだだけの単純な土坑であること(それ以外の固定的な施設を持たない)。
  - ②土坑床面が赤色に焼けていること(壁面のみが焼けたものは除外する)。
- ③炭・灰・赤色焼土の塊~粒が原位置で確認され、その土坑で直接火を使ったことが明確であること (2次堆積のものは除外する)。」

また、「生産遺跡特有の遺物出土は重要だが、それらは移動しうるものであるため、周辺に焼成遺構が存在することを示す重要な証拠であっても、出土遺構の性格を決定するとは言い難い。」と述べている。このような厳格な条件を提示する根拠は、この種の遺構検出数の乱立を防ぐために必要であり、ある程度評価できる。しかし、同時に土師器焼成に関わる遺構の認定が困難であることを示すものでもある。つまり、木立の示した条件を満たすことは容易ではない。今後、確実な遺構の集成をおこない、傾向を抽出したうえで小地域単位での認定基準を設ける必要があるかもしれない。

細谷地遺跡でみられる焼土坑は、どれも概ね方形を呈し、分布が密になり過ぎず散逸している。このことから、焼土坑群はある程度性格的なまとまりが存在したと考えられる。

現在、土師器を焼成したと考えられる土坑は岩手県内で5例確認されている。(表17)しかし、土器焼成土坑とする証拠の明瞭な遺構は数少なく、やはり認定が困難である。そのため、被熱している土坑と報告されているものの中にも土器焼成をおこなった土坑が存在する可能性がある。逆に、土器焼成土坑と報告されているものの中にも性格の異なる土坑が含まれている可能性も十分に考えられよう。

本論の中心である細谷地遺跡では、焼土坑以外に埋土中から「剥片土器」が多く出土した廃棄土坑と考えられる遺構を検出した。この剥片土器は、木立の述べる土器生産に伴う「生産遺跡特有の遺物」である。少なくとも「周辺に焼成遺構が存在する」ことを示している。ただし、剥片土器や剥片土器の廃棄土坑は、これまでの周辺遺跡の調査で確認されていない。また、焼土坑の分布は細谷地遺跡の集落範囲内で収まる。木立の述べたとおり可動性のある剥片土器であるが、今回の場合においてはこの集落内で土師器が焼成されたと十分考えられる。14基もの焼土坑が、調査済みの細谷地遺跡内で集中することは異常であり、焼土坑につ

表18 岩手県内土器焼成土坑一覧

No.	遺跡名	所在地	検出数	時 代	遺跡の立地	関連遺物	関連遺構	備考
1	相 去 遺 跡	北上市	5	平安	台地緩斜面	なし	なし	
2	高前田遺跡	北上市	5	平安	台地緩斜面	なし	なし	
3	比久尼沢遺跡	北上市	1	平安	台地緩斜面	なし	なし	
4	瀬谷子遺跡	江刺市	16	平安	台地上	なし	須恵器窯	
5	細谷地遺跡	盛岡市	15	平安	河岸段丘上	剥片土器	廃棄土坑	
6	熊 堂 B 遺 跡	盛岡市	?	平安	河岸段丘上	剥片土器		未報告

いて土器焼成以外の性格を追求できるような出土遺物はみられない。確かに、剥片土器そのものは可能性あるものと考えられるが、運ばれたとしてもせいぜい集落内での移動であろう。すなわち、剥片土器が他の集落あるいは土器生産地から運ばれる意味が見出せないことは、出土状況からみても明らかである。これらのことから100%ではないが、細谷地遺跡で土坑を用いた土師器の焼成、つまり土師器生産がおこなわれていたと認定しても差し支えないと思われる。

# 4. 土師器焼成の方法

前項では細谷地遺跡での土師器焼成がおこなわれた可能性が高いことを示した。では、この遺跡内ではどのようにして土師器の焼成がおこなわれていたのであろうか。

焼成をおこなった施設と考えられる焼土坑の分析から焼成作業に関する情報を導き出してみると、この焼土坑から得られる情報はかなり限定されそうである。これは焼土坑内で出土した遺物は少なく、土坑内部の焼土化した部分の分布や焼土の厚みなどから土坑内での被熱の範囲やその度合いが予測される程度であると考えられるからである。ただし、この被熱に関しても土坑が、複数回土器の焼成で使用された可能性も充分想定できるため、さらに慎重に判断する必要があろう。以上のことを踏まえ、細谷地遺跡で検出した焼土坑を遺構から分析する。今回検出した焼土坑の平面形態は、いずれも概ね方形を呈する。過年度調査分で検出した焼土坑も同様に一辺1m~1.5mの方形を呈するものが圧倒的に多い。深さは約25~30cm程度でさほど深い土坑ではない。底面は概ね平坦であり、被熱した石が出土する土坑もある。焼土は底面や壁面にかけて分布しているが、今回の調査で確認した土坑は壁面上部まで及んでいなかった。また、埋土下層中には粒状の焼土塊や炭化物が混じっていた。これらの事実を総合すると土器は、方形に掘られた土坑内で複数個体が一括して焼成されたと類推される。この時、土坑底面には燃料が置かれており、時には石などにより土器や燃料を安定させたと考えられる。燃料は粒状の炭化物の残存から主として薪燃料が用いられたと考えられる。また、炭化物は極少量のみしかみられないため土器焼成に際して完全に燃え尽きてしまったのではないだろうか。

また、出土した剥片土器の分析をおこなうことにより、様々な情報を引き出すことが可能である。

剥片土器表面には、焼成時における温度の状況から火色化した部分と黒斑化した部分の両者がみられる。 さらに、この火色化した部分と黒斑化した部分の分布が器表面上においてそれぞれ異なることが判明した。 まず、火色化した部分は、口縁部と体部の剥片土器に多くみられる。また、口縁部の火色については筋状の ものが認められ、体部の火色はリング状や円形のものが多く認められる。次に、黒斑は底部外面、すなわち 木葉痕のみられる面に関して多く認められる。以上の焼成温度差による痕跡の違いとその棲み分けによる違 いは、焼成時における焼土坑内での土器の焼成方法や設置方法によるところが大きいと考えられる。火色は 通常、過度な高温によって生じる痕跡である。そのため口縁部や体部にみられる円形斑状の火色は、酸素が 一点に集中して供給された結果、そこが高温になり火色化したと考えられている。また、口縁部にみられる 筋状の火色は、稲藁等の燃料の一部が付着したまま燃え上がった結果、部分的に高温になり筋状に火色化し たものと考えられる。火色化した部分の出現は、体部上半や口縁部および頸部など土器上部に多くみられる。 このことから、比較的土器上部が高温になることが多い状況であったと考えられる。このような火色化した 剥片土器の様子から、土器焼成に際してある程度土坑内が閉塞されており、さらに、これまでの研究成果に より珪酸分の多い稲藁等が燃料に使用された可能性が高いと考えられる。また、火色とは逆に黒斑について は、酸素の供給が乏しく、温度があまり上昇しなかった箇所に生じる痕跡であると考えられる。このような 黒斑の出現箇所は底部外面接地面に集中するため焼成時に底部が接地していた可能性が指摘できる。さらに、 底部外面が接地しているため土坑内で土器が正置された状態で焼成されたと考えられる。このように土器が 正置されての焼成を想定できるということは、土坑の閉塞に利用される覆いは口縁部の上に施されたことも 想像に難くない。よって、細谷地遺跡で想定できる土器焼成の方法は、土坑内で密着して正置された複数個 体の土器上部を稲藁等により被覆し、閉塞した覆い焼きであったと考えられる。また、剥片土器にみられる 火色部分は、器表面から破断面にまで及ぶものがみられる例が存在する。このことは、焼成途中で弾け、剥 離した後もなお被熱したのであろう。

### 4. 土師器生産と消費

出土した剥片土器の器種は土師器甕の1種のみである。しかも、平安時代の当地域では、製作に際してロクロを使用する土師器甕とロクロを使用しない土師器甕の2者が併存するが、出土した剥片土器はすべてロクロを使用しない土師器甕の剥片である。また、竪穴住居内より出土した土師器甕のうちロクロを使用しない甕の比率はかなり高い傾向にある。

また、細谷地遺跡で出土した土器は、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壷などが挙げられる。その他僅少な 器種もいくらか存在するが、これらは遺跡周辺域を含め客体的なものでしかない。したがって、主体となる のは上記の器種である。これらの土器類のほとんどが竪穴住居を中心とする遺構から出土していることから、 出土した土器類は基本的にこの集落内で消費されたものであると考えられる。

以上の2つの事実より細谷地遺跡では、少なくともロクロを使用しない土師器甕は集落内で生産され、集落内で消費されたと考えられる。さらに、これら土師器甕は比較的簡易な施設で焼成された土器である。未報告資料であるが、約2km離れた熊堂B遺跡においても同様の焼成土坑と剥片土器が確認されている。少なくともロクロを使用しない土師器甕は、広域流通しない種類の土器であったと考えられる。

しかし、このロクロを使用しない土師器甕は焼成時の破損率が著しく高い器種である可能性も否定できない。つまり、少なくともこの器種は広域流通せず、細谷地遺跡集落内で生産され、消費されたことに誤りはないと考えるが、その他の器種についてまで言及することはできない。しかし、須恵器は窯による高温焼成であるため集落外で生産されるが、土師器はどのような場所で生産されていたのだろうか。細谷地遺跡では、ロクロを使用した痕跡が遺構から認められなかったため、ロクロを使用しない器種のみが生産されていたことも想定される。土師器甕がロクロの使用で2者存在する理由は、集落内で自給自足されるものとそうでないものの違いであるのかもしれない。今後資料の充実を待って検討したい。

## 5. まとめ

今回の細谷地遺跡第8次調査で検出した焼土坑は、過年度のものを合わせると14基を数える。かかる焼土坑は、付属施設を持たない単純な構造・土坑底面の被熱状況などから土器を焼成した土坑であると推定され、さらに、焼成時に剥離・破損したと考えられる剥片土器の廃棄土坑が存在することから、上記の焼土坑が土器焼成のためのものであることはほぼ間違いない。

土師器焼成について未だ不明な点が多い古代の岩手県において土師器焼成土坑が検出でき、さらにそれに付随すると考えられる廃棄土坑の存在は、今後この種の遺構を認定する上で大きな指標の一つになりうると考えられる。

次に、この細谷地遺跡で焼成された土器は、廃棄土坑であるRD140土坑出土の剥片土器の分析によりすべて 土師器甕のものであることが判明した。また、剥片土器の土師器甕は、1個体のみではなく複数個体存在し、 剥離は巻き上げ成形の粘土紐単位で剥離していることが判明した。廃棄は剥離した細片のみでおこなわれた ようで、剥離しなかった破片はこの土坑に廃棄されなかったようである。

少なくとも非ロクロ土師器甕は、集落内で生産、消費されたと考えられるに至った。

今回の細谷地遺跡の調査成果が、古代の岩手県において未解明である土師器生産についてわずかでも光を与えることができれば望外の喜びである。同時に、今後県内各地において資料が増加することに期待したい。 末筆になったが、本稿を成すにあたり青森市教育委員会木村淳一氏から土器焼成に関して青森市所在の野木遺跡の調査成果をもとに多大なるご教示とご助言をいただいた。また、同遺跡関連遺物の実見の機会もいただいた。謹んで感謝を申し上げる。

# 引用・参考文献

- ・窯跡研究会編 『古代の土師器生産と焼成遺構』 真陽社 1997
- ・木村淳一 『野木遺跡』 1998
- ·木村 高·三林健一 『隠川(4) 隠川(12)遺跡 I 発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財報告書第244集 青森県教育委員会 1998
- ・『松山・羽黒平(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財報告書第170集 青森県教育委員会 1995

# 写 真 図 版





写真図版 1 調査区全景 (航空写真・写真上が東)



調査区東側(西から)

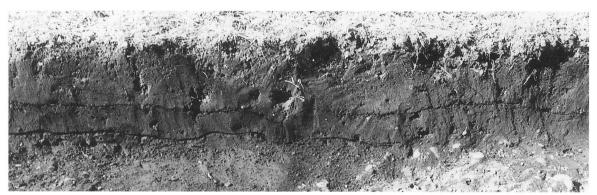


調査区西側(北から)

写真図版 2 調査前現況



基本層序(北東から)



基本層序 (東から)

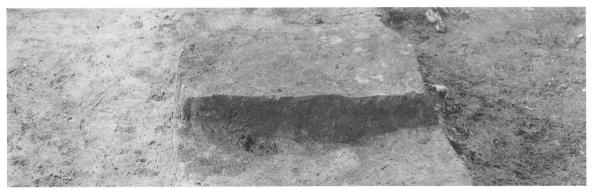


竪穴住居群(北から)

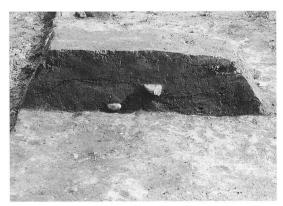
写真図版 3 基本層序 断面・竪穴住居群



RA008 完掘 (北から)



RA008 断面 (東から)

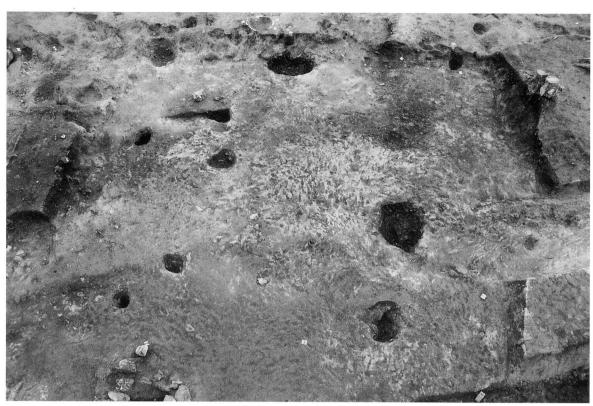


RA034 断面 (西から)

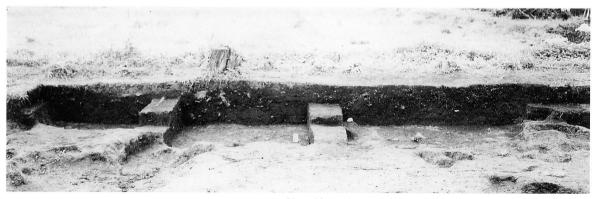


RA034 P1断面(南から)

写真図版 4 RA008 · 034竪穴住居



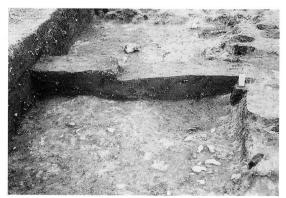
RA035 完掘(北から)



RA035 断面(南から)



RA035 カマド (南から)

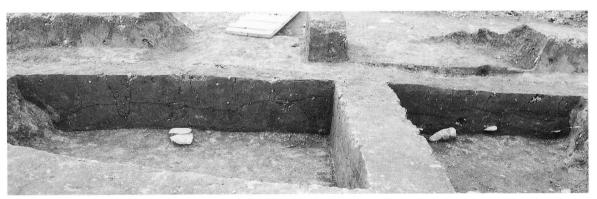


断面(西から)

写真図版 5 RA035竪穴住居



RA040 完掘(西から)

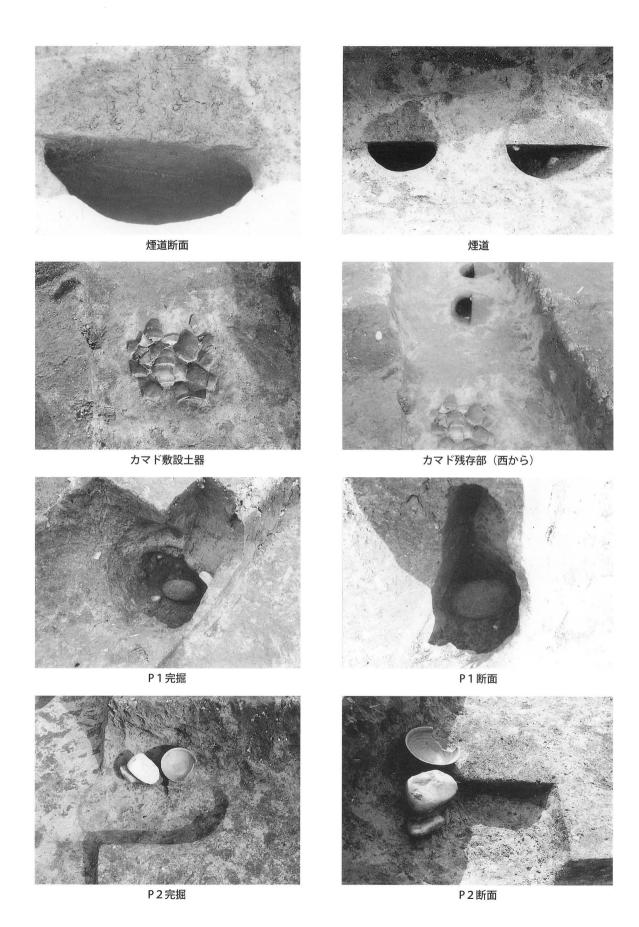


RA040 断面(南から)



断面(西から)

写真図版 6 RA040竪穴住居(1)



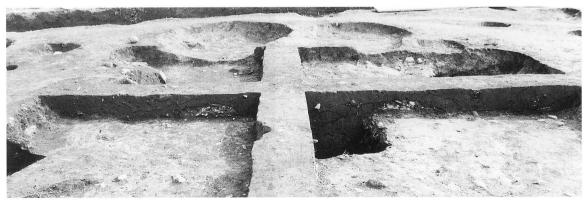
写真図版 7 RA040竪穴住居(2)



RA041 完掘(西から)

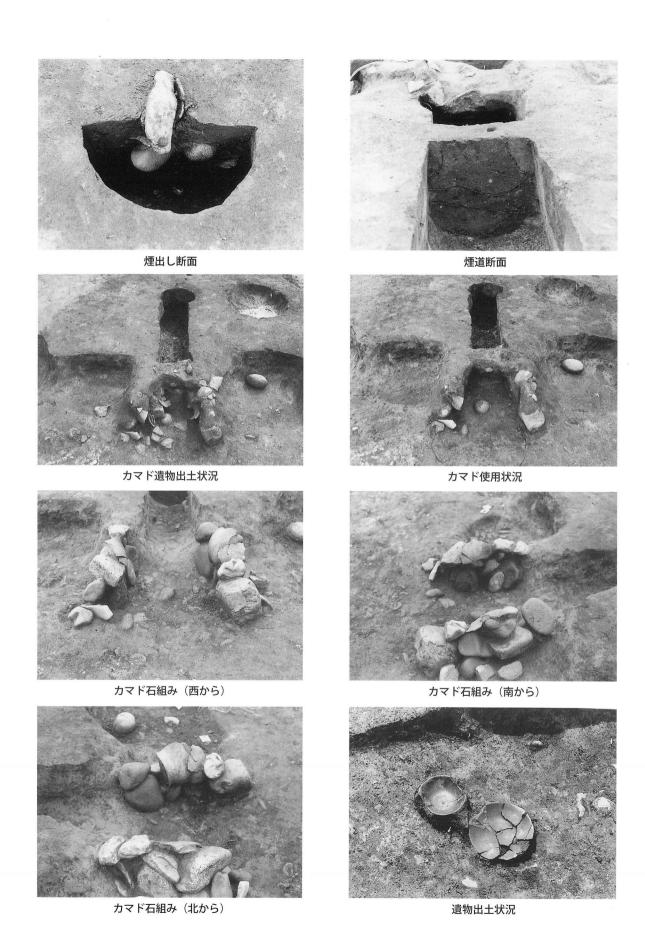


RA041 断面(西から)



断面(北から)

写真図版 8 RA041竪穴住居(1)



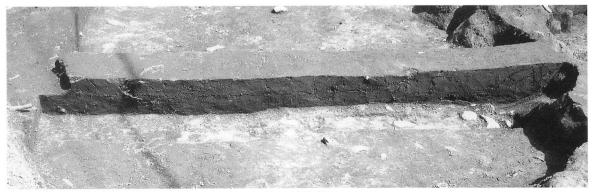
写真図版 9 RA041竪穴住居(2)



RA042 完掘 (東から)



断面(南から)



断面(西から)

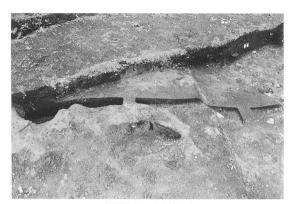
写真図版10 RA042竪穴住居(1)



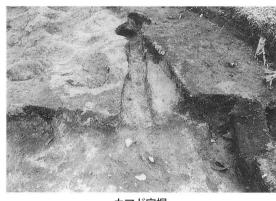
RA042・046 重複部分断面(南から)



カマド煙道断面 (東から)



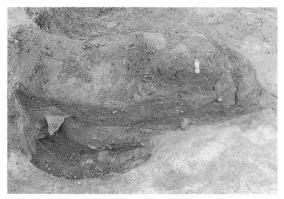
煙道断面(南から)



カマド完掘



P1断面(東から)

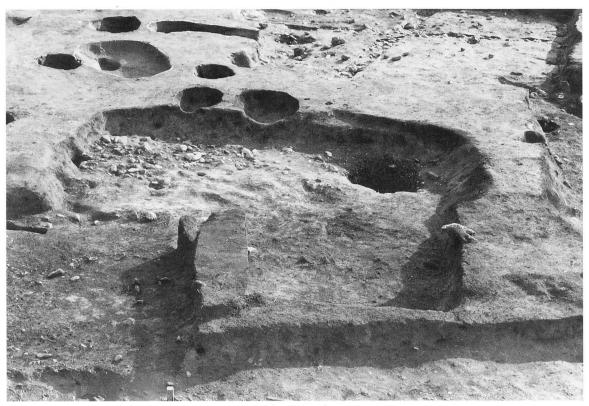


P2断面(南から)

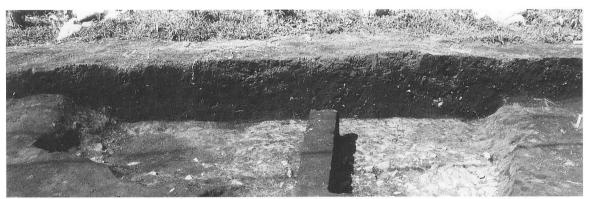


1次完掘(東から)

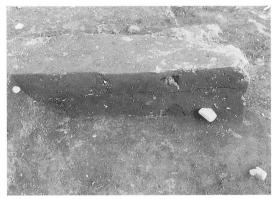
写真図版11 RA042竪穴住居(2)



完掘(北から)



断面(南から)



北側断面 (西から)

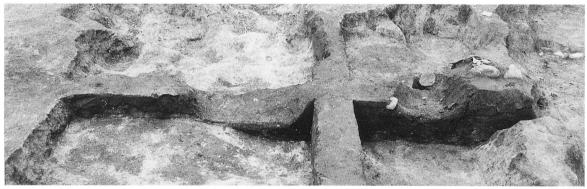


遺物出土状況

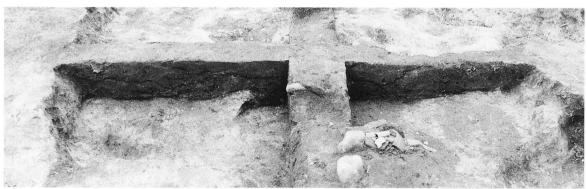
写真図版12 RA043竪穴住居



完掘(南から)



断面(東から)



断面(北から)

写真図版13 RA044竪穴住居



完掘(西から)

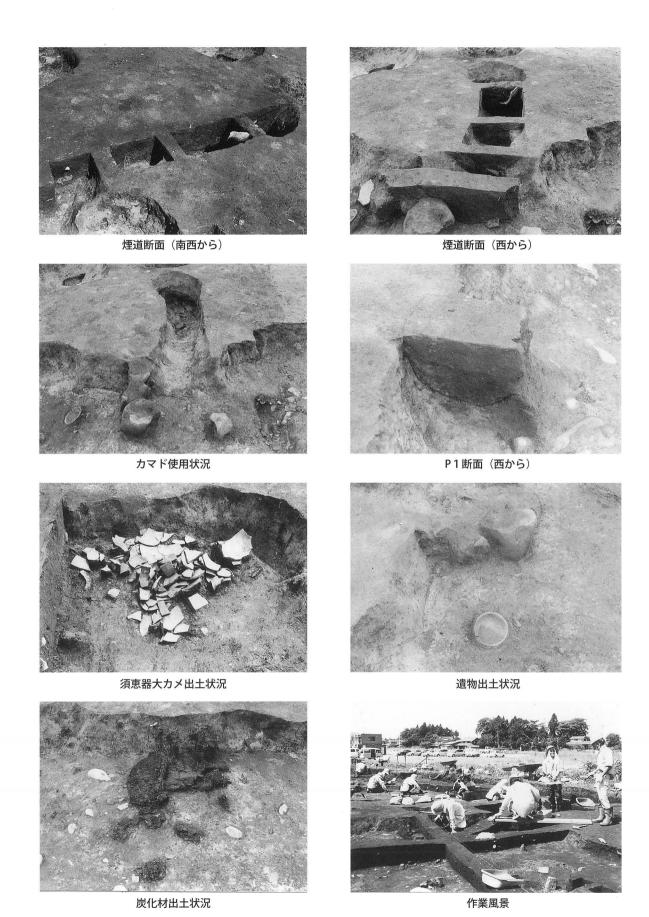


断面(西から)

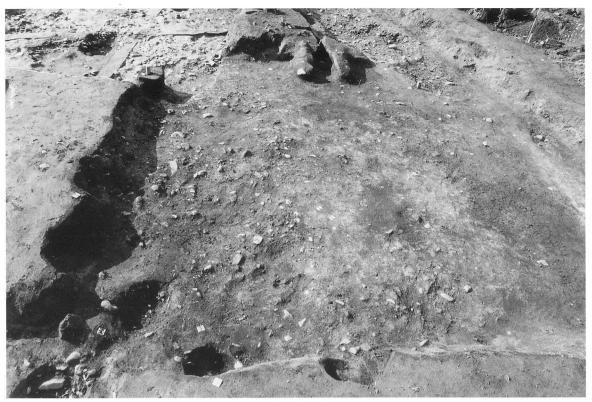


断面(南から)

写真図版14 RA045竪穴住居(1)



写真図版15 RA045竪穴住居(1)



完掘(東から)

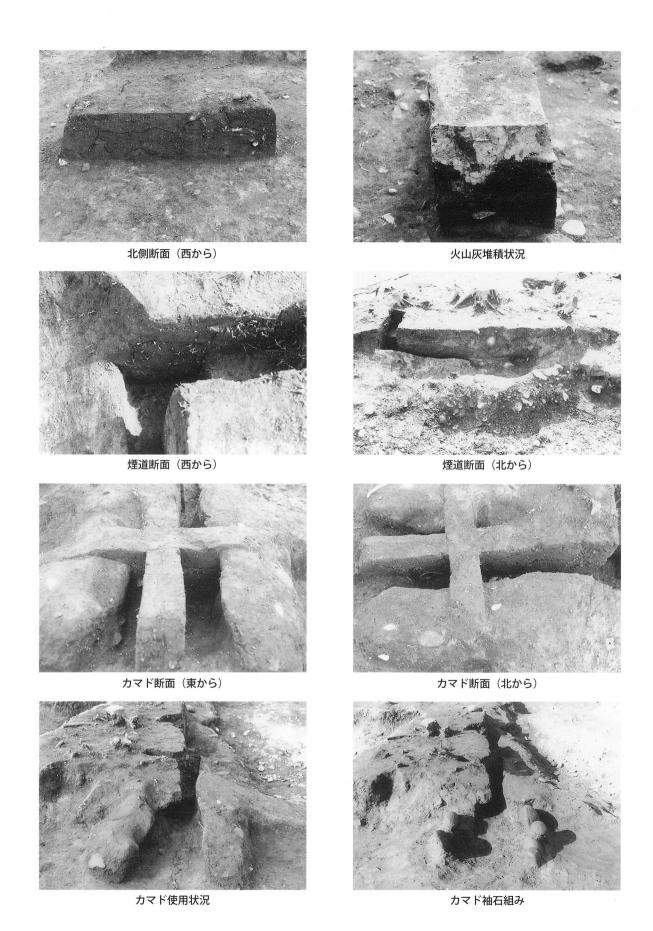


断面(南から)

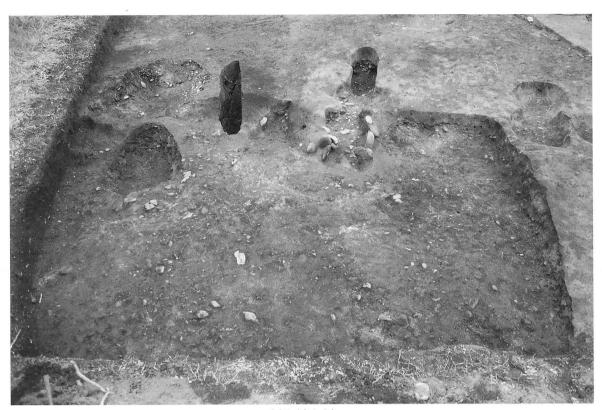


断面(南西から)

写真図版16 RA046竪穴住居(1)



写真図版17 RA046竪穴住居(2)



完掘(東から)

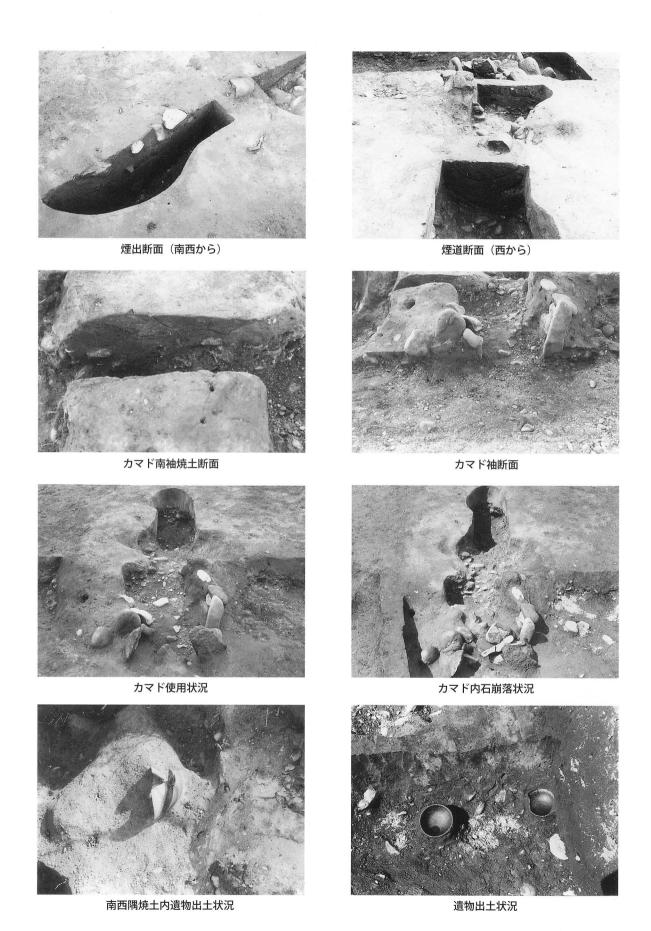


断面(南から)

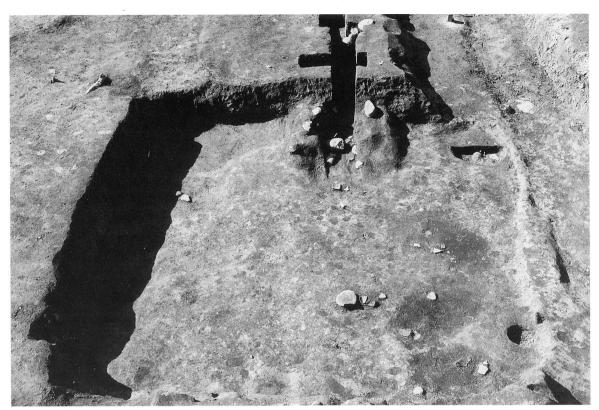


断面(東から)

写真図版18 RA047竪穴住居(1)



写真図版19 RA047竪穴住居(2)



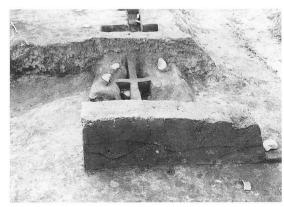
完掘(東から)



断面(南から)

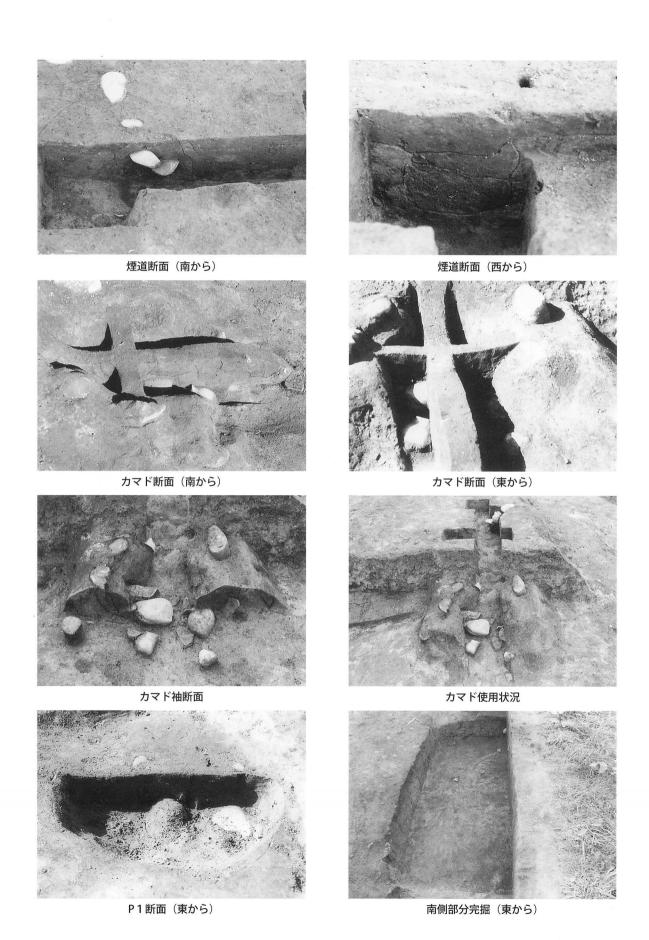


断面(南東から)



北側部分断面(東から)

写真図版20 RA048竪穴住居(1)



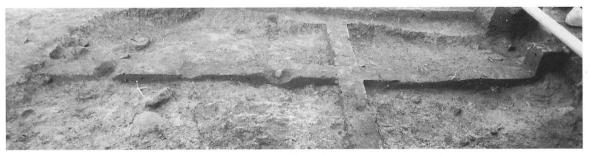
写真図版21 RA048竪穴住居(2)



完掘(西から)



断面(西から)



断面(南から)



カマド使用状況

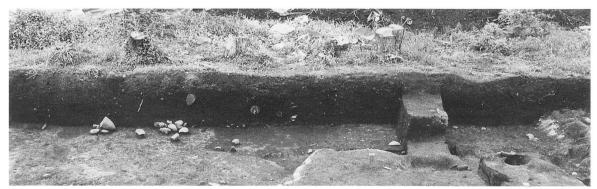


カマド石組み

写真図版22 RA049竪穴住居



完掘(北から)



断面(南から)



断面(西から)



カマド使用状況

写真図版23 RA050竪穴住居



検出状況 (北から)



完掘(北から)

写真図版24 RA051竪穴住居(1)



断面(西から)



断面(北から)



カマド煙道断面 (西から)



煙道断面 (東から)

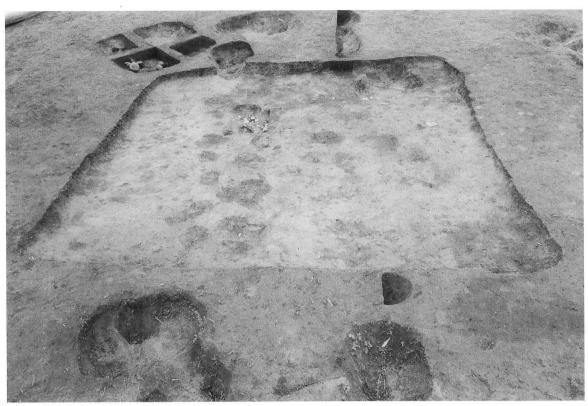


カマド石組み

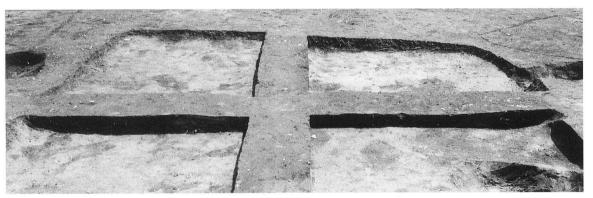


遺物出土状況

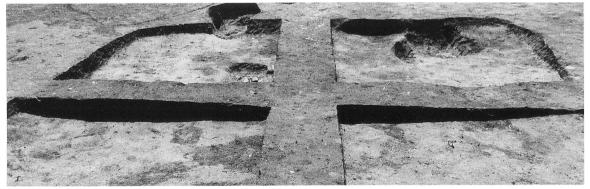
写真図版25 RA051竪穴住居(2)



完掘(北から)



断面(西から)



断面 (北から)

写真図版26 RE006竪穴住居状遺構



RZ004·005 畠状遺構 検出状況



RZ004畠状遺構 断面(北から)

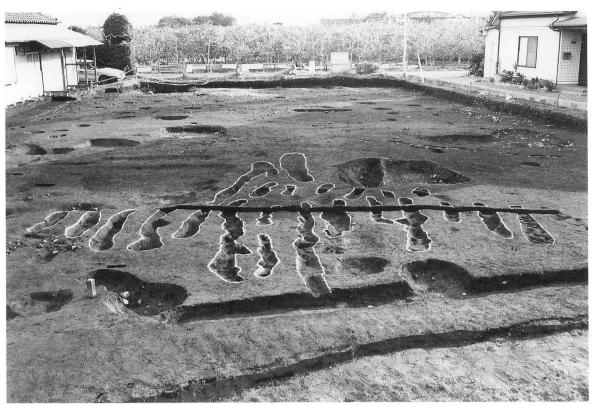


RZ005畠状遺構 断面(南から)



作業風景

写真図版27 RZ004·005畠状遺構(1)、作業風景

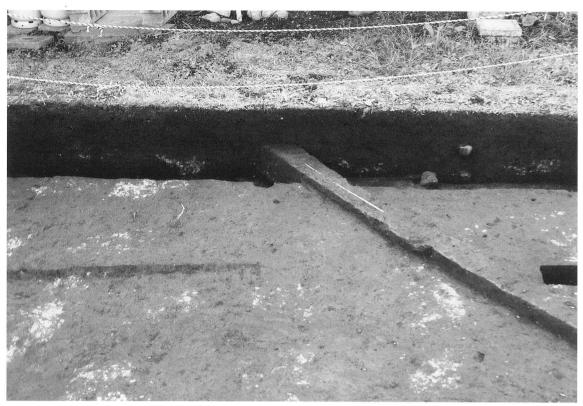


RZ004・005 畠状遺構 完掘(北から)



RZ004・005畠状遺構 完掘 (東から)

写真図版28 RZ004·005畠状遺構(2)



RZ004・005畠状遺構 検出状況① (北から)



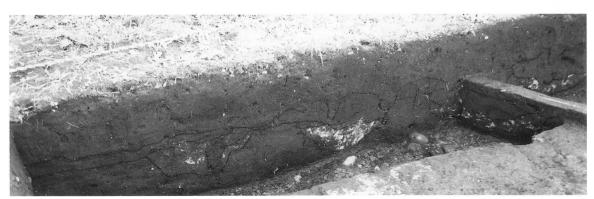
RZ004・005畠状遺構 検出状況②(北から)

写真図版29 RZ006·007畠状遺構(1)



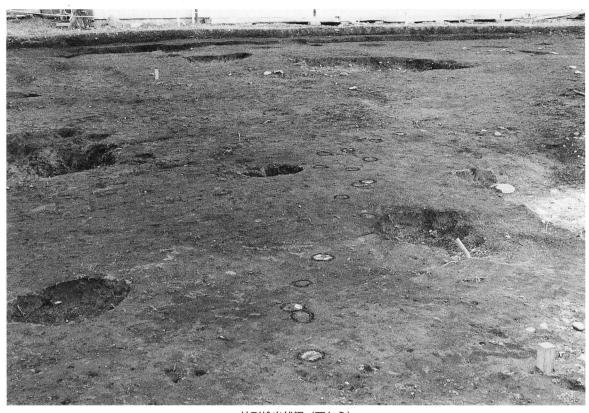
RZ004・005畠状遺構 完掘(北から)





RZ006・007畠状遺構 断面(北東から)

写真図版30 RZ006 · 007 晶状遺構(2)



杭列検出状況(西から)



検出状況 (南から)



①断面



②断面



③断面

写真図版31 RZ008杭列(1)



4~6断面



7・8断面



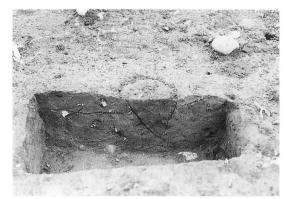
⑨断面



⑩断面



⑪断面

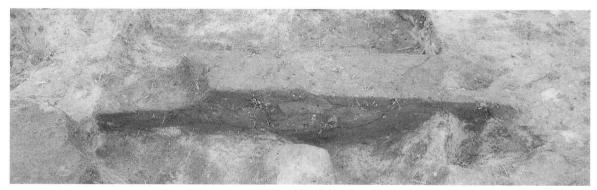


12断面

写真図版32 RZ008杭列(2)



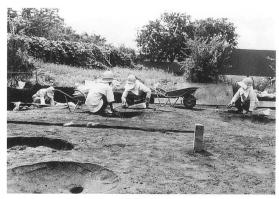
完掘(南から)



断面(南から)

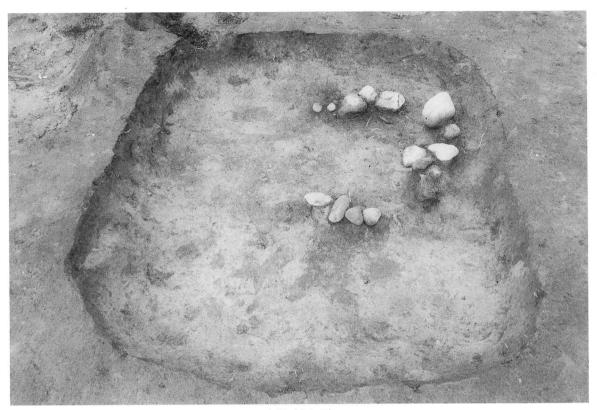


焼土断面 (南から)



作業風景

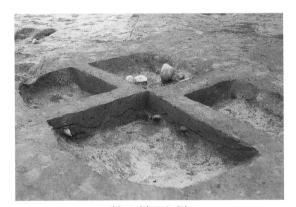
写真図版33 RD137土坑、作業風景



完掘 (南から)



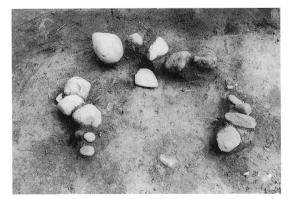
断面(北東から)



断面(南西から)



作業風景

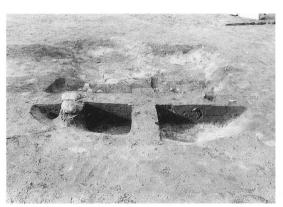


石組み (西から)

写真図版34 RD138土坑、作業風景



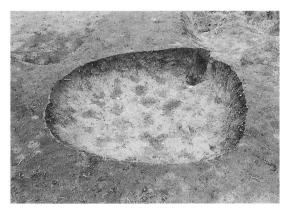
RD139完掘(南から)



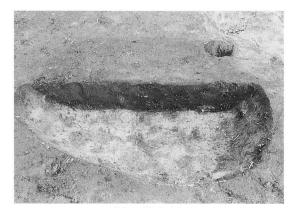
断面(南から)



断面(西から)



RD140完掘(北から)

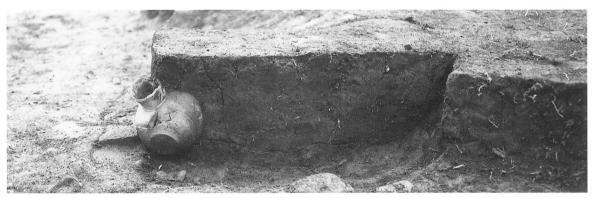


断面(北から)

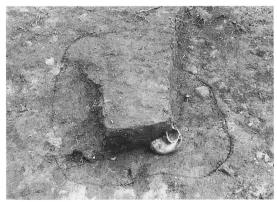
写真図版35 RD139·140土坑



完掘(北から)



断面(西から)

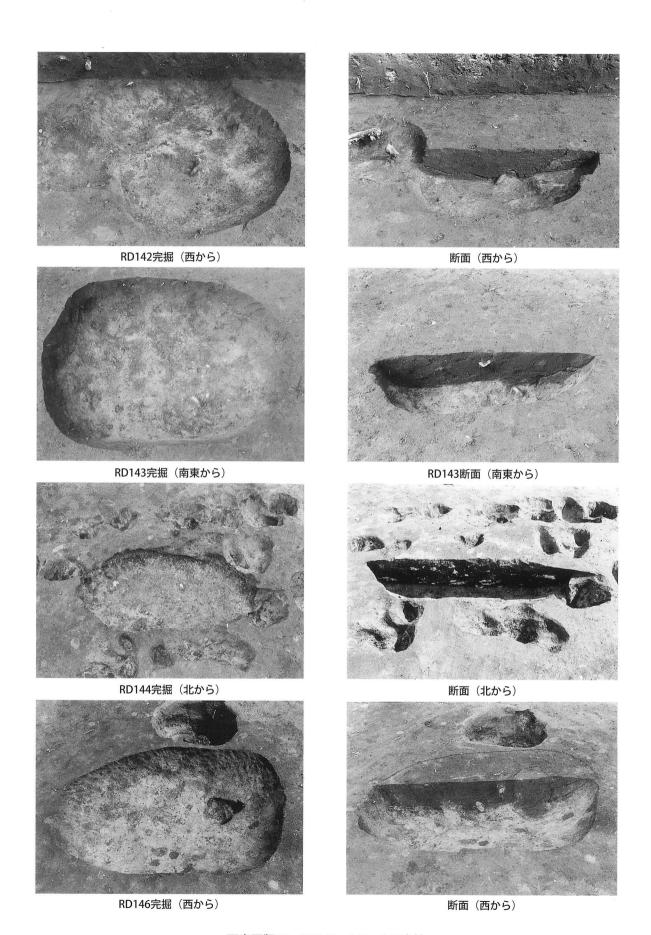


検出状況(北から)

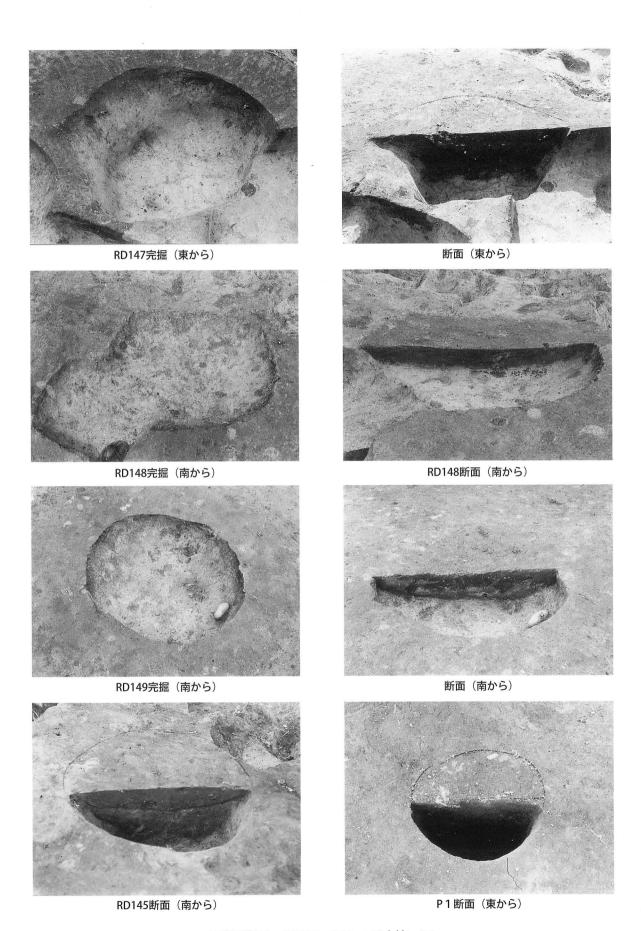


完掘(南から)

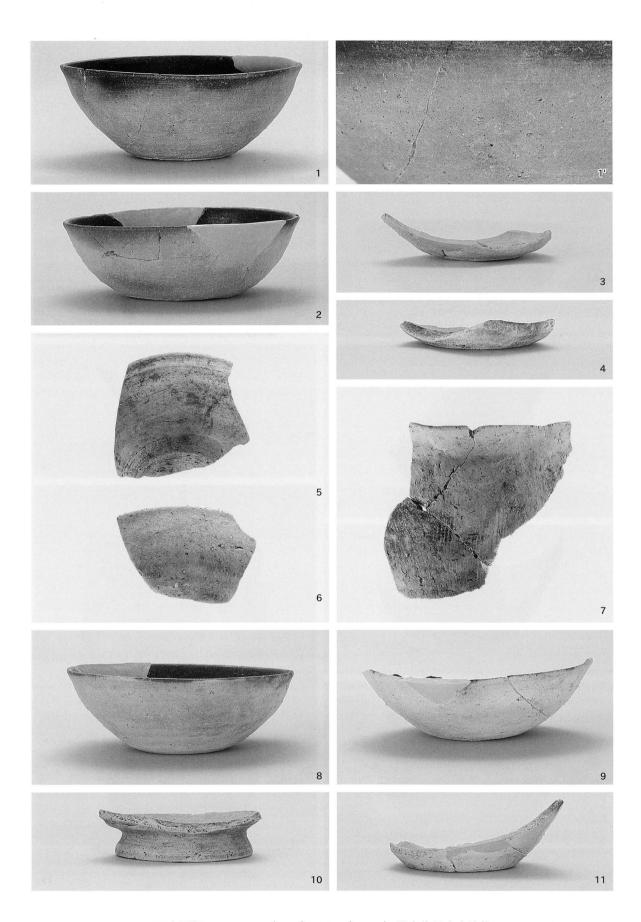
写真図版36 RD141土坑



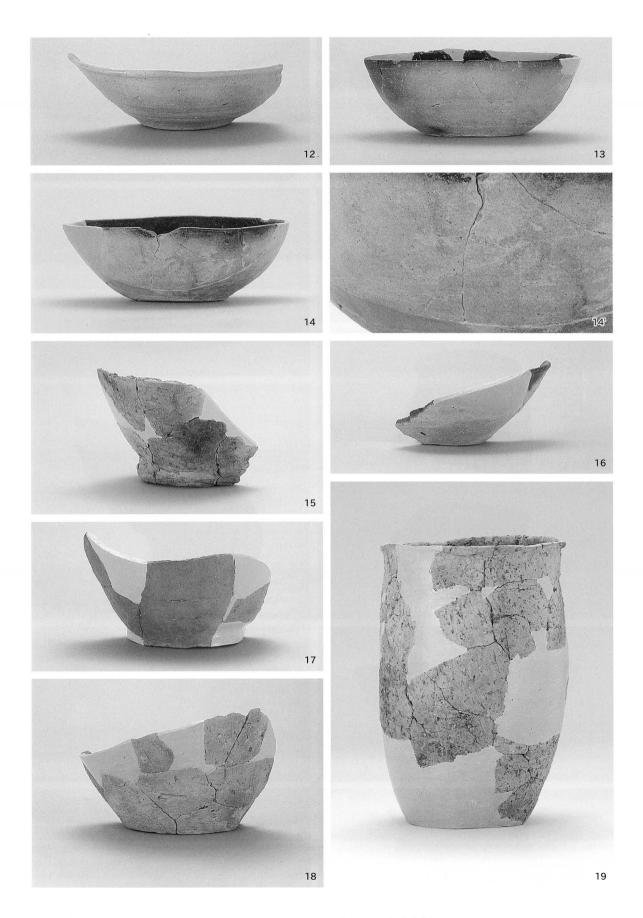
写真図版37 RD142~144·146土坑



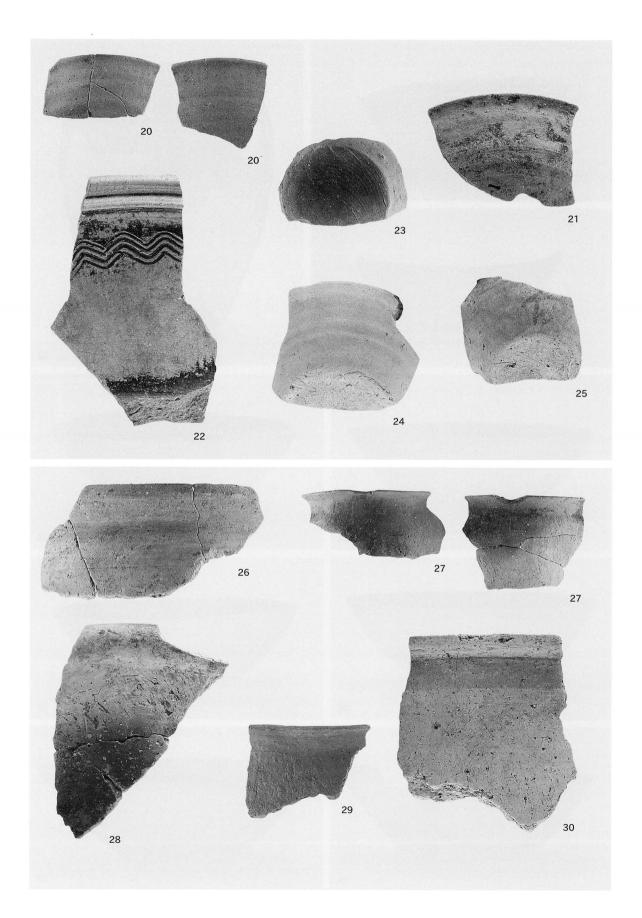
写真図版38 RD145・147~149土坑・P1



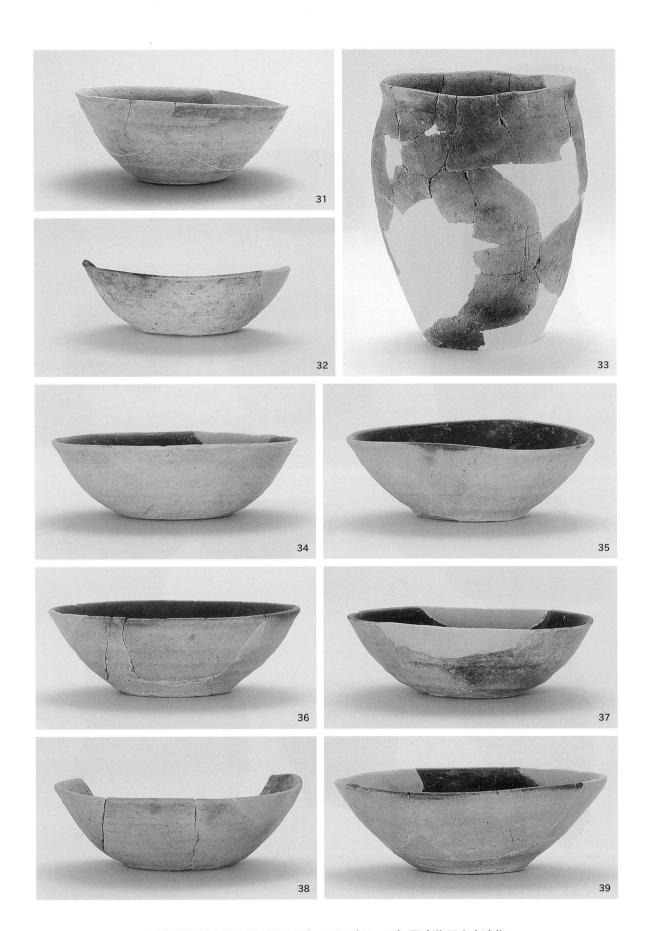
写真図版39 RA034 (1~7) · 035 (8~11) 竪穴住居出土遺物



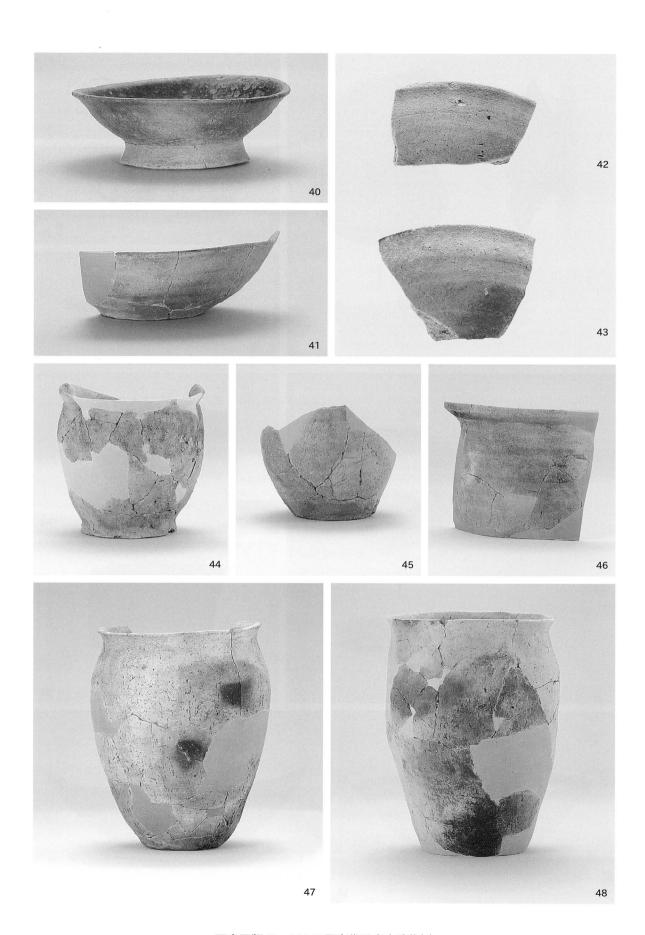
写真図版40 RA035竪穴住居出土遺物(1)



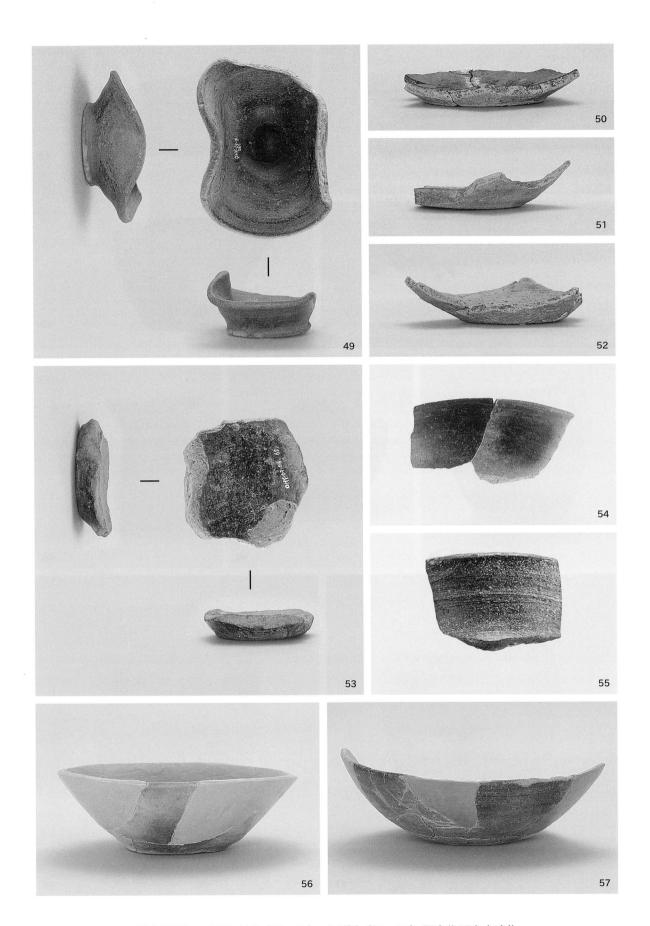
写真図版41 RA035竪穴住居出土遺物(2)



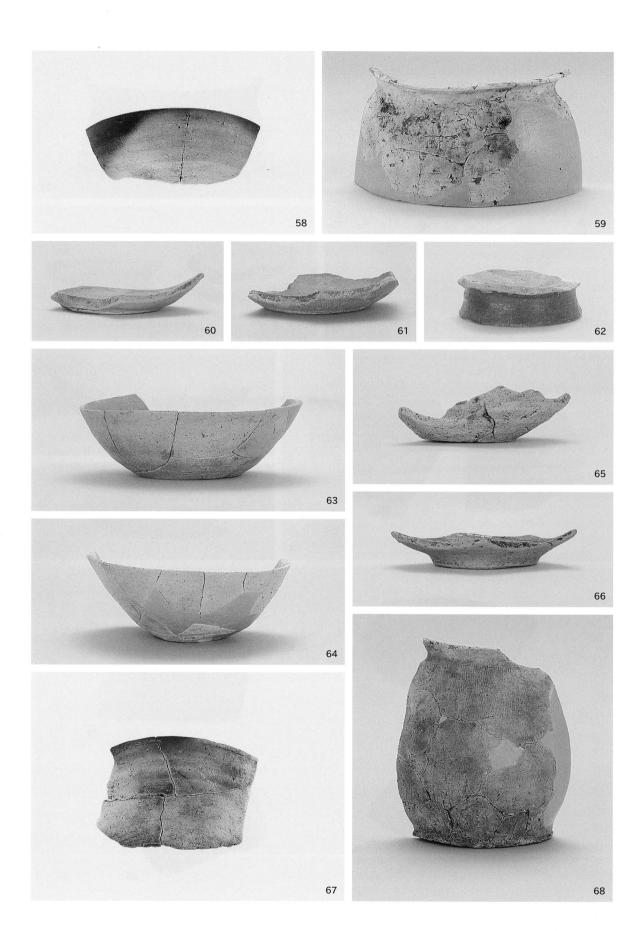
写真図版42 RA040 (31~33) · 041 (34~39) 竪穴住居出土遺物



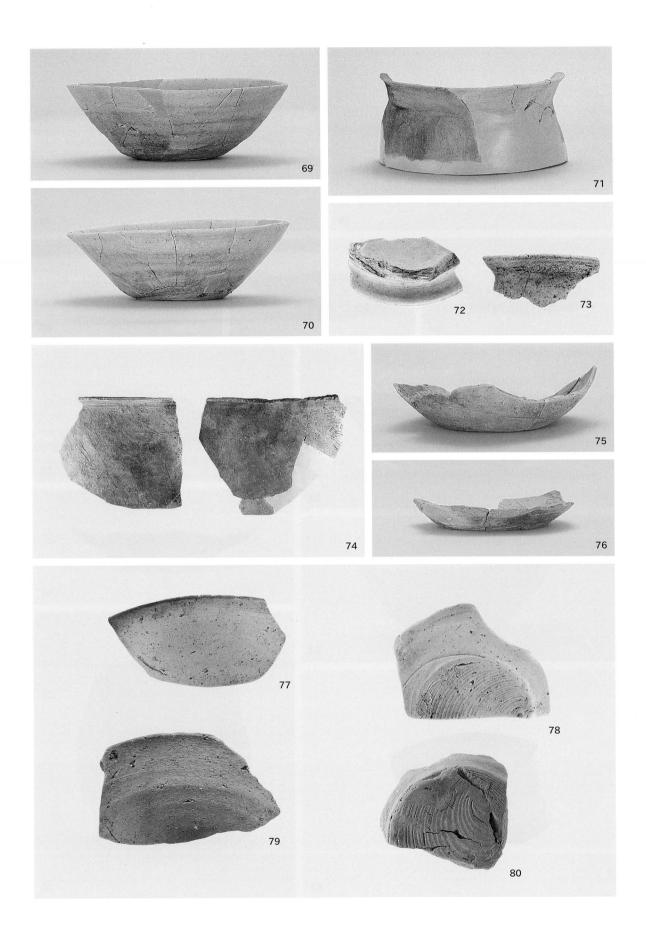
写真図版43 RA041竪穴住居出土遺物(1)



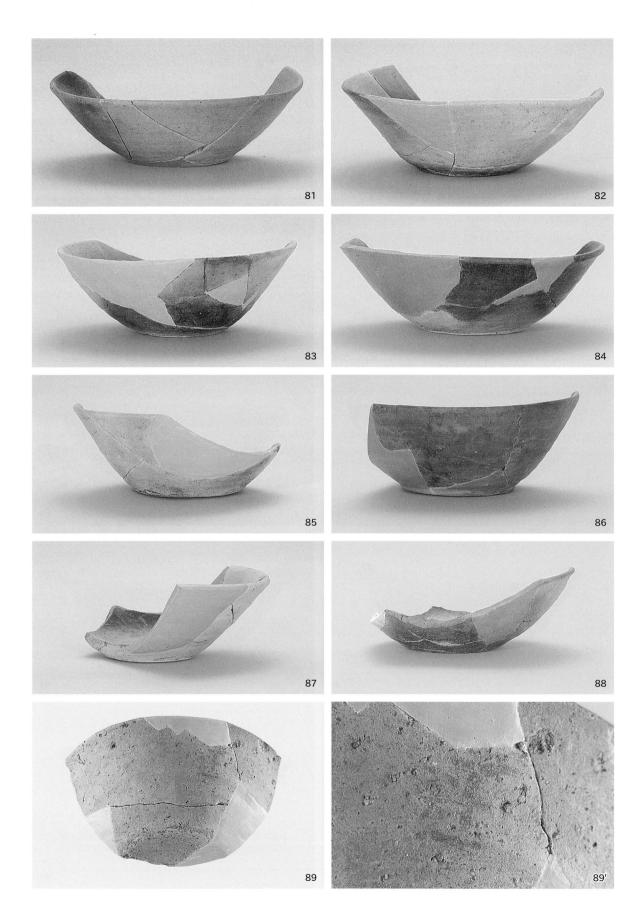
写真図版44 RA041(2) (49~55)・042(1) (56・57) 竪穴住居出土遺物



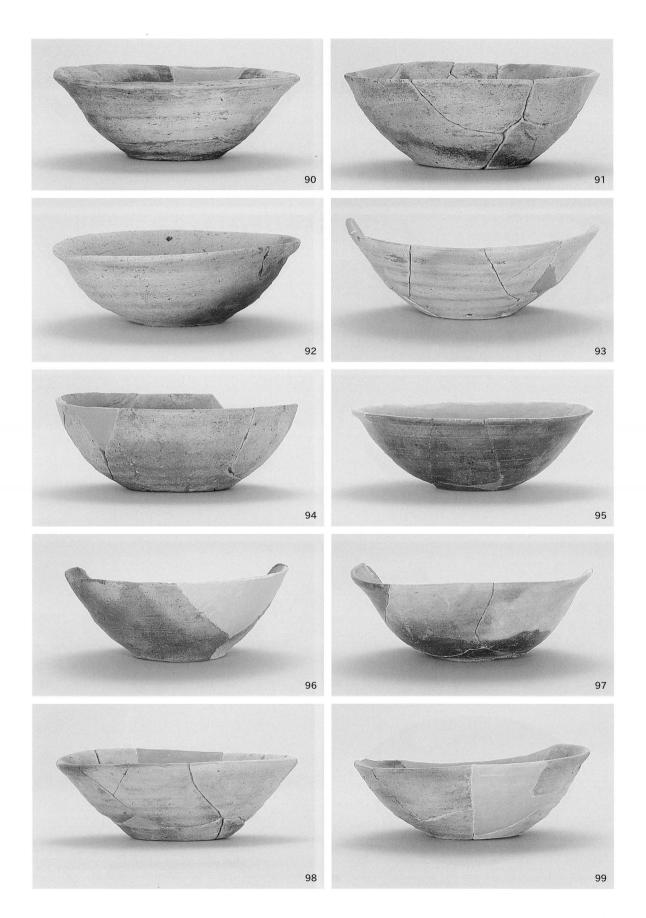
写真図版45 RA042(2) (58~62)·043 (63~68) 竪穴住居出土遺物



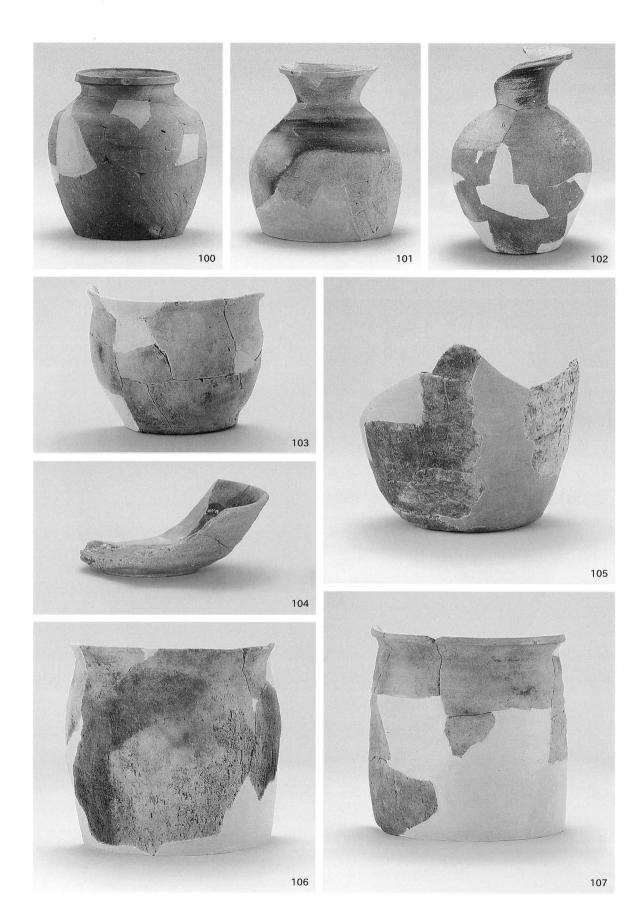
写真図版46 RA044 (69~73) • 045(1) (74~80) 竪穴住居出土遺物



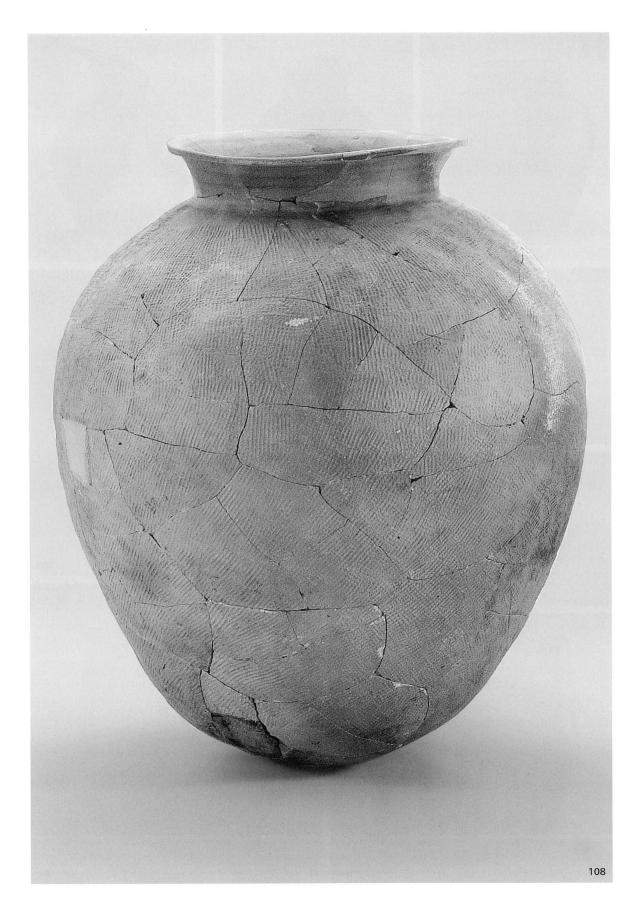
写真図版47 RA045竪穴住居出土遺物(2)



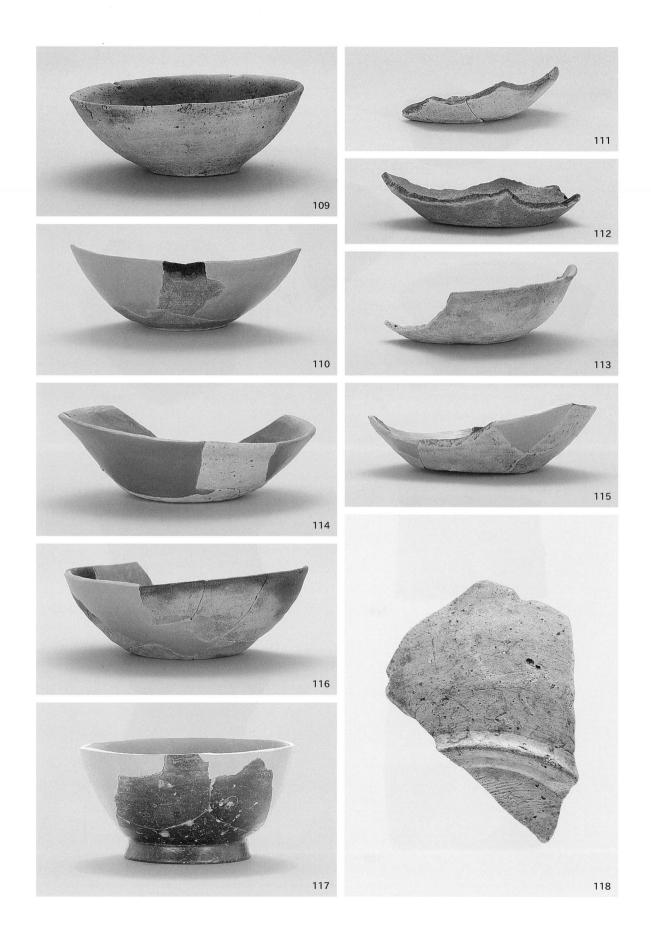
写真図版48 RA045竪穴住居出土遺物(3)



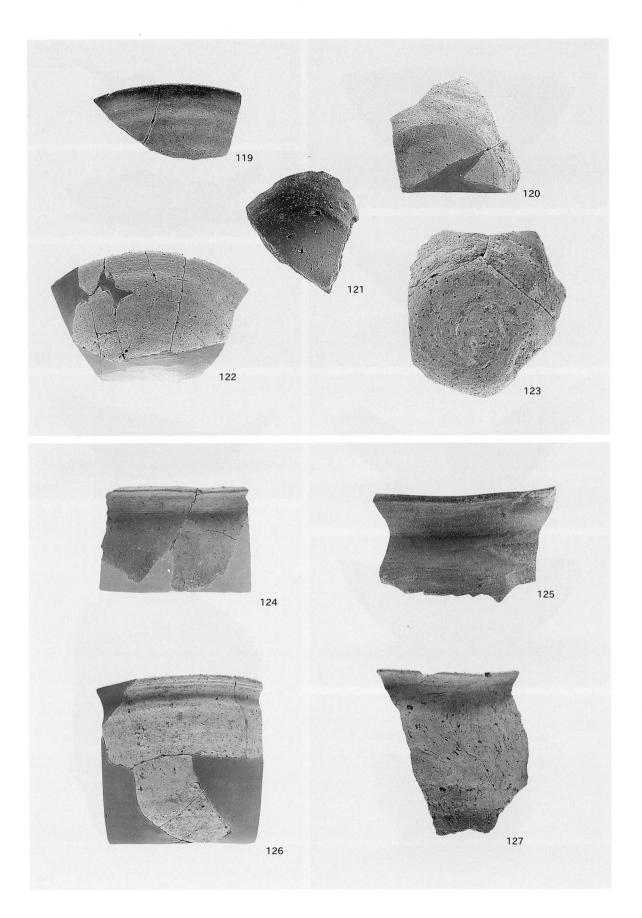
写真図版49 RA045竪穴住居出土遺物(4)



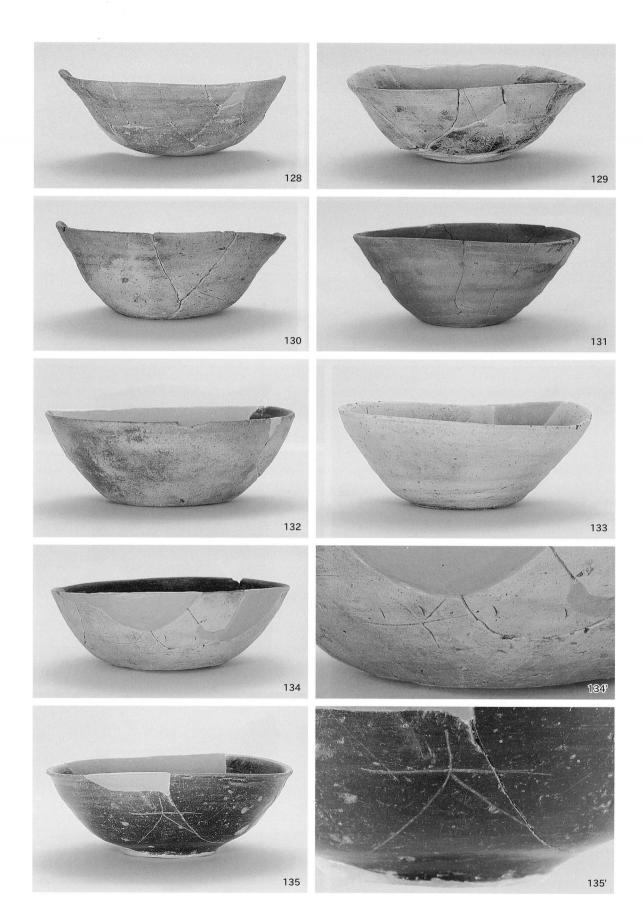
写真図版50 RA045竪穴住居出土遺物(5)



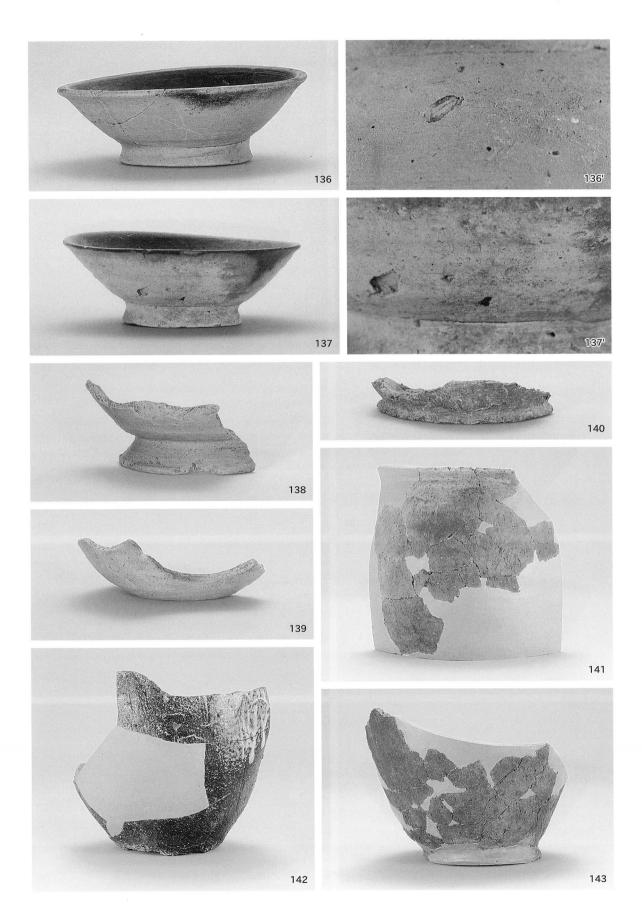
写真図版51 RA046竪穴住居出土遺物(1)



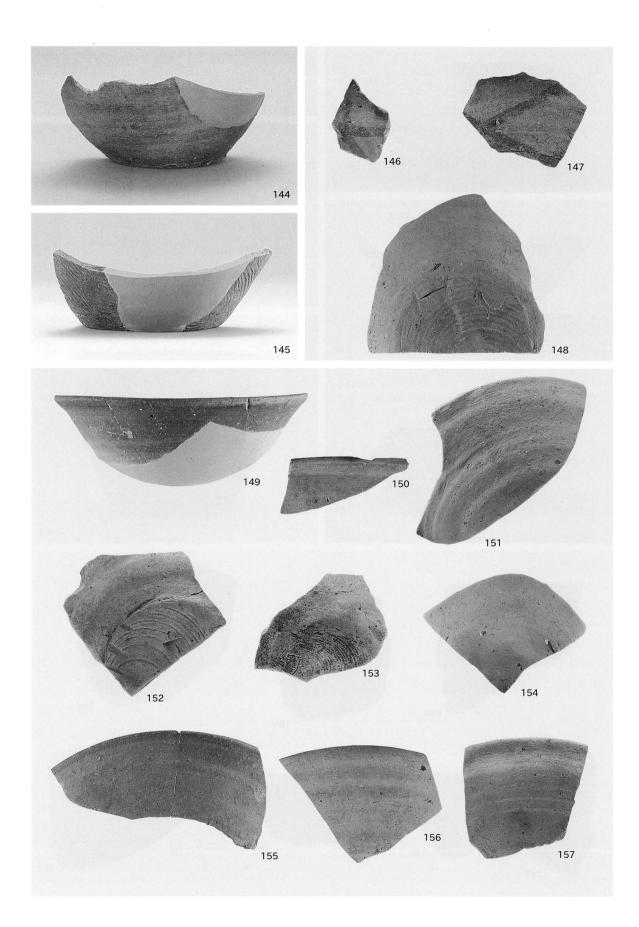
写真図版52 RA046竪穴住居出土遺物(2)



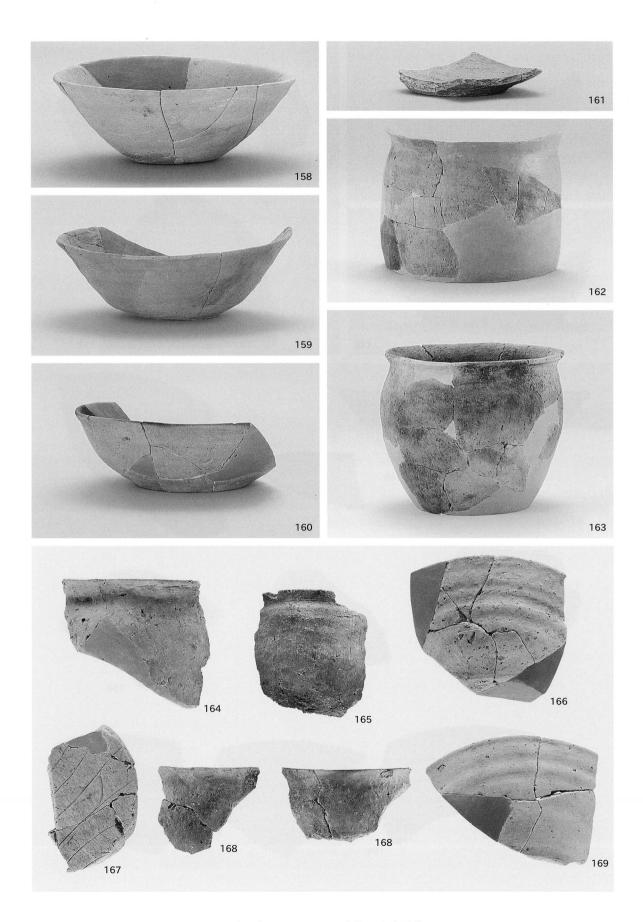
写真図版53 RA047竪穴住居出土遺物(1)



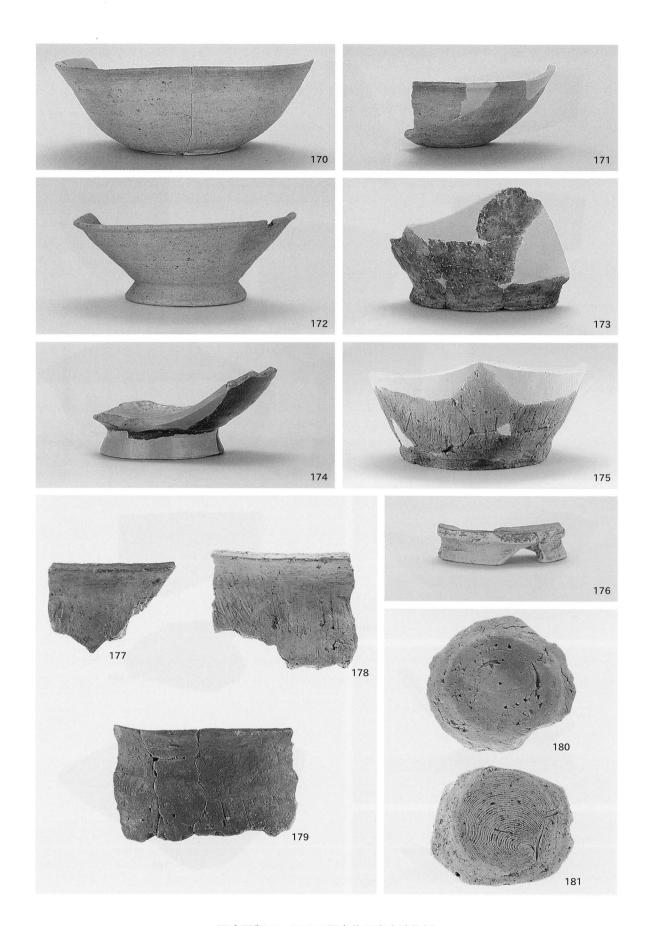
写真図版54 RA047竪穴住居出土遺物(2)



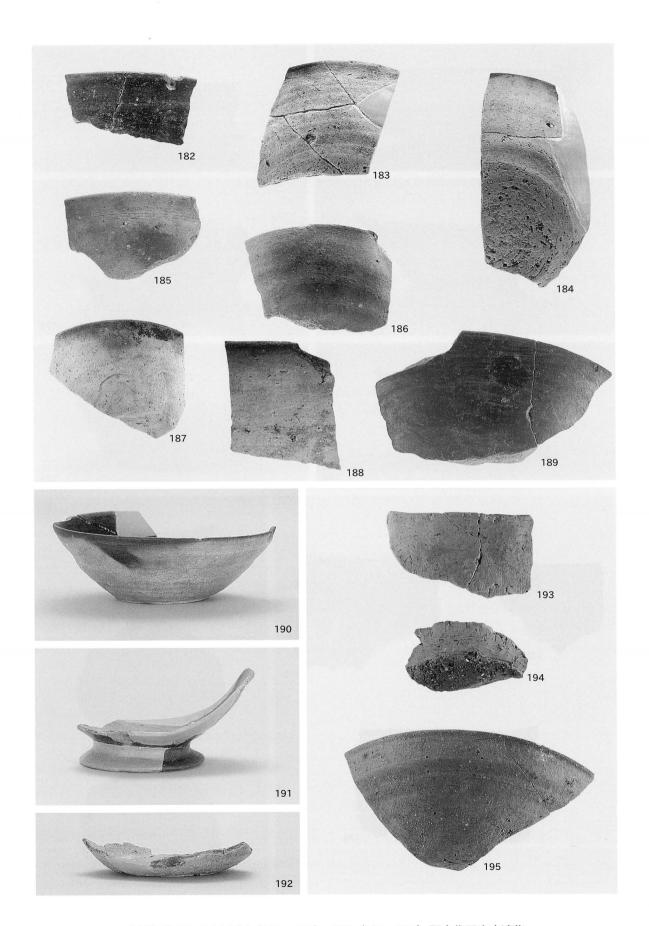
写真図版55 RA047竪穴住居出土遺物(3)



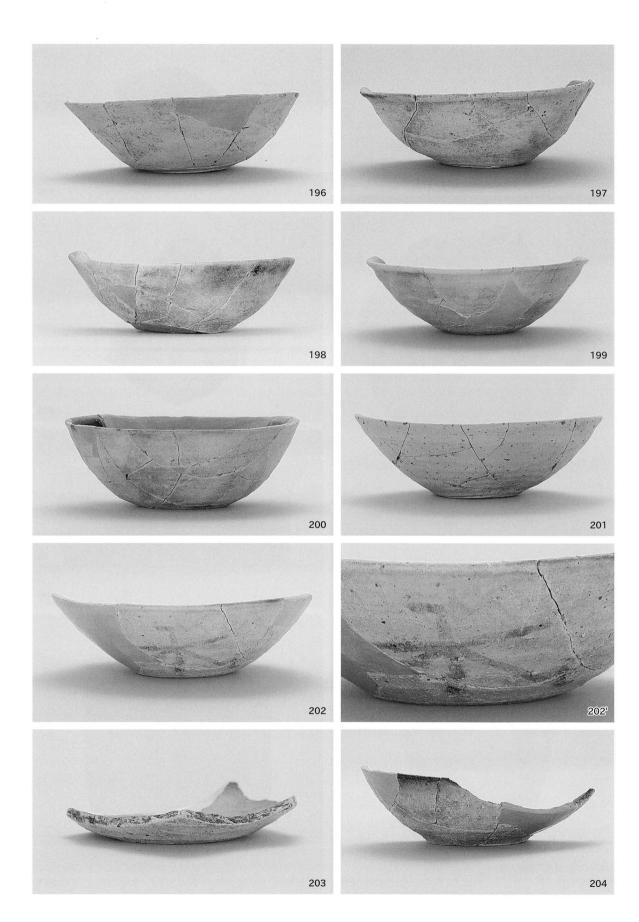
写真図版56 RA048竪穴住居出土遺物



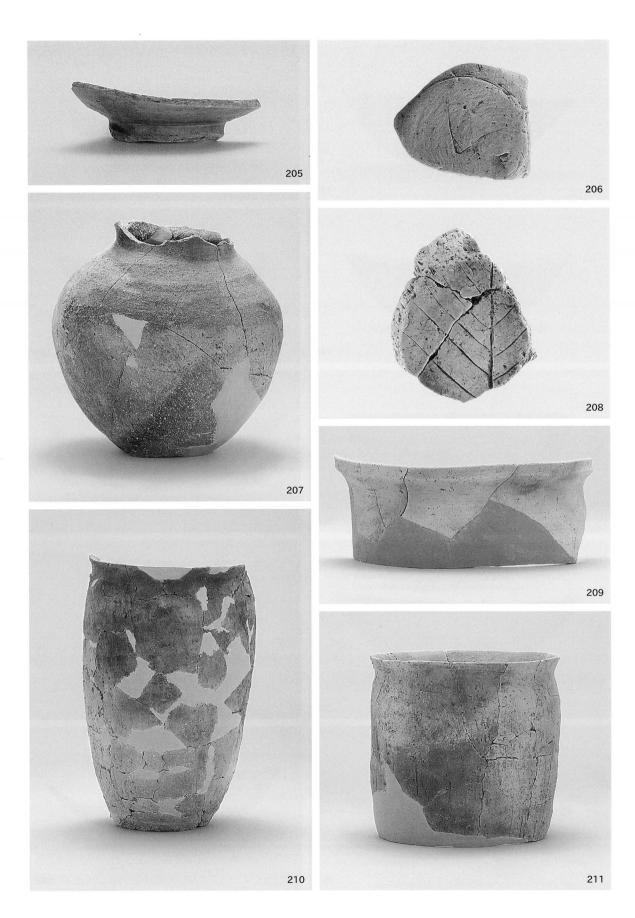
写真図版57 RA049竪穴住居出土遺物(1)



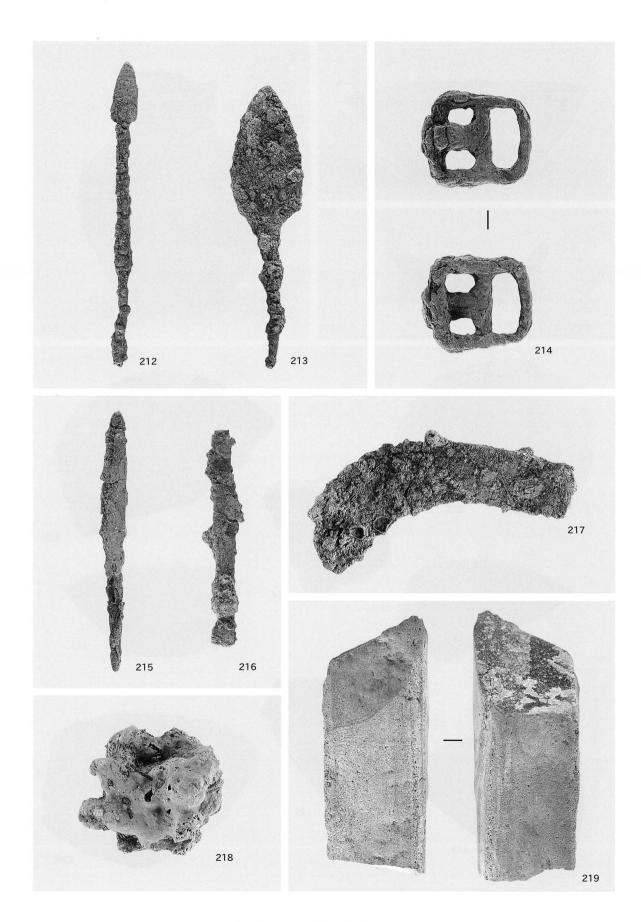
写真図版58 RA049(2) (182~189) · 050 (190~195) 竪穴住居出土遺物



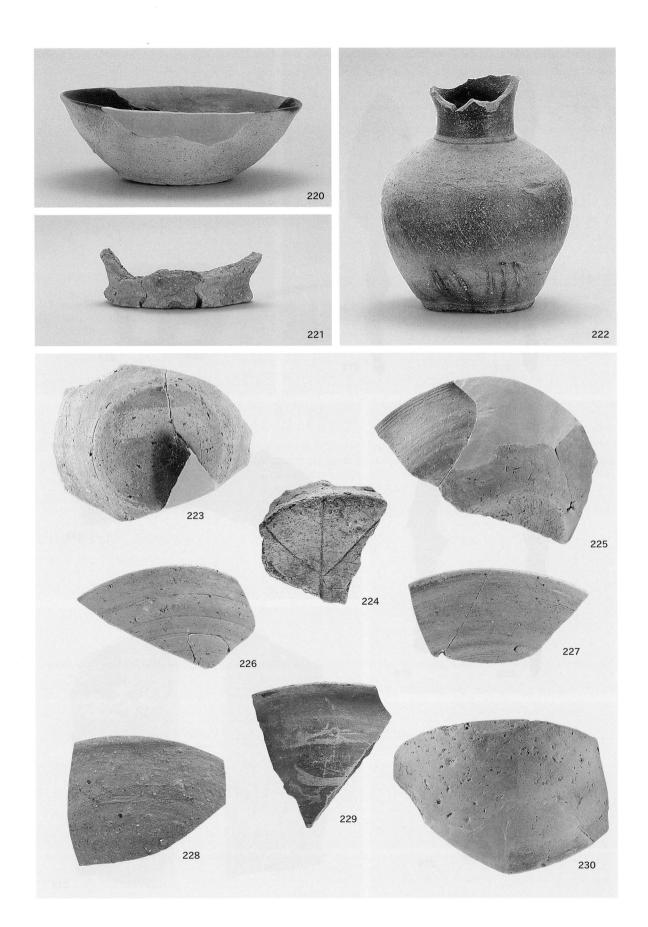
写真図版59 RA051竪穴住居出土遺物(1)



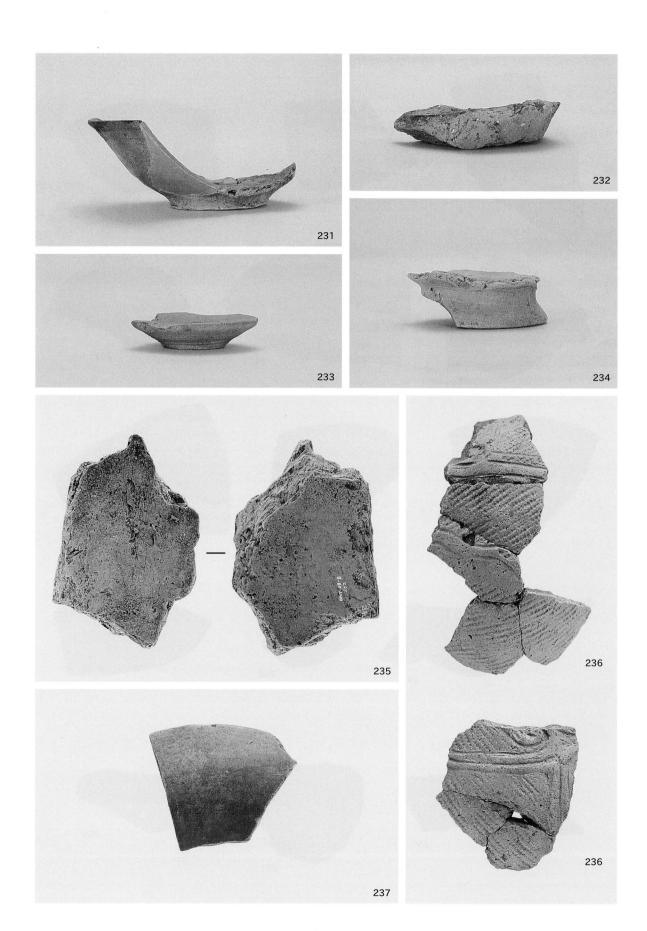
写真図版60 RA051竪穴住居出土遺物(2)



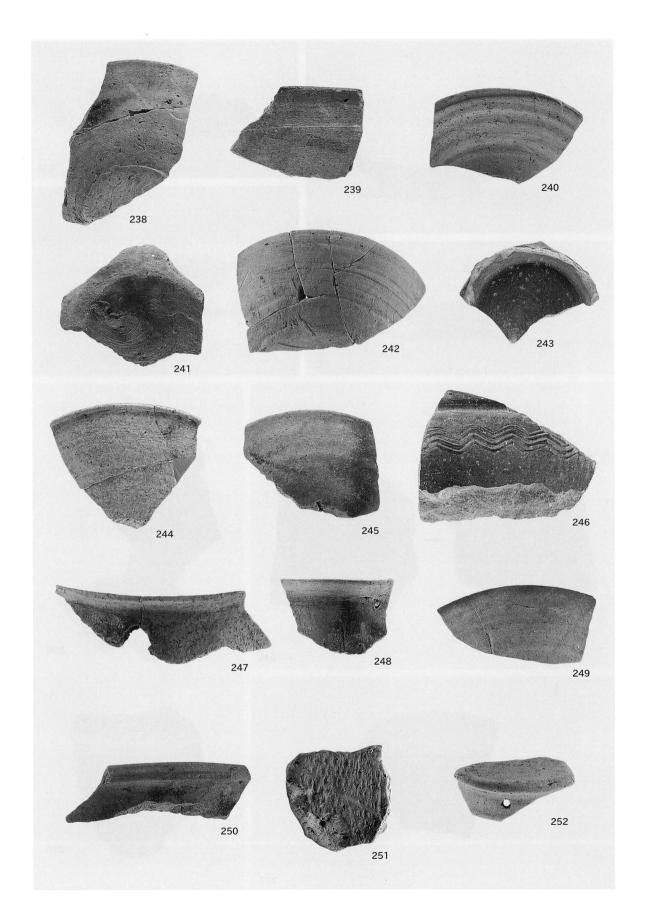
写真図版61 竪穴住居出土石・鉄製品



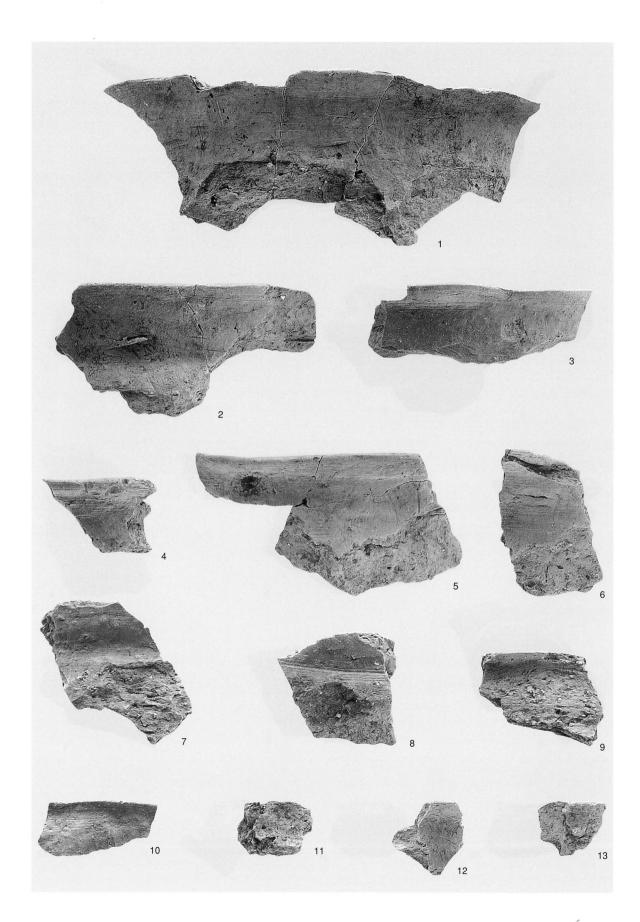
写真図版62 土坑出土遺物



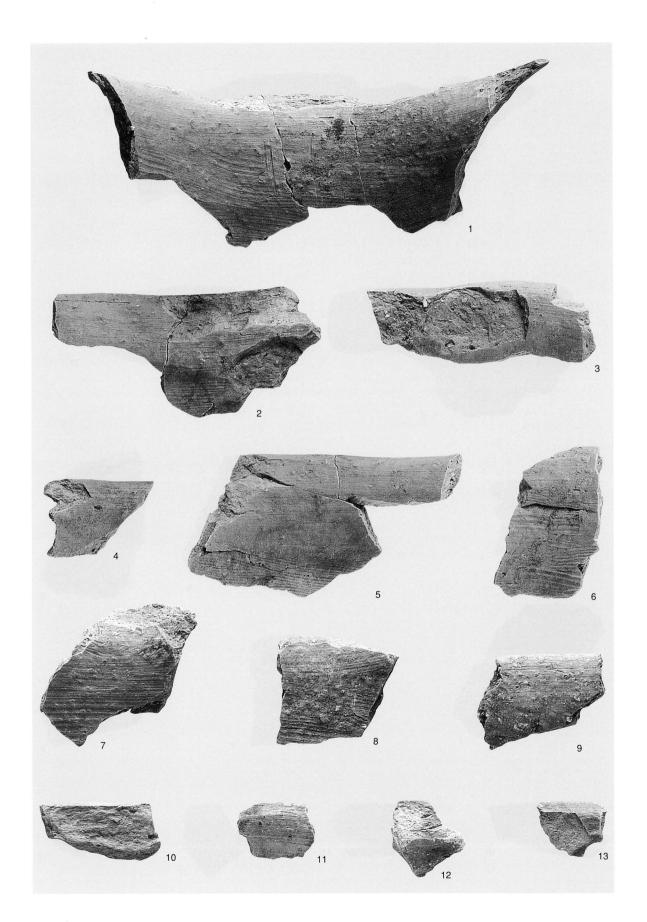
写真図版63 遺構外出土遺物(1)



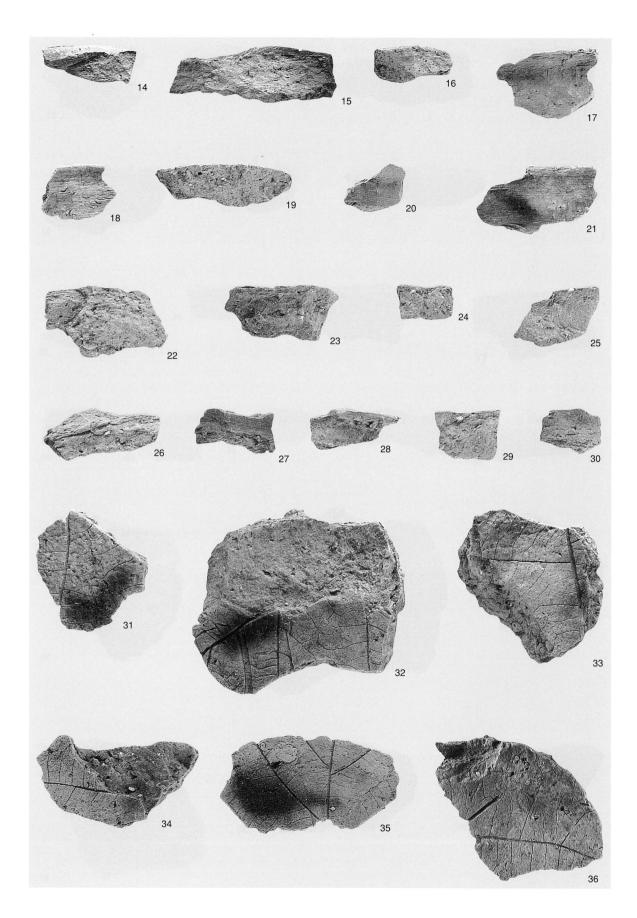
写真図版64 遺構外出土遺物(2)



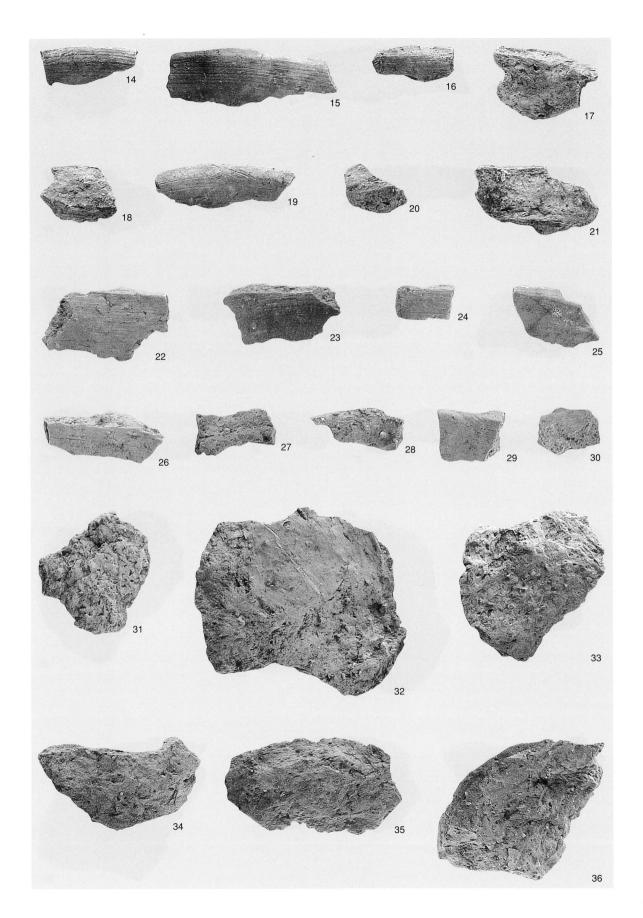
写真図版65 RD140土坑出土遺物(1)



写真図版66 RD140土坑出土遺物(2)



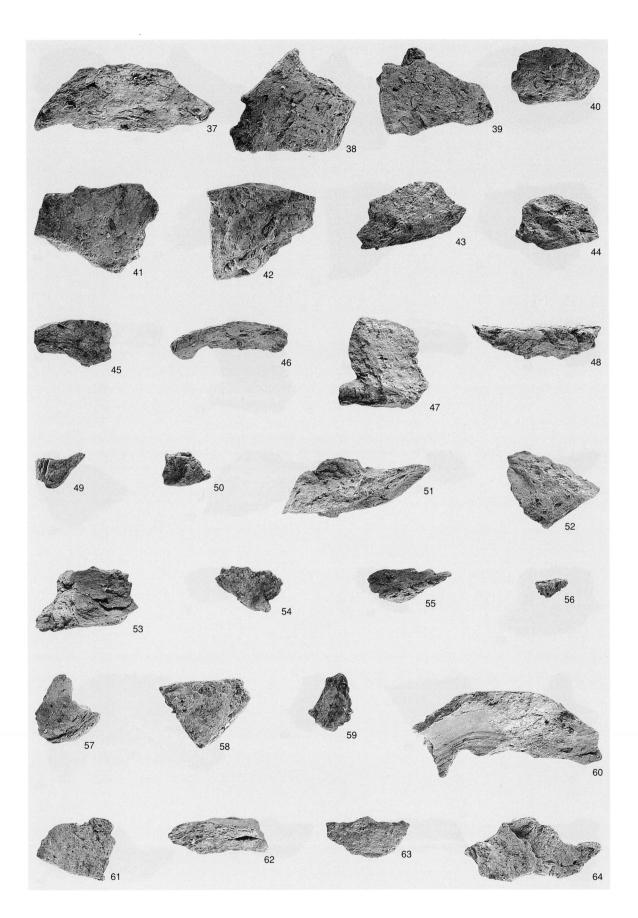
写真図版67 RD140土坑出土遺物(3)



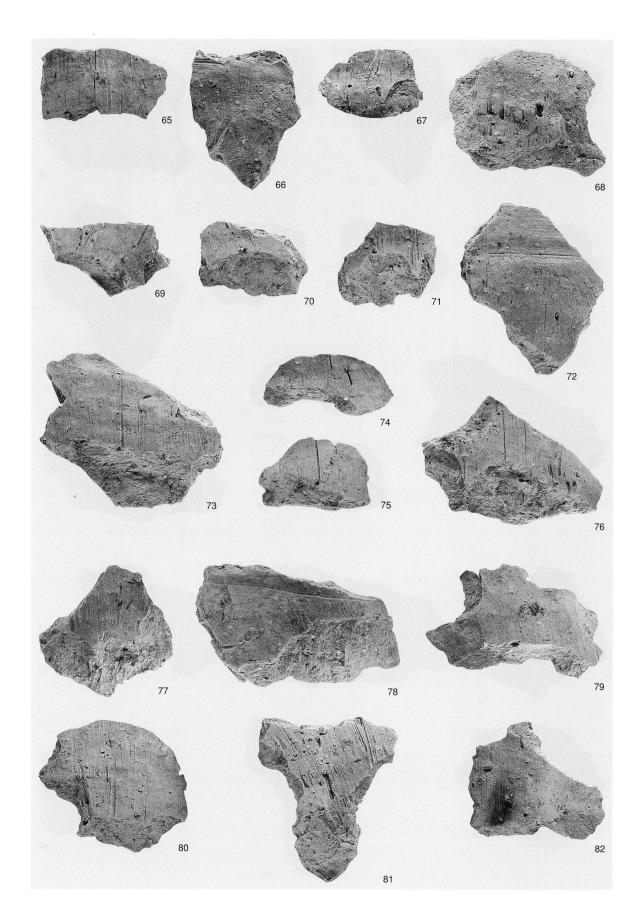
写真図版68 RD140土坑出土遺物(4)



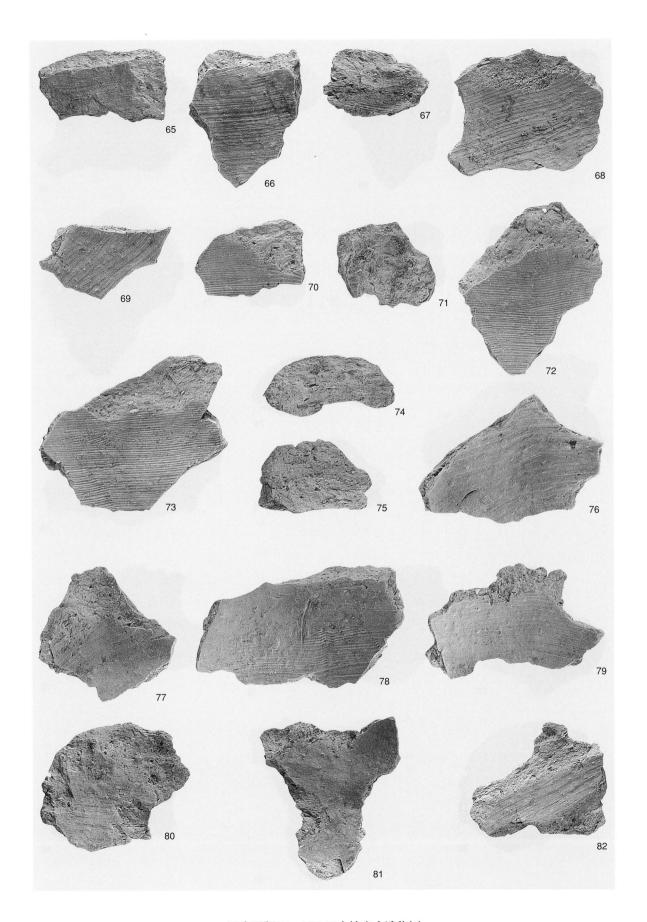
写真図版69 RD140土坑出土遺物(5)



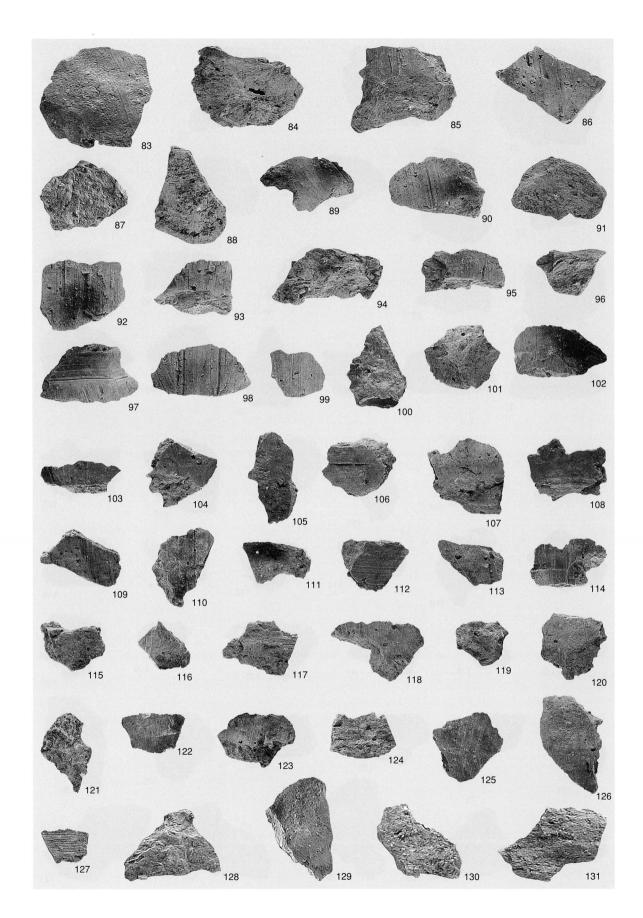
写真図版70 RD140土坑出土遺物(6)



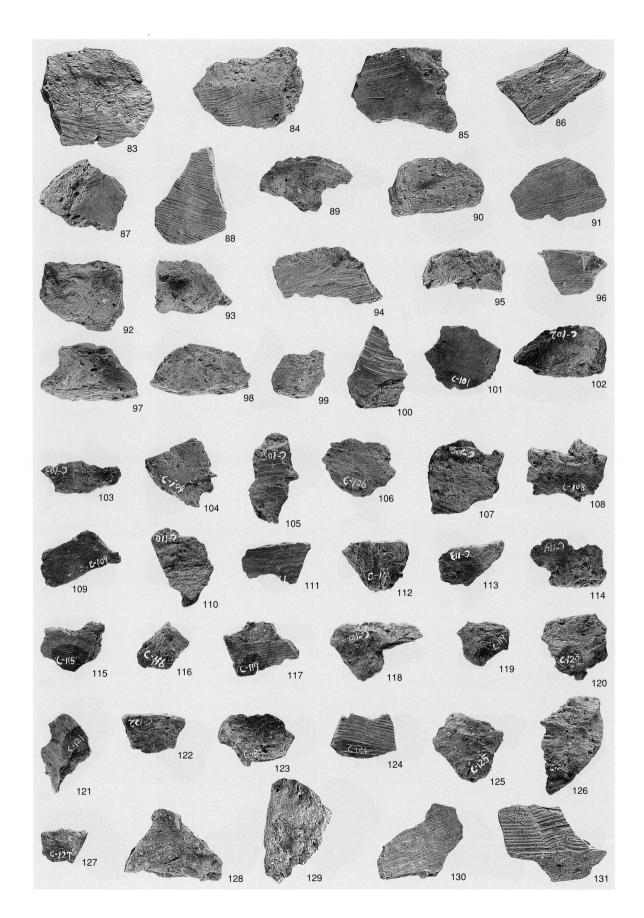
写真図版71 RD140土坑出土遺物(7)



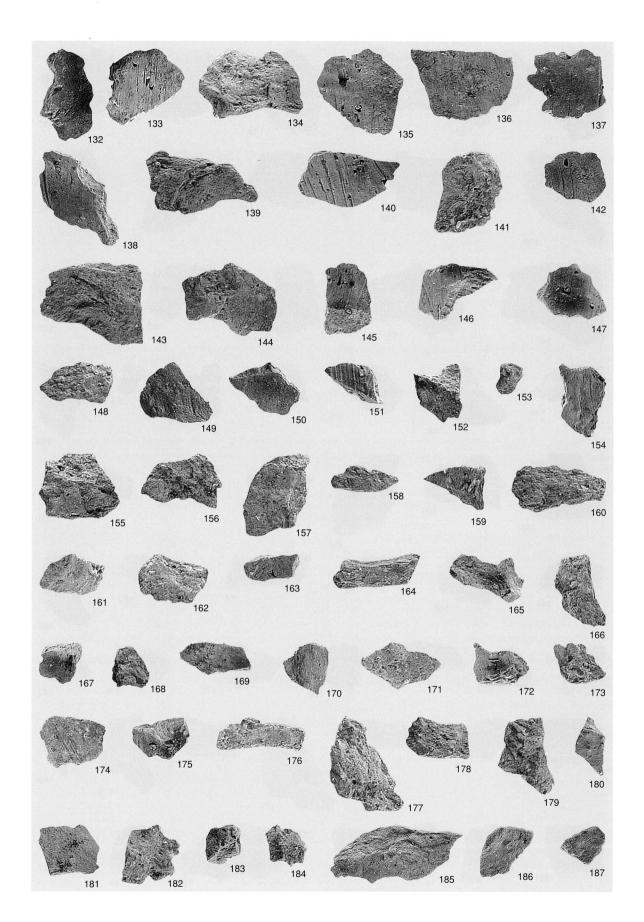
写真図版72 RD140土坑出土遺物(8)



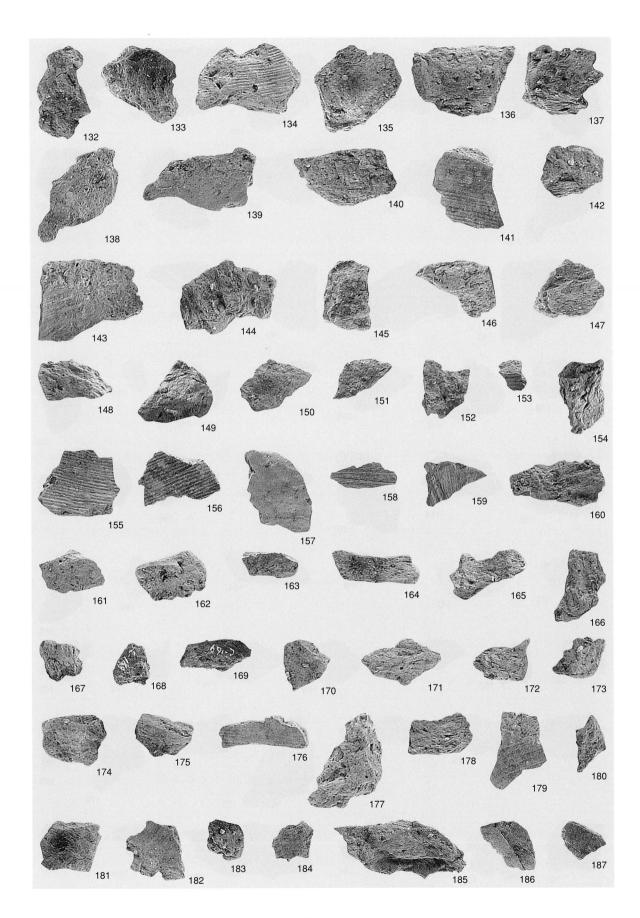
写真図版73 RD140土坑出土遺物(9)



写真図版74 RD140土坑出土遺物(10)



写真図版75 RD140土坑出土遺物(11)



写真図版76 RD140土坑出土遺物(12)

## 報告書抄録

ふりがな	ほそやちいせきだいはちじはっくつちょうさほうこくしょ											
書名	細谷地遺跡第8次発掘調査報告書											
副書名	盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査											
巻次												
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書											
シリーズ番号	第454集											
編 著 者	福島正和・齋藤麻紀子											
調査機関	脚岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター											
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001											
発行年月日	西曆2004年 3 月30日											
ふりがな	ふりがな	<b>-</b>		- ド	北緯		東経	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名			市町村遺跡番		· / //	" 0 / "		神里期间	神红田傾	神宜原囚		
第8次調査	60 840 L Chil (45) の 市 向 中 の 8 ぎ の は6 野 字 野 原 11-1ほか		1	LE26-0214 39, 40, 37;			141度 08分 13秒	2003. 07. 0 ~ 2003. 11. 0		「盛岡南新 都市計画整 備事業」に 伴う緊急発		
					世	界測地系				掘調査		
所収遺跡名	種別	時代		 主な遺構		主な遺物			特記事項			
細谷地遺跡第8次調査	集落跡 平安時代 竪灯 畠状 杭牙 土器		島状 杭列 土器	文住居16棟 犬遺構 2 箇所 刊 1 条 岩焼成土坑 4 基 亢13基			而器 惠器 製品 鎌、刀子、鉸具	、鉄鏃など)	畠状遺構、土器焼成土坑な ど生産遺構を伴う平安時 代の集落遺跡			

## 平成15年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長	木 村		昇	副	所	長	平	野	允	苗
〔管理課〕										
課長	韮 沢	正	吾	嘱		託	高	橋	照	雄
課長補佐	山岸	直	美	,,,,	//		湯	沢	邦	子
主  査	中島	賢	_		//		沼	田	テル	
主事	猿橋	幸	子		//		伊	藤	滋	子
〔調査第一課〕										
課長	佐々木		勝	文化	財調了	員達	北	村	忠	昭
課長補佐	佐々木	清	文		//		丸	山	浩	治
文化財専門員	金 子	昭	彦		//		八	木	勝	枝
文化財調查員	吉田		充		//		島	原	弘	征
″	亀	大二	郎		//		北	田		勲
"	野 中	真	盛	期限	! 付調了	員望	坂	部	恵	造
″	新 妻	伸	也		//		小	林	弘	卓
″	阿部	勝	則		//		藤	原	大	輔
″	杉 沢	昭太	:郎		//		太日	日代		彦
″	西 澤	正	晴		//		小	針	大	志
"	村 木		敬		//		新井	‡田	えり	)子
〔調査第二課〕	> 15	276		I. 11	or to one o	<b>-</b> -	-		w//	,
課 長	三浦	謙	~=-	又化	江財調 3	1 貝	星	Heter	雅	之
課長補佐	中川	重	紀		//		佐	藤	淳	
	高橋	義	介		//		星		幸	文
文化財専門員	小山内	LL be	透		<i>"</i>		溜	Ħ	浩二	
"	金子	佐知			<i>"</i>		本	多	準-	
	濱 田		宏		"		丸	山自	直	美
文化財調査員	赤石	<u> </u>	登		<i>"</i>		福业	島田	正	和金
<i>"</i>	阿部	眞	澄		<i>"</i>		米	田	<b></b>	寛
<i>"</i>	水上	明	博		"		中		絵	美亚
<i>"</i>	阿部		憲				川	又		晋
<i>"</i>	早坂	Ħıſ	淳		"		須 ++	原田		拓涼
<i>"</i>	小松	則	也		//		村 (##	田		淳
<i>"</i>	阿部	徳	幸	#H 17E	1 /→ 弐田 っ	k =	(村	上	H	拓)
"	窓岩	伸成	吾	别 №	设付調3 "	王 貝	古	田藤	里	和畝
<i>"</i>	亀 澤	盛	行		<i>"</i>		江	藤	H+ ↔	敦コマ
//	飯坂		重		"		齌	藤	床木糸	记子
//	鈴木	裕	明		"		<u> </u>	花	Acro.	裕
"	林	4~	勲		<i>"</i>		駒フ		智	寛
"	阿部	孝士	明		//		石	崎	高	臣
//	羽 柴	直	人							

## 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第454集

## 細谷地遺跡第8次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成16年 3 月26日 発 行 平成16年 3 月30日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 電 話(019)638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 トーバン印刷株式会社

〒020-0823 岩手県盛岡市門二丁目2-3

電 話 (019) 653-6333代)

FAX (019) 653-6386

